

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書IV

原山遺跡  
大塚遺跡

1988

新潟県教育委員会

北陸自動車道  
糸魚川地区発掘調査報告書IV

原山遺跡  
大塚遺跡

1988

新潟県教育委員会

## 序

北陸自動車道は、昭和62年7月に上越一名立インター間が開通し、昭和63年夏の全線開通を目指して着々と工事が進められている。

新潟県教育委員会は、これらの建設に係る埋蔵文化財の取扱いについて適切な措置を講ずるために予備調査を行い、事業主体である日本道路公団と慎重に協議を重ねて発掘調査を実施してきた。

本書は、日本道路公団の委託により新潟県教育委員会が調査主体となって実施した北陸自動車道建設に係る糸魚川地区原山遺跡・大塚遺跡の発掘調査報告書である。

昭和60・61年の2カ年度にわたる調査の結果、原山遺跡では全国的にも調査例の少ない梵鐘鋳造の工房跡が検出され、江戸時代における鋳造技術の一端を窺い知ることができた。また、大塚遺跡においては、本県ではまだ例を見ない弥生時代前期の遠賀川式系土器が出土し、縄文時代から弥生時代にかけての過渡期の土器様相が明らかにされるなど、貴重な成果を収めることができた。

本調査に於けるこうした成果が考古学的研究はもとより埋蔵文化財保護の一助となれば誠に意義深いものである。

なお、本調査に際し、多大なる御協力を賜った糸魚川市教育委員会並びに市民の方々、また計画から発掘調査に至るまで格別の御配慮をいただいた日本道路公団新潟建設局・同糸魚川工事事務所の各位に対して、ここに深く謝意を表する次第である。

昭和63年3月

新潟県教育委員会

教育長 田 中 邦 正

## 例　　言

1. 本書は北陸自動車道の建設に伴う新潟県糸魚川地区発掘調査報告書の第4冊である。
2. 本書は糸魚川市大字大野字苦竹原に所在する原山遺跡と糸魚川市大字一の宮字西ソウレハ他に所在する大塚遺跡の発掘調査報告書である。
3. 発掘調査は昭和60・61年度の2カ年度にわたり、昭和60年度は原山遺跡で、61年度は大塚遺跡で主に発掘調査をおこなった。
4. 発掘調査は新潟県が日本道路公団から受託し、新潟県教育委員会が調査主体となって実施した。調査体制は以下のとおりである。

### 〔昭和60年度〕

總　括	新潟県教育府文化行政課　課長	高橋　安
管　理	同　　課長補佐	田中　浩一
庶　務	同　　主事	高橋　幸治
調査指導	同　　埋蔵文化財係長	中島　栄一
調査担当	同　　文化財専門員	寺崎　裕助
調査職員	同　　文化財専門員	田海　義正
	同　　文化財専門員	高橋　昌也
	同　　文化財専門員	鈴木　俊成
	同　　文化財専門員	肥田野弘之
	同　　文化財調査員	田中　靖

調査作業員　糸魚川市上刈・一の宮地区などの有志

### 〔昭和61年度〕

總　括	新潟県教育府文化行政課　課長	高橋　安
管　理	同　　課長補佐	田中　浩一
庶　務	同　　主事	土田　玲
調査指導	同　　埋蔵文化財係長	中島　栄一
調査担当	同　　文化財専門員	寺崎　裕助
調査職員	同　　文化財専門員	高橋　保雄
	同　　文化財専門員	高橋　昌也
	同　　文化財専門員	川村　浩司
	同　　文化財専門員	國島　聰
	同　　文化財調査員	田中　靖

調査作業員　糸魚川市上刈・一の宮地区などの有志

5. 出土遺物は一括して新潟県教育委員会が保管している。遺物の註記はそれぞれの略号として、原山遺跡は「原」、大塚遺跡は「大」を付し、一連番号・出土地点・層位を記した。
6. 石器の石材鑑定については、新潟県教育センター地学研究室松敏雄氏に御教示を賜った。また、磨製石斧に多用されている石材については螢光X線分析を電気化学工業株式会社青海工場 小野 健氏の御好意により実施していただいた。
7. 大塚遺跡の火山灰分析結果については群馬大学講師 早津賢二氏より玉稿を賜った。
8. 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。作成した図面のうち既成の地図を使用したものは、それぞれの図に出典を記した。その他は日本道路公团が測量した地形図を用いた。
9. 図版の空中写真は、(財)日本地図センターが発行する1947年撮影のものを使用した。
10. 本文中における「S K」は土坑、「S D」は溝、「S B」は掘立柱建物、「S R」は道路状遺構、「P」はピットを示している。
11. 本書における近世陶磁器の年代は大橋編年(大橋1984)に従った。
12. 遺物整理及び報告書の作成は、寺崎裕助・高橋昌也・田中 靖を中心に整理作業員がこれに加わった。
13. 報告書の執筆は寺崎裕助・高橋保雄・高橋昌也・竹田和夫・川村浩司・田中 靖が分担して行い、執筆者名は文末にこれを明記した。
14. 発掘調査から本書の作成に至るまで下記の方々や関係機関から御教示・御協力を賜った。厚く御礼を申し上げる。(敬称略・五十音順)

青木和明、青木重孝、石川日出志、市沢英利、小野 健、金子拓男、川又昌延、岸本雅俊、木島 勉、桐山 穎、久々忠義、工楽善道、小島幸雄、小林達雄、小林康男、駒形敏朗、齊藤基生、酒井重洋、佐藤雅一、佐原 真、品田高志、島田哲男、清水芳裕、閔 雅之、田中耕作、土田孝雄、寺村光晴、富樫雅彦、橋本正春、長谷川一英、樋口昇一、宮下健司、百瀬新治、百瀬長秀、森 直樹、矢口忠良、山本正敏、渡辺朋和  
糸魚川市教育委員会、青海町教育委員会、柏崎市立博物館、新発田市教育委員会、水原博物館、長野市立博物館、平出考古館、松本市立考古博物館

## 目 次

第 I 章 序 説 .....	1
第 II 章 周辺の環境 .....	2
第 III 章 層 序 .....	6
第 IV 章 原山遺跡 .....	8
第1節 グリッドの設定と調査の方法 .....	8
第2節 調査の経過 .....	8
第3節 遺構 .....	10
A. 梵鐘鋳造遺構 .....	10
B. その他の遺構 .....	16
第4節 遺物 .....	20
A. 梵鐘鋳造遺構関連遺物 .....	20
B. 江戸時代の遺物 .....	35
C. その他の遺物 .....	35
第5節 考察 .....	51
A. 梵鐘鋳造跡について .....	51
1. 鋳造施設の構造と機能 .....	51
2. 梵鐘製作年代・製作者・供給先 .....	52
B. 糸魚川の鋳物師について .....	53
C. 梵鐘鋳造遺構及びその付近より出土した瓦について .....	54

第 V 章 大塚遺跡	56
第1節 グリッドの設定と調査の方法	56
第2節 調査の経過	56
第3節 遺構	58
A. A沢の遺構	59
B. B沢の遺構	62
C. 台地上の遺構	64
第4節 遺物	76
A. A沢出土の遺物	76
B. B沢出土の遺物	103
C. 台地上出土の遺物	109
D. D地区出土の遺物	114
第5節 科学的分析	115
A. 大塚遺跡火山灰分析結果 I	115
B. 大塚遺跡火山灰分析結果 II	116
C. 大塚遺跡 A沢花粉分析結果及び考察	116
D. 大塚遺跡歛状小溝花粉分析結果及び考察	118
第6節 考察	124
A沢出土の弥生時代遺物について	
1. 出土土器について	124
2. 出土石器について	126
第 VI 章 まとめ	128
引用文献	133

## 挿図目次

第1図	分布調査採集遺物	1
第2図	遺跡位置図	3
第3図	周辺の遺跡	5
第4図	土層断面図	7
第5図	小グリッド表示法	8
第6図	原山・大塚遺跡グリッド図	折り込み
第7図	原山遺跡遺構全体図	折り込み
第8図	梵鐘鋳造跡全体図	11
第9図	SB23平・断面図	13
第10図	SK21第2次作業面平・断面図	14
第11図	SK21平・断面図	15
第12図	土坑(SK20・22・33・37)平・断面図	17
第13図	土坑(SK3・4・5・11・15・34)平・断面図	19
第14図	SD14平・断面図	20
第15図	梵鐘鋳造模式図	21
第16図	梵鐘各部位名称	22
第17図	梵鐘鋳型(外型)	23
第18図	梵鐘鋳型(乳型)	25
第19図	梵鐘鋳型	26
第20図	梵鐘鋳型	27
第21図	こしき炉・三叉形土器等	29
第22図	平瓦・丸瓦・道具瓦	31
第23図	鬼瓦模式図	32
第24図	道具瓦	33
第25図	釘・棒状鉄片・埋管・銭貨	34
第26図	人形・土錐・近世陶磁器	35
第27図	縄文前・中期の土器	36
第28図	縄文後・晚期の土器・弥生土器	38
第29図	縄文晚期の土器・弥生土器	39
第30図	打製石斧・石核・貝殻状剥片	42
第31図	貝殻状剥片・磨製石斧	43

第32図	砾石・磨石・凹石	44
第33図	磨石	45
第34図	石錘・砥石・石匙・小型磨製石斧・石鎌・玉未成品・块状耳飾等	46
第35図	古墳時代の土器	47
第36図	平安時代の土器	48
第37図	平安時代・中世の土器	50
第38図	福井県小浜周辺の瓦生産地	55
第39図	大塚遺跡遺構全体図	折り込み
第40図	SK39遺物出土状況	58
第41図	SK70平・断面図	59
第42図	SK39・土器集中地点等平面図	60
第43図	土器集中地点遺物出土状況	61
第44図	集石46平・断面図	62
第45図	石器集中地点遺物出土状況	63
第46図	P51平・断面図	64
第47図	SB30平・断面図	65
第48図	SK33・34、P35平・断面図	66
第49図	SB31平・断面図	67
第50図	SR38平面図	69
第51図	SR38平・断面図(部分)	70
第52図	歛状小溝平・断面図	71
第53図	歛状小溝平・断面図	72
第54図	歛状小溝平・断面図	73
第55図	SD50平・断面図	74
第56図	SD56平・断面図	75
第57図	SK8平・断面図	76
第58図	A沢出土弥生土器(壺A～F類)	77
第59図	A沢出土弥生土器(深鉢A・B類、甕A～C類)	79
第60図	A沢出土弥生土器(壺B～D類、甕B類)	81
第61図	A沢出土弥生土器(高壺A類、浅鉢A・B類)	83
第62図	A沢出土弥生土器(その他)	85
第63図	A沢出土弥生土器(その他)	86
第64図	A沢出土弥生土器(底部)	87
第65図	A沢出土土製品・異形土器・土偶	89

第66図	A沢出土石器(0層～II b層).....	90
第67図	A沢出土石器(0層～II b層).....	92
第68図	A沢出土石器(0層～II b層).....	93
第69図	A沢出土石器(0層～II b層).....	95
第70図	A沢出土砥石・玉未成品(0層～II b層).....	97
第71図	A沢出土砥石・砥石調整剥片(0層～II b層).....	98
第72図	A沢出土石剣(II a層).....	99
第73図	A沢出土石器・繩文土器(III・IV層).....	101
第74図	A沢出土土師器・須恵器・土師質土器.....	102
第75図	A沢出土繩文土器・須恵器・土師器.....	104
第76図	B沢出土石器.....	105
第77図	石器集中地点出土石器・剥片.....	107
第78図	石器集中地点出土石核接合資料.....	108
第79図	台地上出土ナイフ形石器.....	109
第80図	掘立柱建物跡・土坑等出土土師器・須恵器.....	110
第81図	台地上出土近世陶磁器.....	112
第82図	SR38出土近世陶磁器.....	113
第83図	台地上出土石器・石製模造品.....	114
第84図	D地区出土繩文土器.....	114
第85図	大塚遺跡地質柱状図.....	115
第86図	大塚遺跡(A沢東西セクション南壁)試料採取地点土層模式柱状図.....	120
第87図	大塚遺跡花粉分析結果及び花粉化石群集分布図(A沢).....	121
第88図	大塚遺跡花粉分析結果(畝状小溝).....	122
第89図	大塚遺跡構内堆積物花粉・胞子化石組成図(畝状小溝).....	123
第90図	新潟県及び周辺の繩文晩期末～弥生初頭主要遺跡.....	124
第91図	珪岩・硬玉荒削素材長幅比.....	126
第92図	新潟県細池遺跡出土砥石.....	127

## 表 目 次

第1表	火山ガラス屈折率測定結果一覧表.....	116
第2表	原山遺跡出土石器觀察表.....	136
第3表	大塚遺跡出土石器觀察表.....	139

## 図版目次

- 図版1 遺跡空中写真
- 図版2(原山遺跡) 遠景 発掘風景(試掘)
- 図版3( " ) 発掘風景(表土剥ぎ) 発掘風景(遺物包含層剥削)
- 図版4( " ) 梵鐘鋳造跡全景 SB23・SK21完掘状況
- 図版5( " ) SK21第2次作業面土層断面 SK21第1次作業面土層断面
- 図版6( " ) SK21第2次作業面完掘状況 SK21第1次作業面完掘状況
- 図版7( " ) SK22土層断面 SK33土層断面
- 図版8( " ) SK22・33完掘状況 SK20完掘状況
- 図版9( " ) SK37完掘状況 SK21出土状況
- 図版10( " ) SK15土層断面 SK15完掘状況
- 図版11( " ) SK11土層断面 SK11完掘状況
- 図版12( " ) SK5完掘状況 SK3完掘状況
- 図版13( " ) SK34遺物出土状況 SD14完掘状況
- 図版14( " ) 梵鐘鋳型 梵鐘鋳型(乳型)
- 図版15( " ) 梵鐘鋳型 梵鐘鋳型
- 図版16( " ) こしき炉(外面) こしき炉(内面)
- 図版17( " ) 銅津 三叉形土製品 梵鐘鋳型
- 図版18( " ) 平瓦・丸瓦・道具瓦
- 図版19( " ) 釘・煙管・錢貨 板状金属片
- 図版20( " ) 繩文前期・中期の土器 繩文後期・晚期の土器
- 図版21( " ) 繩文・弥生時代の土器 繩文・弥生時代の土器
- 図版22( " ) 繩文土器(無文) SK34出土の土器
- 図版23( " ) 古墳時代・古代の土器 打製石斧・石核
- 図版24( " ) 磨製石斧 貝殻状剝片
- 図版25( " ) 敷石・磨石・凹石 石製品・块状耳飾・石鎌・石匙・石鍬等
- 図版26(大塚遺跡) 遠景(東から) 近景(北から)
- 図版27( " ) 工事用道路部分発掘状況 工事用道路部分発掘終了状況
- 図版28( " ) SR38発掘状況 敷状小溝発掘状況
- 図版29( " ) A沢発掘状況 A沢発掘状況
- 図版30( " ) A沢土層断面 A沢土壤サンプル採取状況
- 図版31( " ) B沢発掘状況 B沢発掘状況

- 図版32(大塚遺跡) D地区発掘終了状況 D地区発掘終了状況
- 図版33( " ) SK39(A沢)遺物出土状況 SK39(A沢)完掘状況
- 図版34( " ) 土器集中地点(A沢)遺物出土状況 土器集中地点(A沢)完掘状況
- 図版35( " ) 集石46(A沢) SK70(A沢)土層断面
- 図版36( " ) 石器集中地点(B沢)完掘状況 B沢土層断面
- 図版37( " ) P51(台地上)土層断面 P51(台地上)完掘状況
- 図版38( " ) SB30完掘状況 ピット(SB30柱穴)土層断面
- 図版39( " ) SK33(台地上)完掘状況 P35(台地上)土層断面・遺物出土状況
- 図版40( " ) SK34(台地上)遺物出土状況 SK34(台地上)完掘状況
- 図版41( " ) SR38(台地上)完掘状況 SB31(台地上)完掘状況
- 図版42( " ) 敵状小溝(8J・K)完掘状況 敵状小溝(8J・K)完掘状況
- 図版43( " ) 敵状小溝(10N)完掘状況 敵状小溝(12P)完掘状況
- 図版44( " ) SD56完掘状況 SD50完掘状況
- 図版45( " ) SK8(台地上)土層断面 SK8(台地上)完掘状況
- 図版46( " ) A沢出土弥生土器
- 図版47( " ) A沢出土弥生土器(水神平式系) A沢出土弥生土器(遠賀川式系)
- 図版48( " ) A沢出土弥生土器 A沢出土弥生土器
- 図版49( " ) A沢出土弥生土器 A沢出土弥生土器
- 図版50( " ) A沢出土弥生土器 A沢出土弥生土器(赤色塗彩)
- 図版51( " ) A沢出土弥生土器(条痕文系) A沢出土弥生土器(条痕文系)
- 図版52( " ) A沢出土弥生土器 A沢出土弥生土器
- 図版53( " ) A沢出土弥生土器 A沢出土弥生土器(東北系)
- 図版54( " ) A沢出土弥生土器 A沢出土弥生土器(底部)
- 図版55( " ) A沢出土異形土器・土偶・土製品等 A沢出土球形土製品
- 図版56( " ) A沢出土打製石斧 A沢出土打製石斧
- 図版57( " ) A沢出土打製石斧・磨製石斧・スクレイバー等 A沢出土敲石・凹  
石・磨石・石鍤
- 図版58( " ) A沢出土石錐・石刺等 A沢出土玉未成品
- 図版59( " ) A沢出土砾石 A沢出土砾石
- 図版60( " ) A沢出土剥片接合状態
- 図版61( " ) A沢出土剥片分離状態 A沢出土剥片分離状態
- 図版62( " ) A沢出土石核 A沢出土石核 A沢出土黑曜石
- 図版63( " ) A沢出土黒曜石 A沢出土黒曜石
- 図版64( " ) A沢出土ヒスイ(転石) A沢出土ヒスイ(角礫)

- 図版65(大塚遺跡) A沢出土滑石 A沢出土硅岩
- 図版66( " ) A沢出土石英 A沢出土石英
- 図版67( " ) A沢Ⅲ・Ⅳ層出土繩文土器 A沢Ⅲ・Ⅳ層出土打製石斧・磨製石斧・  
石鎌等
- 図版68( " ) B沢出土繩文土器・須恵器・土師器 B沢出土剥片石器・打製石斧・  
磨製石斧等
- 図版69( " ) B沢石器集中地点出土剥片 B沢石器集中地点出土磨石・礫器・石  
核等
- 図版70( " ) 台地上出土ナイフ形石器 台地上出土滑石製品  
B沢出土石核接合状態 B沢出土石核分離状態
- 図版71( " ) A沢台地上出土土師器・須恵器 台地上出土土師器
- 図版72( " ) 台地上出土近世陶磁器(外面) 台地上出土近世陶磁器(内面)
- 図版73( " ) 台地上出土近世陶磁器(外面) 台地上出土近世陶磁器(内面)
- 図版74( " ) 突状小溝出土近世陶磁器(外面) 突状小溝出土近世陶磁器(内面)
- 図版75( " ) SR38出土近世陶磁器 D地区出土土器
- 図版76 正徳3年(1713)の絵図 同絵図原山遺跡・大塚遺跡付近

# 第Ⅰ章 序 説

## 第1節 発掘調査に至る経過

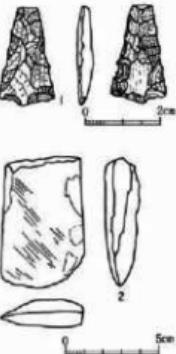
北陸自動車道に係る糸魚川地区の遺跡の分布・確認調査は昭和58年度から実施され、昭和60年4月～昭和61年7月の間に発掘調査が行われた。その間の全体的な経緯は「北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅰ」(高橋1986)においてすでに述べられている。ゆえに、本節では原山・大塚遺跡の発掘調査に至る経過に限り報告することにしたい。

昭和58年4月に行われた北陸自動車道に係る糸魚川地区の遺跡分布調査において、原山遺跡では第1図に示したような有茎の石鎌(1)・蛇紋岩製の斜刃磨製石斧(2)・土師器が、大塚遺跡では繩文土器・須恵器・近世磁器が表面採集され、この分布調査の結果は昭和58年5月11日付教文第345号で日本道路公团新潟建設局(以下公團とする)に通知された。

この通知によると原山遺跡は繩文・平安時代を主体とした遺跡で、從来の原山I遺跡の範囲[新潟県教育委員会1979]が拡大したものであり、大塚遺跡は平安時代を主体とした新発見の遺跡で、地元に伝承として残されている大塚の塚は大塚遺跡の範囲に所在するものと考えられるとされている。

これを受け、公團からは早急に確認調査を実施してほしいとの要望が出され、原山・大塚遺跡でも昭和59年8月末に確認調査が行われた。確認調査では、台地上の12地点に幅約2mのトレーナーを任意に設定し、確認調査予定面積は約1,180m<sup>2</sup>で未買収地や耕作地をのぞく箇所において実施された。この調査結果は、北陸自動車道(糸魚川地区)遺跡試掘調査結果及び取扱い案として昭和59年11月29日付教文第917号で公團に通知された。それによると、原山遺跡については昭和58年度に糸魚川市教委により隣接して発掘調査が実施され、試掘によっても焼土遺構が検出されたが耕作により遺物包含層はすでに存在せずと報告されており、発掘対象面積は約8,500m<sup>2</sup>～約13,000m<sup>2</sup>で重機を多用した発掘調査を実施すべきであるとの取扱い所見が述べられている。一方大塚遺跡については、繩文土器や須恵器を表採したが、耕作によって包含層はすでに存在しないとの報告が行われ、取扱いも原山遺跡と同様で調査対象面積は約11,000m<sup>2</sup>であった。

先述したように糸魚川地区の発掘調査は昭和60年4月から着手し、原山・大塚遺跡の発掘調査もこのような調査過程と工事工程をふまえた上で昭和60年度の下半期に実施することに決定した。



第1図 分布調査採集遺物

## 第II章 周辺の環境

糸魚川市は本県最西端の市で、上越市の南西約40kmに位置しており、頸城アルプスと北アルプスを境に長野・富山の両県に接している。市街地は姫川河口右岸の被覆砂丘やその背後の沖積地に立地する(第2図)。

原山・大塚遺跡はその市街地の南方約3kmの糸魚川台地に位置し(図版1・2上・26上)、原山遺跡は糸魚川市大野字苦竹原に、大塚遺跡は糸魚川市一の宮字ソウレハ他に所在する。両遺跡は姫川低地の扇状地より数えて3段目の段丘上にあり、南には北アルプス、西には能登半島が望まれ、西方眼下にはフォッサマグナ(糸魚川~静岡構造線)の西端にあたる姫川が南~北へと流れ日本海に注いでいる。

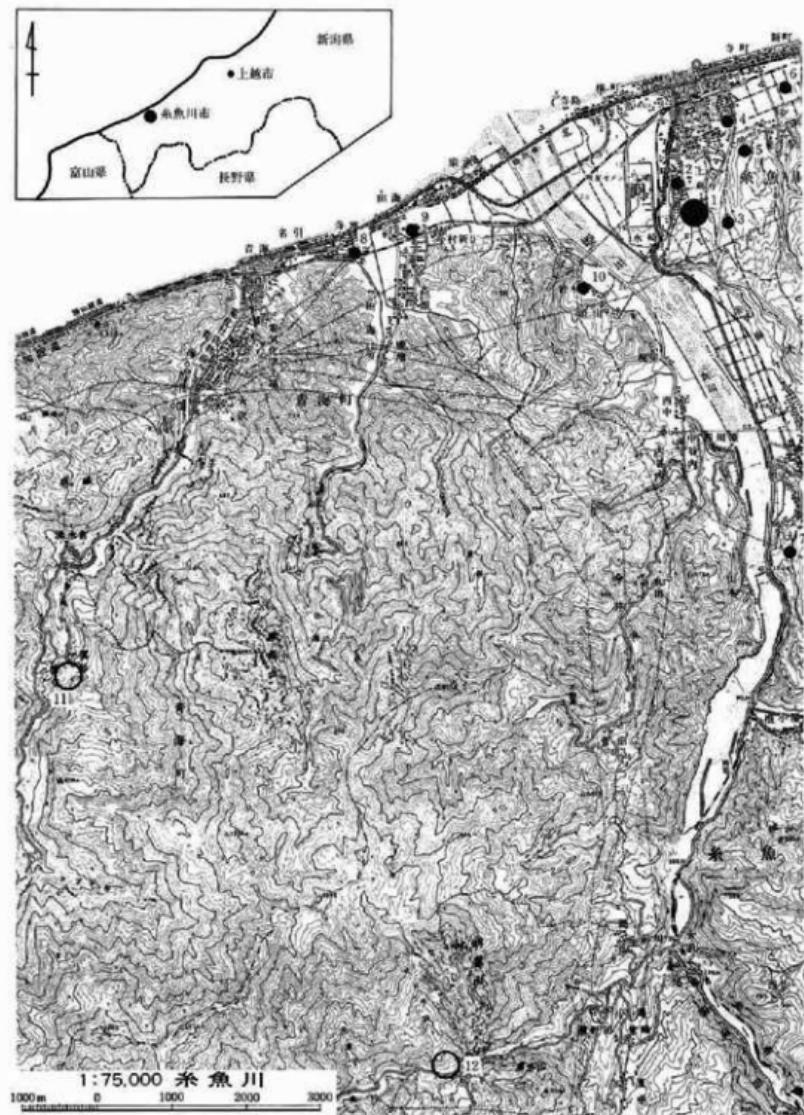
両遺跡の周囲には段丘が発達しており、それらは高位の段丘・中位の段丘・低位の段丘に大別され、それらの段丘面上には多くの遺跡が分布している(第3図)。

高位の段丘はGt.I-1面とGt.I-2面(鈴木1983)に対比され、大野地区西側から蓮台寺地区南側までの間にみられ、糸魚川台地の約半分を占めている。この段丘は上・下2面に区分され、上位面は標高約220mで、下位面は標高約150mを測り、その比高差は約70mである。上位面には茶煙、塚の腰(縄文、昭和60年度県教委調査)、三屋原B(縄文前・中期、昭和60年度県教委調査)遺跡等が、下位面には長者ヶ原(縄文早~晚期、国指定史跡)、大原B遺跡、三屋原A(縄文前・中期、昭和60・61年度県教委調査)、後生山遺跡(弥生後期)(木島1986)が分布する。

中位の段丘はGt.IIとGt.III(鈴木1982)に対比され、高位の段丘と同様に上・下2面に区分される。上位面は標高約100mを測り、美山公園から糸魚川中学校付近までを占めている。一方下位面は標高約65mを測り、配水池、市営住宅付近に認められ、上位面との比高差は約35mである。上位面には原山・大塚遺跡(註)をはじめとして苦竹原A、菊畑(奈良・平安)遺跡等が、下位面には鷹口下(縄文・弥生・平安、昭和61年度県教委調査)、道者ハバ(奈良・平安、昭和59年度糸魚川市教委調査)、宮星敷(奈良・平安)遺跡等が分布している。なかでも道者ハバ遺跡からは約500mという狭い調査範囲にもかかわらず、掘立柱建物跡5棟と井戸1基が検出され、井戸の中からは土師器、須恵器に混じって灰釉陶器や綠釉陶器が出土した。また、県立糸魚川高校や糸魚川市歴史民俗資料館には道者ハバ遺跡から出土した須恵器の横瓶や壺及び壺蓋が保管されている。また、墨書き器や転用硯も出土している。これらの遺構や遺物から道者ハバ遺跡は一般的な集落ではなく、奈良・平安時代の当地方で中心的な役割をなした遺跡であろうと推定されている(土田1986)。

低位の段丘は標高約50mで、中位の段丘との比高差は約50mである。一の宮集落や火葬場、

註 大塚遺跡は昭和59年度発刊の糸魚川市遺跡詳細分布調査の椎文(大森1984)では新削遺跡に含まれている。



- |           |          |          |         |           |           |
|-----------|----------|----------|---------|-----------|-----------|
| 1 原山・大塚道路 | 2 道者ハハ道跡 | 3 長者ヶ原道跡 | 4 一の宮道跡 | 5 後生山道跡   | 6 菊吹田道跡   |
| 7 川倉道跡    | 8 寺地道跡   | 9 大角地道跡  | 10 岩木道跡 | 11 桥立硬玉産地 | 12 小鹿硬玉産地 |

第2図 道路位置図 (1:75,000)

(「国土地理院発行、5万分の1地図団」「糸魚川(昭和44)」「小鹿(昭和45)」を用図)

県立糸魚川商工高校、一の宮神社付近で認められ、Gt. IV・Gt. V(鈴木1982)に対比される。美山(縄文後期・奈良・平安、昭和61年度県教委調査)、火葬場裏(縄文前期)、一の宮(縄文前期・弥生・古墳)、茶畠(奈良・平安)遺跡等が分布している。一の宮遺跡付近は地形的には一の宮面(能生地すべり団体研究グループ1971)とも呼ばれ、沖積段丘に分類されている。一の宮面は糸魚川市史の資料[新潟大学研究グループ1976]等によれば北側の沖積面下に入り込んでいる可能性もうかがえ、一の宮遺跡からは縄文前期前半の繊維土器が出土しているなど、その付近には巻町豊原遺跡(小野・前山1986)や上越市八反田遺跡(寺崎1985)のような埋没遺跡が存在することも考えられる。

沖積段丘はJR大糸線東側から糸魚川小学校西側までの間にみられ、標高約15mを測る。稲場、幅上、苗代坪遺跡等が分布しており、いずれも奈良・平安期の遺跡である。

このように段丘と遺跡分布の関係をみてきたが、高位の段丘には縄文・弥生が、低位の段丘には縄文・弥生・古代が、沖積段丘には古代の遺跡が主に分布するなど、遺跡の時期が下るにしたがって高位から低位へとその分布する主体面を移動させている。ただ、低位の段丘における縄文遺跡の存在はこの傾向に反するものであり、縄文時代でも前期に限られている。このような遺跡立地は先述した上越市八反田遺跡(寺崎1985)、青海町大角地遺跡(寺村・安藤・千家1979)・富山県南太閤山I遺跡(岸本・山本1986)でも同様で、縄文前期の遺跡がなぜこのような立地を示すのかは日本海側における縄文前期の海進・海退問題ともあいまって今後に残された課題である。

(寺崎裕助)



原山から綾川河口を望む



第3図 周辺の道路（大森）1984年版一部加筆

(原図：糸魚川市役所発行 1:10,000地形図 昭和55年)

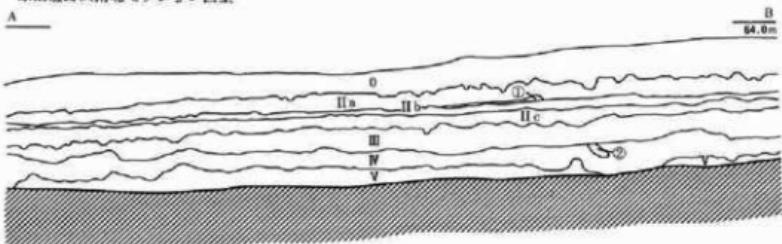
### 第三章 層序

原山・大塚遺跡は市道大野・糸魚川線で便宜的に分離されているが、本来は連続した遺跡と考えられる。層序に關しても両遺跡は極めて近似しており、一括して説明する。両遺跡の現況は畠地及び山林で、尾根部分は広範囲に削平されており、7C・7D付近に包含層が残存する以外、表土直下にVI層中位が位置している。これに対して沢部分では尾根上で失われた各層が深さ1.5mに渡って堆積しており、以下では沢部分の層序を基本層序として表すものとする。

- 0層** 耕土及び客土を一括して本層とする。しまりが悪くビニール・近現代の陶磁器を包含している。沢部分では本層が最大1mも堆積しており、削平時の耕土を客土したものと思われる。
- I層** 暗褐色を呈する砂質土で、V層の小ブロックが班状に混じる。近世陶磁器を包含している。
- IIa層** 黒褐色を呈する砂質土である。上位では平安時代、下位では弥生時代の遺物を包含している。
- IIb層** 暗褐色を呈する砂質土で、弥生時代の遺物を多量に包含している。
- IIc層** 黒褐色を呈する砂質土で、IIa層に似るがやや黒味が薄い。III層の小ブロック及び炭化物を含む。本層からは時期を明示し得る資料は出土していない。
- III層** 黄褐色を呈する砂質土で、焼土及び炭化物の小粒を多く含む。縄文時代後期～晩期中期までの遺物を散漫に包含している。
- IV層** 暗褐色を呈する砂質土で、炭化物の小粒を多く含む。縄文時代前期後半～中期の遺物を散漫に包含している。
- V層** 黄褐色を呈する砂質土で、10Mの本層中より縄文時代早期の石器集中地点が確認されている。なお、本層上位にK-Ahの降下層準があるものと推定される。
- VI層** 赤褐色を呈し、比較的粘性が強い。8K13の本層中より先土器時代のナイフ型石器が出土した。その出土層位より15cm下方にATの降下層準がある。

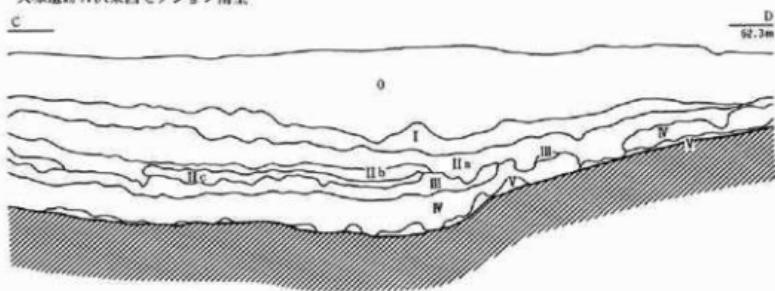
(田中 端)

草原道路沢南北セクション西壁

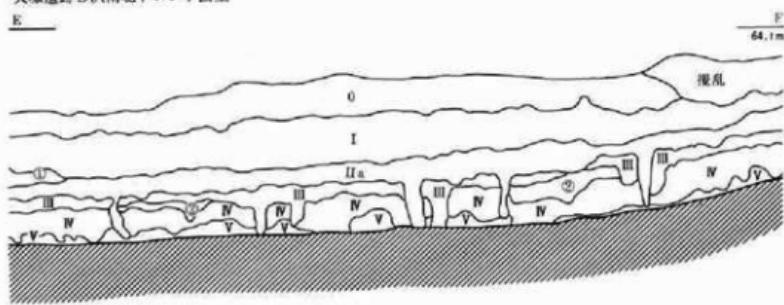


①黒褐色土で多量の硫化物を包含する。  
②V層のブロック。

大塚道路A沢東西セクション南壁



大塚道路B沢南北トレンチ西壁



①褐色土で鐵土・硫化物を多量に包含する。  
②褐色土でしまりがない。



第4図 土層断面図

## 第IV章 原山遺跡

### 第1節 グリッドの設定と調査の方法

原山遺跡と大塚遺跡は同一段丘上に所在し、市道大野・糸魚川線をはさんで近接していることから両遺跡を同一グリッドで覆い、自動車道のセンター杭No.385(STA385)と座標軸を利用して東西南北方向に設定することにした。大グリッドは一辺20m四方で、原山遺跡の南西すみに起點を設け、南北方向をX軸として、A・B・C・D………とアルファベットで、東西方向をY軸として、1・2・3・4………と算用数字で表した。呼称は便宜的にY軸、X軸の順序で行い、1A又は2Bのように表現した。小グリッドは一辺4m四方で、大グリッドの南西すみを1、北東すみを25とし、その間を1・2・3・4………とした(第5図)。そして1A1、2A2などと呼ぶことにした。グリッド杭の打設にあたっては、中心杭をSTA385の北20mを起点に原山遺跡で9本、大塚遺跡で7本の合計16本打設した。この杭は3寸角で長さ3尺のものを使用した。杭頂部の標高と座標数値を明示し、40mごとに打設した。なお、その打設は測量業者に委託した。補助杭は2寸角の長さ2尺余りで、グリッドの方向を示すことのみ目的とし、中心杭間の20mごとに打設した。

調査は、まず層序の確認と造構・遺物の分布状況を把握するため、幅1mのトレンチを南北グリッドぞいに設定して試掘調査を実施し、その結果をみて遺跡全体をいくつかのブロックに分割して発掘調査を行うことにした。表土はざは基本的にはバックフォーで実施し、排土は遺跡外へは搬出しないで遺跡内で処理することにした。

(寺崎裕助)

### 第2節 調査の経過

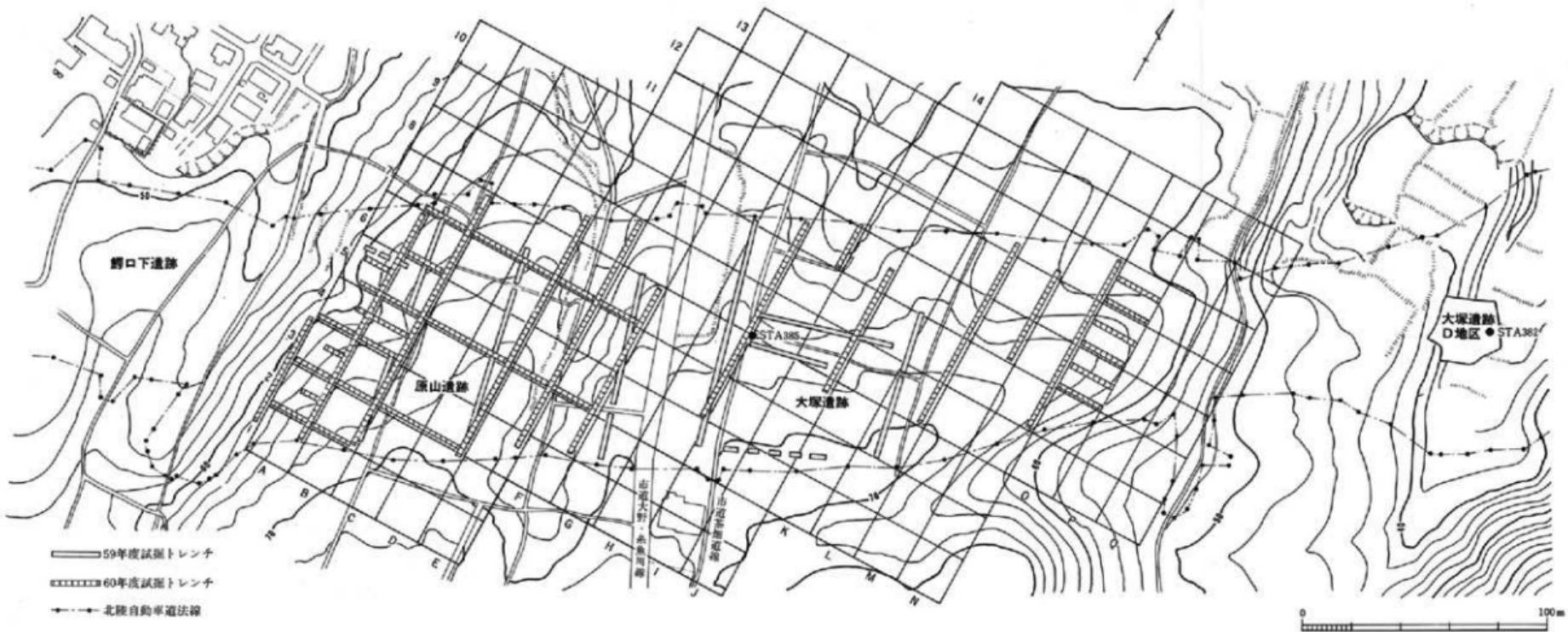
原山遺跡の発掘調査は現地での事前準備から残務整理まで含めると、昭和60年8月20日から12月7日までの延べ110日間であった。その内訳は、事前準備に延べ10日、残務整理に延べ7日、発掘調査に延べ93日を費やしている。

事前準備は8月20日(火)から29日(木)まで行い、その間は調査員2~3名が専従し、後半には一部作業員も投入して機材の搬入、現場事務所の開設、住環境の整備などを行った。

発掘調査は8月30日(金)から開始し、まず本遺跡の層序や造構・遺物の分布状況を把握するた

21				25
		{		
		†		
1	2	3	4	5

第5図 小グリッド表示法



第6図 原山・大塚遺跡グリッド図

めに試掘調査を実施した。この試掘調査は9月10日(火)まで行い、その結果をふまえて今後の発掘調査の予定を立案した。そして、まず本遺跡を1~5区と沢部分の合計6区画に分割し、1区~5区~沢部分の順序で調査を行うこととした。また、堆積の最も厚い沢部分の3~8Eラインで層序を把握して本遺跡の基本層序とし、時期を決定または予想させる遺物が出土していない遺構については、その覆土を基本層序に対比することによって、遺構の時期をある程度予想することも試みた。

1区(1~3、C~E)の調査は9月13日(金)から10月17日(木)まで行われたが、発掘面積が広いた割には遺構が少なく大型の土坑数基を検出したにとどまった。遺物も少なく、土師器・須恵器などが少量出土したのみであった。

2区(4~7、C~E)の調査も1区とあい前後して開始された。この地区の6~7、C~Dの表土面には、縄文晩期の土器片や玉類及び土師器片などの遺物が多く散布しており、住居跡などの遺構の存在も予想された。それゆえバックフォーでの表土はぎは見合わせ、表土からジョレンで薄削ぎを行いながら掘り下げるにした。その結果、多くの遺物を発見することができ、10月16日(水)の遺構確認作業では野銀治らしき遺構群が確認された。この遺構は後日の調査で江戸時代の梵鐘鋳造跡であることが判明した。

3区(1~6B)は遺跡の西端で段丘崖に向かっての傾斜地であり、遺構の検出や遺物の出土はあまり期待できないのではないかということが試掘調査の結果から予想された。調査は10月22日(火)より開始され、土坑を一基検出したのみで11月14日(木)に終了した。

4区(3~8F~G)は沢の東側に位置し、市道をはさんで大塚遺跡とは対峙しており、地形的観点からみれば大塚遺跡に含まれるべき地点である。10月17日(木)よりバックフォーで表土はぎを開始し、遺構確認作業において溝状の平面プランをもつ落ち込みを検出した。発掘調査の結果、覆土内からは近世陶器が出土するものの、平面形が不定形であり、壁面が流路のようにでこぼこしており、調査員で協議した結果、自然の流水路ではないかという判断に達し調査を放棄した。結局、4区では南側で溝状遺構を1基検出したにとどまった。

沢部分(7~8、E~F)では、試掘調査の結果からみて、沢基底部に遺構が存在するのではないかという期待と懸念が生じていたが、精査の結果、風倒木状の擾乱であることが判明した。そのため、バックフォーと人力を併用し、層位的に発掘を行い遺物を採集することにした。調査は10月23日(木)に着手され、途中、晚秋の悪天候になやまされつつも降雪直前11月30日(土)に終了した。検出された遺構は、西側斜面で梵鐘鋳造関係の遺構SK37のみであったが、縄文土器を主体とした遺物が多く出土し、その出土量は梵鐘鋳造跡関係の遺物を除いた全遺物量の約80%にのぼった。

発掘調査は11月30日(土)に終了し、その後12月2日(月)から12月6日(金)までは遺物の水洗いや註記作業、遺構の図面整理作業などの残務整理を行い、12月7日(土)には現場事務所から撤収した。最終的な発掘調査面積は約11,500m<sup>2</sup>であった。

なお、8月30日(金)から11月30日(木)までの発掘調査期間中に大塚遺跡の事前調査(9月13日(金)～10月8日(水))、糸魚川インター・エンジニアリング建設予定地の試掘調査(10月1日(木)～10月2日(金))、美山・鶴口下遺跡の試掘調査(9月26日(木)～10月9日(木))を調査員1名と作業員10～20名で行った。

その結果、美山・鶴口下遺跡では土師器・須恵器が十数片ずつ出土したため、遺跡として再登録を行い、来年度に発掘調査を実施する方向で公團と協議を開始した。一方、糸魚川インター・エンジニアリング建設予定地では、幅3mで長さが16m・19m・29mの3本のトレンチを任意に設定し、バックフォーで調査を行った。しかし、深さ0.6m～1.7m余りで姫川の河原であったことを予想させる礫層が確認され、表土から數片の近世陶磁器が出土したのみで遺構は検出されなかつた。また、地元の古語の話では、100年ぐらい前は畠地や水田であったが、大水になるとしばしば姫川の流水をかぶる河川敷であったということである。これらの調査結果から遺跡ではないと判断するに至り、調査を切り上げた。

(寺崎裕助)

### 第3節 遺構

検出された遺構の時期は、繩文時代晩期～弥生時代前期と江戸時代とに大別される。2時期以外の遺物は若干出土しているものの、そのほとんどが沢からの出土で、これらを伴う遺構は検出されていない。時期が明確な遺構の大半は江戸時代の梵鐘鋳造関連施設とみられ、掘立柱建物跡1棟、土坑5基である。また繩文晩期～弥生前期の遺構として土坑が1基ある。このほかに土坑5基、溝状遺構1基が検出されているが、その時期は明確でない。

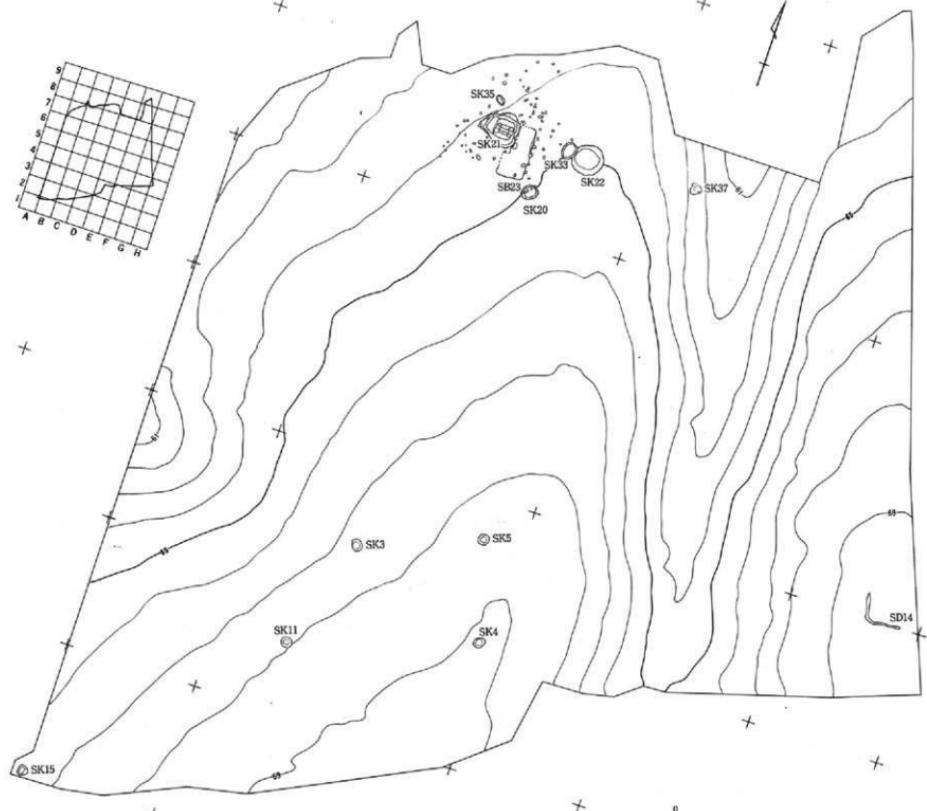
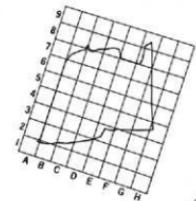
#### A. 梵鐘鋳造遺構

梵鐘鋳造関係遺構は、梵鐘鋳造用土坑SK21、作業場と想定される掘立柱建物SB23を中心として台地北側の緩斜面に集中している。ただSK37のみは台地の東側、沢への急傾斜地に離れて位置しているが、鋳型片・銅津等を出土することから何らかの意味で梵鐘鋳造に関連する施設か、同時期に存在した遺構であると推定される。

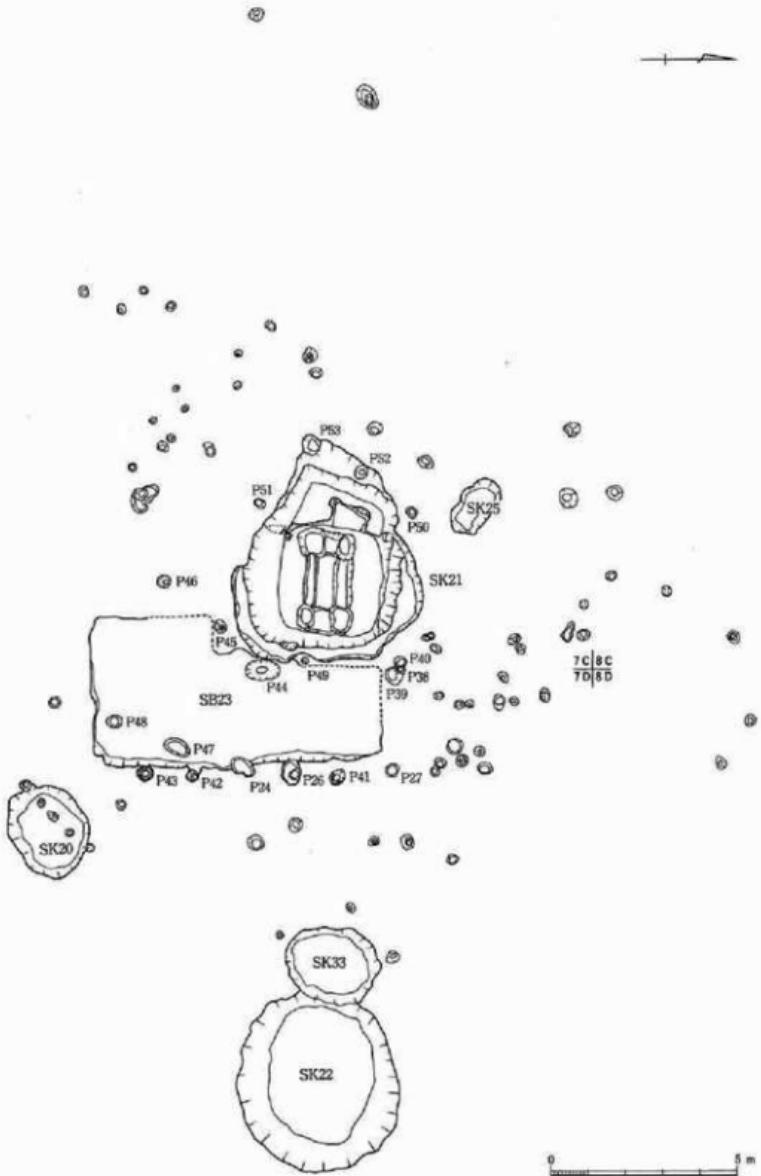
##### 掘立柱建物跡

SB23(第9図、図版4下) 7D北西辺より7Cにかかる土間状遺構である。北西方向に下がる緩斜面を東西約4m、南北約8mにわたって段切るように削平し、黒褐色土と明黄褐色土を交互につき固めて、南北軸に沿ったほぼ長方形の床面を作り出している。梵鐘鋳造用土坑SK21の東側に接続する形態をとっているところから、鋳型の製作等を行う際の作業場と思われる。

これを裏付けるように床面には約2mmの厚さで鋳型に使われる褐灰色砂が堆積している。褐灰色砂より上層にはさらに赤褐色土ブロックを斑状に含む明黄褐色粘土層があり、自然堆積とは異なるため撤入土と考えられる。この遺構に伴う柱穴と考えられるビットは北側のビット39と27、東側のビット27・26・42であり柱間約2.6m、東西2間(約5m)×南北3間(約9m)の掘



第7図 原山遺跡構全休図(1:600)



第8図 梵鐘鉄造跡全体図 (1:150)

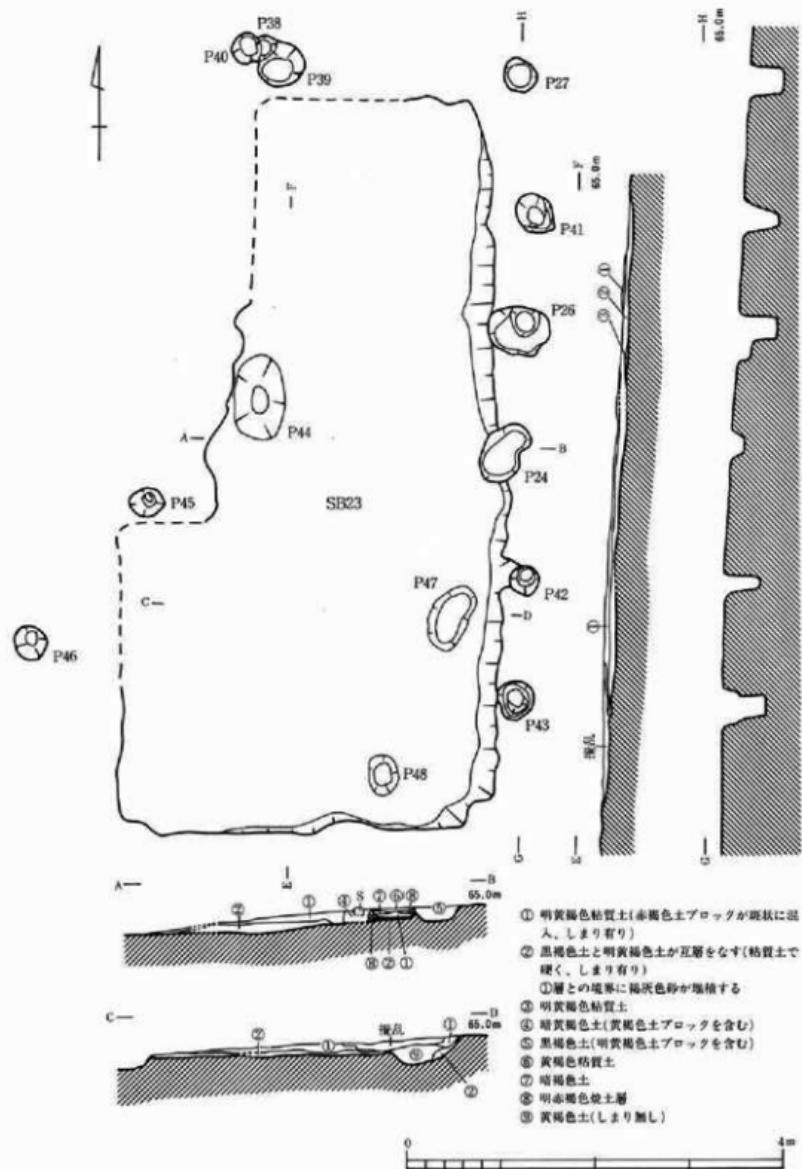
立柱建物であったと想定される。しかし、西側・南側にはこれらと対応する柱穴は検出されなかつた。7C・Dから8C・Dにかけてほぼ南北方向にごぼう溝が掘削されており、このために破壊されてしまったものか、あるいはSK21と接続する曲り家的な構造をもつために一般的な掘立柱建物とは異なる柱の配置をしていたことも考えられる。また、鋳型製作の作業面と思われる砂層上に新たな土を搬入していることから建て替えが行われた可能性もあり、ピット41・24・43等はそれに伴うものであるのかもしれない。

## 土 坑

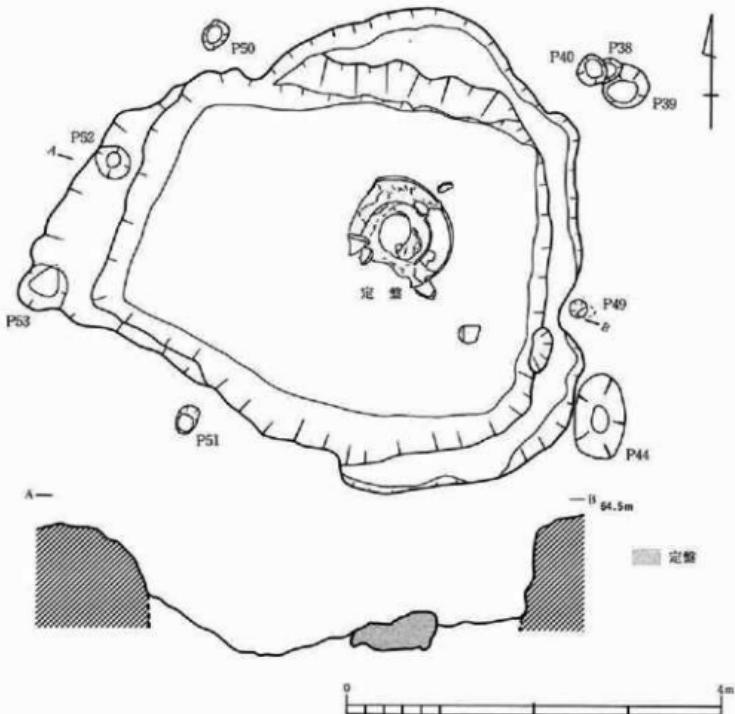
SK21（第10・11図、図版5・6） 7Cの北東に位置する梵鐘鋳造用の土坑である。遺構確認面での平面プランは西側に突出部を持つ不整円形状を呈する。梵鐘鋳造作業は完掘時の底面（第1次作業面）と定盤と思われる円型の鋳型土台が検出された深さ約1mの面（第2次作業面）で行われたと考えられる。そのためここではそれぞれに分けて記述したい。

〔第1次作業面〕 遺構確認面から深さ約2.2m、一辺約3mの隅丸方形をした底面と西側に突出したテラス状部分からなる。底面にはピット4基とこれらをつなぐように掘り込まれた溝4本が検出された。これは定盤下に設置される井桁状に組んだ丸木（掛け木）の跡とみられ、この面で梵鐘の鋳造作業が行われたことを示している。当初は先に出土した定盤に伴うものと考えられたが、定盤が移動されないまま残っているにもかかわらず掛け木用丸木が残らないこと、底面上から鋳型片が出土していること、レベル的に約1mもの高低差があり不自然であることなどから、定盤が設置される以前この面においても鋳造作業が行われ、使用後は掛け木がとりはられたものであろう。テラス部分は底面からの高さが約40cmで中央部のみ底面近くまで掘り込まれている。上面は焼成を受けて硬く、橙色を呈する。このテラス部分と隅丸方形部分との境界付近の南北壁には、底面から約60cmの位置に直径22~25cm、奥行き40~50cmの横穴が掘り込まれている。直径20cm前後の丸木を横に渡した跡と考えられ、これを固定する杭を打ち込んだのか南壁際の底面には約10cm角の方形ピットが検出された。

〔第2次作業面〕 遺構確認面からの深さは約1m、第1次作業面を黒褐色土ブロックの混じる褐色土で埋めて定盤を設置している。梵鐘の高さとの関係と思われる。隅丸の長方形をした褐色土面のほぼ中央部北東寄りの位置に定盤を設置し、周囲にはこれを埋めるかのように明黄褐色の土が入れられている。この褐色土ブロックの混入する明黄褐色土の上面が実際の作業面であったと考えられる。定盤は白色粘土を用いて形成され、表面は焼成され淡黄色を呈する。外径約120cm、内径70cmのドーナツ型をした平らな外縁部分と、2段の掘りくぼめられた中央の部分からなる。外縁部には外型を、中央部の1段目には内型を構築したものと考えられる。さらに低い2段目の部分は内型内の空洞部分にあたり、他の梵鐘鋳造跡の調査報告では、この部分に砂をつめて空気抜きとする事例（五十川1982）もあるが、当遺跡出土のものはこの中央部分も含めすべてが白色粘土の塊であった。また焼成されて硬化しているのは表面から1cm程の部分で他はすべて未焼成のままであった。



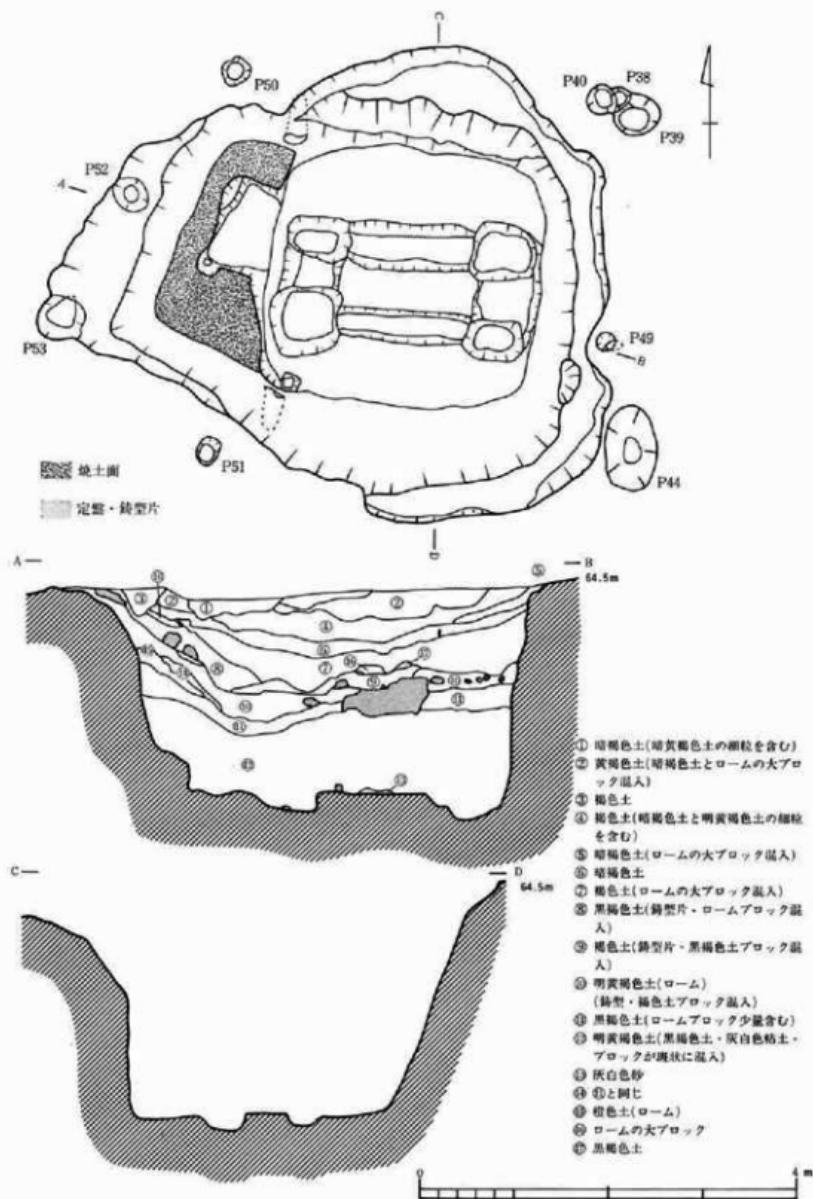
第9図 SB23 平・断面図



第10図 SK21 第2次作業面 平・断面図

以上のようにSK21はその坑内に作業面を2面持つことは明らかであり、少なくとも2回以上は使用されたものと考えられる。しかし、土坑自体ロームを掘り込んでいることから排水は悪く、鉄型には砂が使用されることなどを考え合わせると、長期にわたって土坑を使用するためには上屋の必要性が考えられる。SK21がSB23と一体構造の上屋を持つと仮定した場合、これに伴う柱穴として考えるのは、ピット40または39・44・50・51である。2つの遺構の接続部分にあたるピット39・40・44はいずれも深く、50~60cmを測る。またこれらの間にあるピット49は直径20cm、深さ約47cm、傾斜角79度で東に向かって斜めに掘り込まれている。この穴に柱を立てた場合、その先端は土坑のほぼ中央を指すことから上屋の柱穴として考えるよりも構架材等を設置した柱穴としての可能性が強い。もちろん他の柱穴も同様の可能性は否定できない。この他土坑全体に覆いをかける必要性からすれば、ピット52・53も廟等の柱穴と考えられる。

覆土の堆積状況から、土坑廃棄時には土と一緒に大量の鉄型片、こしき炉片・瓦片が土坑の



第11図 SK21 平・断面図

西方向から投げ込むように捨てられたものと推定される。またこの中から鋳型用と思われる粘土がむしろ様の繊物に包まれた状態で出土している(図版9下)。

**SK22**(第12図、図版7上・8上) 7Dのはば中央部北寄りに位置する東西に長い楕円形の土坑である。長軸4.9m、短軸4.4m、深さ0.8mを測る。底面のロームは叩きしめられたように硬い。ほぼレンズ状に堆積するが覆土の状態から見て自然堆積とは考え難く、土坑廃棄時に埋めもどされた可能性が強い。底面付近より鋳型片が出土している。

**SK33**(第12図、図版7下・8上) SK22の西側に位置する南北に長い楕円形の土坑である。長軸2.5m、短軸2.2m、深さ0.45mを測る。土層面からすればSK22が埋められた後、新たに掘り込まれたものと思われる。覆土中に鋳型用と思われる砂が層をなして堆積する。SK22同様に使用後は埋めもどされたものであろう。鋳型片、銅滓を出土する。直径20~30cm深さ10~20cmのビットが約2mの間隔で土坑西側を囲むような位置に3基検出された。

**SK20**(第12図、図版8下) SB23の南東に位置する楕円形の土坑である。長径2.5m、短径2.1m、深さ0.38mを測る。土坑北西寄り、長軸方向に平行するようなビット列が見られる。20~40cm間隔で並ぶこれらのビットは直径20~30cm、深さは坑内のものが13~15cm、坑外のものはいずれも24cmを測る。覆土の堆積状況から自然に埋没したものとは考え難く、SK33・20と同様故意に埋められたものと考えられる。鋳型片・銅滓が出土している。

**SK37**(第12図、図版9上) 台地東側にある沢の西斜面7Eに位置する。平面形は不整の台形状を呈し、傾斜地に掘り込まれていることから断面形は階段状を呈する。平坦な底面には直径約30cm、深さ15cm前後のビットが2基、直径約15cm、深さ約5cmのビットが1基検出された。白色粘土とロームブロックのつまつた坑内から、SK21出土のものとは明らかに異種の鋳型片がまとまって出土している。

以上の他に梵鐘鋳造関連遺構と考えられるものはSK21北側に位置する不整形土坑SK35(第8図)がある。焼土のつまつたこの土坑は位置的に見て何らかの意味でSK21と関連をもつものと思われる。また、第8図に掲載したビットのほとんどはその覆土中に鋳型・瓦などの破片を含むか、またはその底面に鋳型に使用される砂が残っていたものである。

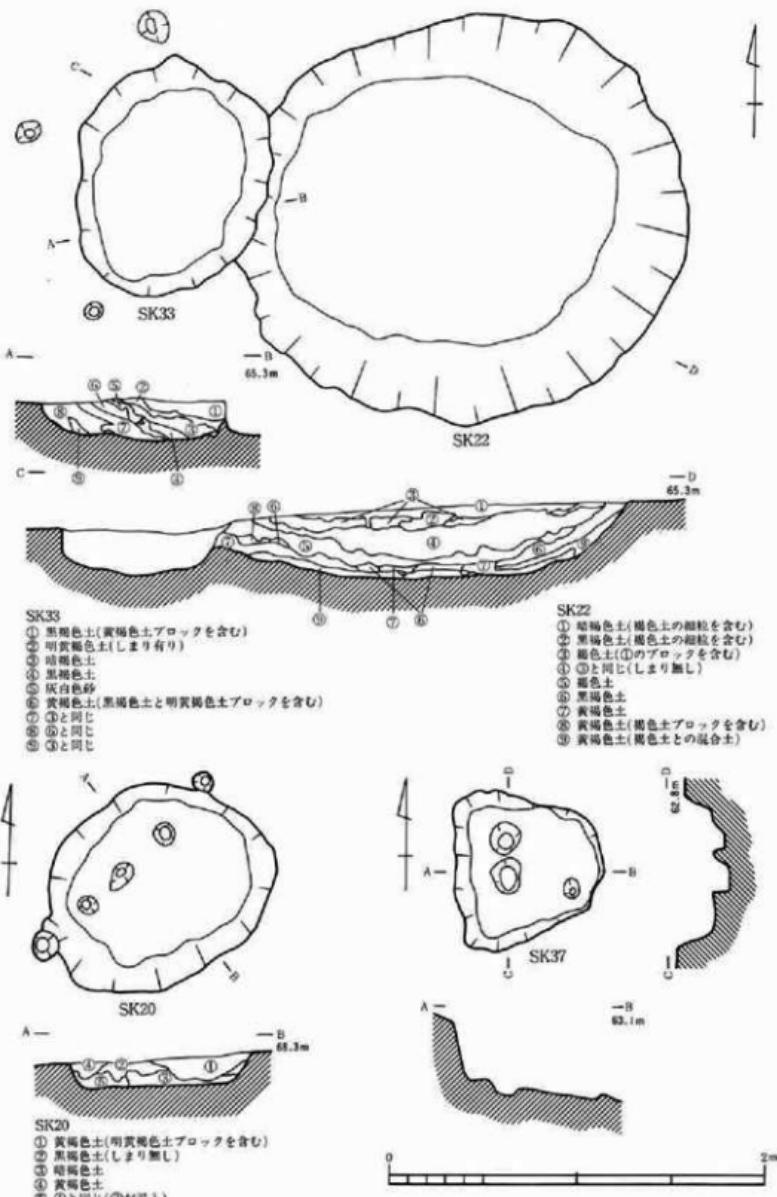
(高橋昌也)

#### B. その他の遺構

本調査で梵鐘鋳造跡以外に検出された遺構は土坑6基と溝状遺構1基のみであった。

#### 土 坑

**SK3**(第13図、図版12下) 4C9・10に所在する。開口部の平面形は楕円形、基底部の平面形は隅丸方形である。西壁面の中央と東壁面の下部が袋状になっており、壁面は開口部付近でゆるやかに外反する。開口部長径約1.9m、短径約1.5m、基底部長辺約0.9m、短辺約0.8m、確認面からの深さ約1.2mを測る。覆土は4層に分層ができ、3層を除けば暗褐色を呈する。1~3層にはにほい橙色土のブロック又は細粒が混入し、3~4層には炭化物が含まれるが、含有



第12図 土坑(SK20・22・33・37)平・断面図

量は3層の方が多い。

SK4（第13図） 3 D 25に所在する。開口部の平面形は楕円形、基底部の平面形は隅丸方形ぎみである。基底部はややくぼんで「U」字型を呈し、壁はほぼまっすぐ立ち上がり外反ぎみに開口する。開口部長径約1.9m、短径約1.4m、基底部一辺約0.9m、深さ約1.3mを測る。覆土はSK3と同じく4層に分層ができ、3層を除けば暗褐色を呈する。1・2層にはSK3でみられたにぶい橙色土ブロックが混入し、4層には若干ではあるが炭化物のブロックが含まれる。

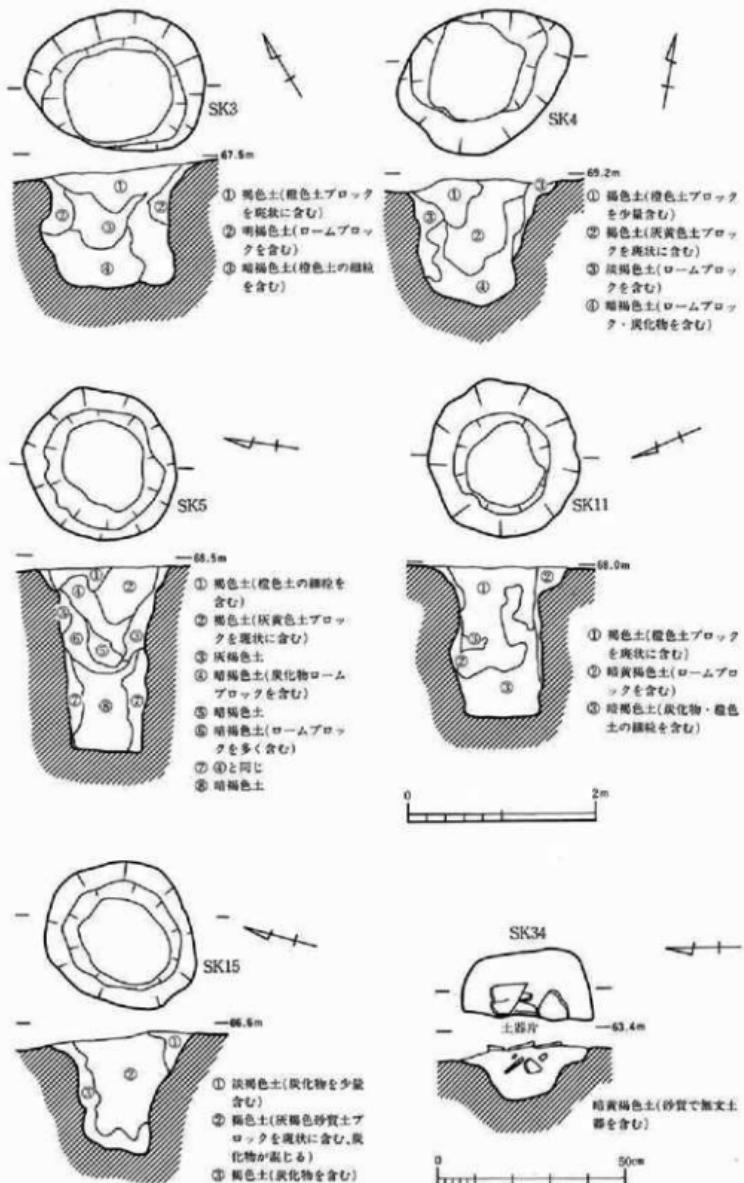
SK5（第13図、図版12上） 4 D 19に所在する。開口部の平面形は円形、基底部の平面形は楕円形である。基底部は平坦で壁はまっすぐ立ち上がり、確認面下0.2m～0.3mのところから外反する。開口部直径約1.5m、基底部長径約1m、短径約0.9m、深さ約2mを測る。覆土は8層に分層でき、全体的に暗褐色を呈している。1・2層にはにぶい橙色土もしくは灰黄色土のブロックが混入し、4・6・7層には炭化物が含まれるが、中でも4層の炭化物の量は目立つて多い。

SK11（第13図、図版11） 3 C 13に所在する。開口部の平面形は円形、基底部の平面形は不定形である。基底部は平坦で、北壁面は若干の袋状を呈し、南壁面はほぼまっすぐに立ち上がり、確認面下0.2mくらいから外反する。開口部直径約1.6m、深さ約1.6mを測る。覆土は3層に分層できるが、全体的に暗褐色を呈している。1層には径3cmくらいのにぶい橙色土ブロックが混入している。

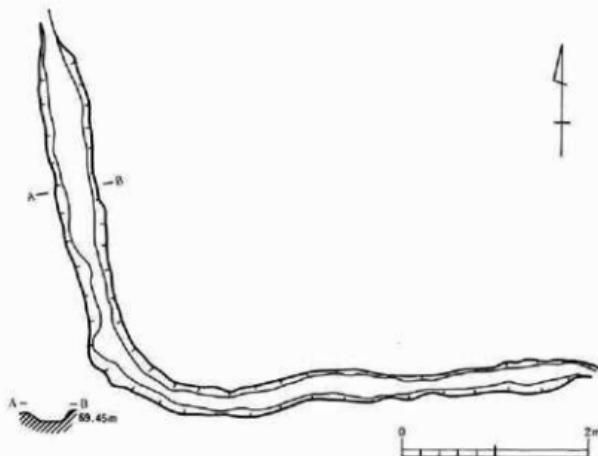
SK15（第13図、図版10） 2 A 5、2 B 1に所在する。開口部及び基底部の平面形は楕円形である。基底部は北から南へとやや傾斜し、北壁面はほぼまっすぐに立ち上がるが、確認面下0.2m余りの箇所から外反する。南壁面は基底部から40cmのところまではほぼまっすぐに立ち上がり、あとはゆるやかに外反する。開口部直径約1.5m、深さ約1.3mを測る。覆土は3層に分層ができ全てに炭化物が含まれる。2層には灰褐色砂質土のブロックが混入している。

SK34（第13図、図版13上） 7 C 11に所在する。開口部の平面形は隅丸方形と推定され、断面形は有段状である。開口部の一辺は約1.1mで、深さ約0.3mを測る。覆土は暗褐色の単層である。覆土の上部から無文の深鉢の胴部破片がまとまって出土している。無文土器で、口縁部と底部を欠いているため詳細な時期決定は不可能であるが、縄文晩期後半～弥生前期に比定される土器と考えられる。

このように5基の大型土坑と1基の小型土坑が検出され、小型の土坑からは縄文晩期後半～弥生前期に比定される土器が出土していることから時期はある程度予想される。しかし大型の土坑からは遺物が出土していないゆえに時期決定は不可能である。ただ、分布地域が2～4、B～Dと遺跡の南西区域に集中しており、平面形や断面形に若干の相違はあるもののその形状や規模においておおよそ似かより、覆土も全体的に暗褐色を呈すなど共通性が認められる。これらのことから大型の土坑は同一時期の所産と考えられる。なお、覆土の上層にみられたにぶい橙色や灰黄色などのブロックは砂質に富んでおり、これが基本層序のV層である黄褐色砂質土層



第13図 土坑(SK 3 + 4 + 5 + 11 + 15 + 34)平・断面図



第14図 SD14 平・断面図

に対比できるとすればこれらの土坑の時期は縄文早期以前にさかのばる可能性も生じる。性格については、大型のものは不明である。小型のものは、上部から無文土器ではあるが約1個体分の土器がまとまって出土していることから土壤墓的な性格も予想される。

#### 溝

SD14（第14図、図版13下） 沢東側の5G3・4に所在する。平面形は「L」字状を呈し、断面形は「U」字状をなす。総延長は約9m、幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。覆土は単層で基本層序のIIa層類似の黒褐色を呈する。また、覆土中より表裏にハケ目整形の施された土師器の裏の小破片が出土している。出土遺物からこの溝は不確かではあるが平安期の溝と推定される。性格については建物に伴う溝ではないかと予想されるが、溝の内側に柱穴など建物を想定させるような遺構が検出されなかったことからその性格は不明としておきたい。

（寺崎裕助）

#### 第4節 遺 物

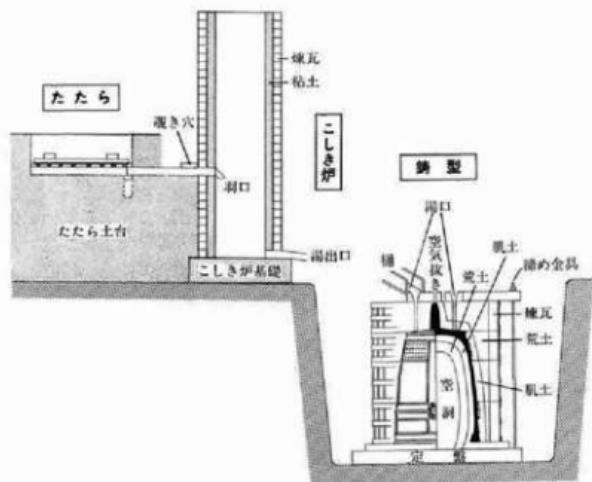
##### A. 梵鐘鋳造遺構関連遺物

梵鐘鋳造に直接関係すると思われる遺物には、鋳型片・こしき炉片・銅津・三叉形土製品・瓦・釘等がある。また直接関係しないまでも同時期の遺物と思われるものに、錢貨・煙管・近世陶磁器・人形・土鍤がある。この他、7CのSK21より定盤とよばれる鋳型土台が出土しているが、取り上げ作業中に崩壊し、原形をとどめていない。遺物の大半はSK21より出土しており、内容的には鋳型片・こしき炉片が最も多くコンテナ約25箱にのばる。他の遺構では、7EのSK37

よりSK21出土のものと異なる鋳型がまとめて出土している以外は、いずれも鋳型・こしき炉・瓦の小片や銅滓を若干出土しているにすぎない。梵鐘铸造遺構と同時期の遺物として掲載するものにはSK21・37以外の遺構出土のものも含めるほか、出土品ではないが、かつて当地で耕作中に採集された瓦片についてもあわせ掲載する。

**梵鐘鋳型（3～35）** 梵鐘の鋳型は鋳込みの後、製品を取り出すために必ず破壊されてしまう性格のものであることから、出土品はすべて破片である。従って鋳型本来の姿を類推できる資料に乏しい。ここに掲載する資料においてもその部位を明確にできるものは少ない。このため遺物の観察から得られた情報をもとにして梵鐘铸造経験者の意見を参考に推定したものがほとんどである。

梵鐘铸造には外型と内型が必要となる（第15図）。外型は煉瓦状に焼き固めた粘土を真土（砂・粘土・焼土粉末の混合土）でかためながら積み上げて外壁とし、この内面に荒真土（粗粒子の砂を混ぜた真土）を塗る。さらに仕上げ真土（細粒子の砂を混ぜた真土）を塗り表面は型離れを良くするために「くろみ」（木炭粉末を粘土汁で溶いたもの）を塗って仕上げる。内型は芯を縦に数本入れ、外型同様に荒真土・仕上げ真土を塗り重ねて表面には灰真土（藁灰と木炭粉末を粘土汁で溶いたもの）を塗って仕上げる。竜頭・乳・撲座・唐草の部分は木型や挽型によって別造りにされ、乾燥後焼成して外型の定位位置に配置される〔坪井1970〕という。出土品は煉瓦状のものや、これに真土や「くろみ」を塗ったもの、内模するもの、別造りの乳や唐草など様々であるが、ここではすべてを一括して「鋳型」と呼ぶ。大半は7CのSK21から出土しているが、12～14のみが



第15図 梵鐘铸造模式図（坪井1970一部改変）

7 E グリッドSK37から出土した鉄型である。なお梵鐘の部位  
名称は第16図に示した通りである。

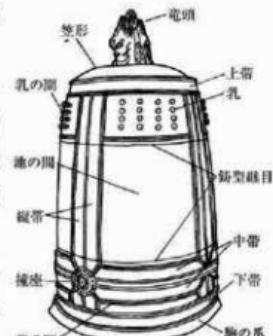
鉄型A (3・4) 砂混じりの粘土を焼成している。「くろ  
み」の塗られた面には3に8条、4に4条の断面逆台形で波打  
つように流れるほぼ平行な凹線が刻まれている。赤褐色に焼  
けた面には明瞭な指頭圧痕が残され、外型本体とは別造りの  
ものであることを示す。竜頭の鉄型と推定される。

鉄型B (5) 梵鐘の上・下帯あるいは草の間に鋳込まれ  
る唐草の鉄型である。3・4と同様砂混じりの粘土を焼成し  
ている。欠損のため長さは不明だが、幅5.3cm、厚さ1.2~1.5cm、  
ゆるやかに湾曲する板状のもので角は丸められている。唐草  
は内湾する面につけられており、極細粒砂の仕上げ真土が薄  
く塗られ「くろみ」で仕上げている。文様は木型によるものであろう。他のすべての面には粗粒子の砂が付着する。外型本体の真土であろう。

鉄型C (6・7) スサ入り粘土を芯として約1cmの厚さに荒真土を塗り、表面は「くろみ」  
で仕上げている。粘土は暗褐色、表面のみ焼けて橙色を呈す。仕上げ真土らしい層は非常に薄  
く塗られているのかほとんど認められない。断面形は段差約0.9cmの階段状を呈すが各段の平  
面は平行せず約5度の開きを持つ。階段の稜線は複元すると直径約65cmの円を描くと思われる。  
6については真土の剥落部分に連続する指頭圧痕が確認され、スサ入り粘土を環状に成形した  
過程がうかがえる。笠形部分の鉄型であろうか。

鉄型D (8・9・10・11) いずれの鉄型もスサ入り粘土の上に荒真土・仕上げ真土を塗り  
重ね表面を「くろみ」で仕上げている。粘土は黒褐色又は暗褐色で表面は焼成を受け浅黄褐色で  
ある。荒真土はにぶい橙色、仕上げ真土は灰色を呈す。8の鋳込み面には幅1.3cm、深さ0.6cmの  
溝が1.8cm間隔で平行に走る。おそらく製造の区画線を陽模するための溝であろう。9・10に  
も1本ではあるが同規模の溝が走り、区画された帶や池の間等の平らな部分の鉄型と推定され  
る。11は他の3例とは異なり内湾する凹曲面を持つ。この鉄型によって鋳出される部分をあ  
えて求めるならば、二段の中帯にはさまれて鐘身を一周するふくらみを持った帶の部分と考えら  
れるが、あくまでも推定の域を出ない。8・9・11には釘が打たれたまま残り、10には釘跡の  
みが残る。鉄型における釘の利用法については釘の項にゆずる。

鉄型E (12・13・14) ここに掲載したものの中では、この3点のみがSK37出土であり、SK21  
出土の鉄型とは明らかに異なる。いずれもにぶい褐色の荒真土と浅黄色をした仕上げ真土から  
なり表面には「くろみ」が塗られている。荒真土の部分にスサの圧痕を残すものもあることから、  
本来スサ入り粘土に塗られていたものと思われるが、スサ入り粘土自体SK37からはほとんど出  
土せず、剥落した真土の部分のみが出土する。再利用のために真土のみを残したものであろう



第16図 梵鐘各部位名称  
(坪井1970)



第17図 梵鐘鋳型（外型）

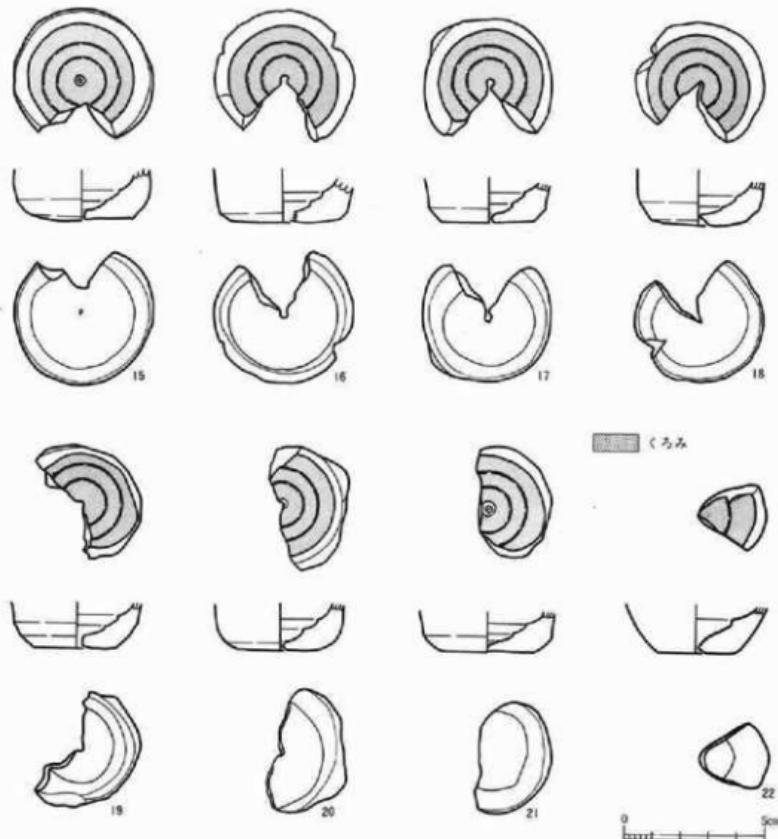
か。12はSK21出土の鉄型10とよく似ており、同じ様な部位の鉄型と考えられるが、溝の幅は約5mm、深さ約2.5mmと10の溝に比して細く浅い。13にも同規模の溝が横に3本走り、その下に内湾する曲面を持つ。14は縦に3本横に1本、やはり12と同規模の溝が走り、その下に13と同様内湾する曲面を持つ。横に走る溝部分の曲線から復元すると、これらは直径40cm内外の半鐘ともいうべき鐘身の外型と推定され、13は草の間～駒ノ爪、14は縦帶～駒ノ爪の部分にあたるものと思われる。

鉄型F（15～22） 梵鐘外型本体の乳の間に埋め込まれる別造りの乳型である。荒真土より少し粒子の細かい砂を混ぜた真土を使い、鉄込み面は「くろみ」で仕上げている。断面形が3段のものと2段のものの2種類出土しており、いずれも頭部の型のみである。欠損面からみて頭部の型もあったものと思われるが、鐘身を取り出す際に破壊されてしまったものと考える。量的には、3段の乳型が40個体ほど出土しているのに対して2段のものは5片と極端に少ない。15～21は3段の乳型である。「くろみ」の塗られた面は三重の同心円形を呈し、各円の半径は中心に近い方から0.8cm・1.3cm・1.9cmであり、どの乳型からもほぼ等しくこの数値が得られる。中心に近い2つの円にゆがみがなく、各段の接線はシャープであること。木型による乳型の様に継ぎ目がなく、どの型にもその中心部分に迴転軸によると思われる「くぼみ」ないしは穴があることなどから、模型によって製作された乳型と考えられる。外型本体に埋め込まれていた面は、焼成により赤味をおびた橙色を呈し、ヘラケズリの整形が施されており部分的に荒真土が付着する。

22は2段の乳型頭部片である。「くろみ」の残る面は、二重の同心円形を呈し半径は推定で1.25cm・2.25cmである。この型によってできる乳はその頂部が擬宝珠状にとがり、円丘状を呈すると思われる3段のものとは異なる。裏面の整形技法は、やはりヘラケズリで色調はにぶい黄橙色を呈す。3段の乳同様、模型によって製作されたものであろう。

鉄型G（23・24・25） いずれも平滑な2面が一定の角度で接している。それぞれの角度や胎土の違いから異なる部位の鉄型と思われる。23は砂まじりの粘土を焼き始めたもので、欠損していない面すべてに真土らしき砂粒が付着する。24はスサ入り粘土に荒真土・仕上げ真土を塗り「くろみ」で仕上げている。「くろみ」の残る面はゆるやかに内湾する凹曲面である。駒の爪の部分であろうか。25はスサ入り粘土のみ。一方は水平面、他方は曲面を呈し、いずれの面もなめらかに仕上げられている。真土が剥落したものか、褐色の砂泥が一面に付着している。部位は不明である。

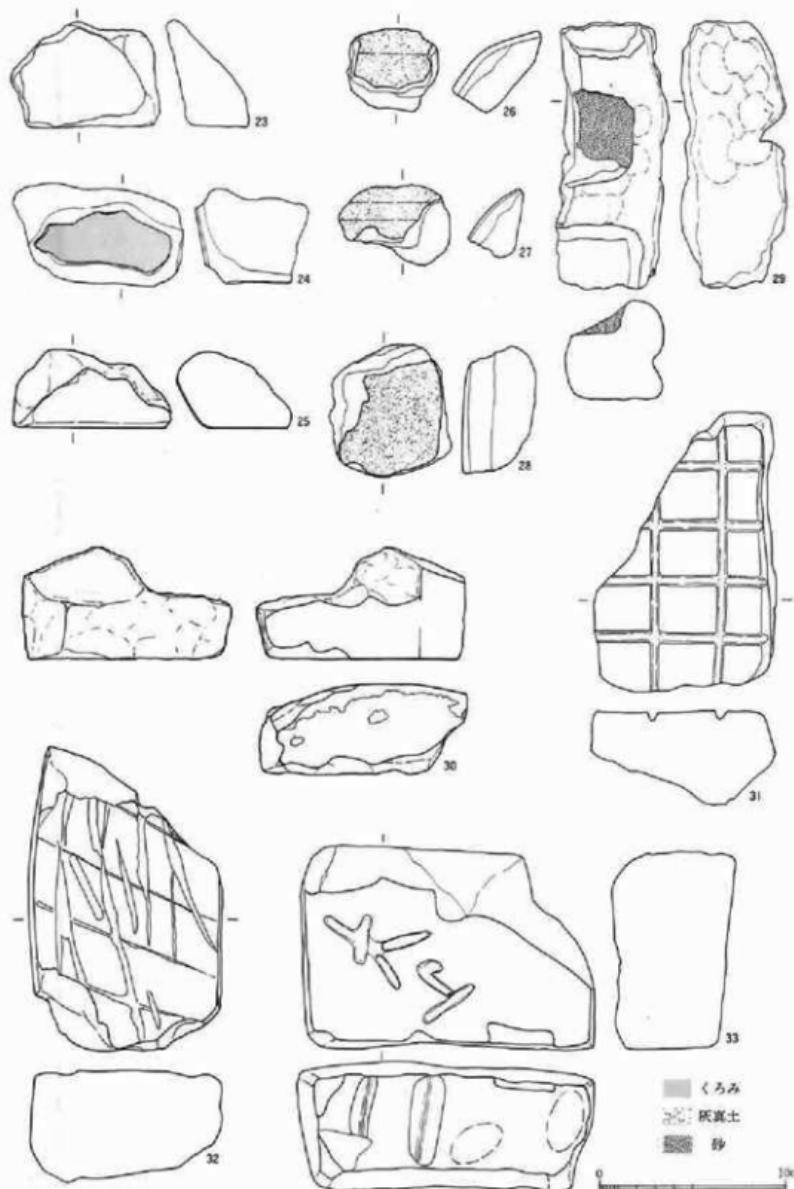
鉄型H（26・27・28） 内型と思われる鉄型である。いずれもスサ入り粘土に真土を重ね塗りすることは外型と同様であるが、表面は「くろみ」で仕上げられた面とは異なって、暗灰色でザラついており「灰真土」で仕上げられたものと考えられる。26・27は、縱方向は急な、横方向は緩やかな曲面を持つことから、内型の中でも肩の部分と思われる。いずれも模型によると推察される横方向の稜線がかすかに残る。28の曲面は両方向ともに緩やかである。



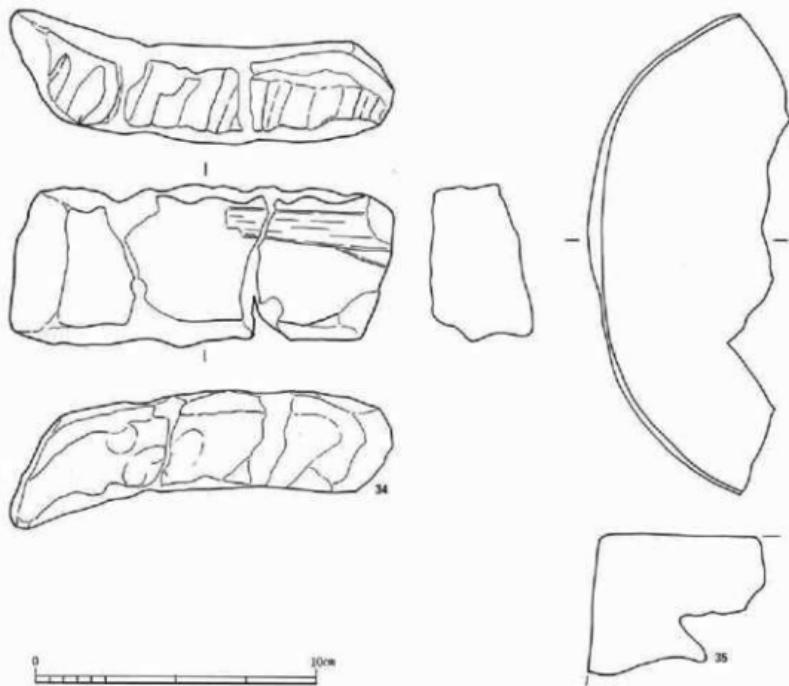
第18図 梵鐘鋳型（乳型）

鋳型 I (29) スサ入り粘土にエグリが入れられている。淡橙色に焼けた表面には明瞭な指頭圧痕が残り、部分的に真土らしい砂が付着している。エグリの部分には砂が塗り込められている。全体に作りが粗雑であることから鋳型の骨材として真土を塗って使用されたものと推定される。エグリの入る理由は不明だが、型のズレを防ぐものかもしれない。

鋳型 J (30) 砂混じりの粘土を硬く焼きしめたものである。湾曲する面と水平な面とがほぼ直角に接し、いずれの面も橙色を呈する。湾曲面には直線が1本刻まれ全体に真土と思われる砂の付着が認められる。水平面は外縁部を除き一面に炭化物が付着している。黄灰褐色を呈す欠損部分には、凹凸が激しく砂粒子の目立つザラついた面と、円筒形の道具でえぐり取られたように平滑な面がある。部位は不明である。



第19図 梵鐘鉤型



第20図 梵鐘鋳型

鋳型K (31・32・33) いずれも砂とスサが混入した粘土を焼きしめた煉瓦状のもので表面は橙色、欠損面は暗褐色を呈す。31は約100度の鈍角で接する2つの平面を持つ。この一方には幅約6mm、深さ約4mmの沈線がほぼ等間隔で横縦に入っている。この網目状の沈線の意味は不明であるが、あまりにも整然としているため真土に隠れる部分ではなく特別な意味を持つのかかもしれない。部位は不明。32は復元すると外径約80cm、内径約60cmのドーナツ状を呈すと考えられる。水平面と内溝面に真土のつまつた細く浅い沈線が認められ、真土のつきを良くするための工夫と見られる。部位は不明だが、内型の周囲を囲んで鐘身の底部に接する土台部分であろうか。33は煉瓦状の直方体だがゆるやかに湾曲している。内溝する面には真土らしい褐色砂泥の付着が見られる。この曲面から推定される内径は約80cm、32の外径とはほぼ一致することから外型の外壁材と推定される。これを積み上げた際の接着面と思われる水平な面には指頭圧痕と左右の斜め上から切り込んだような割み目があり真土と思われる砂の付着が見られる。強い接着力を得るための工夫と考えられる。外面には外型を土坑内で再構築するための記号か、「六上」か「大上」あるいは「十八上」と読める文字が刻まれている。

**鉄型L** (34) 33と同様の外壁材と思われる。内湾する面全体に荒真土らしい砂の付着が見られる。水平面に割み目が入る点においても同じである。外面には幅2cm位の帯状の圧痕が認められる。鉄あるいは竹製の「たが」によるものと思われる。

**鉄型M** (35) 出土遺物の中では定盤について大型の破片である。水平な面と湾曲する面が約100度の角度で接する。いずれの面も平滑に仕上げられ、外面には真土が多く付着する。平面形は梢円で断面形は台形を呈するものと思われるが、部位は不明である。

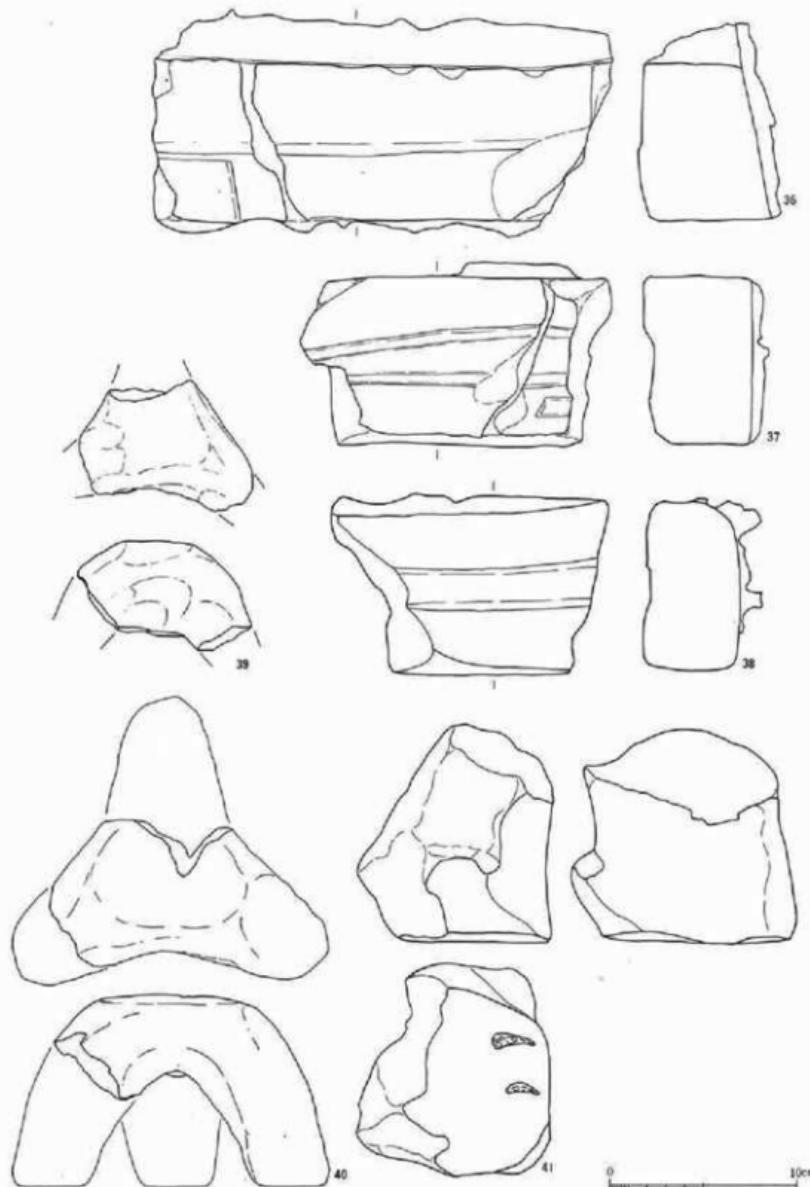
ここに掲載した鉄型は以上であるが、この他に内型の骨材と思われるものも出土している。これは砂とスサを混ぜた粘土を帯状に延ばして環状に積み上げて作られている。1本の帯の断面形は約3cm角の正方形で積み上げ面には指頭圧痕が見られる。外面は平滑で淡黄褐色を呈し、真土らしい灰色の砂が付着する。内湾面は未整形で灰褐色を呈す。曲面から復元推定される外径は約68cmで真土の厚みを加えると約70cm、外壁の内径が80cmとすれば、この鉄型によって鋳造された梵鐘の口径もこの範囲におさまるものと推定される。なお、定盤については遺構の項で述べたのでここでは省略する。

#### こしき炉 (36~38)

梵鐘など大型のものを鋳込む時には一度に大量の湯(金屬溶融液)が必要となる。このため第15図にあるような溶融炉を構築し、金属材料と木炭を交互に投入して点火し、躍輪・ふいご等で大量に酸素を供給、高熱で一気に金属を溶融させる。この形式の炉を鋳物職人は「こしき」と呼ぶ。36~38はこの「こしき」の炉壁と見られる。いずれも7°CのSK21出土。砂とスサを混ぜた粘土を硬く焼きしめた煉瓦状のもので、ゆるやかに湾曲する。形状は34の鉄型に非常に良く似ているが内湾面全体に暗赤褐色を呈する溶融した金属が約1~2cmの厚さで固着し、断面を観察しても真土の存在は認められない。外の面は焼成を受け橙色を呈し、外枠によるとと思われる帶状圧痕を残す。水平面には外型外壁に見られるような割み目は見られず、金属溶解時に出る不純物の炭化したものが内湾面からみ出るように固着している。36は、ここに掲載したものの中で最も大きな破片であるが、幅8.5cm、厚さは溶融物を除いて約5~6.5cmである。外面の曲線から炉の直径を復元すると約80cmである。37・38はいずれも長さが36の半分程度の破片であるが、幅約8.5cmと等しい。厚さは37が約5.5~6cm、38が約2~5cmと一定せず、外面による曲線はほぼ正円をえがくが内面のそれは凹凸とした梢円形を呈するものと思われる。内湾面に固着する溶融金属の面には縁背を生じている部分と鉄錆を生じている部分がある。鉄錆の部分は他の面とは異なり暗紫灰色を呈し表面に白濁した皮膜がかかっている。銅は鉄を嫌うため銅鋳物と鉄鋳物は同じ場所で行わないということであるから、不用意に炉内に鉄を投入したとは考えにくい。梵鐘などの鋳込みには壇家が立ち合い、淨財やかんざし等を炉に投じる風習もあると聞くが、そのような理由によるのかもしれない。

#### 鋼津 (図版17上・左)

こしき炉に固着するものも含め錆の溶解時に生じた津を鋼津として一括する。一般的に気体



第21図 こしき炉・三叉形土製品等

の抜けた気泡部分がそのまま固まった多孔質の滓である。木炭と思われる炭化物をその中に含むものもある。大部分は銅を含み表面は暗赤褐色を呈し緑青を生じている部分も見られる。図版18上と下左寄りに並ぶものがそれである。一方、不純物が溶解・凝固したと思われるガラス質のものもある。黒褐色もしくは暗褐色を呈し非金属性で軽い。銅滓はSK21を中心として遺構の内外から出土している。

#### 青銅溶解片（図版17上・右）

鋳造過程で滴下した湯がそのまま凝固したものである。梵鐘の鋳造には銅と錫の合金、すなわち青銅が使われるという。図版18下、右寄りに並べたものはいずれも体積に比して重く、しづく状・粒状を呈す。いずれも表面は緑青に覆われている。7CのSK21出土。

#### 三叉形土製品（39・40）

39は7Dの遺構確認面、40は7CのSK21より出土している。いずれも砂とスサ入りの粘土を三脚状に成形して焼成している。全面に指頭圧痕が残ることから、手づくりによるものと思われる。39は小型品で三脚とも根元から欠損している。馬の背状の上面は黄灰色であるが、その裏側にあたる面は二次焼成を受け淡橙色を呈する。40は39よりも大きく、二脚が欠損しているが残る一脚より復元すると二脚間9cm前後、高さ10cm前後と推定される。上面と脚の先端は平坦である。全体に赤褐色を呈すが、上面から脚の外側にかけて黒く変色し表面も荒れている。「すきぎ」と呼ばれる金属を溶解する際に用いたもの（甲野・中村1965）との説もあるが用途は必ずしも明らかでない。

#### その他（41）

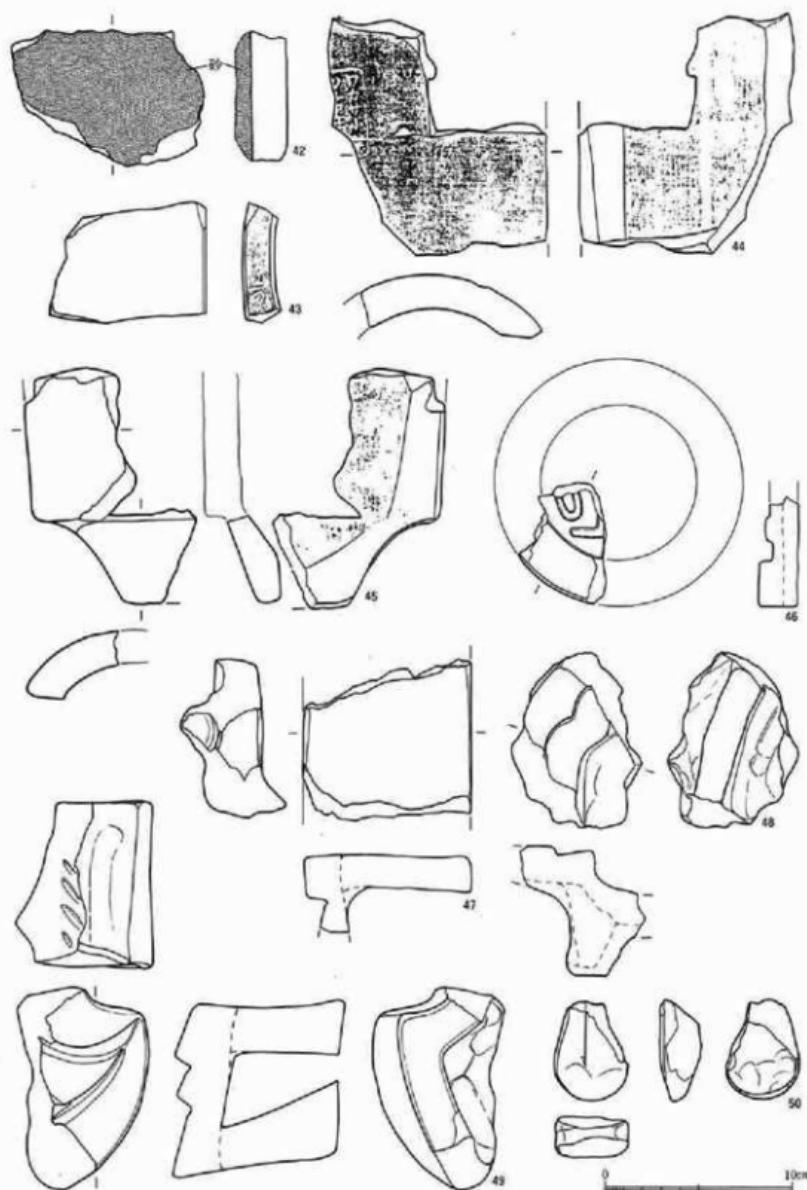
7CのSK21出土。砂とスサ入りの粘土を焼成していることから、鋳型か、こしき炉の一部と思われるが断定できない。表面は焼成を受けて橙色を呈す。底面と思われる平面に牙形のくぼみが見られる。

#### 瓦（42～55）

瓦は7CのSK21、7DのSK22、SB23から出土しているほか、耕作中に発見され、糸魚川市史編さん室に保管されていたものもある。SK21・22出土のものは、いわゆる投げ込みの形で埋土中より発掘されたものであり、SB23では床面直上で出土した。出土した瓦の中で環元焰焼成の瓦は、SK21から1片出土しているのみで、他は全て二次的な酸化焰焼成のため全体に橙色を帯び、表面はもろくなっている。

平瓦（42・43） 42はSK21出土の平瓦と思われる破片である。外面に荒真土らしい砂が約1cmの厚さで塗られている。砂の剥落部分は本来の瓦表面と見られ、暗赤灰色を呈す。43はSB23出土の文字瓦である。端面に「つ」と読める文字が捺印されており、道具瓦の一部である可能性もある。

丸瓦（44・45） 44はSK21出土の文字瓦である。外面に片仮名と漢字が捺印されているが、欠損部分にかかる文字は解説し難い。1行目は「ワカサ小口」と読み瓦の产地を示す文字と思わ



第22圖 平瓦・丸瓦・道具瓦

れる。不明の文字が「演」であると仮定すれば現在の福井県小浜市を指すことになる。2行目は欠損をまぬがれた右側部分から「□(ツカ)□(ルカ)□(ヤカ)□(主カ)」と推定してみたが、確証はない。内湾する面には製作工程で型離れを良くするために型にかける布の粗い目と縦筋が残る。45は玉縁付丸瓦である。内湾面は玉縁の部分まで布目が残ることから、玉縁は別造りではないものと思われる。

**軒丸瓦 (46)** 1Cの表土層出土の軒丸瓦当と思われる破片である。幅約2.5cmで外区外縁が巡らされ内区には文字らしい文様がある。范に押す粘土にもう1枚板状の粘土を貼り合わせてある。丸瓦部との接合痕が見られないことから瓦当の下半部であると思われる。文様部に暗紫灰色の部分も見られるが、他は橙色を呈す。

**道具瓦A (47・48・49)** 47はSK21、49はSB23出土の資料、48は保管資料である。いずれも鬼瓦の部分と思われる(第23図参照)。鬼板部は范(型)に粘土を押して作られたものと推定され、背面の棟への装着部分は別の粘土を板状にしてほぼ垂直に立てた形で接合している。接合部には補強のための粘土をなでつけて塗っている。鬼板表面には銀粉をまぶしたように光る部分があり「きらこ」(雲母粉)かと思われる。外表面はすべてミガキ調整が行われている。

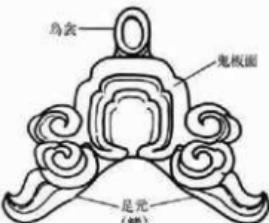
**道具瓦B (50)** SK22出土の舌状をした瓦である。表の面は中央に1本沈線があり、「きらこ」状の光る粉末が散点する。裏面には指頭圧痕がかすかに残る。両側縁に欠損面が見られることから道具瓦の一部分と思われる。

**道具瓦C (51)** SK21出土である。円筒形の一端に斜めの欠損面を持ち接合のための刻みを有する。おそらく瓦当部の剥落した鳥糞瓦であろう。

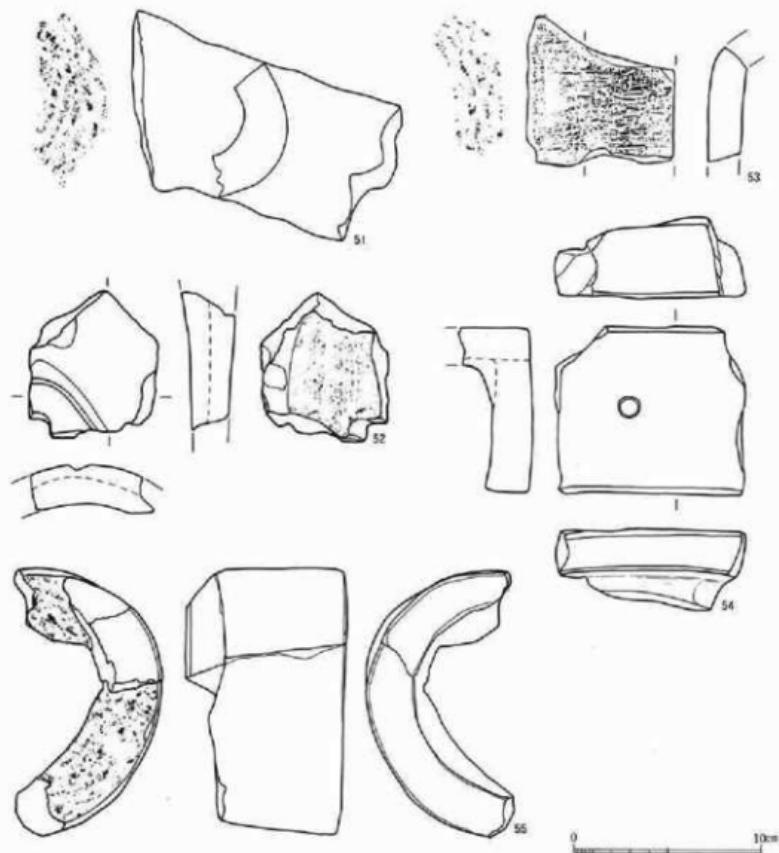
**道具瓦D (52)** 表の面はきれいに磨かれ、斜めに削り込んだような溝と釘孔のような穴が見られる。裏面に丸瓦と同じ布目疵痕が残る。断面は2層に分かれることから范による文様面を丸瓦部に貼りつけたものと思われる。

**道具瓦E (53・54)** 53は保管資料、54はSK21出土である。鬼瓦等の固定装置部分であろう。53は表面に「延享四」(1行目)「京」(2行目)と読める文字がへら書きされている。おそらく製作年を記したものであろう。端部に接合部の剥離を示す刻み目が見られる。54は平滑な2面がほぼ直角で接合されたもので、両面ともにかすかではあるが「きらこ」状の光る粉末が見られる。幅広の面には銅線を通す釘孔が穿孔されている。

**道具瓦F (55)** SK21出土瓦片と保管資料が接合した唯一の例である。鬼瓦の部分と見られ、側面部にあたる弧状の粘土帶には鬼板部との接合面に刻み目が見られる。わずかに残る鬼板部分は表面にミガキがかけられ「きらこ」状の粉末が散点する。湾曲する面はナデ調整が行われ、一部焼しの名残りと思われる黒色の部分が見られる。内湾面は未調整のままで粘土をなでつけた



第23図 鬼瓦模式図



第24図 道具瓦

際の指頭底が残る。足元(踏)の破片であろうか。

鋳造工程における瓦の再利用法は明確でない。鋳型製造過程で真土の水分を吸収させる「スイヒ」の代用品として焼き乾かした瓦を使ったのではとの意見もあるが推測に過ぎない。

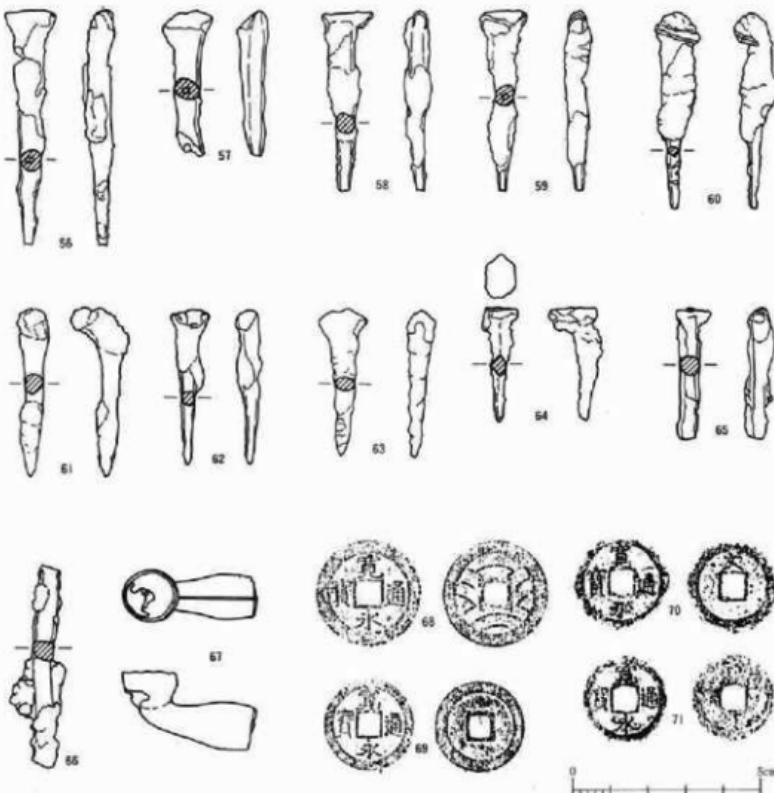
#### 金属製品

**鉄釘** (56~64)　すべてSK21出土である。釘本体のみのものは100本余り、鋳型に残るものまで含めると、かなりの数にのぼるものと思われる。釘には全体に荒真土の砂が付着し、さびが瘤状に盛り上がっている。このため断面形は明確でないが角釘ばかりと思われる。頭部の形態としては、基部上端を叩き延ばし、これをさらに折り曲げたものが一般的である。鋳型に残

る釘の大半はこのタイプで「コ」の字状に折り返している。しかし、60や61のようにはほぼ直角に1度折っただけのものや、64のように叩き延ばしのない釘も見られる。長さは先端部が欠損していくで不明確だが、短いもので3cm前後、長いもので7cm弱である。釘は鋳型にひび割れが生じた際、真土の剥落を防ぐ目的で打つとのことであるから、その長さも真土を貫いて芯の粘土に達すれば良いわけである。第17図11の鋳型を観察すると、真土部分が粘土部分より完全に分離していくながら、釘によりかろうじて剥落を免れており、釘の効用を示す好例であろう。

棒状鉄片（65・66） SK21出土。約0.5cm角の棒状を呈し、釘とは異なって楔形でない。真土の付着は認められず、<sup>鉛等</sup>の一部かと思われる。

板状金属片（図版19下） 鋼製のものと鉄製のものがある。図版左側の3点は銅片である。一辺約3cm角のものが2片、約1.5cm角のものが1片、厚さは2~5mmである。表面が粗悪であ



第25図 釘・棒状鉄片・煙管・錢貨

ことから、製品ではなく鍛込みの際生じる「バリ」(甲野・中村1966)と呼ぶ不用部分であろう。右2点は鉄製の接合する資料である。工具等であろうか。

(高橋昌也)

### B. 江戸時代の遺物

梵鐘鋳造遺構と直接には関連しないが、煙管・錢貨・土人形・土錐・近世陶磁器が出土している。

**煙管** (67) 7Dの遺構確認面から、銅製の雁首部分のみ出土している。火皿の直径は約1.4cm、首部の火皿側中央に1条の合わせ目が残る。脂返しの湾曲は小さく、補強帶や肩も持たない。古泉編年(古泉1983)の5段階、すなわち18世紀後半に位置づけられよう。

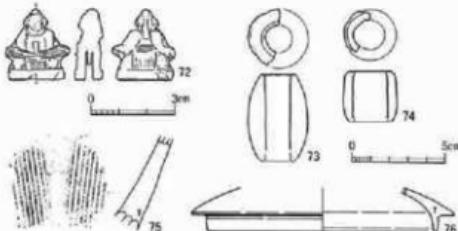
**錢貨** (68~71) 寛永通宝が6枚出土している。ここに掲載したものは、いずれも新寛永である。残りの2枚は腐食がひどく不明である。68・71が沢、69が7Cの表土層、70がSK21、他の2枚はSB23出土である。68は背に11波、70は正字文が見られる。本来、貨幣は商品交換の媒介としての役割を担うが、梵鐘鋳造遺構出土の銅錢については「型持ち」や素材(林1978)としての利用法も考える必要がある。

(高橋昌也)

**土人形** (72) 道真公人形が7Cより1点出土している。素焼の土人形で、全長2.9cm、最大幅2.5cmを測る。精選された粘土を用いており、明灰褐色を呈するが、背面の腰から下には煤状のものが付着している。近世以降の「天神様遊び」に使用された人形であろう。

**土錐** (73・74) 1A25と7Cから1点ずつ、計2点出土している。73は最大径3.2cm、内径1.4cmで、全長4.7cmと推定される。素焼であるが焼成は良好である。74は最大径2.9cm、内径1.8cm、全長2.8cmを測る。黄緑がかった褐色を呈する釉が施されている。

**近世陶磁器** (75・76) 75は指鉢で、内面に帯状の下し目がみられる。内外面暗赤褐色を呈し、胎土は緻密で赤褐色を呈する。胎土や外面の色調から唐津焼ではないかと思われる。76は蓋物で、口径14cmと推定される。透明釉が施釉されているが、口縁端部の裏面は無釉である。肥前系の京焼風陶器と考えられる。この他に梵鐘鋳造遺構のSK21から伊万里焼の染付網目文碗の小破片が1点出土している。網目文は一重線で描かれており、17世紀後半に位置づけられよう。



第26図 人形・土錐・近世陶磁器 (左のみ1/2、他1/3)

### C. その他の遺物

本遺跡からは梵鐘鋳造関連の遺物や江戸時代の遺物のほか、縄文~平安時代の遺物が出土し

ている。

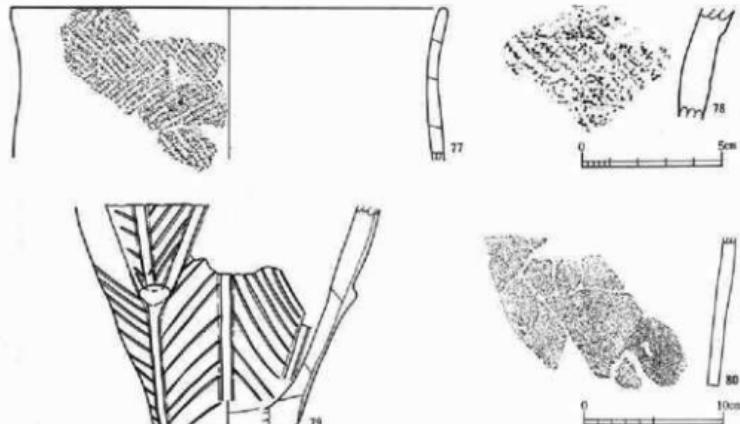
#### 縄文・弥生時代の土器

**縄文前期の土器 (77)** 胸部上半が若干ふくらむ深鉢形土器1個体が沢(6E)の第IV層(暗褐色砂質土)中より出土している。推定口径31cm、現存高11cmを測る。器面全体に羽状縄文が施されており、縄文原体は口縁部から腹部へとLR-RL-LR-RLとなっている。

また、口唇部にも縄文らしき圧痕がみられる。器内面は横ナデ調整がなされているが、それほど丁寧ではなく、口縁部内面にはナデ以前の指頭圧痕がうかがえる。器壁はやや薄く、胎土中に纖維は含まれていないが多量の小礫と白砂が混入されている。色調は外面とも灰質褐色を呈する。

**羽状縄文**が施されているが、胎土中に纖維は含まれず、白砂が多量に認められることや口縁部の内面に指頭圧痕が残されていることから、前期後葉(諸磯式併行期)に比定される土器と考えられる。

**縄文中期の土器 (78~80)** 深鉢の破片が3片、いずれも沢から出土している。78は胸部上半がふくらみ、やや變形を呈する。口縁部は無文帯で胸部にはRLの縦文が施されている。内面は丁寧にナデ調整がなされている。胎土中に小礫を含み色調は外面灰黃褐色、内面灰黒褐色を呈する。器形がやや變形を呈することや、口縁部に無文帯を持つことから中期後葉に位置づけられよう。79はⅢ層(黄褐色砂質土)より出土している。底径10.2cm、残存高15.8cmを測る。いわゆる葉脈状文の土器で、微隆起部が縱位に垂下し、空白部は矢羽根状沈線で溝たされている。胎土中に粗い砂粒を多量に含み、外面灰赤褐色、内面灰黃褐色を呈する。東海地方の山の神式土器又は北陸地方の大杉谷式土器の系統と考えられ、中期後葉に位置づけられよう。80は深鉢



第27図 縄文前・中期の土器 (78のみ1/2、他1/4)

胴部破片で、径約20cmを測ると推定される。無文であるが、胎土中に水晶の粗粒を多量に含む。外面暗赤褐色、内面黒褐色を呈し、内面におこげ状の炭化物が付着している。色調が暗赤褐色で、胎土中に水晶の粗粒を含むことから信州系の土器ではないかと考えられる。(寺崎裕助)

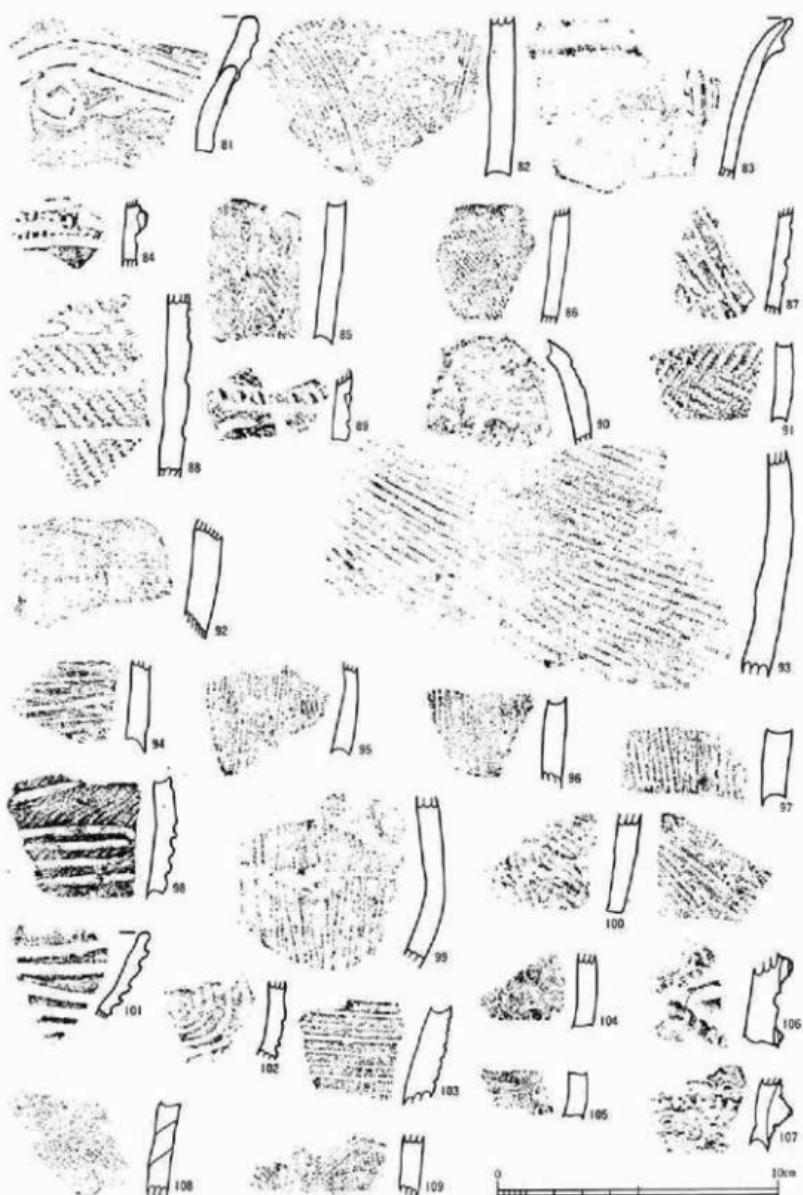
**縄文後期の土器 (81~84)** 81は西側の斜面の4Aより出土している。波状口縁を呈する口縁部片で、内面は丁寧に磨かれている。外面は微隆起線文を口縁にそって2条平行させ、頂部下に溝文を配する。後期前半に比定できようか。82は5Eの斜面IV層から出土している。外面に数条の平行沈線を直線的、曲線的に描く。103も同様な沈線文を配することから、82と同時期のものかもしれない。83は沢のIII層から出土している。小波状口縁を呈するかと思われ、頂部下に沈線を垂下させる。84は7Cの表採品である。壺の頭部片であろうか。2条の隆起線上に刻みを入れ、小突起をつける。淡灰褐色を呈し、焼成良好である。後期末葉の所産と思われる。

(川村浩司)

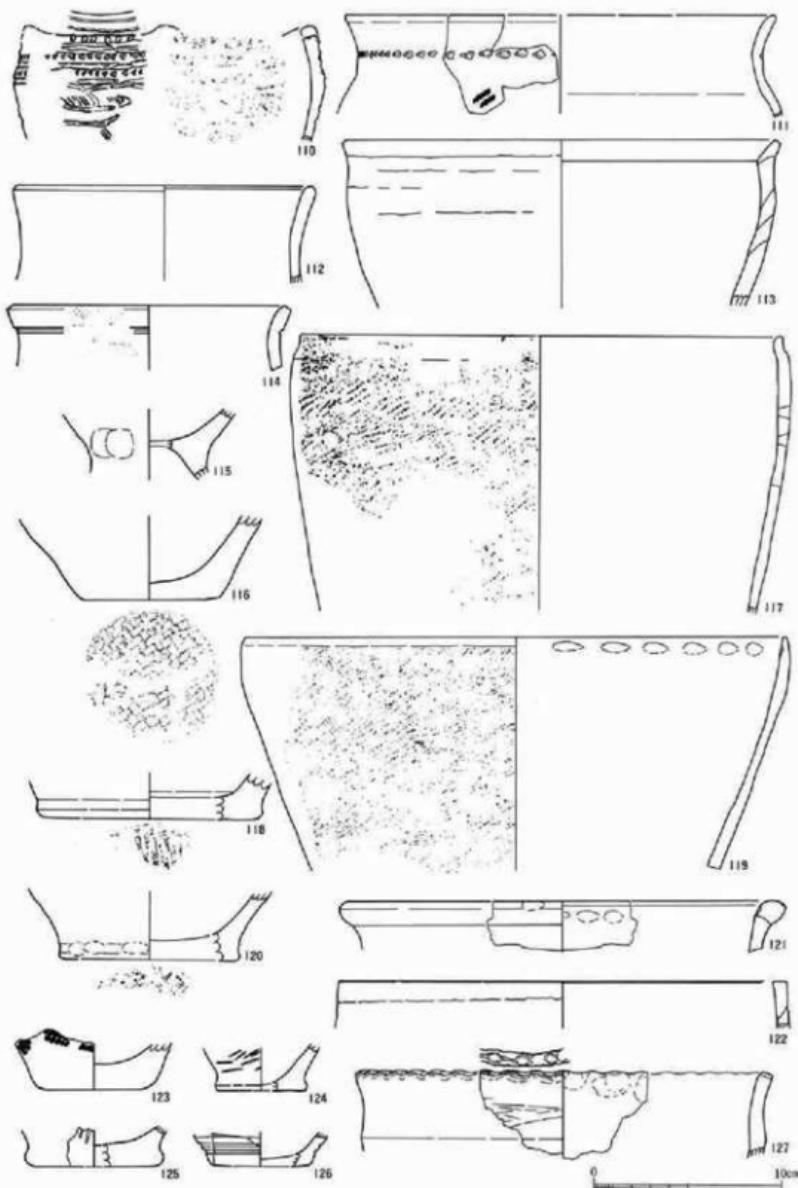
**縄文時代晚期・弥生時代の土器 (85~127)** 当該期の土器は、沢出土のものと台地上出土のものがある。沢出土で層位別に取り上げられたものには、III層からの出土が多く(85~88・91・92・94・95・97~99・101~103・110~117・121~123・127)わずかにII層(120)IV層(96・118)からの出土がある。台地上出土のものには、表土出土(100・109)SB23出土(104・105)、風倒木痕出土(124)、表面採集資料(106・107・125・126)がある。なお、104・105はSB23の時期に伴うものではない。

晩期と認定できる、いわゆる精製土器は117~119・127・110・111・114である。117はRL縄文を地文とし、横方向の浅い沈線と列点文を施している。同一個体と思われる胴部破片が10數片ある。細泡遺跡[寺村・安藤ほか1974]に類例が多く存在しており、本例も晩期中葉に比定できよう。89はRL縄文を地文とし、深い列点文と入組文的な曲線の沈線を施す。90は入組文をもつ鉢形土器である。外面にススが付着する。89・90とも越後以西の北陸地方の影響が強い晩期中葉の所産と思われる。110は、ゆるやかな波状口縁を呈する鉢形土器で、口径は17.9cmと推定され、口縁端部に一条の沈線をめぐらす。口縁部には3条の列点文を付すが、各列毎に押捺の仕方が異なる。頭部に「メガネ状」の微隆起帶、頭部には雲形文らしき文様が施されるようであるが、器表荒れのため不明瞭である。内面は軽く削られた後、磨かれる。外面及び胴部にはススの付着がみられる。111は口縁がゆるく外反する壺形土器と思われる。口頭部は丁寧に磨かれる。特に口縁部上位外面を強く磨き、端部を外方へ丸味をもたせている。頭部外面に深い列点文をめぐらせ、頭部にLR縄文をまばらに施文する。114も壺形土器で、口径14.5cmと推定される。口縁にLRの縄文を施し、頭部との境に段をつけて文様帯を明確に作出している。内面及び頭部は磨かれているが、頭部外面の磨かれ方は極めて丁寧である。以上の3点は、いずれも晩期中葉に属すると思われる。98はLRの縄文を施し、工字文を加える鉢形土器である。外面にはススの付着がみられる。晩期後葉に属する。

85~87・91~97・99・100・112・113・117・119・121・122・127は、いわゆる粗製土器であ



第28図 縄文後・晩期の土器・弥生土器



第29図 聖文晩期の土器・弥生土器

る。85は縦回転のRL結び目繩文、86はR無節繩文、87はLの捺糸文を施文する。91はRL—LR繩文を異方向に施文して羽状を呈する。86の胎土中には水晶片がみられる。85・87・91は晩期でも中葉以前かと思われる。

113は口縁部を外折させる鉢形土器である。口径23.2cmと推定され、接合痕を明瞭に残す。117、119は胴部外面に繩文を持つ大型の深鉢形土器である。117は胴部がわずかに内湾しながら伸び、口縁部に小さな段を作り直立させて端部を丸くおさめる。内面は丁寧な横ナデ、口縁外面は横ミガキ調整される。胴部上位には補修孔を確認でき、胴部中位にはススの付着がみられる。119は直線的に外傾した胴部に直立させた口縁をもつ。胴部内面は横ケズリされ、口縁内面に連続的なユビオサエをもつ。器形と口縁内部の調整手法は、金沢市チカモリ遺跡(南・増山1986)に類例があり、越後以西の地域との関連を予想させる。また、117はRL2段、119はLR2段直前段3条の繩文を地文とするが、ともに一部横方向のケズリまたはナデが認められる。122は内傾した口縁をもち端部を水平に面取りする。外面には接合痕を残し、口縁内面にはユビオサエらしき痕跡がみられる。

112は口縁がゆるやかに外反する鉢形土器で、大塚遺跡でみられるような小突起を有するものと思われる。胎土中に水晶片を多量に含み、外面にススが付着する。121は口縁部を外反させ端部を外側に肥厚させている。端部上面は水平にならず、口縁内面及び口縁外端面をユビオサエする。他の部分は粗く磨く。色調は暗褐色を呈し、外面にススが付着する。焼成は良好である。127は内湾気味に外傾する胴部に、外反する口縁をもつ深鉢形土器である。端部上面にユビオサエをめぐらせ連続小波状口縁を形成する。また口縁内面上位にユビオサエがみられる。他の部分は粗く磨いている。121と同様の色調、焼成である。

92~97・99・100は条痕文が施された土器である。92は横方向の浅い条痕、93は斜横方向に非常に粗い条痕(貝殻条痕)を施す。95~97は、いずれも外面に縦方向の細い条痕が施される。95は内面にも横方向の条痕がみられる。94・100は、やや粗い条痕を施し、100は内面にも同様の条痕がみられる。99は外面が深く粗い条痕で、内面は縦ナデである。93~95・99・100には外面にススがみられ、93は特に厚く付着する。これらの時期比定は容易でないが、本遺跡出土土器で時期比定可能なものは晩期中葉が多いことから、一応上限をこの時期におきたい。しかし、大塚遺跡の様相をみると弥生時代の所産とする可能性も充分あろう。

115・116・118・120・123~126は底部片である。116・118・120・123は胴部下位までLRの繩文を施し、胴部最下部から底部外周にかけて削られている。底部内面も外面と同様の工具で削られている。115は台付土器であるが、外面に文様が施されず、ユビオサエされている。当該期に類例を見出せないことから、他時代の所産の可能性もある。124・125は外面に条線が施される。126は外面に横方向の2条の沈線がめぐり、その上位に方向を異にする沈線が施される。あるいは(変形)工字文かもしれない。内面は粗くなられる。125・126は赤彩されている。

101・102・104~109は晩期末あるいは弥生時代の所産と推定する精製土器片であるが、小破

片のため、時期決定等の詳細は不明である。101は波状口縁の浅鉢である。深く幅広の沈線を施す。石川県柴山出山遺跡(湯尻1983)等に類例が知られる。102は同心円の沈線を施す鉢の胴部片である。愛知県西志賀遺跡(紅村1949)等、東海地方に類例が知られる。104・105は同一個体と思われる破片で、外面に円形竹管文をつけ、内面に粗い横ナナ調整を加える。外面に赤色塗彩される。円形竹管という点では、晩期とされる長野県御社宮司遺跡(小林ほか1982)に出土例が知られる。また、大塚遺跡と同時期と考えられる長野県福沢遺跡(小林ほか1985)(註1)に赤色塗彩こそないものの本例と近似する資料があり、弥生時代の所産とできる可能性もある。107は刻目隆帯をもち、その両側に104・105と同様な円形竹管文を押捺する。106は107に似た刻目隆帯をもち、2本が交わる内側に深い沈線文を施す。108・109は浅い沈線で、波状様の曲線文、直線文が施されるが、収束した工具を用いて1本ずつ引いている。氷式の文様の系譜を引くものであろうか。

(川村浩司)

#### 石器

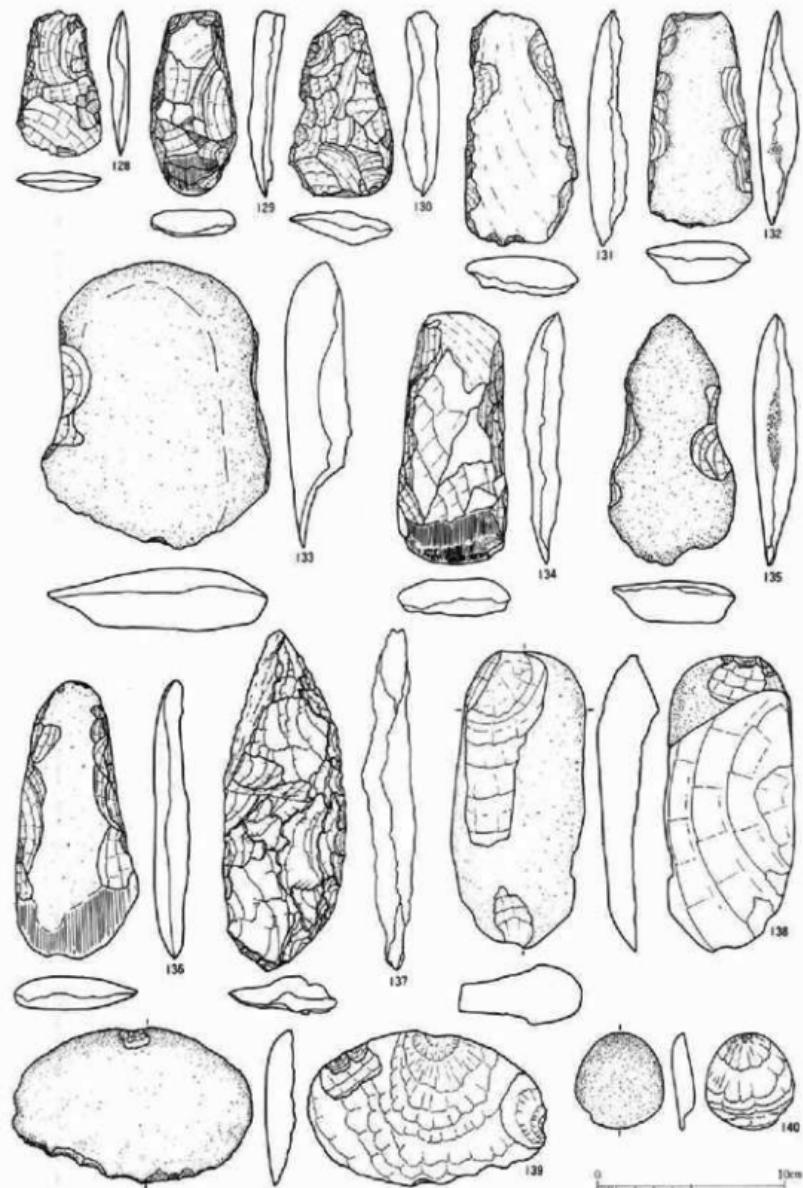
本遺跡からは、未成品を除くと総数で122点の石器が出土している。出土地点では東側の沢が72点と最も多く、出土層位ではⅢ層で31点となっている。これらの石器の所属時期は、本遺跡から出土している土器からみて縄文時代前期後半から弥生時代前期であろう。以下器種ごとに説明を加えていきたい。

**打製石斧 (128~137)** 22点出土しており、安山岩・砂岩・流紋岩などの石材が用いられている。131・134など蛇紋岩製のものも見うけられるのは、蛇紋岩が多く産する姫川を持つ糸魚川の地域性と考えられる。素材は剥片を利用し、片面に自然面を残すものが多い。128のように全長7.7cmと小型のもの、137のように全長18.2cmと大型のものなど大きさはさまざま、133は重量710gを測る。133は中部高地で石器と呼ばれているたぐいの打製石斧であろうか。形態はバチ形のものが多い。しかし、133・135のように分銅状を、134のように短冊状を呈するものも見られる。側縁部には細かい敲打又は剝離が加えられて形状が整えられている。使用痕は不明瞭なものが多いが129・134・136のように刃部が摩滅し、使用痕跡が明らかなるものもある。とくに129は刃部の正・裏面の摩滅がいちじるしく光沢を帯びている。

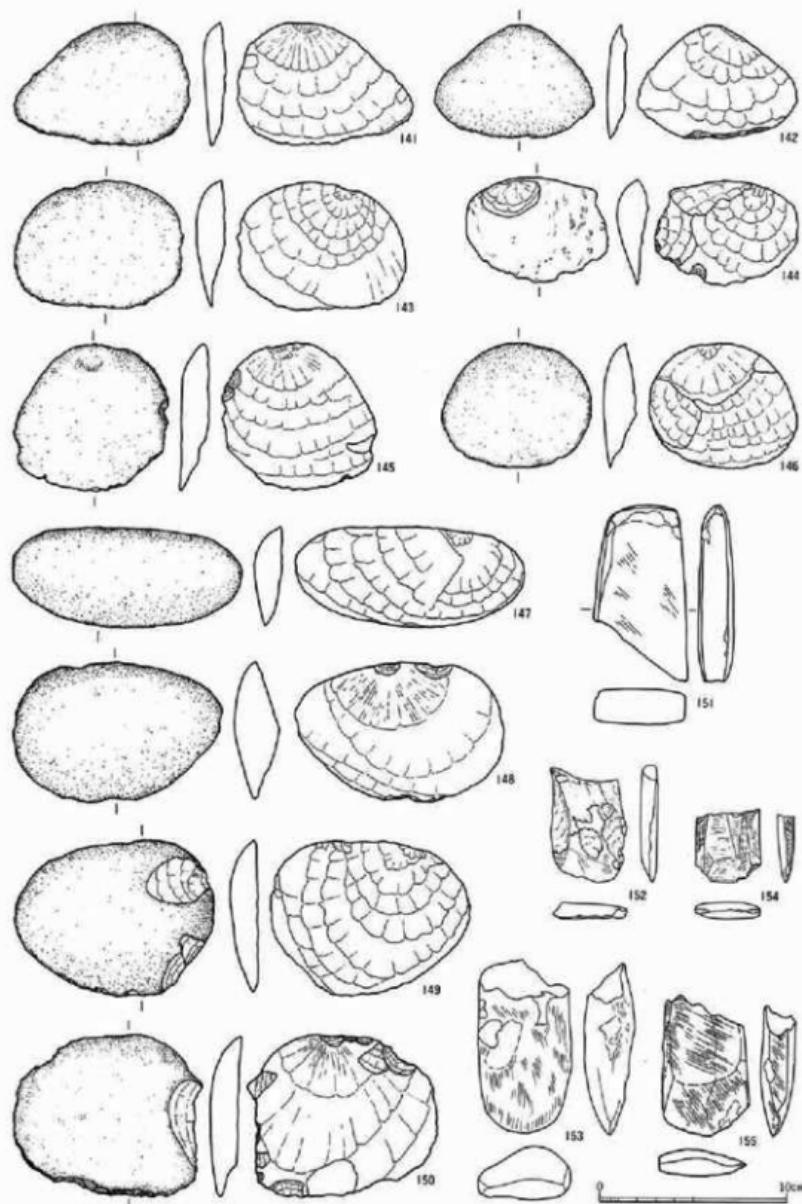
**磨製石斧 (151~155・172・173)** 14点出土しており、うち4点は未成品である。石材はすべて蛇紋岩(註2)である。152~153を除きいわゆる定角式の範疇に含まれる。153は礫を素材とし、その形状を大きく変えていないもので、礫面の凹凸をそのまま残している。縁側部は丸味をおび、面取りはされていない。152は部分磨製の石斧である。剥片を素材とし大ぶりな剝離で形状を整えている。片刃状を呈し研磨は刃部付近のみに限られる。152~153は刃部に使用痕と思われる摩耗が観察される。173は未成品で偏平な礫を素材としている。剝離及び敲打によって側縁

註1 報告書に記載はないが、1986年12月に実見させていただき、その際に記述許可の承諾をいただいた。

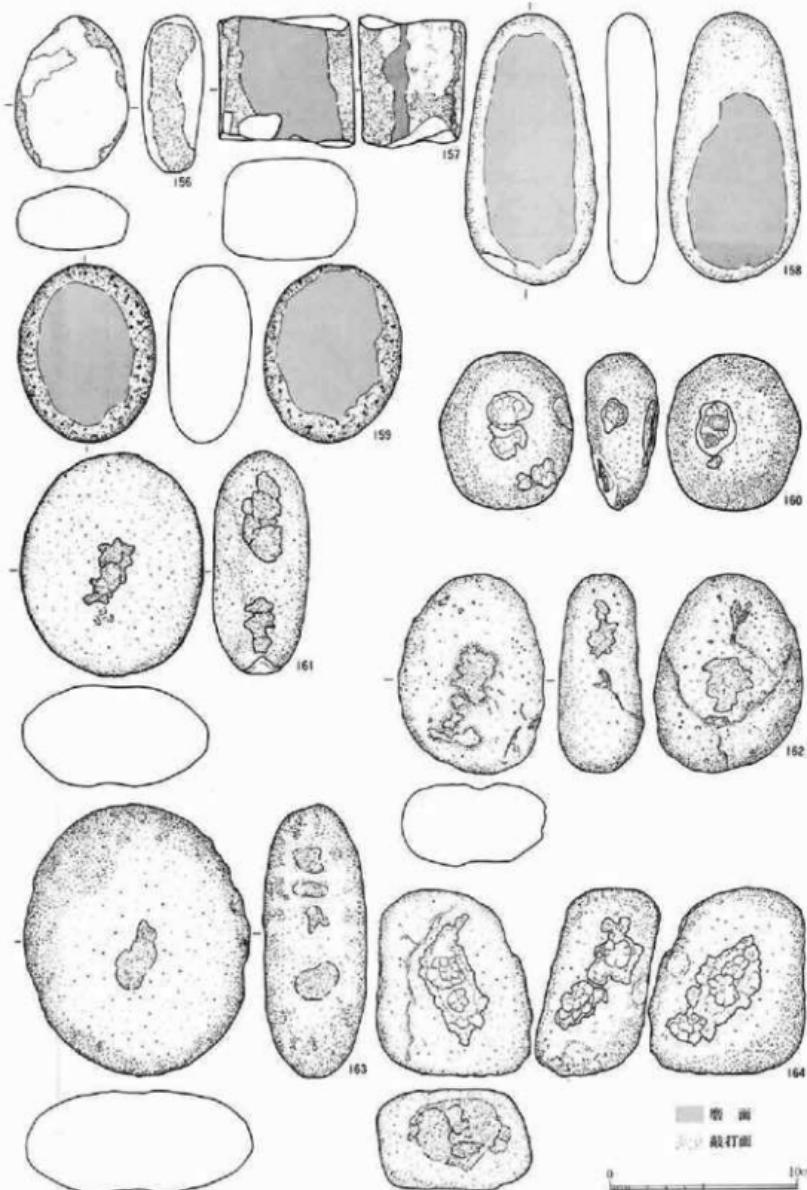
註2 蛇紋岩については石材の内臓鑑定の結果、流紋岩と判定されていた。しかし流紋岩と判定された石材については、考古学研究者の間では蛇紋岩と理解されており、螢光X線による石材分析を行った。



第30図 打製石斧・石核・貝殻状剥片



第31図 貝殻状剥片・磨製石斧



第32圖 鹽石・磨石・圓石

部の形状を整えた後、部分的に研磨が開始されているが、刃部を形成するには至っていない。

**敲石** (156・157) 2点出土している。156は蛇紋岩製で、偏平な洋梨形を呈する。側縁部に敲打痕が残されている。このような敲石は糸魚川・西頃城地方の縄文時代中期以降の遺跡から多出し、蛇紋岩・硬玉製のものが目立つ。磨製石斧の調整加工などに用いられたものと推定される。157は断面四角形の棒状石を素材とするもので、稜線上につぶれが観察される。

**凹石** (160~164) 7点出土しており、石材としては安山岩が多用されている。160・162・164が両面、161・163が片面にくぼみやあばた状の敲打痕をもつ。これらは敲石としても使用されており、周縁部にもつぶれが観察される。

**磨石** (158・159・165・166) 5点出土している。石材は安山岩・花崗岩・砂岩が見られる。素材としては偏平な円盤が主体的に用いられているが、165のように不整形なものも使用されている。165が片面、その他は画面に摩耗痕が観察される。

**砥石** (168~170) 3点出土しており、いずれも細粒砂岩が使用されている。これらは内磨き砥石とされているもので、原面をもつ横長剥片を素材としている。169は左側縁に調整加工が施され、その対辺に砥面をもつものである。168・170は形状を整える調整加工が施されないものである。内磨き砥石は細泡型砥石とも呼称されており、縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺跡から出土する。

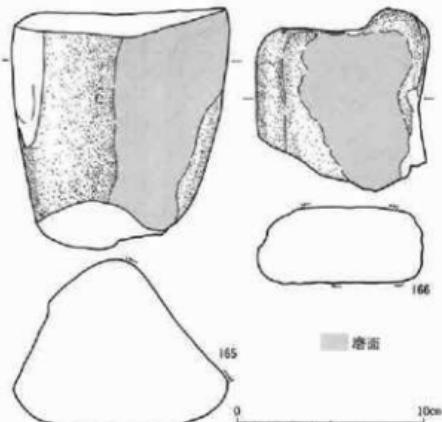
**石鎌** (167) 1点のみの出土で、石材は安山岩である。偏平な円盤を素材とし、両面からの大ぶりな剥離で択り部が作り出されている。一端を欠損する。

**石匙** (171) 灰岩製のものが1点出土している。四角い偏平なつまみを持つ横形の石匙である。

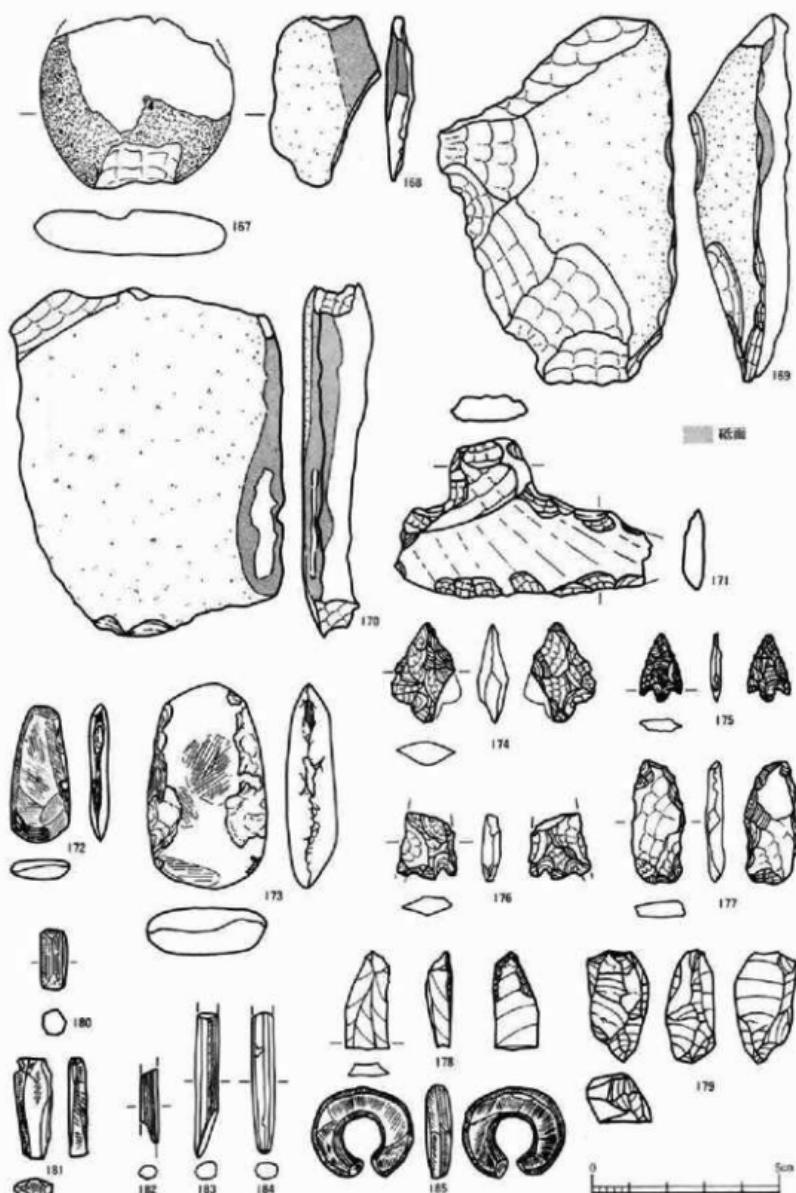
**石鎌** (174~177) 5点出土しており、うち1点は未完成品である。石材は黒曜石・水晶・安山岩・灰岩である。全て有柄石鎌で175を除き欠損している。177は未完成品である。

**ピエスエスキュー** (179) 流紋岩製のものが1点出土している。平面形は四辺形であるが下端は尖り、断面形は台形状を呈する。相対する2辺に階段上の剥離がみられる。

**石核** (138) 粘板岩製のものが1点出土している。長楕円形の円盤で、相対する上・下端に縱長の剥離面が認められ裏面には貝殻状剥片を剥ぎ取った痕跡も残されている。剥離面のうち正面のそれは、両極打法によるものと考えられる。



第33図 磨石



第34圖 石錐、砾石、石匙、小型磨製石斧、石鐵、玉未成品、块狀耳飾等

**使用痕のある剝片** (178) 石英粗面岩製のものが1点出土している。両設打面の石核から作出された縦長剝片を素材とし、剝片の末端に微細な剝離痕が観察されるものである。

**貝殻状剝片** (139~150) 63点を数え、全石器数の51%を占める。石材には砂岩・頁岩が多く用され、横長のものが主体をなす。139・150は剝片の一端に連続的な小剝離が施され、刃つけされたもので、150には使用痕と思われる摩耗も観察される。貝殻状剝片は本遺跡周辺の遺跡で多出し、用途としてはそのまま銳利な縫合を使用した石器、または打製石斧などの素材という二面性(高橋・小池1986)が考えられている。

**块状耳飾り**(185) 滑石製のものが1点、完形で台地上から出土している。平面形はほぼ円形で、断面形は楕円形を呈する。長径2.7cm、短径2.5cm、孔側8mm、切れ目6mmを測り、型式率(藤田1983)は0.75である。型式率は青海町大角地遺跡や富山県権現寺遺跡出土の块状耳飾りに近似しており、型式率からすれば前期初頭から前葉に位置づけられるものであろう。

**バステル型石製品** (182~184) 用途不明の石製品で3点出土している。全て滑石製である。円柱状に面どりがなされ、研磨が施されている。182は他の2つより細身で184の先端は細いが丸く、183の先端は斜になり尖っている。斜になっている面には研磨が施されていないことから、破損後再使用されたのである。

**玉未成品** (180・181) 滑石製のものが2点出土している。180は垂玉の未成品で、両側縁、上下端が研磨されている。181は管玉の未成品で面取りされ、上・下端に磨痕がみられる。

(寺崎裕助)

#### 古墳時代の土器

古墳時代の土器が1点SB23から出土している。遺構に伴うものでなく混入と考えられる。口径17.8cmを測る中型の旋形土器の口頭部破片である。「コ」の字状に外反させ、口縁上位に平坦な面をもたせて、端部を上方にすばませている。外面及び口縁部内面は横ナデ・胴部内面は横ハケ調整である。外面にはススの付着がみられる。胎土はやや密で2mm以下の砂粒を多く含んでいる。にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。柏崎市礼坊遺跡(畠田1985)、糸魚川市田伏遺跡(岡ほか1972)出土土器などから5世紀代もしくはそれを前後する時期の所産と思われる。

(川村浩司)

#### 平安時代の土器

平安時代の所産と思われる土器には須恵器・土師器がある。201は7Dの出土であるが、他はいずれも沢から出土しており7E3を除いては、4Fあるいは5Fの出土である。層位の明確なものはII層から出土している。

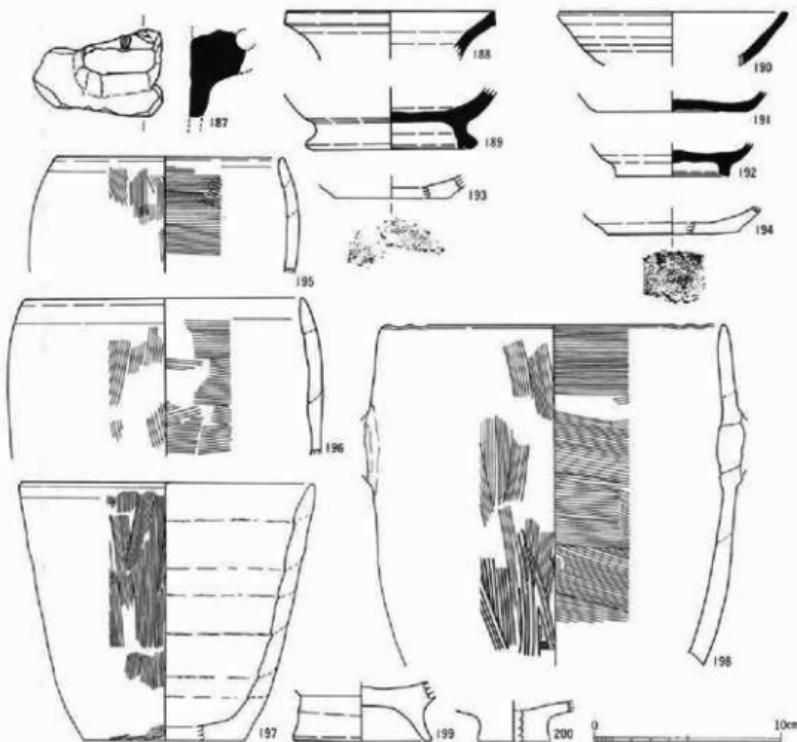
**須恵器** (187~192) 187は丸味をもつ胴部に把手が付く土器である。斐形もしくは鉢形となると思われるが判然としない。胴部外面にカキメ調整を施した後、横広の把手を付け、そこ



第35図 古墳時代の土器

に両脇から穿孔している。やや軟質な感を受ける。188・189は長頸瓶であるか同一個体ではない。188は口径11cmを測る細頸のものである。頸部上位よりゆるく外折し、口縁は内湾気味に立ちあがる。口縁端部は上方へつまみあげ外側に面を有する。内外面とも自然釉がかかる。189は高台付の底部で高台径8.6cmを測る。胴部下位はクロナデされ、底部外面は高台接合前にヘラケズリされる。接合部は特に強くクロナデされ、高台部は外側へ伸び、いわゆる「ふんばる」形となる。外端接合で接地面内側には一条の凹線をめぐらせる。高台内面及び底部外面を除いて自然釉がかかる。釉の厚い部分は暗緑灰色～淡緑灰色を呈し、薄い部分とかからない部分は灰白色を呈する。胎土は緻密で焼成は非常に良好である。

190・191はともに無台坏である。191は口径12.2cmを測る。ゆるやかに内湾しながら伸び、口縁端部を丸くおさめる。191は底径8cmを測る。底部は回転ヘラ切り後無調整で、ややあげ底状となる。190・191ともに淡灰色、青灰色部が構状となっている。やや軟質な感を受ける。192は



第36図 平安時代の土器

有台环の底部及び高台部である。坏部の深いものであろうか。高台径6.1cmを測る。底部は回転ヘラ切りされ、そこに短い高台を垂直に付ける。接地部に面をもち外端接地である。190・191と同様青灰色と灰色の縞状を呈する。

201～203は内面に同心円文タタキ、外面に平行タタキが認められる。201は小型品で、外面にカキメ調整を加えている。色調は淡灰色を呈する。202・203は外面青灰色、内面灰色を呈する。

**土器器（193～200）** 193・194はともに回転糸切り技法の無台环である。内面及び体部外面は丁寧なロクロナデ調整である。胎土は緻密で焼成は良好である。193は底径6.1cm、194は底径7cmを測る。195～198は接合痕を看取できる非ロクロ成形の土器である。いずれも淡褐色系の色調を呈する。195～197は深鉢、198は把手付の土器である。195・196は口縁を内湾気味に内傾させる。外面縦ハケ、内面横ハケ、口縁端部横ナデの調整が施される。口縁端部の形状は異なり、195は丸味をもち、196は細くすぼませている。ともに二次焼成による器表の荒れがみられ、剥落している部分もある。195の外面にはススの付着も認められる。197は195・196とは異なり外方へ直線的に伸びる形状を呈する。口径15.8cm、器高14.2cmを測る。外面縦ハケ、口縁端部横ナデ調整である。内面にも横ナデが施されるものの、接合痕が明瞭に残る。少程度の破片であるが、明確な二次焼成の痕跡は看取しえない。198は把手が付く以外195・196と調整・形状等は基本的に同様である。把手は胴部の調整後、胴部上位に穿孔し把手をつめている。内側はあらくなでつけ、外面は周囲から粘土を被せてなでつけている。口縁端部は細くおさえる。また、端部に上方からくぼませた部分を残存部分で2ヵ所確認できるが、意図的か否かは不明である。外面調整の原体は明らかに2種あり、上位に細かいもの、下位に粗いものを用いている。胴部下位は二次焼成により赤褐色または暗褐色化している部分がある。瓶であろうか。

199は高台径7.3cmを測る塊でロクロナデ調整される。高台は外方へ伸びる。外面灰褐色、内面赤橙色を呈する。軟質な感を受ける。200は柱状高台を有する小皿である。底径3.9cmを測る。底部は回転糸切り後無調整で、他部位はロクロナデされる。

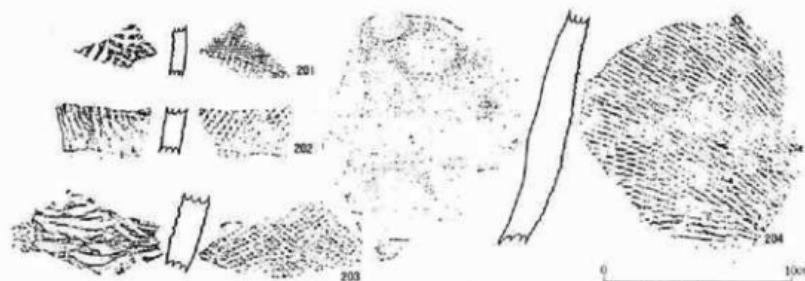
次に、これらの土器の編年的位置づけ等について若干触れておきたい。まず、これらは遺構に伴うものではなく、出土数も少ないが沢中の同一層序から出土する例がほとんどである。190～194の坏類の構成は9世紀後半から10世紀前半の中で類似したセットを有する例があり〔坂井ほか1984、坂井ほか1986等〕これらの土器と近似した時期の所産である可能性を有するとみなしたい。この前提で、坂井の土器変遷案〔坂井ほか1986〕に則り検討を加えてみたい。当該期の土器変遷は今池遺跡SD3IV層→一之口遺跡西地区SE153→一之口遺跡西地区SE183→下新町遺跡（以下各々、今池SD3→一之口SE153→一之口SE183→下新町とする）出土土器として捉えられている。須恵器坏類が存在し、かつ少數の土器の中でも土器器坏類より多い点から下新町段階まで下らない。土器器坏の体部最下部に強いロクロナデによる凹面が存在することからも同様の指摘ができる。須恵器無台环の傾きをみると、今池SD3のものよりは緩い傾きであるが、一之口SE183のものよりは急傾斜である。須恵器有台环は高台接地部に明確な面を有することから、一之口SE183のも

のよりふるい形態であることは確実で、今池SD3の例に類する。以上を勘案すると190~194の土器は一団SE153を中心とする段階、すなわち、9世紀第4四半世紀を前後する頃に位置づけられると思われる。

これを基に他の2器種にも検討を加える。188の長頸壺は細頸であり、下新町段階の太頸とは異なる。口縁端部の特徴は今池SD3例よりもやや後出的であるが、今池SD3の次に位置づけられた子安遺跡出土土器よりも先出的である。よって188も190~194とはほぼ同時期の所産としてよいであろう。189の長頸瓶は明らかに上述の土器群と異なる胎土、焼成をしており釉の色調も異なるいわゆる「優品」である。同様の胎土・焼成をもつものに上越市高畠遺跡出土例がある。(寺崎・肥田野・田中ほか1986)が高台の長さ、接地面の形態等から、本例の方が古手の傾向を有する。猿投窯編年(橋嶋・齊藤ほか1983)の瓶類の形態から判断する限り、井ヶ谷78号窯式(9世紀前~中葉)に対比できる。本例と188・190~194の土器とは出土地点もやや離れていることもあわせ、異なる時期のものと考えておきたい。187については類例を知りえないため、時期判断を保留しておく。また、201~203は時期限定が不能である。

195~197の探鉢には、青海町大角地遺跡(寺村・安藤ほか1979)、糸魚川市岩野下(和田ほか1987)、同新割(糸魚川市史編さん委員会1986)遺跡、本遺跡の糸魚川市教委調査分(木島1987)、上越市東カナクソ谷遺跡(戸根1987)等に類例があり、一定の分布域をもつことが予想される。ここでは積極的に言及できないが、量的に多い188・190~194の土器群もしくは189の土器と近似する時期の所産である可能性が強いとしておきたい。198の把手付の土器は同時期の類例がない。瓶とすると、上越地方では7世紀前半とされる上越市山畠遺跡出土のもの(小島1979)、8世紀前半とされる新井市栗原遺跡出土のもの(坂井ほか1983)が知られるのみである。それらと同時期である可能性もあるが、口縁の形態、把手の位置で本例と合致する例はない。ここでは成形・形状・調整等で類似する195・196と近似する時期の所産と考えておきたい。

199・200については、その形態等から上述の土器群とは明らかに異なる時期の所産と思われる。近畿の編年案(田嶋1986・川上1986)や200の形式に対する編年案(坂本1986)を参考にすれば



第37図 平安時代・中世の土器

大略11世紀代の所産とすることができるよう。

#### 中世の土器（204）

珠州焼が一片出土している。内面に無文の円形オサ工具をあて、外面に平行タタキが施されるが胴部下位にあたるため、タタキが交差する。内面に自然釉がかかり、焼成は非常に良好である。

（川村浩司）

### 第5節 考察

#### A. 梵鐘鋳造跡について

##### 1. 鋳造施設の構造と機能

梵鐘鋳造遺構の発掘事例は全国的にも多いとはいえない。また鋳造技術自体秘伝の部分が多く、鋳造施設の構造・用途には不明な点が多い。原山遺跡で検出された梵鐘鋳造用土坑SK21には他の調査例と比べて注目すべき点がいくつかある。それは作業面が2面存在したと考えられること、完掘面が非常に深いこと、定盤の下部に掛木の痕跡すら残らないことなどである。

作業面を2面想定した理由は先にも述べたが、第2次作業面を想定する一つの根拠となる定盤自体、下部に掛木を残さず一部破損も認められることから、もともと設置されたものでなく土坑を埋めもどす際の廃棄物との不安もあった。しかし均質な混合土で基礎を固めた上に載せられ、周囲の褐色土層も堆積状況から故意に敷きつめられた様に見えることから、少なくともこの層までは土坑廃棄時の埋土ではないと考えたい。定盤下部に掛木が残らない理由は不明であるが、掛木以外にも鋳型の固定手段があったと仮定すれば、掛木を用いた第1次作業面の段階とは、鋳造技術そのものが変化している可能性が考えられて興味深い。

梵鐘鋳造用の土坑は、鋳型上端にある湯口を、金属溶解液が注ぎ易いよう低位に設定するため掘り込まれるわけであるから、土坑の深さはそのまま梵鐘の規模を反映していると考えられる。他の調査例（註）では深さ1m前後の土坑が一般的なようで、SK21の第2次作業面の深さと一致する。定盤の規模と鋳型の径から、この面で鋳造された梵鐘は口径が80cm前後の中型品であったと推定されるが、第1次作業面は深さ約2mとかなり深く、鋳造された梵鐘はかなりの大型品であった可能性が強い。この他、第1次作業面におけるテラス部分の用途や上屋構造、構架装置の有無などについては必ずしも明らかではなく、今後の類例の増加を待ちたい。

SB23はSK21に伴なう作業場的な性格を有する遺構と考えられるが、砂が堆積し実際に鋳型の製作が行われたと考えられる面の上にロームブロックを含む粘土をつき固めた平坦な面が載り、この面の上には砂が見られないことから作業場としての機能を失った後に別の目的で再利用さ

註 滋賀県大津市滋賀里長尾遺跡（林1978）、長野県寺平遺跡（友野1979）、京都大学構内遺跡（五十川1982）、兵庫県多可郡多可寺跡（神岡1962）、京都市太秦広隆寺跡（石尾1982）、大阪府南河内郡真福寺遺跡（長谷川1986）、など。

れた可能性を考えてみる必要もある。

SK22とSK33は用途不明の土坑であるが出土遺物と位置関係からみて梵鐘鋳造に何らかの関係を持つ構造と考えられる。SK33はSK22が埋まりきった後に掘り込まれ、規模は異なるが同じ性格の土坑である可能性が強い。鋳型の製作には粘土・砂・水が不可欠といわれ、台地上は水を得難く、ロームを掘り込んで貯水施設とした可能性は否定できないが、鋳型用の真土を練る施設、あるいは水槽を行った施設とも考えられる。SK22とSK33が同じ性格の土坑であると仮定した場合には、廃棄された土坑SK22が本来持っていた機能をSK33が受け継いだものと考えられ、一旦不要となった機能が改めて必要とされた背景が考えられる。またSK22・SK33をSK21の第1次作業面・第2次作業面に対応するものと考えた場合には、それぞれの規模の変化に共通性を見いだせるのではなかろうか。

## 2. 梵鐘製作年代・製作者・供給先

梵鐘鋳造遺構においては、出土遺物の大半が鋳型片・鋼滓等である。砂と粘土で造られた鋳型は、鋳込んだ後、中の製品を取り出す必要から、あるいは再度真土に利用するため、砕かれるのが普通で、鋳込み前の原形を保つ例は少ない。このため、銘文を陽鋳した部分の鋳型が、完形で残るといった場合を除いては、これらの遺物から、梵鐘の鋳造年・鋳工名・供給先を知ることは難しい。原山遺跡の場合、鉄貨・煙管・陶磁器等17~19世紀の遺物を伴ない、江戸時代の梵鐘鋳造跡と推定されるため、当時糸魚川で鋳物師を営んでいた人物を文献資料に求めることにした。

諸国鋳物師名前写(文化以前)には、一の宮村の鋳物師として、森半左衛門・森作右衛門の名が記載されているのみである。しかし、糸魚川市釜沢にある通託寺の半鐘には、鋳工として綱嶋作右衛門・綱嶋甚三郎・森助左衛門の名が陰刻され「一ノ宮村 住人」とあるところから、一の宮村には森氏の他に綱嶋姓の鋳物師が存在したと考えられる。綱嶋作右衛門の名が刻まれた鋳物製品としては、この他に陽巖寺(糸魚川市田里)の鋼製資巻があるが、梵鐘・半鐘の類には森半左衛門の銘を有するものが多い。載時供出鐘の調査報告(新潟県1944)によれば、寛政7年(1795)の勝蓮寺(同市根小屋)梵鐘と嘉永元年(1848)の陽巖寺の梵鐘が、また糸魚川市史によれば、文政2年(1819)の徳正寺蒲池村道場半鐘が森半左衛門 雅原氏次の作とされる。

森家所蔵の文書に寛政11年(1799)5月、半左衛門・作右衛門が京都真椎家より鋳物師の許状を得るべく上京するにあたって、伊勢神領役所に提出した願書がある。その要旨から森家の先祖は近江鋳物師より繪旨写を譲り受けて代々鋳物業を営んでいたが、一時休職し、松本で修業後家業再興のため鋳物師許状を受けに上京したものとわかる。この際の許状は不明ながら文政13年(1830)7月、森半左衛門への許状が残る。糸魚川在住の勤許鋳物師であること、鋳造品に梵鐘や半鐘の類が多いこと、一定期間鋳物業を休んでいることなど、遺構の状況と考え合わせた場合、ここで梵鐘を鋳造した鋳物師としては最有力の候補といえよう。しかし原山はかつて山境について紛争の舞台となった場所で、一の宮村の西側境界は信州街道まで(青木1981a)と

のことであるから、自村の領外に工房があったことになり、それが可能であったかについては疑問が残る。

距離的に造橋を製作者と結びつけて考えた場合には以上のような推測がなされるわけであるが、供給先と結びつけて考えた場合には別の推測が可能となる。「出職」の場合がそれである。出職は注文先の寺に出張して付近の適当な場所で行うわけであるから供給先は工房の近くにあるわけである。遺跡に近い寺としては長久寺(同市一の宮)、淨福寺(同市上刈)などがあり、淨福寺の鐘は宝曆12年(1762)、高田鑄物師 柳崎市良右衛門 藤原吉利作(坪井1984)とされる。この他に、大庭鑄物師等による鐘を持つ寺もあり(坪井1984)、市史には他所の鑄物師が滞留した記録も残ることから、出職による工房跡の可能性も考えてみる必要がある。(高橋昌也)

#### B. 糸魚川の鑄物師について

本章では原山遺跡の性格について理解を深めるため、この遺跡を拠点の一つとして活動していたと思われる職人像を浮き彫りにしてみたい。從来、近世社会においては京都公家真継家によって鑄物師統制がなされていたとされていた。ところが最近の研究により、真継家によって一方的に支配されていたわけではなく、むしろ鑄物師側に強い主体性(一見支配されたと見せかけ、実は支配している側を逆に利用している鑄物師のしたたかな面)が存在した事が明らかにされつつある。現糸魚川市域にも鑄物師が存在していた事は「糸魚川市史5」(青木1981b)でも明らかにされているが、在地の関係資料が少なく、鑄物師の実態については不明な部分が多い。そこで、その解明のため真継家作成の鑄物師名簿を概観してみたい。糸魚川に居住、活動した鑄物師森氏の名が見られる。詳細は以下の通りである。

史料名	作成年代	鑄物師名
諸国鑄物師文化以前名前写	文政(1818)以前	森半左衛門
諸国鑄物師文化以前名前写	文政11年(1828)～嘉永5年(1852)	森半左衛門・作左衛門 (作右衛門カ)
諸国御鑄物師姓名記	嘉永7年(1854)	森半右衛門・森作左衛門 (半左衛門カ) (作右衛門カ)
諸国鑄物師控帳	文久元年(1861)	森半左衛門
由緒鑄物師人名録	明治12年(1879)	森半左衛門

寛政8年(1796)の半左衛門・作右衛門(兄弟)による願書(糸魚川市一の宮 森直樹氏所蔵文書)によると森家の先祖安左衛門の代に近江国蒲生郡八日市の金屋善兵衛から技法を学び綴旨写を得て、鑄物業を始めている。金屋氏は、文久元年成立の禁裏諸司真継家名寄鑑写に名が見える職人である。その後森家は一時的に鑄物業を廃業したが、信濃松本鑄物師田中伝左衛門(伝右衛門の誤りか)に弟子入りし、京都の真継能登守から鑄物師職免許状を発給してもらうため上洛を願い出ている。その契機となったのが、当時の越後市場を席巻していた柏崎の大庭鑄物師が信州水内郡の戸狩村光明寺で信州鑄物師と商闘争いを起こした事件である。この争論の直後に越

後国各地の鉄物師が新規に免許状を得ている〔桑原1983・1985・1986〕森家の場合もこのような背景があったと思われる。森家には文政13年(1830)7月日付鉄物師職免許状が伝存している。

では、このような鉄物師職免許状配布・取得については現実にどのような意義があったのだろうか。まず、真継家の側からであるが、近世初頭から強固な支配構造を有していたわけではない。真継家は本来、豊臣政権との結びつきが強固で、それゆえ幕府からは当初圧迫された。真継家の最盛期については、(1)近世中期を想定する考え方〔中川ほか1977、小原1963〕や、(2)中期以後を想定する考え方〔榎本1984a・1984b〕に分かれているが、近世中期以後、鉄物師は一般庶民得意先とし、その結果、他国鉄物師・新鉄物師との対立が激化していった。そこで頻発する争論の調停者として再び真継家の存在がクローズアップされてきた。真継家は鉄物師職免許状配布に際して札銭を得て鉄物師との関係を再編しようと企図したのである。逆に鉄物師側からみると自家の由緒の確認、諸役免除、諸国の自由通行、新鉄物師への対抗、寺社関係の争論に際して有利になるなど免許状獲得によるメリットがいくつもあった。森作右衛門は鉄物原料である銅(ズク)の買入れ人でもあり、糸魚川藩が銅に対して沖の口役銀を課した行為に抗議している〔青木1978〕。このように、原料の買入れから免許状の取得まで、糸魚川鉄物師職人の積極的な活動を知る事ができる。

(竹田和夫)

#### C. 梵鐘鑄造遺構及びその付近より出土した瓦について

先述したように本遺跡では梵鐘鑄造遺構のSK21・22、SB23及びその付近から平瓦・丸瓦・道具瓦が出土している。これらの瓦のはほとんどは二次焼成をうけて橙色に変色し、表面はもろくなっている。出土量からも梵鐘鑄造時に「スイヒ」として使用されたものではないかとも推測されている。これらの瓦の中には刻印や捺印された文字瓦が2・3個みられる。刻印の文字瓦は調査以前の深耕中にSK21付近より発見されたもので、道具瓦などの固定装置部分と推定されている。表面に「延享四」(1行目)「京」(2行目)の文字がヘラ書きされており、「延享四」とはおそらく製作年号(註)を印したものであろう。捺印の文字瓦はSK21から出土しているもので、平瓦であろう。1行目は「ワカサ小箇」と判読が可能であるが、2行目は「ツルヤ主」と推定されるのみで確証はない。多分、瓦の生産地を示す捺印であろう。小箇ではこれらの文字瓦から瓦が使用されていた建造物と瓦の生産地の推定を試みてみたい。

まず瓦が使用されていた建造物の推定であるが、江戸時代前半における瓦の使用頻度は極めて少ない。江戸市中においても初期の需要はもっぱら城と大名屋敷であり、その後もせいたくを慎む風潮や身分制度維持の必要上から一般家屋の瓦ぶきは禁じられていた。一般家屋の瓦ぶきの禁が解かれ、瓦ぶきが奨励されたのは享保5年(1720)以降で、それも防火対策上の施策であった。江戸時代の糸魚川市中での瓦の使用頻度はさらに低く、一般家屋ではまったく使用されて

註 道具瓦(特に鬼瓦)は注文品で、独自な物を製作し、完成時には製作者が製作年月日と製作者名等を刻印することである(水原博物館遠藤慎之介氏の教示)。

いなかったものと考えられる。寛保2年(1742)には板ぶき屋根獎勵に伴い、木羽板の需要が増加したため糸魚川浜から木羽板の積み出しを禁止するなど(青木1978)、江戸中期においても一般家屋の屋根はカヤぶきから板ぶきへの転換期であった。寺院でも瓦ぶきはまれで、そのほとんどが明治以降までカヤぶき屋根であったと言われている。それゆえ、延享年間(1744~1748)の糸魚川市中で瓦ぶきの建造物は希有な存在で、可能性のある建造物は糸魚川城と神宮寺(註1)くらいではなかろうか。しかし、本遺跡出土の瓦が他から搬入されて再利用された可能性もあり、延享年間に糸魚川城と神宮寺が瓦ぶきであったことを積極的に示す資料や情報が得られなかったことから、現時点では本遺跡出土の瓦が使用されていた建造物は不明としておきたい。

次に瓦の生産地の推定を行ってみたい。捺印の文字瓦に「ワカサ小園」と判読可能なものがあることから、その生産地の一つに現在の福井県小浜市周辺をあげることができよう。江戸時代における小浜市周辺の瓦生産は、海岸部の西津福谷において開始され、元文年間(1736~1740)には内陸の田繩村や新滝村に移り、以後大飯郡や相生で生産されていた。供



第38図 福井県小浜周辺の瓦生産地

給先としては、初期は官家の御用に、ついで村里の寺院や町方の蔵等に、さらに幕末には北海道の小樽・函館へも北前船で運ばれている(註2)。本遺跡出土の瓦が現在の福井県小浜市周辺で生産されたものと仮定するならば、その生産地は元文年間に瓦生産の行われていた田繩村や新滝村付近と目される。

(寺崎裕助)

註1 天津神社の境内に所在した神宮寺は真言宗の大寺で、高峰山教王院神宮寺と称した。寛文12年(1672)の古文書(糸魚川市史編さん委員会1986)や天津神社に収蔵されている延享5年(1748)の絵図面から、神宮寺は江戸時代前半において天津神社の神事を行い、社領を支配していたことがうかがえる。そして、そのような神宮寺の勢力は明治元年の神仏分離令で神宮寺が消滅するまで続いたものと考えられる。現在、神宮寺跡付近には当時の瓦片が散在する。

註2 福井県小浜市周辺の瓦生産については、小浜市役所文化課・大森宏氏より貴重な御教示を賜わった。

## 第V章 大塚遺跡

### 第1節 グリッドの設定と調査の方法

本遺跡のグリッドは、原山遺跡と同一座標軸で設定し、大・小グリッドの呼び方も原山遺跡と同様にした。また、中心杭も方向杭も原山遺跡と同じ方式で打設した。D地区は本グリッドを設定後にもうけられた地区であったため、センター杭(STA)382を起点に独自に設定する予定であった。しかし調査の結果、若干の遺物が出土したのみで遺構は検出されなかったためグリッドは設定されなかった。

調査は、まず原山遺跡と同じく試掘調査を行い、その調査結果をふまえて調査計画を立案することにした。表土処理も原山遺跡と同じく重機を多用することにした。  
(寺崎裕助)

### 第2節 調査の経過

本遺跡の調査は、原山遺跡と同様に昭和60年度に完了する予定であった。しかし、原山・大塚両遺跡の発掘面積が増加し、原山遺跡では梵鐘鋲造跡など予想外の遺構が検出されたことなどのため、結果的には昭和60・61年度の2ヵ年度にわたって実施された。

(昭和60年度)

9月13日(火)から原山遺跡と同じ目的で試掘調査が開始され、10月18日(火)に終了した。その結果、当初は調査対象外地域としていた沢部分の8~12H~Pにおいても遺物の出土が確認され、発掘調査予定面積は17,000m<sup>2</sup>に拡大した。特に8~9Iと9~10L~Qを中心とした沢部分では良好な包含層が残存し、遺物も多く出土した。それゆえ、原山遺跡と同様に沢部分で基本層序を把握し、遺構の時代決定の参考にした。

その後の公団との協議により、本年度の調査範囲は、4~7H・Iの2,200m<sup>2</sup>で残りは来年度に発掘調査を実施することで合意した。しかし、重機による表土はぎは出来る限り行うこととした。10月24日(木)には重機での表土はぎに着手し、11月8日(木)には今年度の発掘予定部分の調査を終了した。重機による表土はぎは、高速自動車道のセンター杭(STA)を結ぶラインの南側で発掘終了後も続行されたが、11月19日(火)には終了した。表土のみをはぎとった面積は約6,800m<sup>2</sup>であった。

2月20日(木)には北陸自動車道埋蔵文化財に関する会議が行われ、その中で公団は昭和61年7月末日発掘終了戦守を再確認するとともに、本遺跡の工事用道路建設予定地部分の調査を最優先で実施するよう要望し、そのためには3月中旬に除雪することもいとわないとの姿勢を示した。県教委はその要望を受け入れ、公団の協力による除雪作業も含めて現地での昭和61年度発掘調



第39図 大塚遺跡遺構全体図 (1:600)

査の事前準備を3月24日から行うことに決定し、実行した。

(昭和61年度)

4月2日より発掘作業員を投入しての発掘調査の事前準備を行う。工事用道路建設予定地部分の除雪作業も4月2日で終了し、昨年の試掘調査結果や工事工程をふまえた調査計画を立案した。それによると4~10J~Pの工事用道路建設予定地部分をA地区として、最優先で調査を行い、4月中旬に終了する。5~11J~Pの台地上をB地区、6~12G~Pの沢筋及び台地突出部分をC地区とし、B→Cの順位で調査を実施することになった。なお、B地区の大半は昨年度に表土はぎが終了している。4月3日(木)にはA地区の発掘に着手し、4月11日(金)にはC地区の沢の層序確認のために、トレンチの再発掘をバックフォーで開始した。4月21日(日)にはB地区の5~7JKの遺構確認作業にも着手し、4月24日(木)には予定通りA地区の発掘調査を終了してその部分を公團に引き渡した。

4月25日(金)から5月6日(火)の間は連休が重なるため発掘調査を中止し、5月7日(水)から再開した。5月8日(木)に、本年度の調査開始時より遺跡ではないかと注目されていたD地区の確認調査を実施した。計12箇所のグリッドを任意に設定して発掘を行い、層序は上位から暗褐色土・黒色土・暗褐色土・黄褐色土となり、層厚は上位から15cm、10cm、15cmを測った。遺物は石斧未製品や剣片などで、黒色土層から出土した。この調査結果からD地区の南側部分に遺構や遺物が存在する可能性が生じたため、翌日に公團と協議を行い、7月末までの発掘調査期間中にこの地区的調査を実施することで合意した。5月22日(木)にはB地区の調査がほぼ終了したが、C地区のA沢(註)からは本県初の弥生時代前期の資料がまとめて出土しはじめたり、同地区的台地突出部分では、道路遺構がいわゆる信州街道(塙の道)と確認されたりするなど調査のピークを迎えた。6月6日(木)にはC地区B沢の調査にも着手し、D地区ではバックフォーによる表土はぎを開始した。D地区の調査は、木の切り株に悩まされたが、遺構が検出されなかったことや、遺物の出土も少量にとどまったため順調に進み6月18日(火)には終了した。このような発掘状況の中で、現地説明会開催の気運が高まり、6月8日の日曜日には一般市民を対象としての現地説明会が本遺跡と立内の内遺跡で行われ100名をこす市民が参加した。

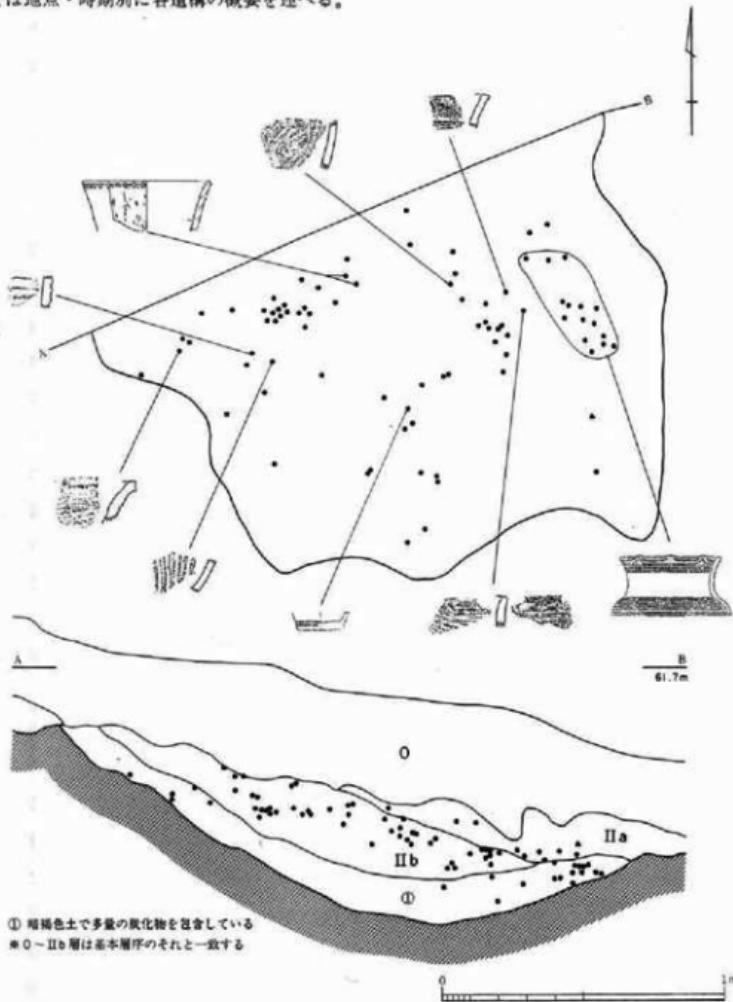
7月に入り、調査も最終段階を迎える。8日(火)には弥生時代前期の貴重な資料が出土したA沢の調査が終了し、23日(木)にはB沢の調査も終わりを迎える。2ヵ年度、延130余日にわたった本遺跡の発掘調査を完了した。発掘面積は約17,800m<sup>2</sup>であった。その後2日間は残務整理などをを行い26日(土)には現地から撤収したが、昭和47年8月の大墓遺跡の発掘調査に端を発する本県の関越・北陸自動車道関係の遺跡発掘調査は15年あまりの年月を経て、II期線部分を除きここに一応の終了をみたのである。この間に発掘調査の対象となった遺跡は関越自動車道18箇所、北陸自動車道48箇所の多数にのぼり、整理報告された遺跡は43遺跡で、現在なお報告書作成のため遺物整理作業が続行されている。

(寺崎裕助)

註 C地区では沢が2箇所で検出された。本報告書では便宜的に西側の沢をA沢、東側の沢をB沢とした。

### 第3節 遺構

大塚遺跡から検出された遺構は縄文時代早期・弥生時代前期・平安時代・江戸時代の4時期に大別され、この他時期不明のものがいくつか確認されている。これらは時期ごとにいくつかのまとまりを持って存在しているが、江戸時代を除いてその分布は極めて偏在的である。以下では地点・時期別に各遺構の概要を述べる。



第40図 SK39 遺物出土状況

## A. A沢の遺構

A沢で検出された遺構は、土坑2基、集石1基、ピット8基で、出土遺物及び覆土の状況から時期不明の土坑1基を除いて弥生時代前期に属するものと思われる。

## 土坑

**SK39** (第39・40・42図、図版33) 調査区北端の10Ⅰで検出された不整方形の土坑で、断面は浅いスリット状をなす。本土坑の約強は北側法線外に伸びている。規模は長辺(推定)2.2m、短辺2m、深度0.4mを測る。覆土は第39図に示したように整然としたレンズ状堆積を示し、一様にIIb層を基調とする。遺物の大半は覆土の上層に浮いた状態で検出された。出土遺物は、土器が約80点、剣片6点、磨製石斧の未成品2点、管玉の未成品1点、珪岩礫6点である。土器は第58図4を除いて著しく細片化しており、器形を判別し得る資料は少ないが、大半は無文の粗製深鉢と考えられる。本土坑の所属時期は、III層を掘り込んで構築される事から縄文時代晩期中葉を上限とし、覆土上層で検出された土器群の時期、すなわち弥生時代前期を下限と考える事が出来る。しかし覆土が一様にIIb層を基調としている事から弥生時代前期に限定される可能性が強い。

**SK70** (第39・41図、図版35下) 8Ⅰ25において検出された梢円形の土坑である。断面は浅いスリット状をなし、規模は長径0.7m、短径0.6m、深さ0.15mを測る。覆土は3層に分層されており、各層共多量の焼土・炭化物が遺存していた。本土坑からは全く遺物が出土せず、所属時期等は不明である。



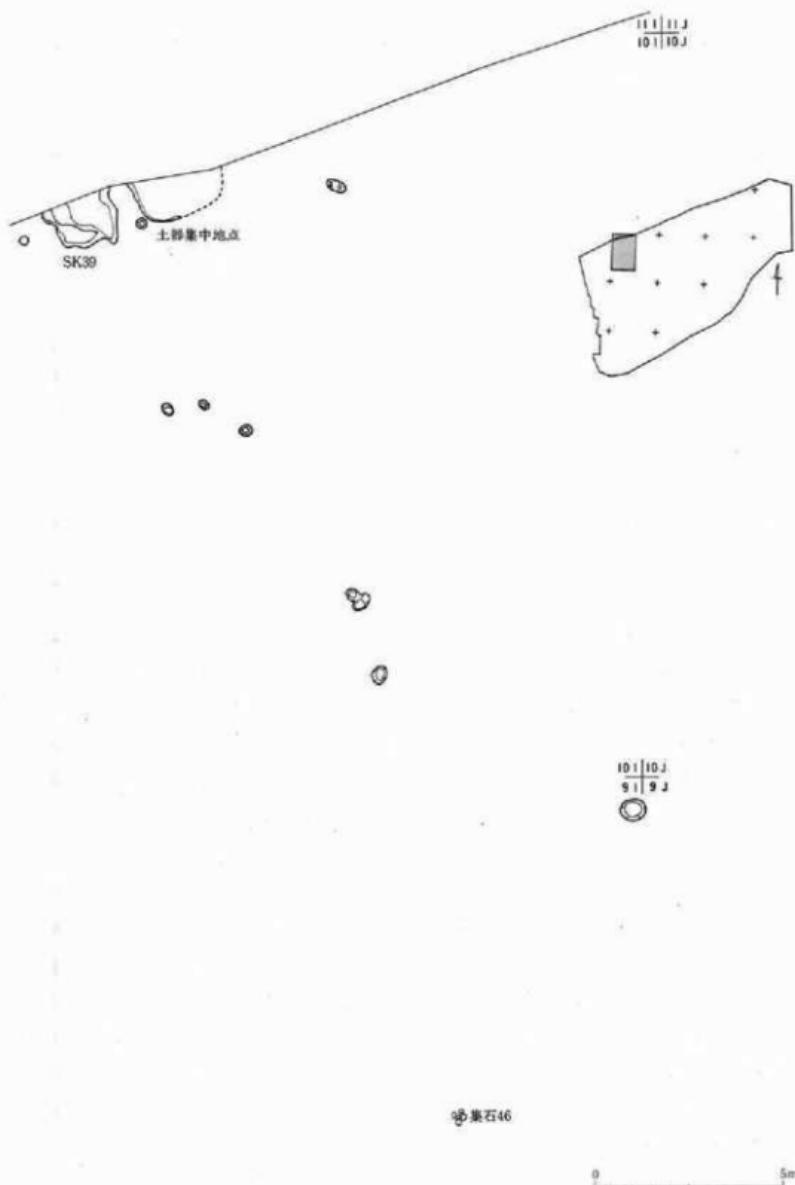
第41図 SK70 平・断面図

## 土器集中地点 (第39・42・43図、図版34)

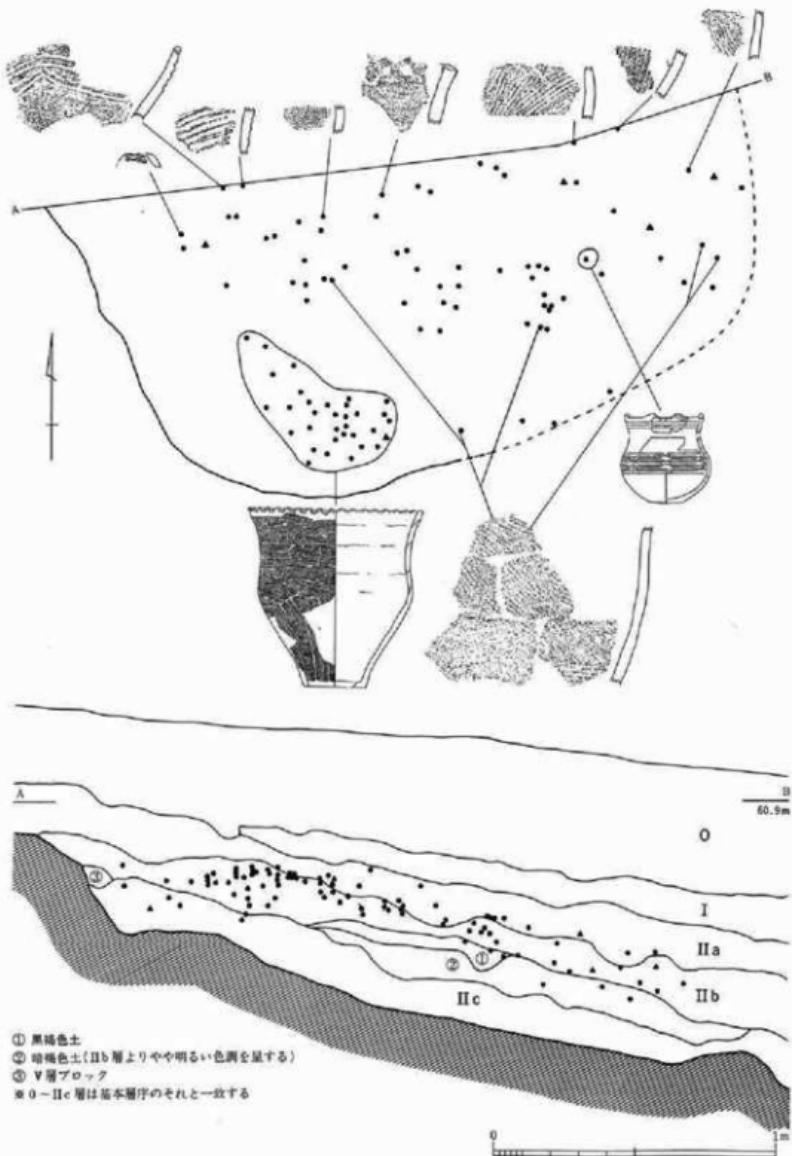
10Ⅰ13・SK39の東側に隣接して弥生時代前期の完形土器や大型破片等がまとまって検出された。その範囲は南北1m、東西2mで、主にIIb層上位に集中している。遺物の分布状態から、さらに法線外北側へ伸びているものと推定される。本地点は当初遺物の出土状況から、その下層に竪穴住居あるいは土坑の存在が予想され、精査の結果遺物集中範囲に一致して落ち込みのコーナーが検出された。この落ち込みは山側で約30cmの深度を有するが、谷側における立ち上がりは不明瞭であった。完掘後のセクション観察によてもそれは確認されず、底面の傾斜がIII層のそれに一致するなど自然地形である可能性が強い。本土器集中地点の成因は、III層上面における微地形が、IIb層堆積時にも若干の凹地として残存し、その部分に土器等が一括埋棄された事に起因すると考えられる。出土遺物は、土器の完形品が2点、破片63点、剣片2点、珪岩礫3点で、出土状況からほぼ同時期の所産と考えられ、水神平式併行期の表と浮線文系土器が共伴している点が注目される。

## 集石46 (第39・44図、図版35上)

9Ⅰ20のIIb層中で確認されたもので、10~20cmの大型の蝶5点を十字形に配している。しかし、集石下やその周間に関連する遺構は見られなかった。使用されている蝶は四石を一点含む



第42図 SK39・土器集中地点等 平面図



第43図 土器集中地点 遺物出土状況

他、破碎面を持つ河原石3、持たないものの1で、いずれも火を受けた痕跡は認められない。礫の石材は安山岩3、砂岩2で姫川の転石として普遍的に見られるものである。出土遺物は前述した凹石(第44図)の他に細密条痕の施された土器の底部(第64図185)が本集石に接して検出されている。本集石の所属時期は、II b層中に構築されている事や、第64図の土器から弥生時代前期に位置づけられよう。

#### ピット(第42図)

ピットは10 Iの沢西斜面に8基検出され、確認面はIII層上面である。平面形は円あるいは橢円形で、規模は直径25~40cm、深度10~40cmを測る。覆土は全てIIb層の単層で、土器細片が微量混入していた。ピット群は規模・配列に規則性が無く、性格は不明である。所属時期はIIb層を覆土とする事から、弥生時代前期に位置づけられよう。

この他のIII層上面において風倒木痕が6基確認され、主に沢底部及び西斜面に分布している。その形成時期は、IIb層を第一次堆積土としている事から全て弥生時代前期と考えられ、覆土からは該期の資料が若干検出されている。特に土器は酸化鉄の付着が著しく、茶褐色に変色しているものが多い。

(田中 靖)

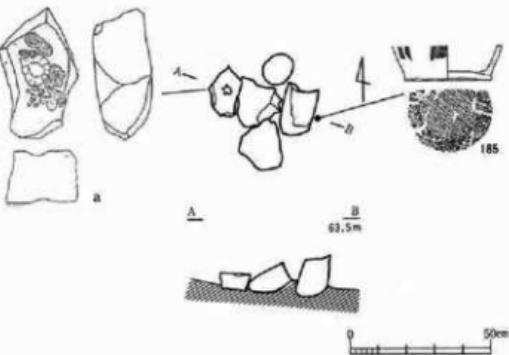
#### B. B沢の遺構

B沢では、北側の緩斜面から石器集中地点が1箇所検出されたのみである。

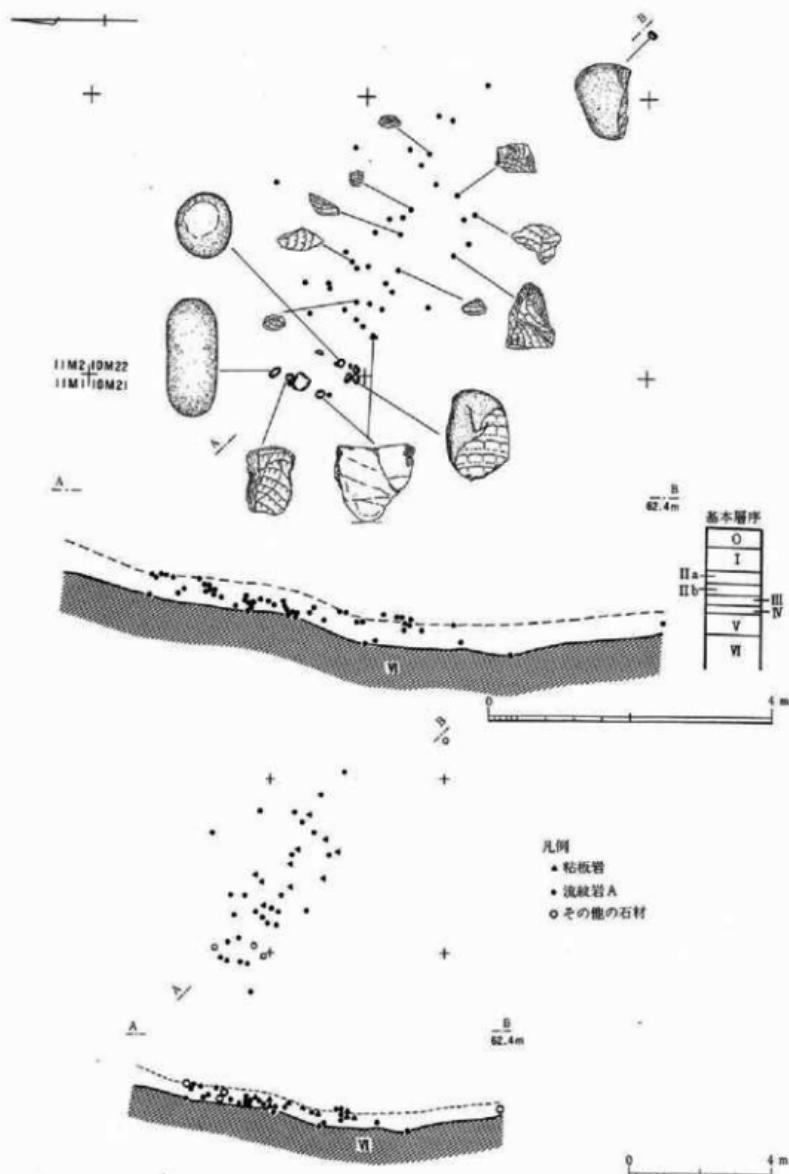
#### 石器集中地点(第39・45図、図版36上)

本集中地点は50点あまりの石器類・チップ・フレークからなり、10M16~18・21・22を中心とし検出された。形状は斜面の傾斜にそって北西~南東方向を長軸に長楕円形を呈し、その範囲は北西~南東7.6m、北東~南西2mの範囲を占めていた。遺物のほとんどがV層(黄褐色砂質土)から出土しており、石器類では磨石・礫器・石核がみられる。石材は流紋岩・安山岩・砂岩である。出土層位のV層中にK-Ah(鬼界アカホヤ火山灰、BP 6000)の降下層準のあることが予想されたり。石器組成からこの石器集中地点は縄文時代早期に比定されるであろう。出土した石核にフレークが接合し、チップも多く出土していることから石器製作跡の可能性がうかがえる。

(寺崎裕助)



第44図 集石46 平・断面図



第45図 石器集中地点 遺物出土状況

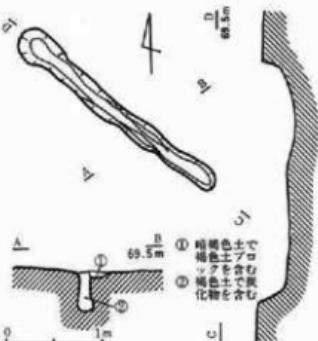
### C. 台地上の遺構

台地上からは、縄文時代・平安時代・江戸時代の遺構が検出された。以下、追って説明を加えていく。

#### 縄文時代の遺構

##### ピット

T ピット P51 (第39・46図、図版37) 5 I 1・2で検出された。平面形は細長い溝状を呈し、全長2.6m、幅0.3mを測り、確認面からの深さ0.42mである。覆土は2層に分層でき、1層はIV層類似の暗



第46図 P51 平・断面図

褐色土で褐色土ブロックを含み、2層は褐色土で炭化物を含んでいる。覆土から遺物が出土していないことから明確な時期は不明であるが、覆土にIV層類似層の堆積が認められることから、縄文時代前期後半～中期の遺構ではないかと考えられる。このピットの性格としては、1基のみの検出ではあるが平面形がいわゆるTピットと同様であることから、落とし穴的性格の推測が可能であろう。

(寺崎裕助)

#### 平安時代の遺構

平安時代の遺構は掘立柱建物跡1棟・土坑2基・ピット1基で、いずれも9H～10Hに分布しているが後世の削平により極めて浅く、遺存状況はあまり良くない。

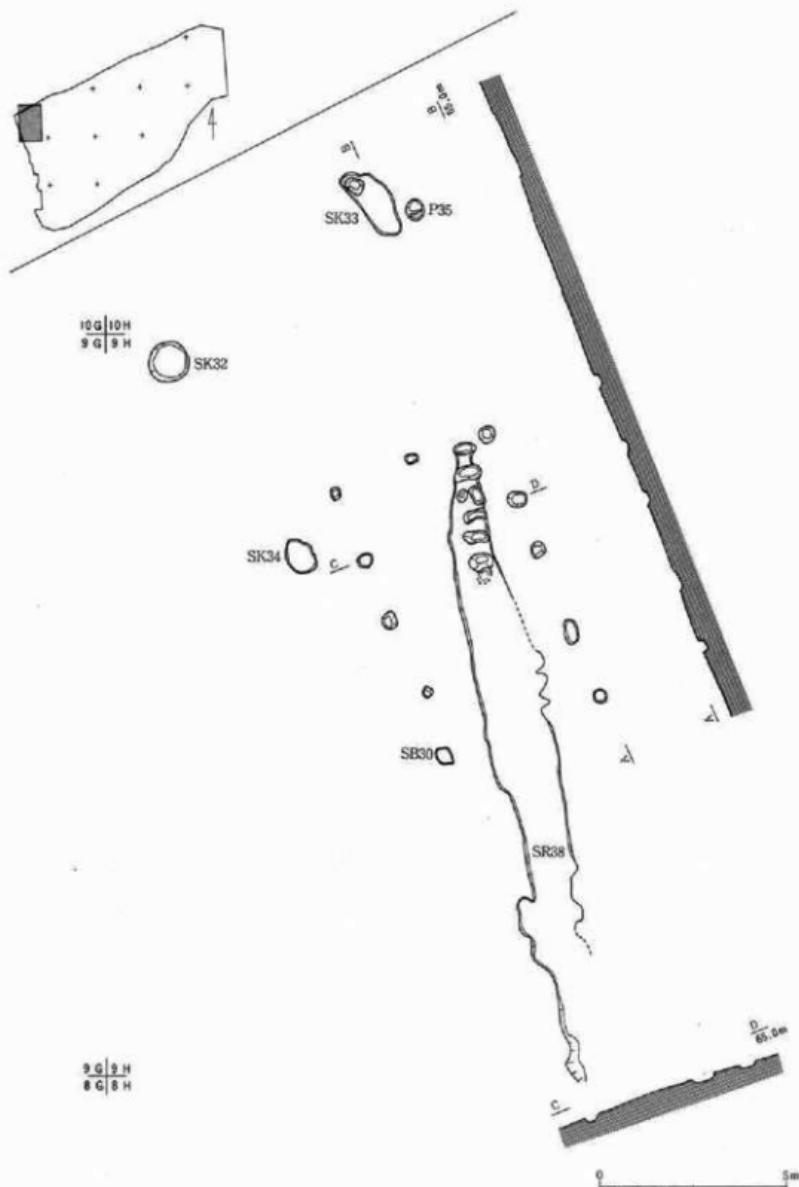
##### 掘立柱建物跡

SB30 (第39・47図、図版38) 9Hのほぼ中央部で検出された4間(8m)×2間(4.7m)の南北棟建物(西偏23度)である。柱穴の一部は、SR38及び現代の擾乱によって破壊され確認ができなかった。柱間は桁行、梁間とも2mのほぼ等間である。柱掘方は一辺40cmの隅丸方形をなし、深度は10～20cmを測る。掘り方埋土はIIa層の小ブロックを含むVI層である。柱痕跡は径約15cmの円形で、IIa層が充填していた。本建物跡では、時期を明示し得る資料は全く出土しなかった。

##### 土坑

SK33 (第39・47・48図、図版39上) 10H 2・17に所在する長槽円形の土坑で、底面の北西隅がピット状に一段深くなっている。規模は長辺2.2m、短辺0.9m、深度8cm(ピット部分15cm)である。本土坑は底面の南側が90cm×50cmの範囲で焼けており、覆土中にも多量の焼土及び炭化物が遺存していた。出土遺物は土師器鉢4個体、須恵器壺蓋1個体で、ピット35出土のものと同一個体片を多く含む。本土坑は出土遺物からSK34より若干古く9世紀前葉に位置づけられよう。

SK34 (第39・47・48図、図版40) 9H 17に所在する不整円形の土坑である。規模は長辺1m、短辺0.7m、深度5cmで極めて浅い。覆土はIIa層の単層である。本土坑からは、10世紀前葉



第47図 SB30 平・断面図 (SK32は近世の遺構)

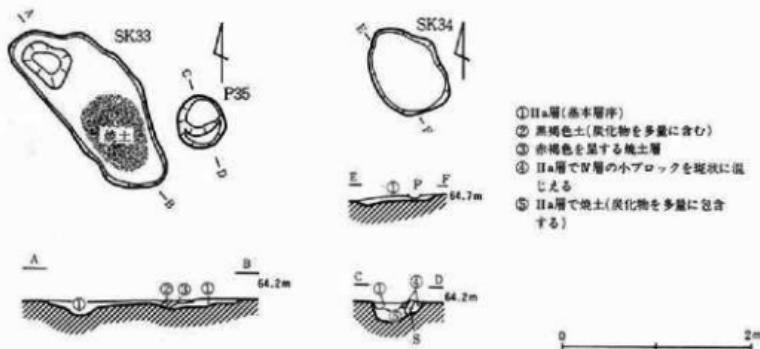
に位置づけられる土師器環が2点出土しているが、その内1点は「个」と墨書きされている。本土坑はSB30に隣接して構築されており、それに付随する何らかの施設であった可能性が高い。

### ピット

P35（第39・47・48図、図版39下） 10H 3に所在する円形のピットで、南側に狭いテラス部分を持つ。規模は直径60cm、深さ20cmを測る。覆土は3層に分層されるが、いずれもIIa層を基調としている。また、③層中には多量の焼土・炭化物が遺存していた。ピットの底面や側壁には焼成痕を持たない。出土遺物は土師器鉢4個体、同環一個体、須恵器壺蓋一個体で、土師器環を除いて全てSK33出土のものと接合する。本ピットはSK33の東側に隣接して構築されている事や遺物の接合関係及び覆土の類似から、同時期に存在し相互に関連した遺構と考えられる。

本遺跡における平安時代の遺構は、9世紀前葉及び10世紀前葉の2時期に大別される。前者は底面の焼けたSK33と焼土及び炭化物が厚く堆積したピット35によって構成されており、周囲に柱穴等が存在しない事から屋外炉の一種と考えられる。後者はSB30及びSK34で1つのセットをなしている。同時期に共通して言えることは、遺構が面的に分布せず孤立して存在する事である。このような傾向は隣接する原山遺跡〔糸魚川市史編さん委員会1986〕においても指摘でき、一般集落とは異なる性格を示すものと考えられる。

（田中 靖）



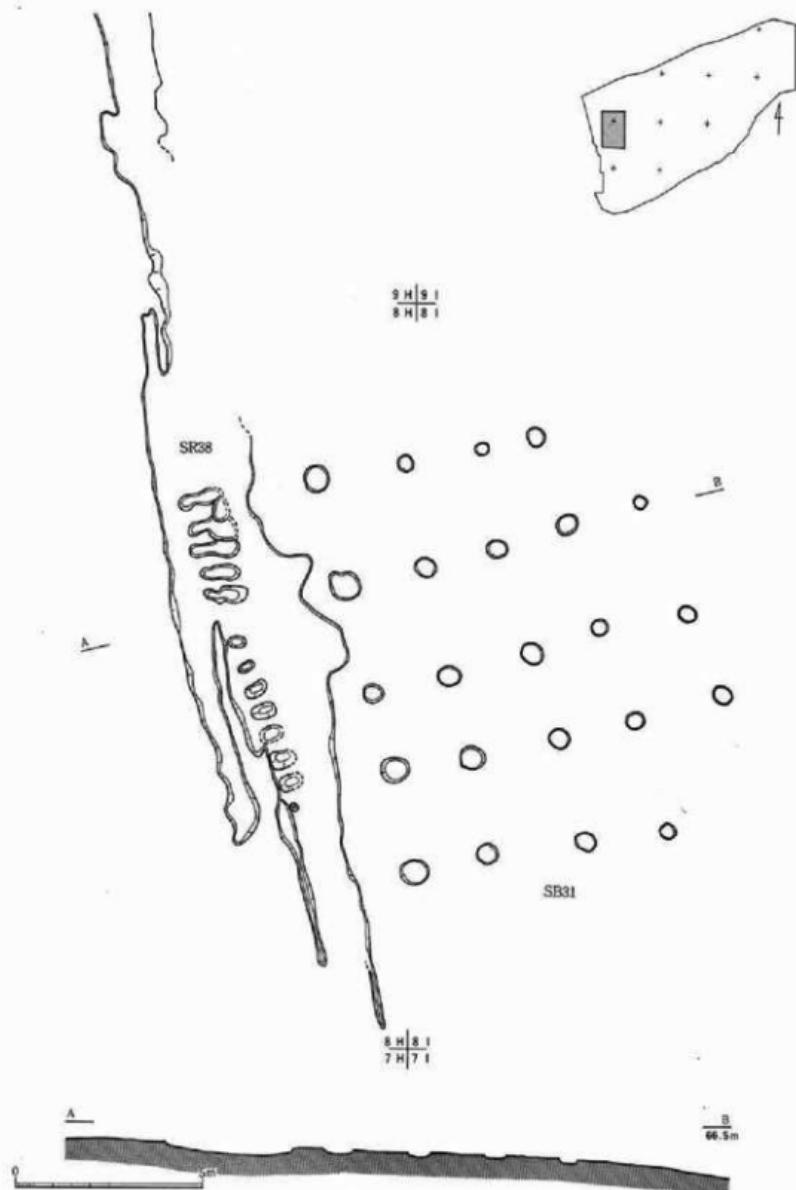
第48図 SK33・34、P 35 平・断面図

### 江戸時代の遺構

掘立柱建物跡1棟、道路遺構1基、歓状小溝3群、溝1基、土坑1基を検出した。なお、江戸時代の遺構の分布は台地上に限られていた。

### 掘立柱建物跡

SB31（第39・49図、図版41下） 北方向へ突出した台地上の7H～Iで検出された。規模は4間(11.3m)×3間(7m)で、東側に2間(5.5m)×1間(2.5m)の張り出し部分が付属する直柱建物である。柱間寸法は、桁行が北から3m・3m・2.3mで梁間が西から2m・2.6m・2.3mであ



第49図 SB31 平・断面図

る。北から1・2間の間は、道路遺構が建物側に1m余り突出していることから、この部分が入口ではないかと推定される。柱穴から遺物は出土していないが、柱穴の覆土はI層(黒褐色砂質土)で道路遺構の覆土と同じであることから、道状遺構と同一時期と考えられる。性格については、一応不明としておきたいが、道路遺構に面していることや、聞き込み調査(註1)及び記録[糸魚川市ふるさと運動実行委員会1977]からボッカ茶屋(註2)の可能性が考えられる。

### 道路遺構

**SR38** (第39・50・51図、図版41上) 5~8Iで検出され、法線内を南北に継続する。延長88m、幅2.6m~3.4m、確認面からの深さ5cm余りを測る。道路面は堅く踏みしめられた砂利敷であるが、ところどころビット列や溝がみられる。ビット列は6~8基ずつまとめて3箇所で認められた。平面形は長円形又は円形で、径30cm~60cm、深さ5cm内外である。性格は不明であるが、歩がかり(すべり止め)ではないかとの指摘もある。溝は長さ9m、幅40cm、深さ5cm位で、道路遺構の両脇に数条認められる。降雨時の雨製など自然現象で生じた溝と考えられる。道路面からは、砂利に混じて伊万里焼・唐津焼・瀬戸焼など18世紀を主体として17世紀中期から19世紀にかけての陶器が出土していることから、この道路遺構も19世紀を下限とする。道路面からは、砂利に混じて伊万里焼・唐津焼・瀬戸焼など18世紀を主体として17世紀道と呼ばれ、現在の山の井神社左折→糸魚川商工→浄福寺裏→糸魚川中学校→市道茶畠線→原山のコースをたどっている。また、この道は天和(-1681)の清崎城破棄以後に開通した[青木1981]といわれている。

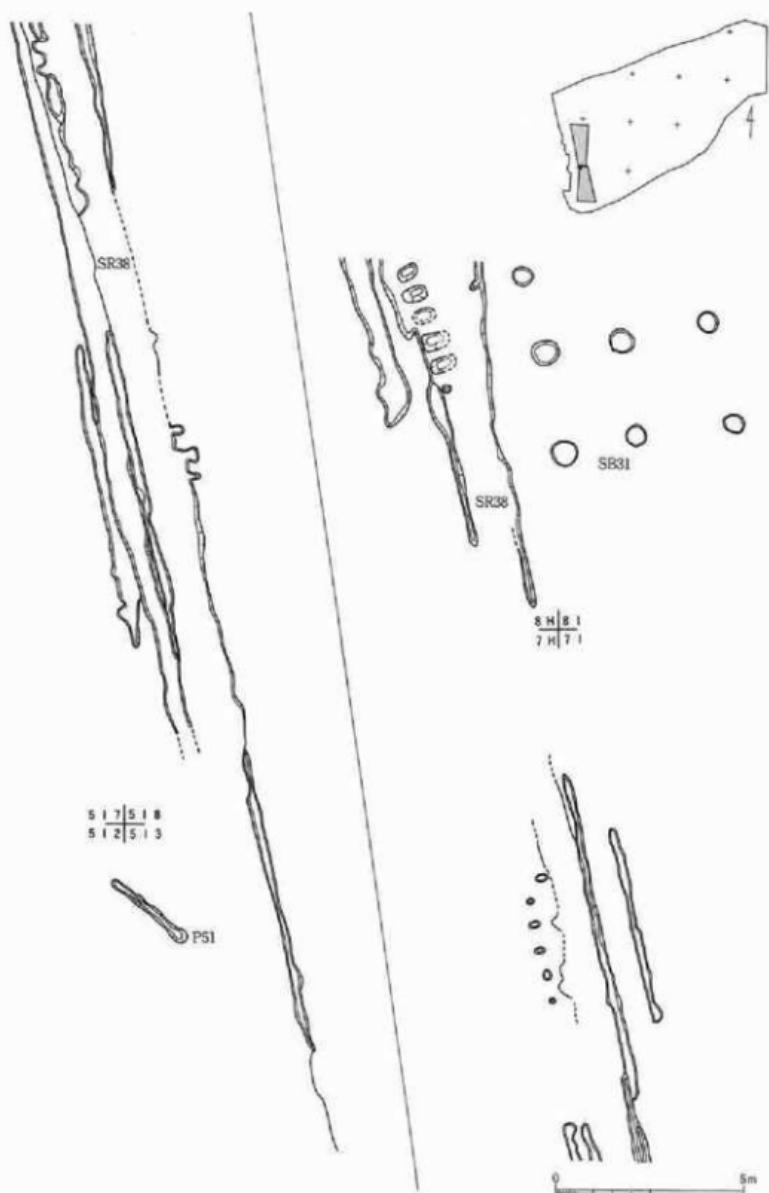
### 溝

**SD60** (第39図) ボッカ茶屋でないかとされる掘立柱建物跡の東側に隣接し検出された。「U」字状の断面形を呈し、長さ8.2m、幅1~1.3m、深さ17cm~27cmである。SK32と同様に、遺物は出土していないが覆土にI層の堆積が認められることから近世のものであろう。掘立柱建物と畝状小溝の間にあって、方向も畝状小溝と同一であることから家屋と畠地を区する溝の可能性が大きい。

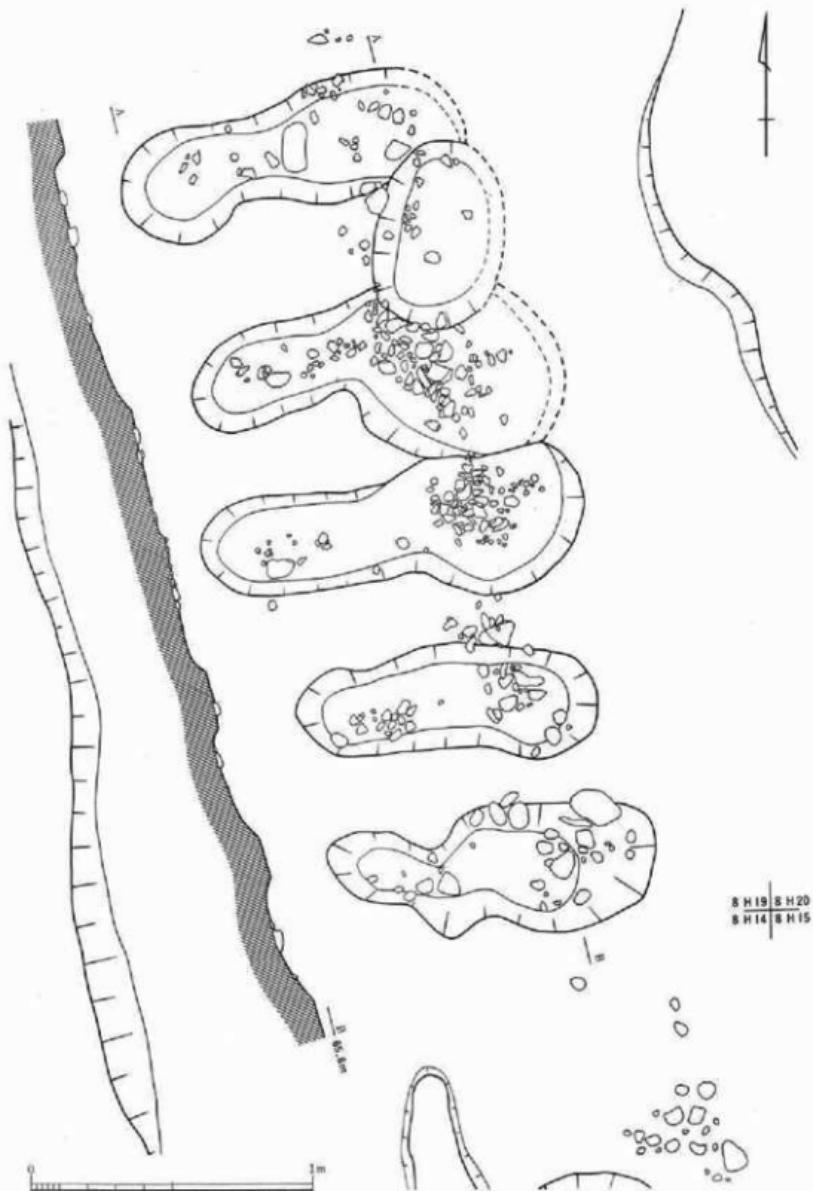
**畝状小溝** (第39・52~54図、図版42・43) 台地上の9~11Q・Pと7~8J・Kの2点で検出され、畝の方向からして3群に分けられる。全長は12m~15m余りで、幅0.3m~0.4m、深さ0.1m~0.3mを測る。畝の間隔は平坦地で0.7m、斜面地で1.5m、検出面積は9~11Q・Pで約590m<sup>2</sup>、7~8J・Kで170m<sup>2</sup>~350m<sup>2</sup>である。これらの細くて浅い溝が一定間隔を保って群をなして並んでいることから畠の可能性が強く、小溝の間は畝間と考えられている。これらの溝

註1 現在、糸魚川市鉄砲町に「原山さ」という屋号の家がある。このお宅のひいおじいさん(存命なら110才くらい)が原山で茶屋を営んでいたということである。また、本遺跡の南に隣接している早津さんのお宅も以前は茶屋であった。

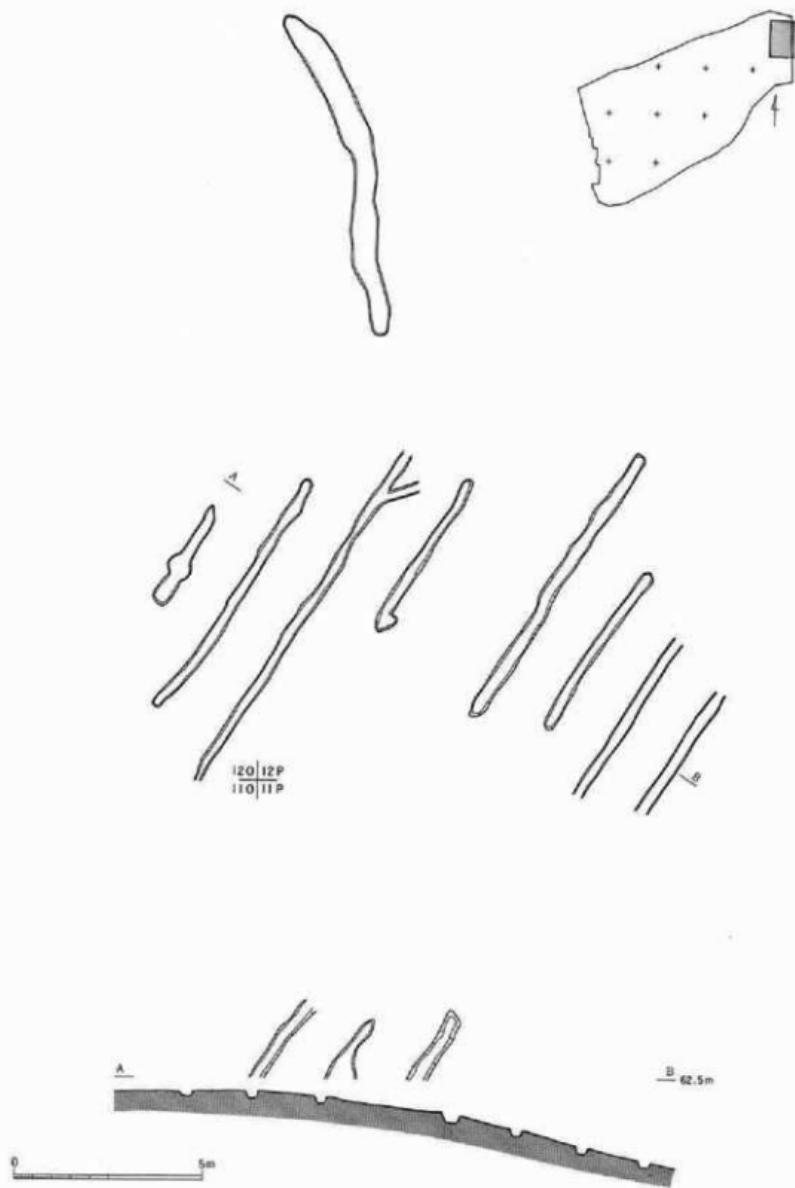
註2 ボッカが足につけた「ハバキ」を脱がないで土間までふみこんで、圍炉裏の火にあたれるようになっていた茶屋を「ボッカ茶屋」または「ふんごみ茶屋」といった。なお、ボッカとは荷物運搬者のことであるが、ここでは主に塩荷の運搬を行った人達のことである。



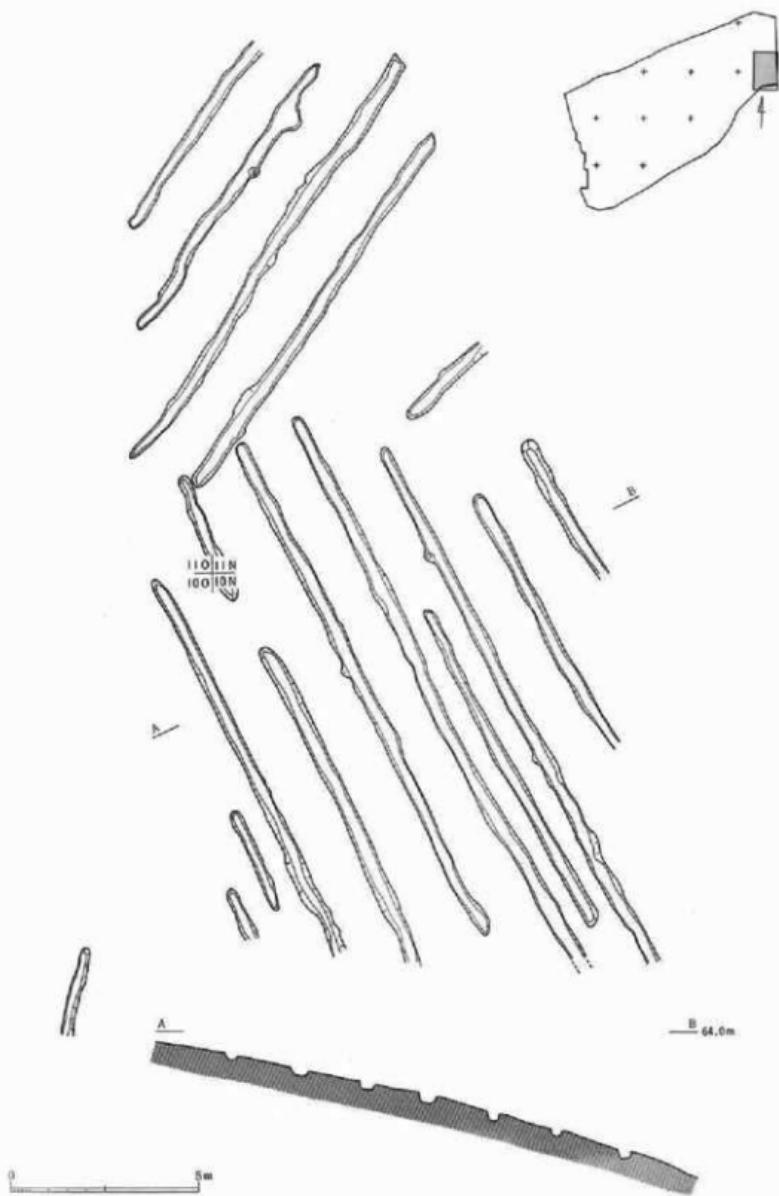
第50図 SR38 平面図



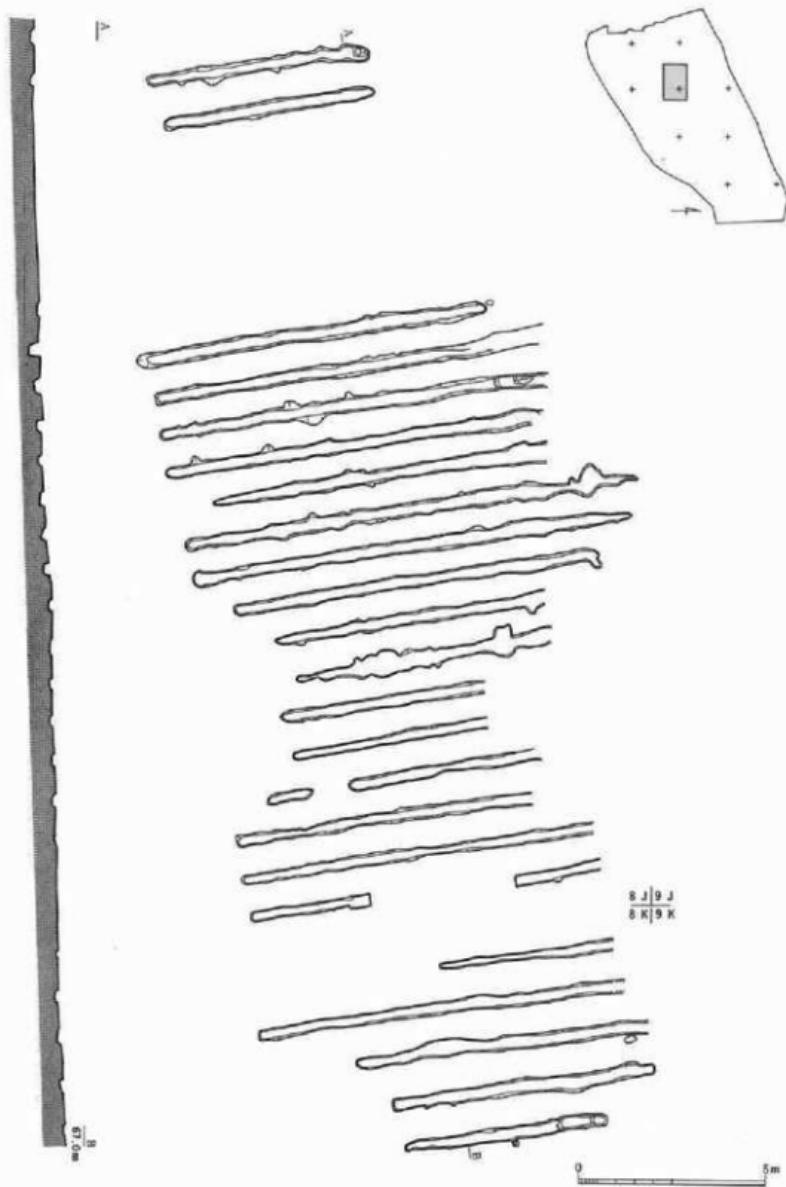
第51図 SR38 平・断面図(部分)



第52図 故状小溝 平・断面図



第53圖 突狀小溝 平·斷面圖



第54図 鉄状小溝 平・断面図

の中からは伊万里焼・唐津焼・越中瀬戸焼が出土しており、斜面地のものは18世紀、平担地のものは17世紀～19世紀前半の所産であろう。

#### 土坑

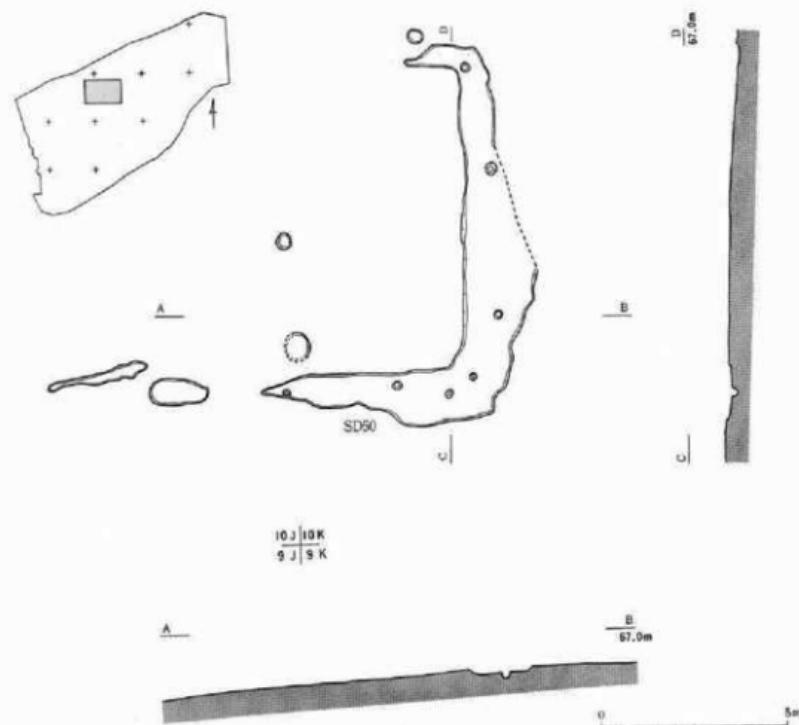
SK32（第39・47図） 9Hで検出された。開口部直径1.1m、底径0.8m、深さ0.34mを測る。遺物は出土していないが、覆土にI層の堆積が認められることから近世のものと考えられる。

（寺崎裕助）

#### 時期不明の遺構

#### 溝

SD50（第39・55図、図版44下） 9J・Kグリッドに所在し、西側はA沢に向かっての傾斜や耕作等の削平により、また東側の一部は擾乱による破壊を受け、全容は明らかでないが検出した限りでは「コ」字状を呈する溝である。各溝は北東隅、南東隅でほぼ直角に結ばれる。北溝は全長約2.1m、幅1.2m、深さ約3cm前後を測り、ゆるく西側に向かって傾斜する。東溝は全長



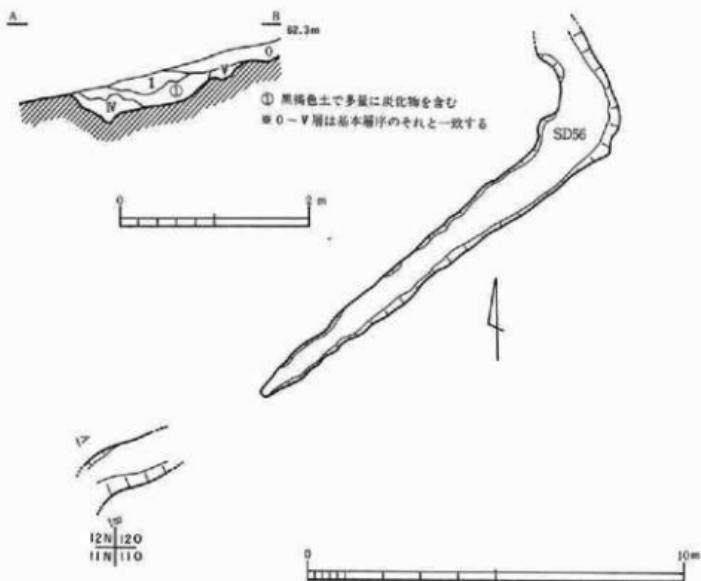
第55図 SD50 平・断面図

約10m、幅約0.9~2.0m、深さ6~22cm前後を測り、ゆるく北側に向かって傾斜する。南溝は全長約12.4m、幅約0.2~1.6m、深さ2~15cm前後を測り、ゆるく西側に向かって傾斜する。各溝の断面形は、底部がほぼ平らであり、壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とし、2層に識別され、自然堆積を示す。ピットは溝の内側より2基、溝底面より小ピット7基、北溝のすぐ外側より1基検出されたが、P1は焼土と褐色土の混合土、P2は暗褐色土を主体とする覆土であり、溝の覆土と異なる。それ以外のピットは溝の覆土に近似するが、溝に伴なうかどうか明らかでない。遺物は摩滅した縄文土器片が溝より1点出土している。溝の時期は不明であり、性格も不明であるが、地元の伝承によれば本遺跡には以前壕が存在していたということから、本溝は塚の周溝とも考えられる。

(高橋保雄)

**SD56** (第39・56図、図版44上) 120のB沢と尾根との交換点に位置するが、近現代の擾乱及び、試掘トレンチによって破壊される部分があり、遺存状況はあまり良くない。本溝は、120 13~14付近で直角に近く屈折しており、底面のレベルは屈折部付近が最も高く、南西及び北西の方向へ順次低くなっている。溝の規模は、最大幅1.9m、最大深度40cmを測り、断面形はほぼ台形をなす。覆土は第55図に示したように4層に細分され、いずれも整然としたレンズ状堆積を示す。本溝からは全く遺物が出土せず、性格及び所属時期は不明である。

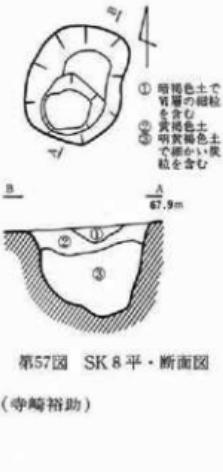
(田中 順)



第56図 SD56 平・断面図

## 土坑

SK8 (第40・55図、図版45) 台地中央部のSK7・8で検出された。開口部の平面形は隅丸方形ぎみを呈し、基底部の平面形は梢円形で、基底面北側にテラスを持っている。基底面とテラスの比高差は約10cmである。壁は南側から外反ぎみに真っすぐに、北側はなだらかに立ち上がる。開口部の長辺1m、短辺0.7m、基底部長辺0.5m、短辺0.4m、確認面からの深さ約1mである。覆土は暗褐色土、黄褐色土、明黄褐色土の3層に分層が可能で、1層にはV層のブロックがまだら状に混じり、3層には炭化物が混在する。遺物は出土していないが、隣接する原山遺跡で検出された土坑と形態が似ており、V層のブロックが覆土にまだら状に混じっていることから、それらとはほぼ同時期で性格も同様と考えられる。(寺崎裕助)



第57図 SK8平・断面図

## 第4節 遺 物

### A. A沢出土の遺物

A沢から検出された遺物は、縄文時代～中世にわたり、総量はコンテナで10箱である。その内、弥生時代前期の遺物は全体の8割以上を占めており、以下では該期の資料を中心に概要を述べたい。

#### 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は0層～IIb層から出土している。遺物の大半はIIb層上位に集中しており、0層～IIa層出土の土器は細片化・磨滅が著しく、IIb層出土のものと接合する場合が多いことから本来はIIb層に包含され、後世の搅乱等の要因で原層位から遊離したものと考えられる。ゆえに、以下では0層～IIb層出土の弥生時代の遺物を一括して取り扱うものとする。

#### 土器

A沢出土の弥生土器はコンテナで約5箱あるが、細片が多く総個体数は不明である。以下系統器種ごとに概要を述べる。

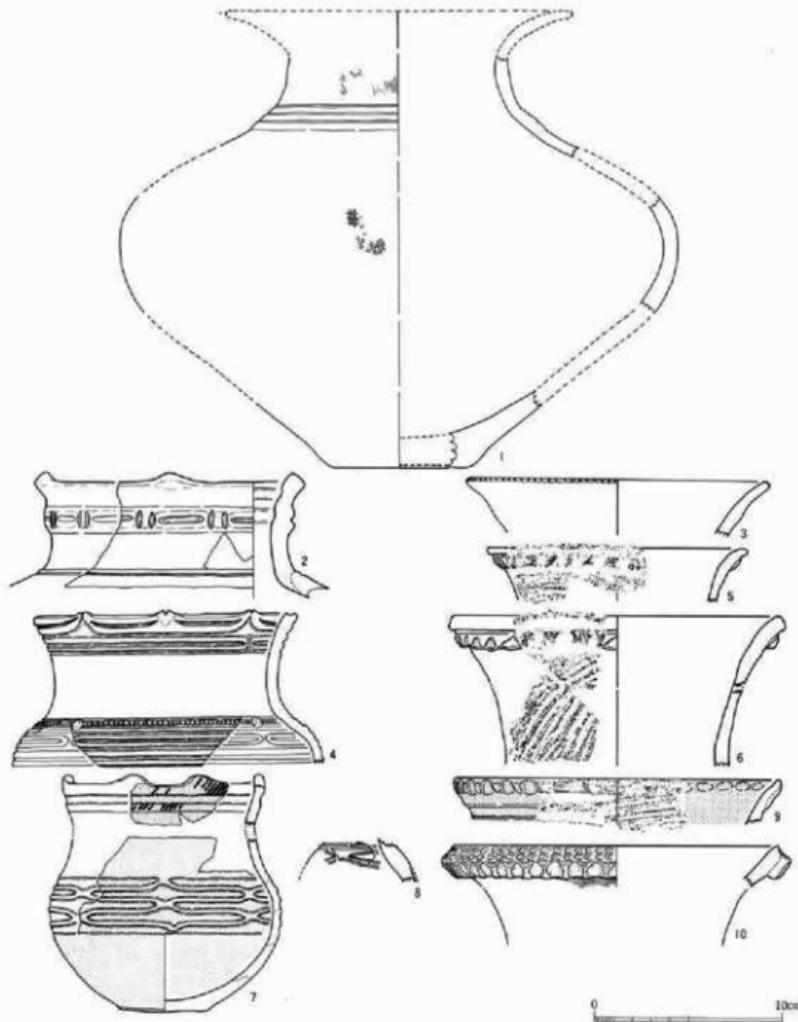
#### 壺形土器

壺A類(1・3) いわゆる遠賀川式系の土器で、2個体存在する。いずれも胎土中に大量の水晶粒を含んでいる。

1は体部が偏球形をなすもので、頭部と体部の境界が突帯状に肥厚し、その部分に3条の沈線が施されている。器面調整は外面が刷毛調整の後へラミガキで、刷毛目は部分的にしか残っていない。内面は丁寧になでられている。本土器の肩部には網代状の痕跡が残されており、蓋

のようなもので被覆されていた可能性が強い。本例は二次焼成を強く受けており、遺存状況はあまり良くない。3は口縁が大きく外反するもので、端部に刷毛状工具による刺突が施される。器面調整は内外面ナデである。

■■■類（5・6・9・10・23-32） 水神平式系の一群を本類とする。本類は口縁部の形状により3類に分類される。



第58図 A沢出土弥生土器 (型A~F類) 7・9は赤色塗装

B I 類 口縁部が外反もしくは大きく外反し、端部よりやや下った位置に刻目突帯が施されるもので、3個体存在する。いずれも黄褐色を呈し粗い砂粒を多量に含んでいる。器面調整は内面ナデで外面は貝殻による粗い条痕が施される。本類は口縁端部に押し引きを持つB I a類(23)と持たないB I b類(5・6)に細分される。

B II 類 一個体のみ確認されている。10は口縁部が大きく外反し、端部直下に指頭による刻目突帯が付加されたもので、広い端面には棒状工具による押し引きが施される。器面調整は内面ナデで、外面は貝殻による粗い条痕調整である。淡赤褐色を呈し粗い砂粒を多量に含んでいる。

B III 類 口縁部がゆるく外反し、その外面に1~3条の低い突帯が施されるもので、3個体確認されている。胎土はいずれも淡灰褐色を呈し、砂粒等の混入はB I・B II類に比べ少ない。

9は外面に2条以上突帯が付加されており、口縁部内外面には指頭圧痕が見られる。器面調整は外面ナデで内面には繊細な貝殻条痕が左→右の方向へ施されている。両面に赤色顔料が塗布されている。27は外面に3条の突帯が付加されたもので外面に赤色顔料が塗布されている。器面調整は内面及び口縁部外面がナデで、頭部外面には繊細な貝殻条痕が下→上の方向へ施されている。28~30は27と同一個体の体部破片と考えられる。24~26・31・32は小破片のため、詳細は不明だがB類に属するものと思われる。

壺C類(4・20~22) いわゆる大地型の広口壺で、5個体確認されている。本類は暗茶褐色ないし暗黄褐色を呈し、器面調整は一様に良好である。

4はSK39より検出され、口縁部がゆるやかに外反し最大径が胴部上位にあるもので、外面にはスヌが付着している。口縁部には1条の沈線及び6単位の小突起が施され、口縁部及び体部上半に工字文風のモチーフが描かれる。器面調整は内外面とも丁寧にヘラミガキされている。20~22は本類の頭部破片と思われる。

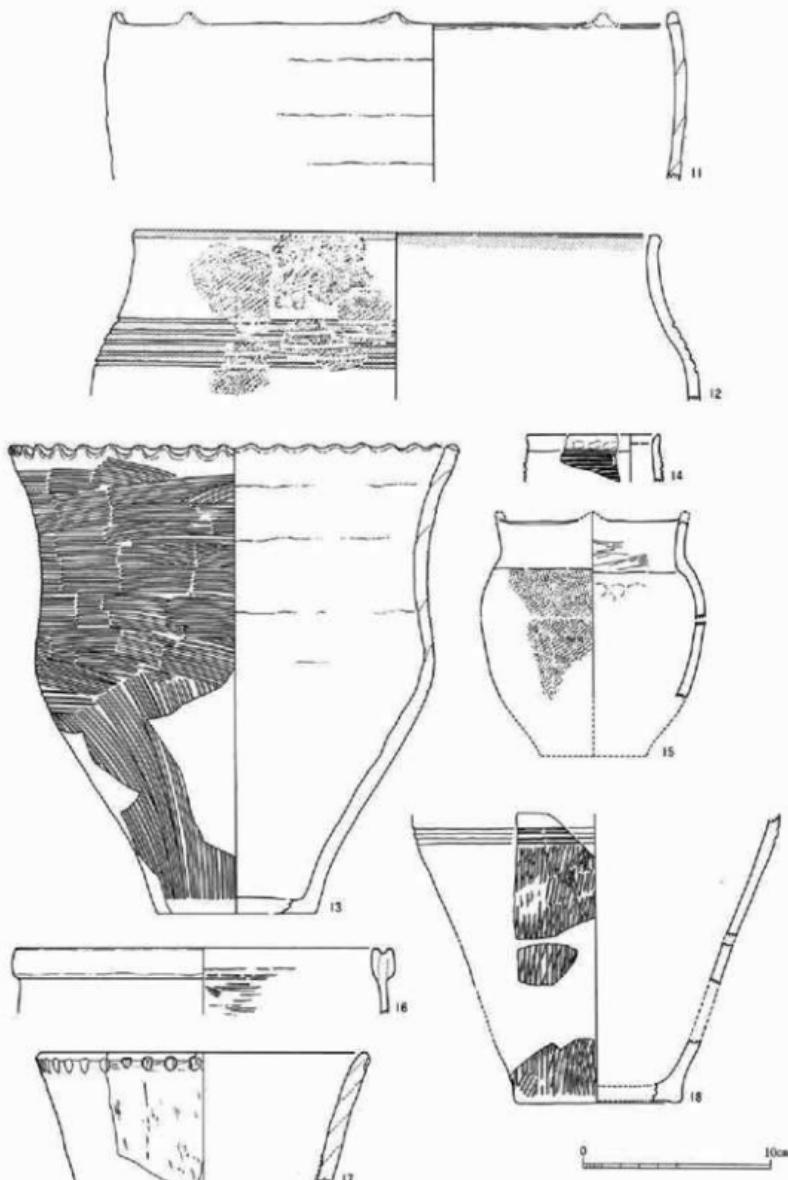
壺D類(2・19) 東北地方の亀ヶ岡式土器の系譜を引く一群で、2個体確認されている。本類は器形及び文様構成により2類に細分される。

D I 類 2は口縁部が直立気味に立ち上がる大型の壺で、肩が張る器形になるものと推定される。本例は大洞A式以降の壺形土器に系譜が求められるが、工字文風モチーフの形骸化及び各文様帶の省略が著しく、特に体部上半のそれは一条の突帯に置きかわってしまっている。器面調整は内外面ヘラミガキで、色調は黒色を呈する。

D II 類 19は小破片のため全形は不明であるが、瓜実型を呈する体部と、外反し短く立ち上がる口縁部をもつものと推定される。体部外面には、沈線で変形工字文が施される。器面調整は外面ヘラミガキで、内面は丁寧になでられている。色調は暗茶褐色を呈する。

壺E類(7) いわゆる浮線文土器の系譜を引く一群を本類とする。

7はA沢の土器集中時点より出土した。口縁部は直立気味に短く立ち上がり、太く長い頭部を有する。文様帶は口縁部及び体部上半に集約される。口縁部文様帶はLRの縦文を地文とし、端部の小突起及び太い一条の沈線によって構成され、体部上半の文様帶には浮線網状文が2段



第59図 A沢出土弥生土器（面A・B類、底A～C類）12は赤色塗彩

に渡って組み込まれている。器面調整は内外面へラミガキで、赤色顔料の塗布痕を持つ。色調は暗黄褐色を呈し、黒斑が認められる。

**壺F類（8）** いわゆるミニチュア土器で1個体のみ確認されている。

8はA沢の土器集中地点より出土した。小破片のため、全形は不明で、壺以外の器種になる可能性もある。外面には工字文風のモチーフが沈線によって描かれている。

**深鉢形土器**

**深鉢A類（17）** 口縁部が直線的に立ち上がる。いわゆるバケツ形を呈するもので、1個体確認されている。

17はSK39より出土した。口縁部外面にヘラによる刻目が施されるほか、装飾を持たない。器面調整は内外面共にヘラミガキが施されるが、外面は右下→左上の斜方向にヘラケズリがなされた後、研磨が加えられている。胎土及び色調は水神平式系土器のそれと酷似している。

**深鉢B類（11）** 口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、3個体確認されている。

11は口径33cmを測る大型の深鉢で、口縁端部に小突起が付加される以外装飾を持たない。器面調整は内外面ナデが施されるが、一部接合痕を残している。暗茶褐色を呈し、外面には炭化物が付着している。

**甌形土器**

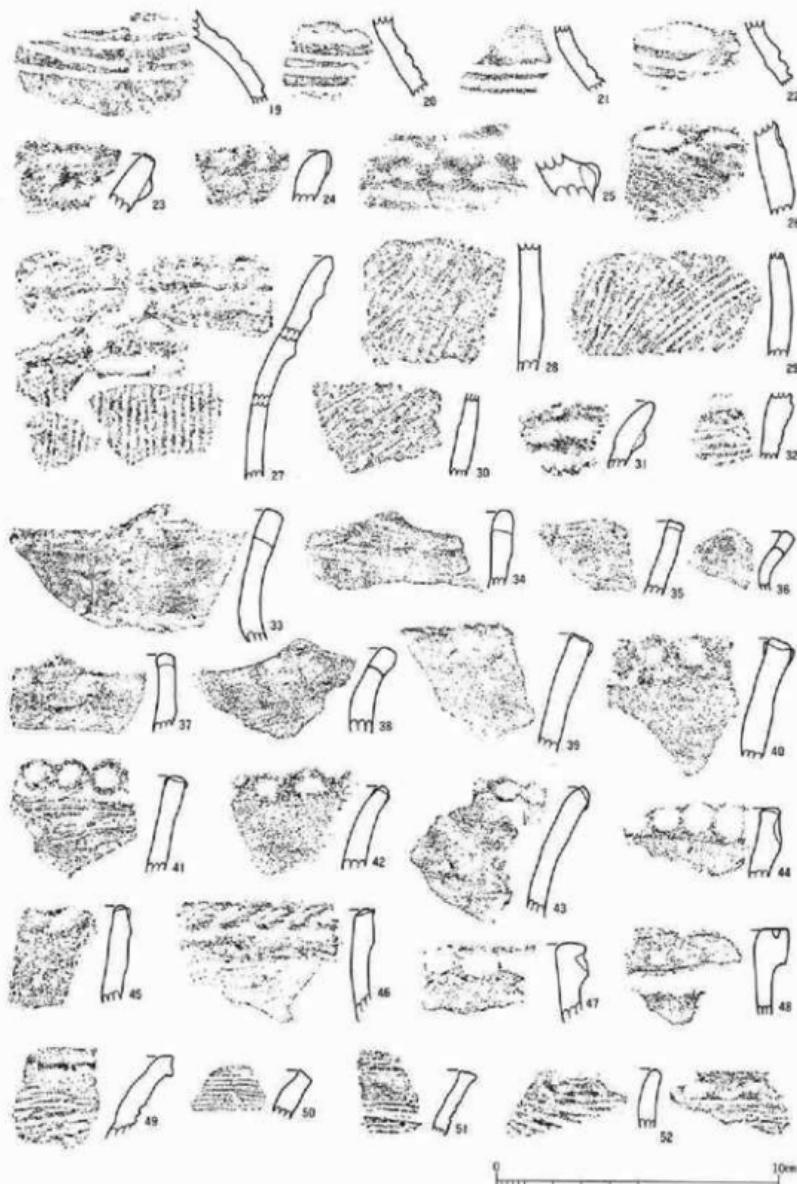
**甌A類（12）** 口縁部が直立気味に短く立ち上がり、肩が張る器形をとるもので、1個体確認されている。

12は口径30cmを測る大型の甌で、口縁端部外面が面取りされている。口縁部及び体部上半に狭い文様帯を持ち、その部分にのみ赤色顔料が塗布されている。体部文様帯は5条のヘラ描き平行沈線及び赤色塗彩によって構成されるが、口縁部文様帯は帶状の赤色塗彩だけで表現されている。地文にLRの繩文を持つ。淡赤褐色を呈し、外面には炭化物が付着している。

**甌B類（13・15・18・33・43・49～52）** 口縁部が外反し、口頸部と体部の境界が明瞭にくびれるもので、口縁端部には山形の小突起やレンズ状押圧が多用される。本類は器面調整の手法により2類に細分される。

**甌B I類** 外面の調整に見あるいは棒状工具を用い、全面に条痕を施すものを本類とする。3個体確認されている。13はA沢の土器集中地点より検出されたもので、口頸部と体部で条痕の方向が異なり、各部位の区分をより明確にしている。条痕の方向は口頸部が左→右で体部が下→上である。内面の調整は横方向のナデで部分的に接合痕を残す。胎土は水神平式系土器のそれに近く、多量の砂粒が混入されている。本例は底部に著しい二次焼成を受けており、口頸部外面及び体部内面には炭化物が付着している。49～52も本類に属するものと思われるが、小破片のため、詳細は不明である。49・51・52はSK39より出土した。

**甌B II類** 口頸部が広い無文帯となるものを本類とする。5個体確認されている。15は体部がやや胴張りとなるもので、口縁端部に小突起を持ち、体部外面に無筋しの繩文が施されてい



第60図 A 沢出土弥生土器 (復B-D類、復B類)

る。内面の調整は棒状工具による条痕調整の後粗くなられており、部分的に条痕が観察される。色調や胎土は甕A類と近似している。18は体部が張りを持たず直線的に立ち上がるもので、口頭部と体部の境界に二条の沈線文帯を持ち、体部外面には棒状工具による縱方向の条痕が施される。内面はヘラミガキされるが、外面の調整は不充分である。33~43も口頭部の形状から本類あるいは深鉢B類に属するものと思われる。これらと同一個体と考えられる体部破片には、外面無文のものと縱方向に細密条痕が施されるものが存在する。33は胎土中に水晶粒を含んでいる。

**甕C類 (14)** 口頭部のくびれが小さく筒状の器形をとるもので、体部に幅広い文様帯を有する。1個体確認されている。14は口径7.2cmを測る小型品で、体部外面に浮線文的なモチーフが沈線によって描かれている。器面調整は内外面ナデで、口頭部外面に指頭圧痕を残す。

16及び44~48は甕あるいは深鉢の口縁部破片と考えられるが、破片が小さく詳細は不明である。口縁部にレンズ状押圧が加えられるもの(45)の他に端部が肥厚し端面に刷毛状工具による刺突が加えられるもの(46)沈線が一条加えられるもの(16・48)レンズ状押圧が外面に施されるもの(44・47)がある。

#### 高环形土器

**高环A類 (53~57)** 高环形土器は6個体以上出土しており、器形の判別できるものはいずれも体部から口縁部が直線的に外反し、端部の大小の突起等各文様帯が著しく発達している。本類は文様帯のあり方から2類に分類できる。

**高环A I類** 変形工字文が施される文様帯が体部上半に集約されるものを本類とする。53は口縁端部に大小の突起を持ち、体部上半に曲線的な変形工字文が沈線によって描かれるもので、体部下半にはLRの繩文が施されている。器面調整は内外面丁寧なヘラミガキで、赤色顔料の塗布痕を持つ。55は本類の脚台部と考えられる。RLの繩文を地文に持ち、上・下端にそれぞれ3条・2条の界線が描かれている。

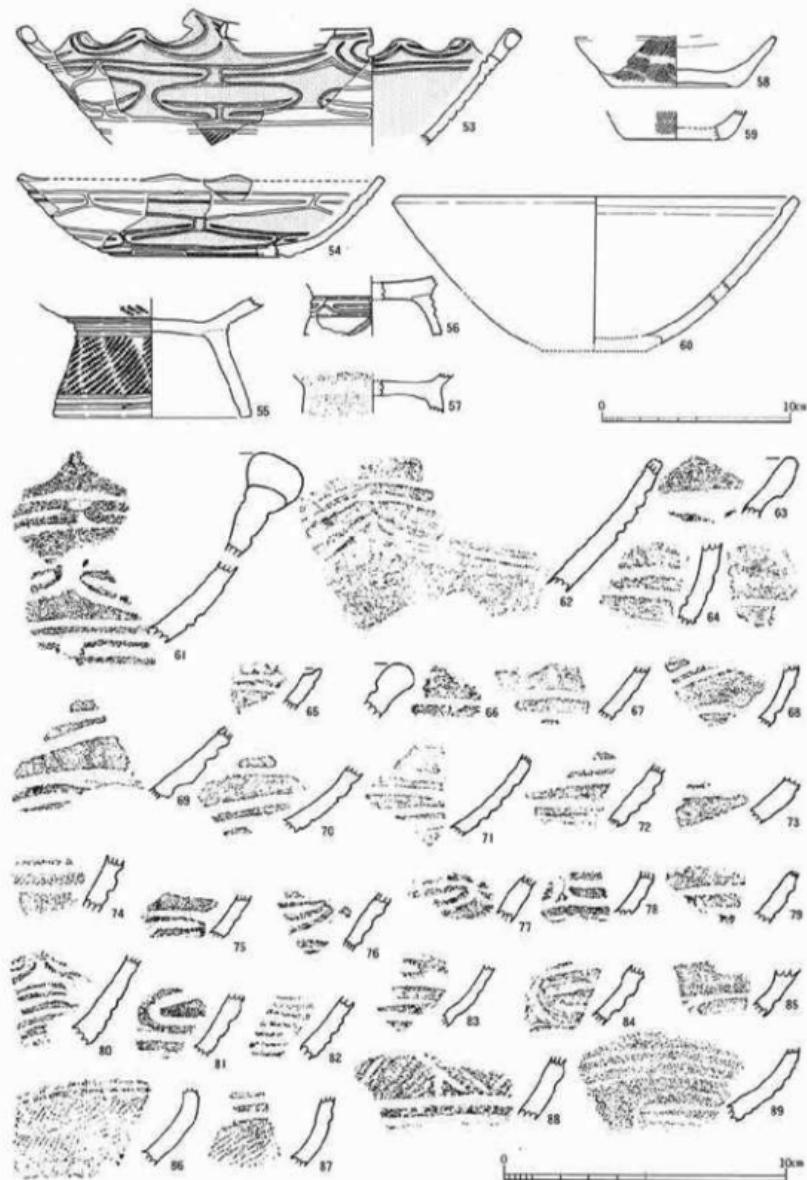
**高环A II類** 主文様帯が体部上半に集約されず、外面全体に描かれるものを本類とする。54は口縁の遺存部が少なく詳細は不明であるが、大突起を持つ可能性が強い。体部外面には平行及び斜交する沈線の組み合わせで、直線的な変形工字文が描かれている。器面調整は内外面丁寧なヘラミガキで、赤色顔料の塗布痕を持つ。56・57は高环の脚台部と考えられ、56の外面には変形工字文、57には斜回転のRL繩文がそれぞれ施されている。

#### 浅鉢形土器

**浅鉢A類 (58・59)** 全形をうかがえる資料は無いが、有文の浅鉢形土器を本類とする。2個体以上存在する。胎土や色調は壺形土器D類・高环形土器のそれに近似している。

58は底部が上げ底風となるもので、体部上半に文様帯を持ち、下半にはLRの繩文が施されている。内面の調整は丁寧なヘラミガキである。59は、本類の底部破片と考えられる。

**浅鉢B類 (60)** 無文の浅鉢を本類とする。1個体確認されている。



第61図 A 沢出土弥生土器（高环A期、浅林A・B期）53・54は赤色塗彩

60は底部から口縁部へ直線的に外反するもので、端部が肥厚し内面に段を持つ。器面調整は内外面丁寧なヘラミカキで、暗茶褐色を呈する。

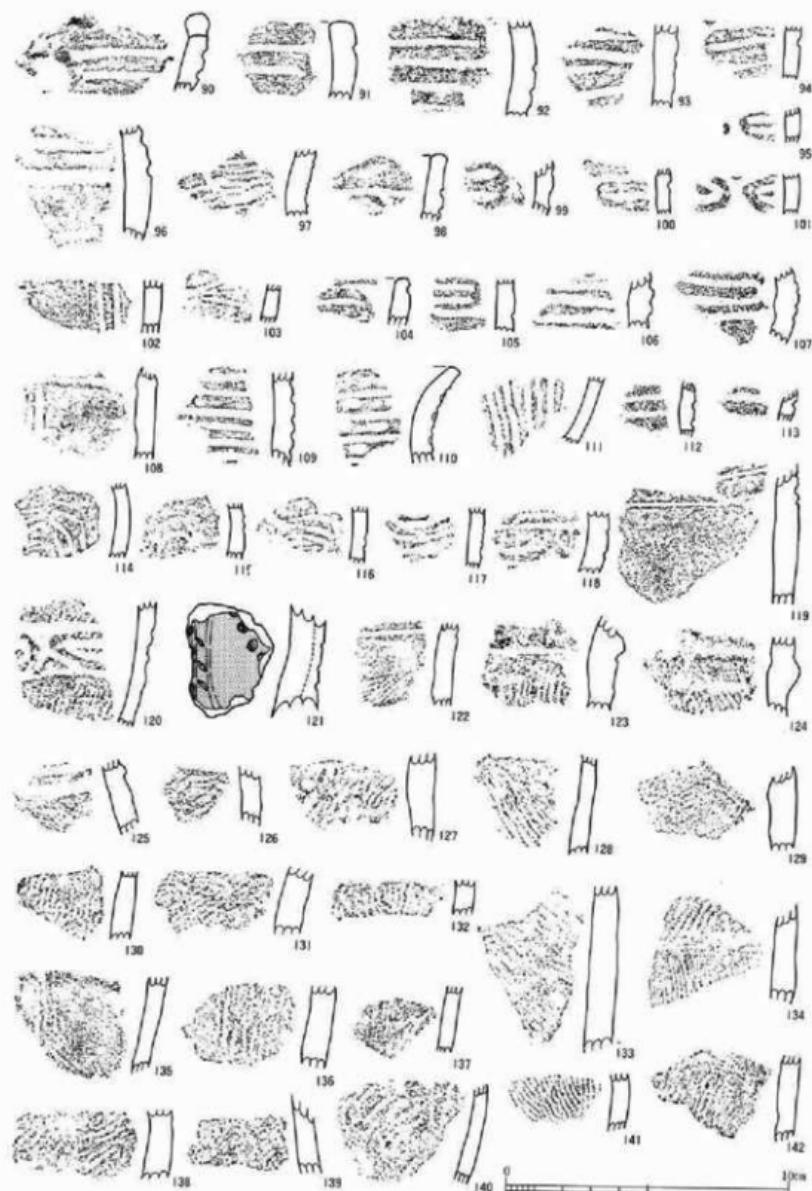
61・89は高环あるいは浅鉢形土器の口縁部・体部破片と考えられる。61・63・65・89は沈線及び器面削除によって工字文風のモチーフが描かれるものである。64・67・73は54のような構図をとるものと考えられ、70は赤色顔料の塗布痕を残す。63・75・81・83・85・89は工字文の結束部分と考えられる。63はSK39より出土したもので、口縁部が緩やかな波状をなし沈線によって連弧文状のモチーフが描かれている。86・87は地文に繊細なLR繩文を持ち、口頭部と体部の境界に沈線が施されるもので、高环A II類あるいは浅鉢A類の体部破片と考えられる。88も地文にLR繩文を持ち、沈線によって鋸歯状のモチーフが描かれている。

#### その他の土器

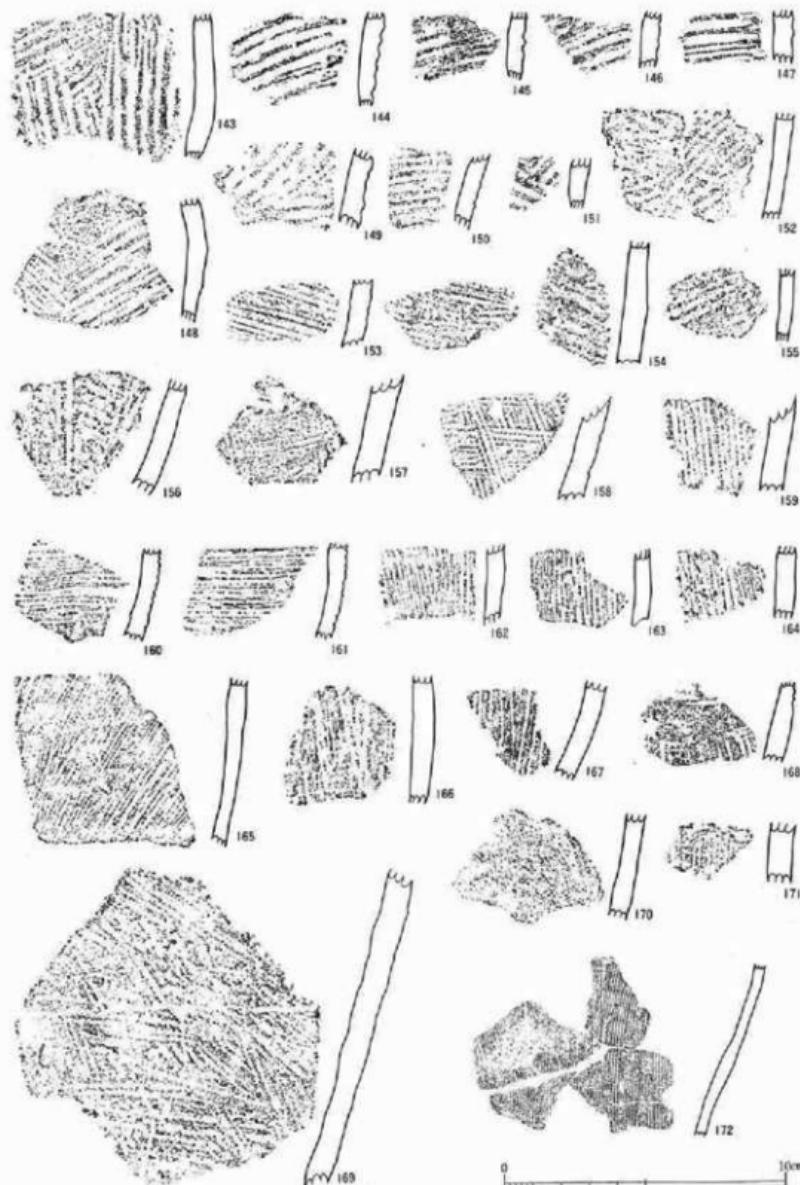
第62・63図は器種不明のもので、以下では文様によって分類しその概要を述べる。

90・101・103・107・109・120・122は沈線及び器面削除によって工字文風のモチーフが描かれるもので90・95・97・101・104・107は、その結束部分と考えられる。120・122・125は地文に繩文が施されるもので、原体は120がLR、122・125がそれ前々段反撫りのLRr、RLiである。90・109は赤色顔料が塗布されるもので、前者は胎土中に粗い水晶粒を含んでいる。104・105及び94・100はそれぞれ同一個体の可能性がある。102・108は縱走する沈線が施されるもので、108は内面に明瞭な接合痕を残している。110・111は同一個体で111はSK39より出土した。口縁部では横方向の、底部付近では縱方向の平行沈線及び列点文が描かれる。112・113も同一個体片で、沈線で区画された内側に細かな刺突文で充填される。114・117も同一個体片で、沈線によって崩れた溝文が描かれる。118は沈線によって工字文風のモチーフを描いた後、その上に格子目状に沈線が加えられる。119は平行沈線間に細かな列点が加えられるものである。121は縱方向に貼り付け突帯が付加された後、円形刺突が突帯に斜行及びそれに沿う位置に施されるもので、内外面に赤色顔料が塗布されている。123・124は横方向に貼り付け突帯が施されるもので、地文にそれぞれ前々段反撫りのRLi、LRrの繩文を持つ。126・134・136・142は繩文のみが施されるもので、原体は126・127・129・131がLRr、128・132・136がRLiの前々段反撫りで、133・141がそれぞれL・R、134・135・140・142がLR、139がRLである。120・140はSK39、141はA沢の土器集中地点より出土した。

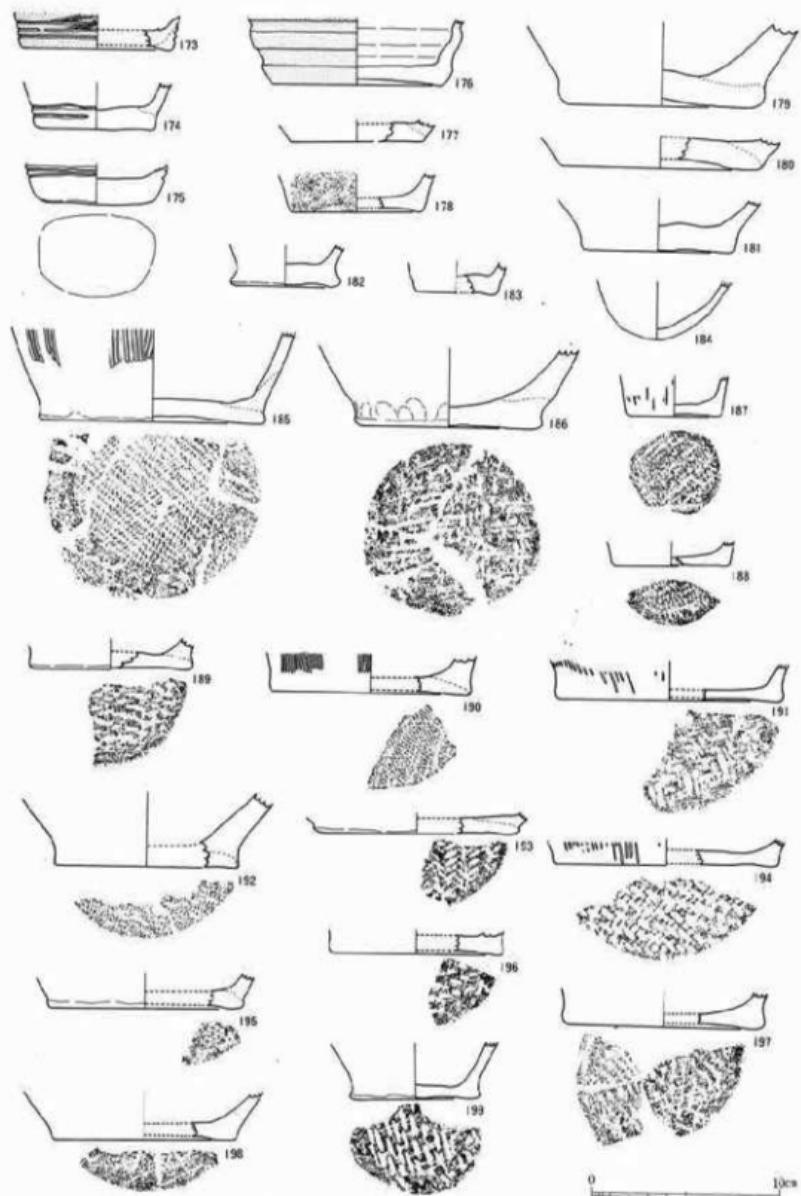
第63図(図版51)は条痕が施されるものである。143・156・169は粗い貝殻条痕が施されるもので、148・151は矢羽状の構図をとる。143・151・169は壺B I～B II類、152・156は壺B III類の胎土と非常に近似しており、前者は粗い砂粒を多量に含んでいる。157・159・171・172はいわゆる細密条痕が施されるもので、地文原体は貝殻の背と考えられる。157・171は同一個体で、条痕施文後にRLの結び目繩文が施されている。172は4～5本を単位とする細密条痕が、やや間隔を置いて帯状に施されるものである。160・166・168・170は細く深い条痕が施されているが、地文原体は不明である。167は半截竹管によって2本同時に施文されている。144・167はA沢の



第62図 A出土弥生土器(その他の121は赤色鉛鉢)



第63図 A沢出土弥生土器（その1）172のみ1/4、他は1/2



第64図 A坑出土弥生土器(底部) 173・176は赤色地紋

土器集中地点より出土した。

#### 底部

第64図(図版54)は底部破片である。173~184は底面に軸物の圧痕を持たないもので、173~175は底部と体部の境界に2~3条の沈線が施される。173は外面にLの縦文を持ち、赤色顔料が塗布されるもので、三条の沈線は工字文風のモチーフをとる。174はSK39より出土した。175は底部の平面形が方形をなすもので、異形土器の底部と考えられる。178は外面に繊細なLRの縦文が施される。176は器壁を屈曲させる事によって凹線状の効果を上げているもので、内面にもそれによる凹凸が観察される。器面調整は内外面丁寧なヘラミガキで、外面には赤色顔料が塗布されている。184は底部が丸底をなすもので、器面調整は外面ヘラミガキで内面は粗くなられており、185~199は底面に軸物の圧痕を持つもので、198が木葉痕、その他は網代状圧痕が観察される。185~190は外面に細密条痕、191~194は細く深い条痕が施される。185は集石46より出土した。187は外面に縱方向のヘラケズリの痕跡を残している。

#### 土製品

**球形土製品** (200~203) 4点出土したが、全て欠損している。形状は200~202が偏球形、203が円筒形を呈し、器面は入念に研磨されている。いずれも中心部が焼成前に穿孔されており、200・202・203は1孔、201は重複する2孔を有する。

**土偶** (204) 1点出土したが、風化が著しく器面調整は不明である。顔面あるいは肩の部分と考えられ、右上端が焼成前に穿孔されている。文様は正裏面に沈線によって表現されており、さらに赤色塗彩がなされている。胎土中には多量の砂粒を含み、色調や胎土の状況は壺B I~B II類とした条痕文系土器のそれに非常に近似している。

**不明土製品** (205~207) 性格不明の土製品で、5点出土している。205は偏平な精円形を呈し、右側縁に棒状工具による沈線が巡る。正裏面には指頭痕を残している。胎土中にはほとんど砂粒を含まず、色調は赤褐色を呈し、黒斑が観察される。206は棒状を呈し、全面には指頭痕が観察される。明黄褐色を呈し胎土中に砂粒を多く含む。207は酒杯形を呈し、内外面に指頭痕が観察される。暗黄褐色を呈し、胎土中に粗い砂粒を含む。同種のものが他に2点出土している。

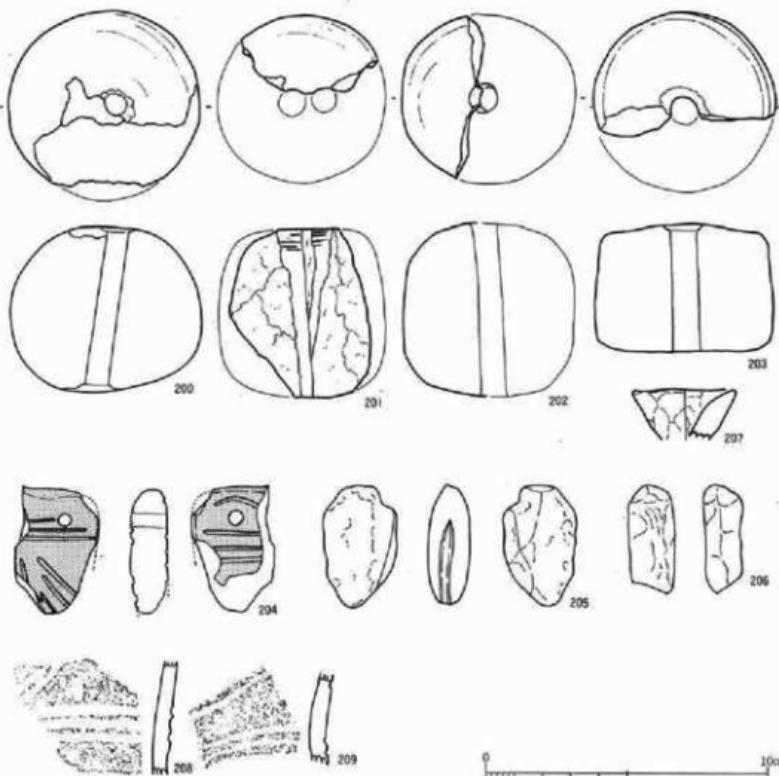
**異形土器** (208・209) 208・209は器面のカーブや内外面の調整から土偶形容器あるいはヒト形土器等異形土器の体部破片と考えられる。文様帶はいずれも水平及び斜行する沈線によって構成されており、村尻遺跡出土のヒト形土器と共通したモチーフをとる。208の器面調整は外面が丁寧なヘラミガキで、内面は粗くなられ部分的に未調整部分を残している。暗黄褐色を呈し胎土中に粗い水晶粒を含む。209はかなりローリングを受けており器面調整は不明である。淡黄褐色を呈し、胎土中に多量の砂粒を含む。

#### 石器

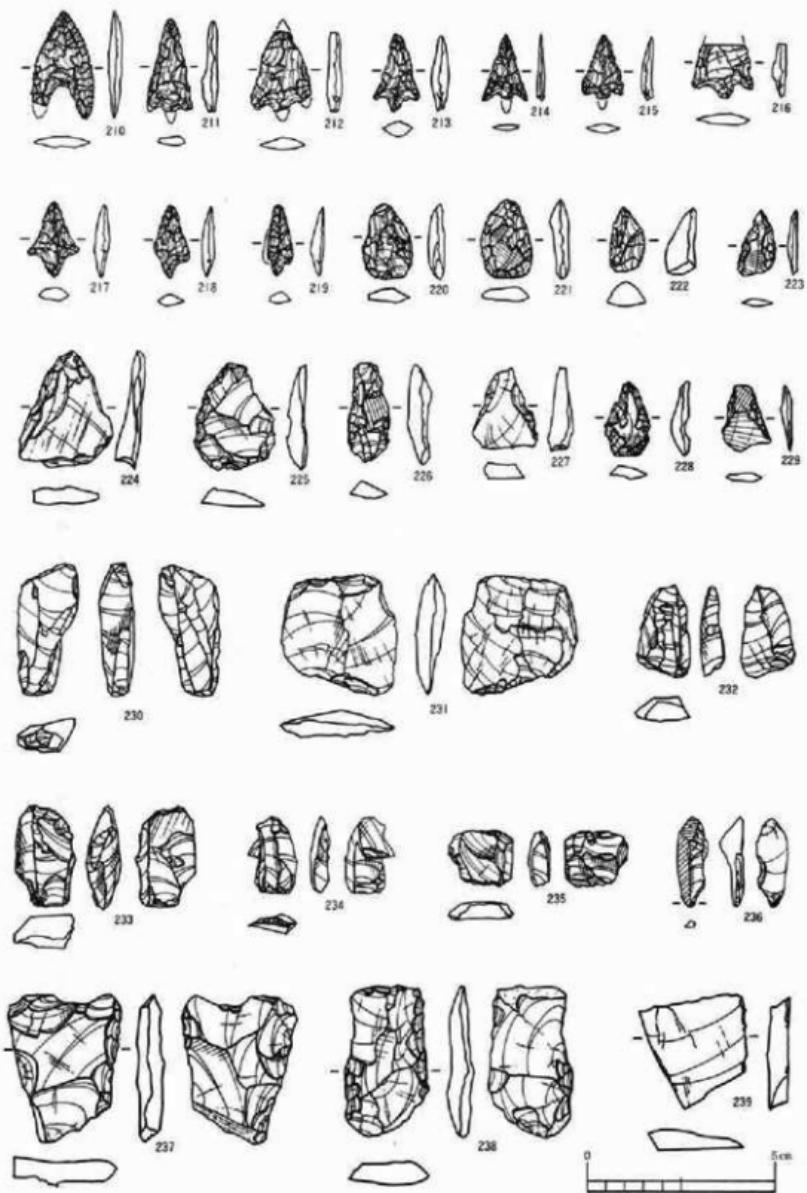
A沢0~II b層出土の石器は総数186点有り、伴出した土器が弥生時代前期以外全く他時期のも

のを含まない事から、これらの石器群も大半が該期に位置づけられるものと思われる。以下器種ごとにその概要を述べる。

**石鏸 (210~219)** 10点出土したが、石材としては黒曜石及び頁岩が多用されている。210は基部の抉りが深い凹基無柄鎌で、側縁部が鋸歯状をなし基部左端を欠損する。211~216は凹基有柄鎌でいわゆる逆刺しが発達している。欠損部位は柄部が4例(211・212・214・215)で最も多く、以下逆刺し2例(211・212)、先端2例(212・216)である。217~219は平基有柄鎌であるが、柄部左側の抉りが不明瞭な218は、平面形が左右不对称となっている。220~229は剥片の一端あるいは周縁部に連続した調整加工が施されるもので、形状及び石材の共通性から石鎌の未成品と考えられる。総数で18点出土し、素材の形状を大きく残すもの(224・225・227)から、柄部が作り出される直前(220)までの各段階の資料がある。221・225・226・229は縦長剥片を、223・224・227・228は横長剥片を素材としている。



第65図 A沢出土土製品・異形土器・土偶 204は赤色染彩



第66図 A沢出土石器(0層~II5層)

**石鎌** (236) 1点出土した。236は正面に大きく原石面を残す綫長剝片を素材としており、調整加工は裏面の先端部のみ施される。錐部の断面形は菱形で使用痕と思われる後の摩耗が観察される。

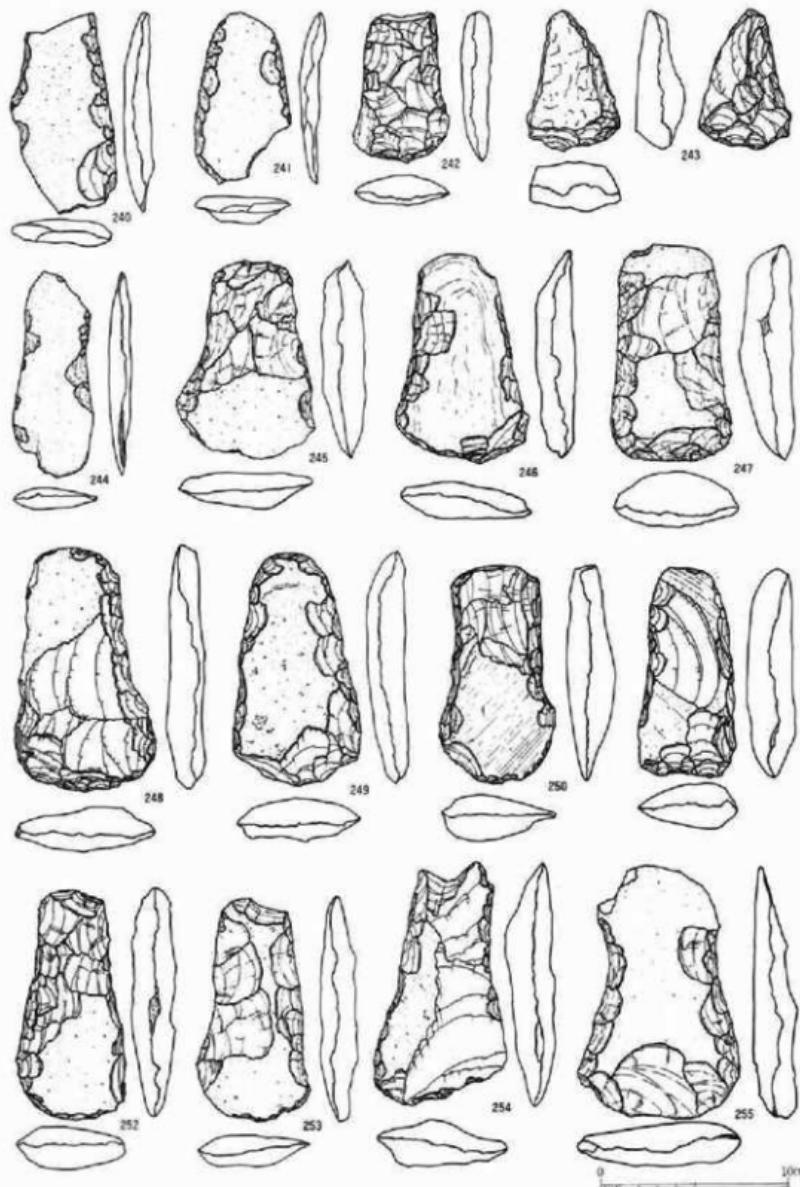
**ピエスエスキュー** (230~235・237・238) 8点出土した。石材としては黒曜石が多用されるが、安山岩、頁岩製のものも存在する。平面形は四辺形を基本とし、相対する2辺あるいは4辺につぶれや階段上状の剥離が観察される。230・231・233は相対する2辺に観察されるもので、いずれも側縁部に剪断面が形成されている。230は火を受けた痕跡を持つ。237・238は4辺全てに観察されるものである。235も同じタイプと考えられるが、剪断面の形成によって1側縁のつぶれ部を欠失している。234は破損したピエスエスキューの一辺に二次加工が施されるもので、裏面から連続した急角度の調整がなされている。232は両極に剥離痕を持つが、側縁のつぶれが全く見られないもので、ピエスエスキューの範中からはずれるものと考えられる。本例は火を受けた痕跡を持つ。

**打製石斧** (240~259) 45点出土した。石材は細粒砂岩が最も多く、流紋岩、玢岩、蛇紋岩等も使用されている。素材はいずれも剝片を使用しており、表裏に原石面及び主要剥離面を残す場合が多い。257はいわゆる短冊形石斧で、横長剝片を素材としている。調整加工は頭部及び側縁部に集中し、後者には著しい敲打痕が観察される。257以外は全て刀部幅が頭部幅をしのぎ、いわゆる撥形石斧の範中に包括されるものと考えられる。これらは側縁部の形状からさらに二分される。241・249は側縁部がくびれを持たず直線的なもので、綫長剝片を素材としている。ともに側面形は、やや反った形状をとる。240・242~248・250~256・258・259は、側縁部にくびれを持つもので、248・254が綫長剝片を素材とする以外、全て横長剝片が用いられている。調整加工は側縁部に集中し、くびれ部を中心に著しい敲打痕を持つ。244・248・255・258の刃部には、使用によるものと考えられる摩耗が観察される。

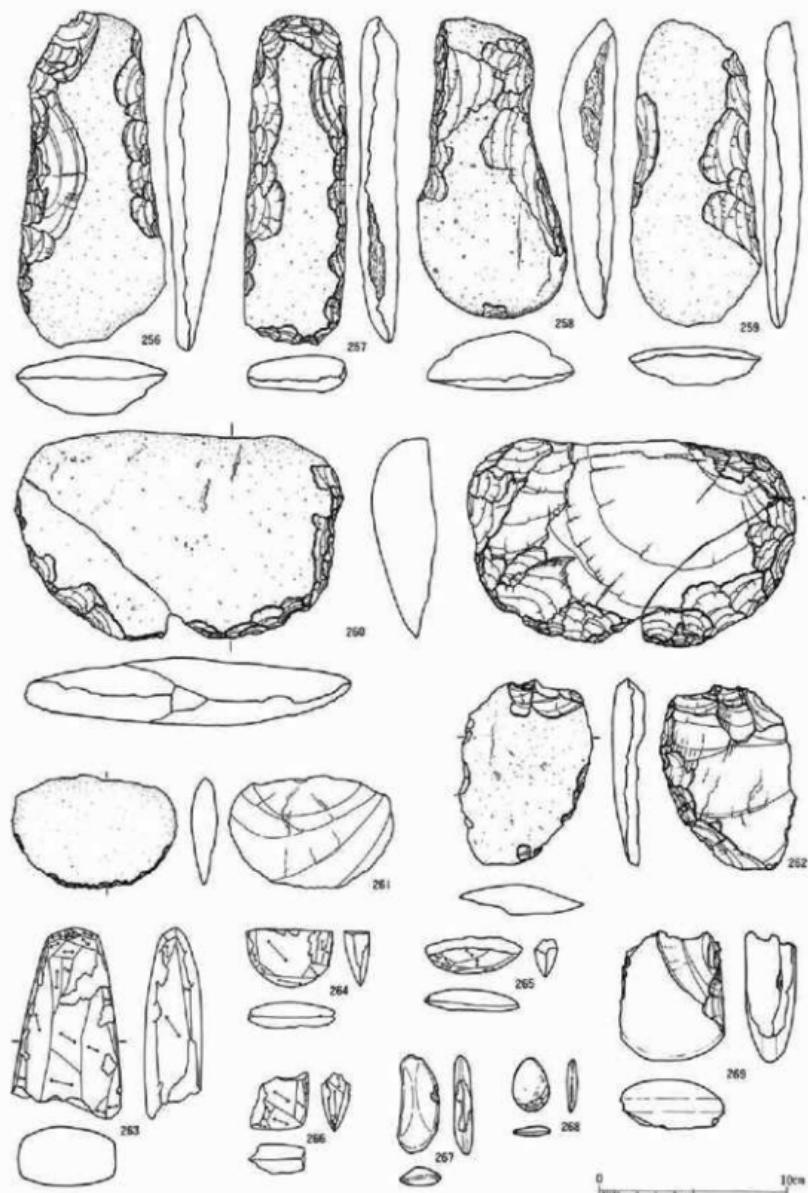
上記打製石斧の刃部は、素材の縁辺部をそのまま利用するもの(240・244・245・256・259)と素材の形状を変えない程度に調整加工が施されるもの(241・250・252~254・257・258)、深い調整により素材の形状が大きく損なわれるもの(242・243・246~249・251・255)の3者が存在する。これらの差異は、素材の形状及び折損による再加工等に起因するものと考えられる。

**磨製石斧** (263~269) 6点出土したが、いずれも定角式石斧の欠損品である。石材は全て蛇紋岩が使用されている。263は頭部破片で、研磨以前の剥離面を残している。264~266は刃部破片で、刃部が弧状をなすもの(264・265)と直線的なもの(266)がある。267~269は磨製石斧の未成品と考えられ、総数で6点出土した。いずれも礫を素材としており、周縁を剥離、敲打で形状を整えた後研磨が加えられるもの(268・269)と、整形加工が研磨のみによって行われるもの(267)が存在する。この他、磨製石斧あるいは玉類の素材と考えられる蛇紋岩の礫が12点出土している。

**削器** (260~262) 4点出土した。いずれも、いわゆる貝殻状剝片を素材とし、その縁辺部



第67図 Aji出土石器（Ⅰ層-Ⅱb層）



第68図 A沢出土石器（Ⅰ層～Ⅱb層）

に連続的な調整加工が施されている。260・261は素材が横長のものである。260は長さ17.4cmを測る大型品で、周縁の約5%に両面から刃付けされている。261は主に表面からの調整によって周縁の約15%に刃付けされており、刃部は鋸歯状をなす。262は素材が縦長のもので、両面からの調整によって打点及びバルブが除去されている。右側縁に刃付けされるが、刃部の調整は主に正面からである。

**使用痕のある剝片** (239) 239は上下端を欠損する縦長剝片の両側縁に微細な刃こぼれ及び使用痕と思われる摩耗が観察されるものである。頁岩を石材とする。

**凹石** (270~276) 13点出土した。石材は安山岩が多用され、流紋岩や蛇紋岩等も微量用いられている。また、第44図a以外は全て円形あるいは梢円形の礫をそのまま利用している。第44図aは集石46の部材に使用されていたもので、全長18.1cmを測り本器種の中で最も大型である。破碎した礫を素材とし、粗い剝離によって縁辺の形状を整えている。正裏面の中央部にそれぞれ一つのくぼみを持つ他、その周縁部に無数の敲打痕が観察される。270~272・276は周縁部及び正裏面に敲打痕を持つもので、271の側縁及び272の正裏面は単独あるいは複合した深いくぼみとなっている。273~275は正裏面に摩耗痕が観察され磨石としての機能も合わせ持つものである。敲打痕は正裏面及び周縁に見られ、特に274・275の正裏面は単独の深いくぼみとなっている。

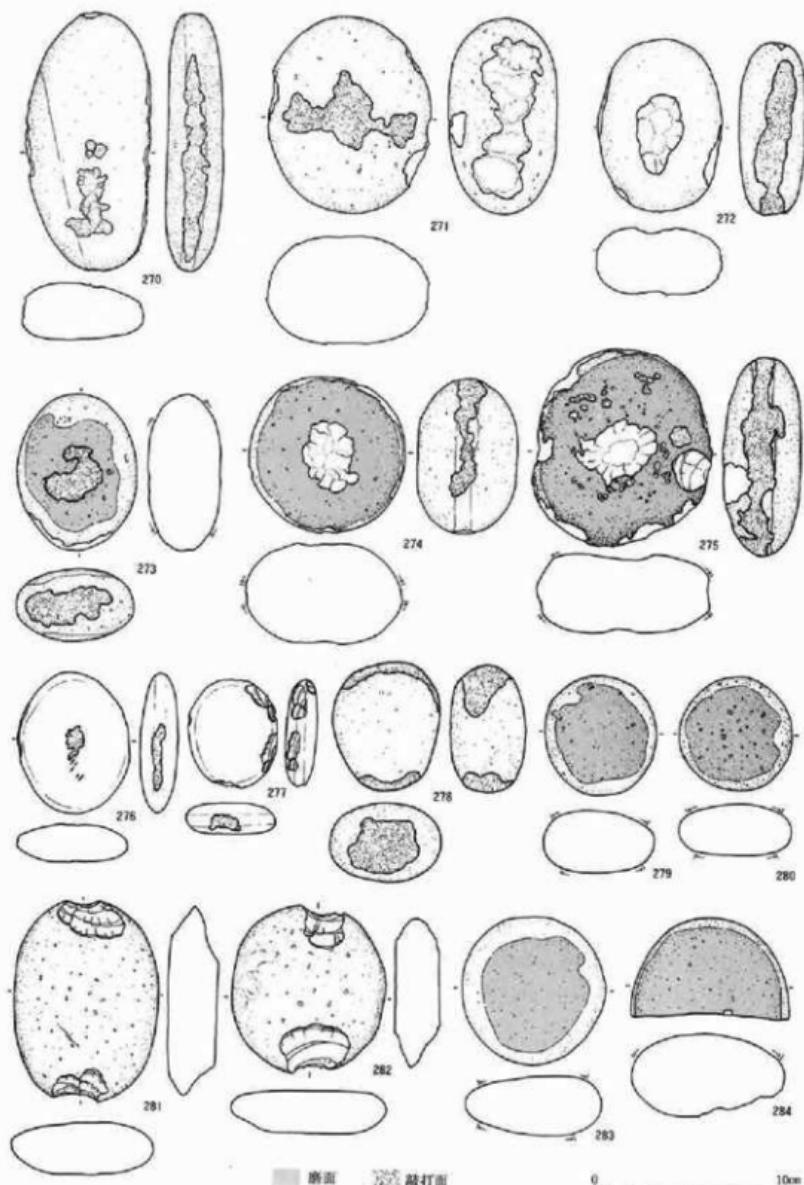
**敲石** (277・278) 2点出土したが、いずれも自然理をそのまま使用している。277は周縁に、278は上下両端に敲打痕を持ち、特に278は著しいつぶれが観察される。

**磨石** (279・280・283・284) 4点出土した。いずれも偏平な円形の礫をそのまま使用しており、正裏面に摩耗が観察される。15は火を受けており裏面に火ハゼによる剥落が見られる。

**礫石錐** (281・282) 2点出土した。いずれも偏平な円形あるいは梢円形の礫を素材とし、正裏面からの剝離によって両端に抉り部が作り出されている。

**砥石** (299~324) 33点出土した。石材は全て細粒砂岩が使用されており、砥面の形状から大きく3類に分類される。

**A類** (300~302・305・306) 砥面に溝を有するもので、筋砥石あるいは有溝砥石と呼称されてきた一群を本類とする。300は礫を素材とし、両面からの粗い剝離で周縁の形状を整えている。正面には2条の溝を持ち、断面形は左がV字形、右がU字形を呈する。裏面は部分的に平坦な砥面が観察され、平砥石としても使用されたものと考えられる。301・302は正面に原石面を持つ大形の剝片を素材としている。301は両面からの粗い剝離で周縁部の形状を整えており、正面に1条の溝を持つ。溝の断面形は幅広のU字形を呈する。302は左側縁を4回にわたって粗削りした後、裏面を中心に調整加工が加えられるもので、正面に一条の溝を持つ。溝の断面形は幅広のV字形を呈する。305・306は偏平な礫をそのまま利用するものである。いずれも正面に1条の溝を持ち、その断面形は浅いU字形を呈する。正裏面には平坦な砥面が観察され、平砥石としても使用されており、22の正面には線条痕が観察される。共に砥石として使用された



第69図 A沢出土石器 (6層~IIb層)

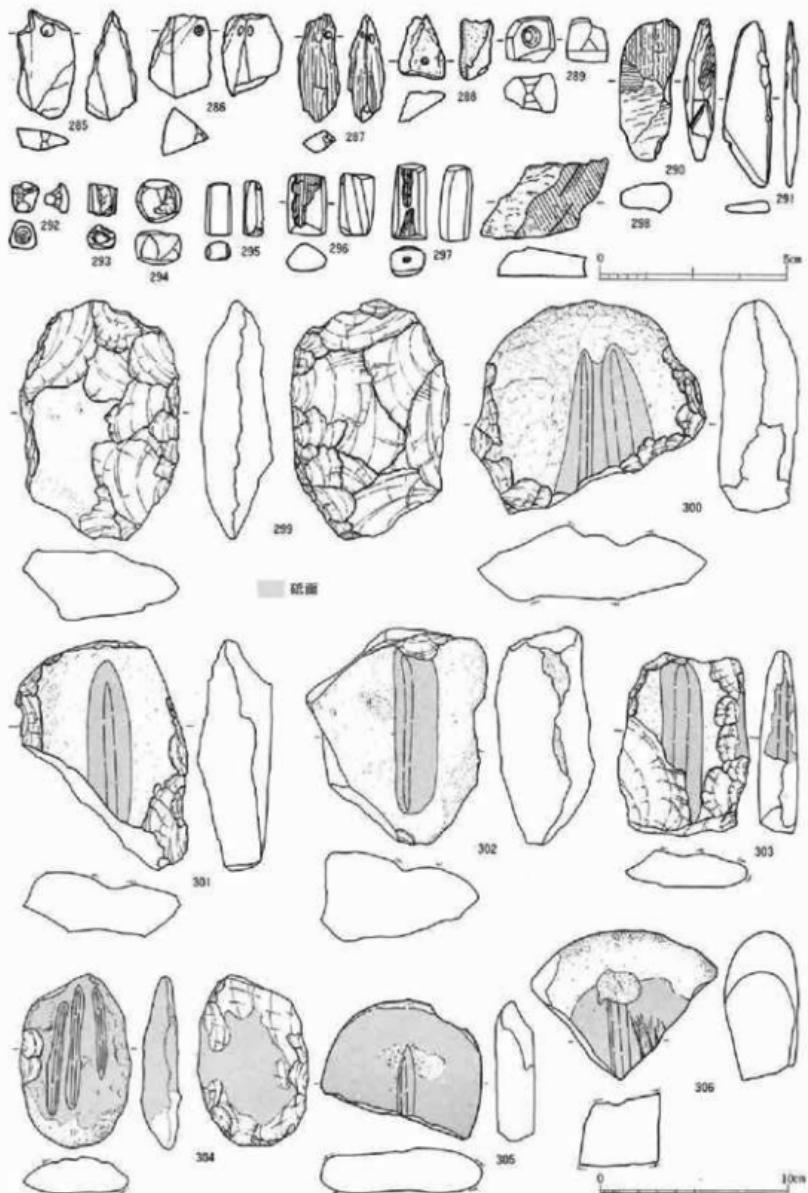
後、舷石に転用されており、正裏面及び周縁部に敲打痕が観察される。

**B類** (303・304・308~312) 側縁部を砥面とするもので、いわゆる内磨き砥石と呼称されてきたものを本類とする。全て剥片を素材としている。

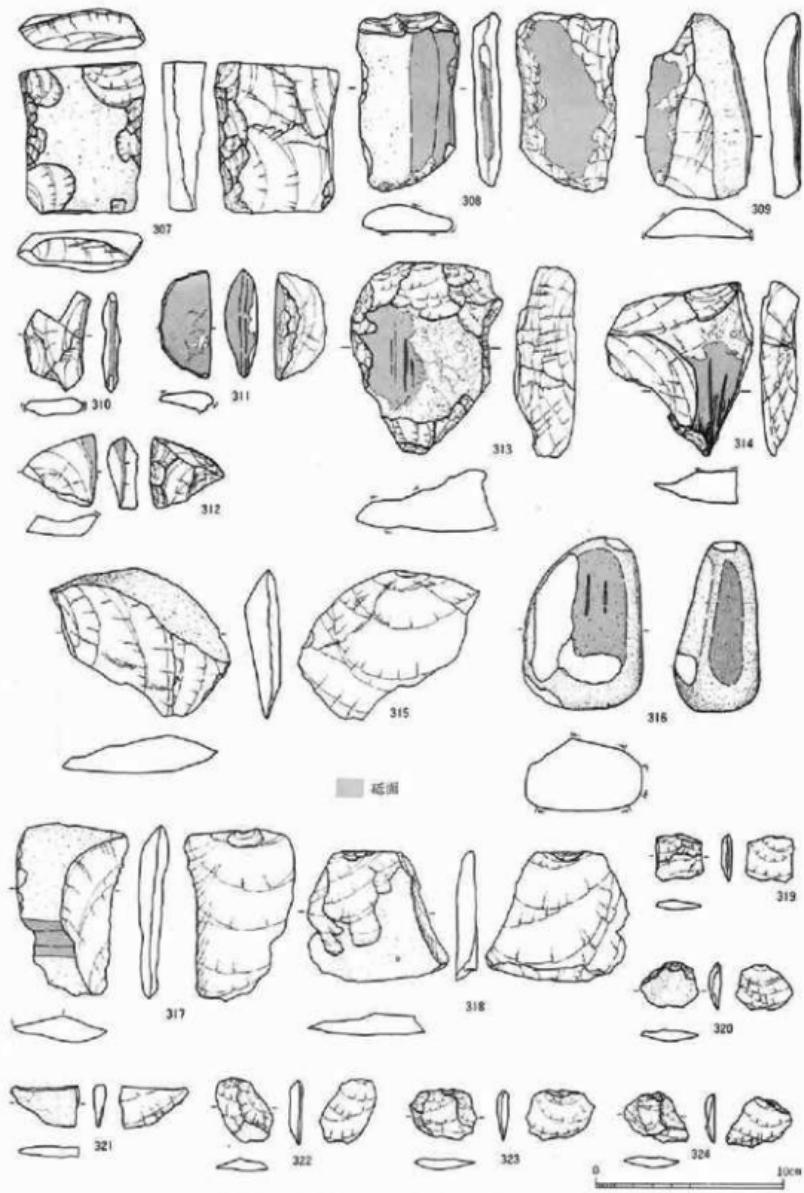
303は筋砥石の破損品を転用しており、右側縁に幅広いU形の砥面を持つ。正裏面には少なくとも次のような3時期の剥離面が観察される。①裏面に広く残るもので、原石から剥離された際の主要剥離面と考えられる。②正裏面の右側縁に観察される砥面形成以前の剥離であるが、筋砥石の段階の側縁調整が、内磨き砥石に転用された際のそれとは明らかでない。③砥面形成以後の剥離で、右側縁の一部と左側縁に両面から施される。砥面再生に関わる調整と考えられる。本例は砥面が形成された段階で火を受けている。304及び308は正面に原石面を持つ横長剥片を素材とし、主に正面からの調整加工で周縁の形状を整えている。304は梢円形を呈し、砥面は右側縁及び正裏面に見られる。右側縁のそれは断面U形を呈する。正裏面には平坦な砥面が、また正面には断面V字形を呈する3条の溝が有り、いわゆる筋砥石及び平砥石としての機能も合わせ持つものと考えられる。308は長方形を呈し、砥面は右側縁及び正裏面に見られる。右側縁のそれは断面U形を呈する。正裏面には平坦な砥面を持ち、平砥石としても使用されている。309は正面に一部原石面を残す横長剥片をそのまま利用するもので、両側縁に狭いU形の砥面を持つ。310は横長剥片を素材としている。正面には4枚の剥離面が観察されるが、側縁調整に関わるものかどうかは不明である。両側縁にU形の砥面を持つ。312は右から左へ抜ける力で欠損している。右側縁に正面からの砥面再生が行われており、正面に古い砥面を残している。311は砥面再生時に生じた剥片と考えられ、裏面に主要剥離面を残している。

**C類** (313・314・316) 平坦な砥面を持つもので、いわゆる平砥石の一群を本類とする。313は剥片を素材とし、正裏面からの調整で形状を整えているが、右及び上側縁に粗削りの面を残している。両面に平坦な砥面を持つが、正面のそれには平行する線条痕が観察される。314は上側縁に自然面を持つ板状の剥片をそのまま使用するもので、右側縁を裏面から正面へ抜ける力で欠損している。正面に平坦な砥面を持ち、不定方向に線条痕が観察される。本例は砥面形成時に火を受けた痕跡を持つ。316は自然縞をそのまま利用するもので、正裏面及び右側縁に平坦な砥面を持つ。正面のそれには線条痕が観察される。299・307・315・317・318は砥面を持たないが、形状及び石材の共通性から砥石の素材と考えられる。299・307は剥片の周縁に、粗い剥離が施されるもので、299は上下端が意図的に折断されている可能性がある。315は横長剥片、317・318は綫長剥片で、いずれも全く調整加工はなされていない。317は砥石A類から剥離されたもので、正面にU字形の古い砥面を持つ。これらは形状から299が砥石A類、307・315・317・318が砥石C類のそれぞれ素材である可能性が強い。

319~324は砥石製作時の、周縁調整によって生じた剥片と考えられ、正面に複数の剥離面が観察される場合が多い。



第70図 A沢出土砥石・玉未成品（Ⅰ層～Ⅱb層）



第71図 A沢出土砾石・砾石調整削片(Ⅰ層～Ⅱb層)

## 石製品

**玉** (285~298) 全て未成品で、23点検出された。A沢ではこの他、玉類の素材と考えられる硬玉原石27点、同剥片91点、滑石剥片34点が出土し、玉作りの工具と考えられる砥石が多量に発見されている事から、玉生産が当該地で盛んに行われていたものと推定される。

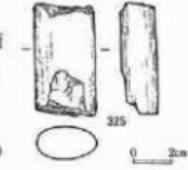
**垂玉** (285~291) 285・286は荒削りされた角柱状の硬玉を素材とし、全く研磨されない状態で両方から穿孔されたものである。288も同様で、広い原石面を持つ硬玉の剥片を素材とし、正面のやや下位に浅い穿孔痕が観察される。287は纖維状の節理を持つ塊状の滑石を素材とし、右側縁にわずかに研磨痕を残す。穿孔は両面から加えられ正面から1回、裏面から2回の作業で貫通しているが、若干の食い違いが生じている。289は下半を欠損するが、右側縁に抉り部が残存する事から匂玉状を呈するものと考えられる。穿孔は両面からで、それぞれ2回の作業で貫通している。研磨は全面に及ぶが、粗い擦痕及び後線を残しており未成品と考えられる。290・291はそれぞれ周縁・周縁+正面に研磨が施されている。垂玉の未成品と考えられるが穿孔されていない。

**小玉** (292~294) 292は両面からの穿孔で、それぞれ2回の作業で貫通している。研磨は全面に及ぶが、粗い擦痕を残している。293・294はほぼ全面が粗く研磨されるもので、穿孔はされていない。293は下端に擦り切り痕を持ち、管玉状の物から折り取られたものと考えられる。294は多面体状を呈し、研磨面が明瞭なもので、全面に粗い擦痕が観察される。

**管玉** (295~297) 295~297は管玉の未成品と考えられ、角柱状に粗く研磨されている。295・296はこの状態で折断・分割される例(293)が存在し、小玉の素材である可能性もある。297は上下両端に断面U字形を呈する穿孔痕を持つ。

**その他** (298) 滑石の剥片を板状に粗く研磨しているもので、正裏面に著しい擦痕が観察される。周縁部には研磨が加えられておらず、荒削りの面をそのまま残している。穿孔痕は見られない。

**石劍** (325) 1点のみ出土している。325は上下両端を欠損するもので断面は凸レンズ状を呈している。正裏面とも良好に研磨されている。 第72図 A沢出土石劍 (田中 靖)



## 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物はIII・IV層から出土しており、総量はコンテナで約1箱である。以下層位ごとに概要を述べる。

## III層出土の遺物

**土器** (339~341) 2個体出土している。339は口縁部外面に幅約3cmの無文帯を持ち、下部にLRの縄文が施されるもので、内面はヘラミガキされている。赤褐色を呈し、胎土に粗い砂粒を含む。340・341は同一個体で外面にLの縄文が施される。内面は右下から左上へのヘラケズリがなされた後、粗くなっている。黄褐色を呈し、外面に厚く炭化物が付着している。

これらの土器は、胎土・焼成や原体の特徴から339が中期後半～後期前半に、340・341が後期前半にそれぞれ位置づけられよう。

**石器** (326～330) 打製石斧1点、磨製石斧2点で、この他貝殻状剥片が2点出土している。326は楔形の打製石斧で横長剥片を素材とする。調整加工は両側縁に施されるが浅く、素材の形状を大きく変えるものではない。327・328は定角式の磨製石斧と考えられる。327は頭部破片で正面から裏面に抜ける力で折損している。328は刃部破片で正裏面に研磨時の擦痕が観察される。本例は裏面から正面に抜ける力で折損している。329・330はいわゆる貝殻状剥片で、329は右側縁を欠損している。いずれも刃部に二次加工や使用痕は観察されない。

#### IV層出土の遺物

**土器** (342～344) 1個体出土している。342～344は同一個体で、表面には縱方向の条線文が施されている。内面の調整は粗いヘラミガキで、部分的に接合痕が観察される。暗赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を多量に含んでいる。

**石器** (331～338) 石鎌1点、打製石斧2点、磨製石斧3点、スクレーパー1点、不明磨製石器1点が出土している。331は凹基無柄鎌で、基部左端を欠損している。内外面共に入念な調整加工が施されており、側縁は鋸歯状をなす。332・333は打製石斧である。332は縦長剥片を素材とするもので、頭部を欠損する。調整加工は入念で、素材の剥離面はほとんど残さない。刃部には使用痕と思われる摩耗が広く観察される。333も縦長剥片を素材としており、刃部を小欠する。調整加工は側縁部に集中し、くびれ部を中心に著しいぶれが観察される。334～336は定角式磨製石斧である。334は頭部を欠損するもので、正裏面の側縁部を中心に製作時の傷があばた状に残っている。刃部には使用痕と思われる摩耗及び線状の擦痕が観察される。335は刃部を欠損するもので、頭部に製作時の敲打痕を残す。正裏面には研磨による擦痕が明瞭に観察される。336は刃部破片で刃部から右側縁へ抜ける力で折損している。本例も研磨時の擦痕が明瞭に観察される。337はスクレーパーで裏面に広い原石面を持つ。正面は調整加工が中央部まで及んでおり、素材の主要剥離面は全く残されていない。左側縁及び先端部では裏面から急角度の調整が施されており、刃部を形成している。338は原石面を持つ滑石の剥片を素材とし、周縁部を両面からの粗い剥離、敲打によって円形に形状を整えている。正面には4枚の研磨面を持ち、粗い擦痕が観察される。本例は滑石を石材としている事から垂飾あるいは块状耳飾の未成品とも考えられる。

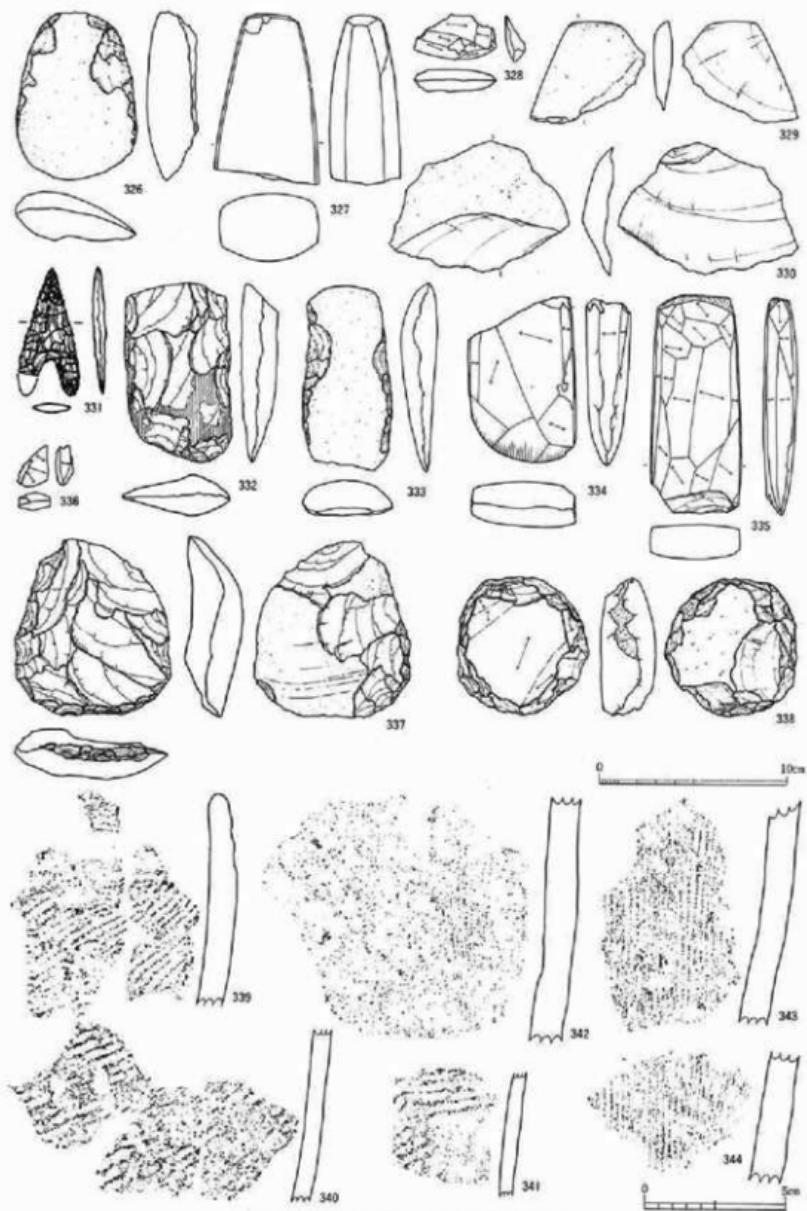
(田中 翔)

#### 古代～中世の遺物

古代～中世の遺物は主にIIa層上位から出土している。総量はコンテナで約1箱である。以下器種ごとに概要を述べる。

##### 須恵器 (345～352)

**壺蓋** (345) 345は器高の低い平坦なもので、端部は小さく折り返されている。器面調整は

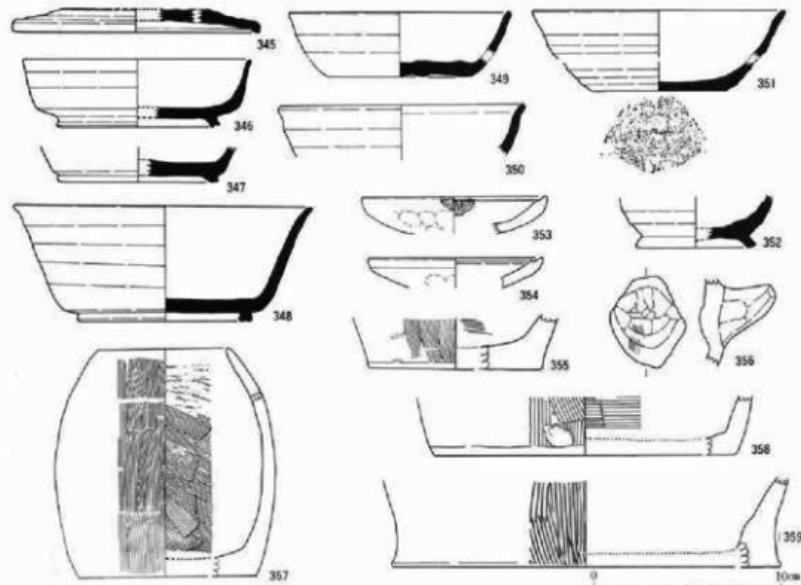


第73図 A河出土石器・縄文土器(III・Ⅳ層)

天井部がヘラキリ後なでられており、他は内外面共にナデ調整である。色調はセピア色を呈する。

**有台坏 (346~348・350)** 346は底部と体部の境界が明瞭で口縁部が直線的に立ち上がるものである。高台は内接接地で、端面は強く横ナデされ中央が少しくぼむ。器面調整は底部内面がヘラケズリされる他、内外面共に丁寧になでられている。底部の切り離し痕はヘラケズリによって消されており詳細は不明だが、形態や器面調整の特徴から回転系切りと考えられる。暗灰色を呈し、焼成は非常に堅緻である。347は高台が低く、その接地面が丸味を持つものである。器面調整は内外面共に丁寧にロクロナデされている。底部の切り離しはヘラキリと考えられる。暗灰色を呈し、焼成は非常に堅緻である。348は身が深く大型のもので、口縁部がやや外湾気味に立ち上がる。高台は低く幅広で、接地面の中央部が強いロクロナデによって若干くぼんでいる。器面調整は内外面共に丁寧なナデであるが、底面にかすかにヘラキリ痕を残している。暗灰色を呈し、焼成は非常に堅緻である。350は底部を欠損し詳細は不明だが、器形及び器面調整から有台坏となるものと考えられる。

**無台坏 (349~351)** 349は底部と体部の境界が丸味を帯びるもので、底部の切り離しはヘラキリである。器面調整は内外面ロクロナデで、それによる凹凸が観察される。色調は外面がくすんだ黄褐色で、内面は淡灰褐色を呈し、焼成はあまり良くない。351は口縁部が大きく外反



第74図 A沢出土土師器、塚窓器、土器質土器

するもので、口径に比して底径、器高が大きい。底部の切り離しは回転糸切りである。器面調整は底部外面を除きロクロナデされており、外面にはそれによる小刻みな凹凸が観察される。暗青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

**長頸壺 (352)** 352は小型の長頸壺の底部で、外面には焼成後の敲打痕があげた状に観察される。器面調整は内外面ロクロナデである。暗灰色を呈し焼成は堅緻である。

#### 土師器 (355~359)

**鉢 (355・357~359)** 357は最大径が体部中位に有り、口縁部は内済気味となる。器面調整は外面が下から上への、内面が右下から左上への刷毛調整である。色調は内面が黒灰色、外面が暗黄褐色を呈し、胎土中に粗い砂粒を多量に含んでいる。355・358・359は鉢の底部と考えられ、いずれも赤褐色を呈し、粗い砂粒を多量に含んでいる。

**把手 (356)** 356は頗る丸い鉢の把手と考えられる。外面に整形時のユビオサエの跡を明瞭に残している。淡赤褐色を呈し、粗い砂粒を大量に含んでいる。

このほか、ローリングを受けた土師器环底部が4点出土している。

#### 土師質土器 (353・354)

353・354は土師質土器の皿で、いずれも非ロクロ整形によるものと考えられる。353は口縁部が強く横ナデされ内面に段を持つが、体部外面には指痕痕が観察される。本例は證明皿として使用されたものと推定され、口縁部に1カ所燈心の跡が有る。354も同様の器形をとるが、口縁部外面と体部の境界に段を持つ。

以上、古代～中世の遺物について概要を述べてきたが、次にその編年的位置づけについて簡単に述べてみたい。須恵器环(346~351)は、底部の切り離しに糸切りが多用されている事や、底部がまだ厚味を持っている点などから上越市今池遺跡SD201(坂井1984)出土資料に近似し、9世紀前葉頃に位置づけられよう。环蓋345も当該期に伴なうものと考えられる。長頸壺(352)は底部のみで詳細は不明だが、子安遺跡(坂井1984)出土資料に近似し、9世紀後半～10世紀頃に位置づけられよう。土師器鉢(355・357~359)は西頸城地方の9世紀～10世紀に見られる独特なものであるが、良好な資料が少なく時期的変遷は明確にされていない。本例も上述した須恵器に確実に伴なうものであるが、9世紀～10世紀のどの時期に位置づけられるかは不明である。土師質土器の皿(353・354)は手づくね整形で器壁が厚く、口縁部内面が横ナデされて段を持つ点など、小国町御館遺跡(荒川1985)出土資料に類似し、15世紀頃に位置づけられよう。

(田中 靖)

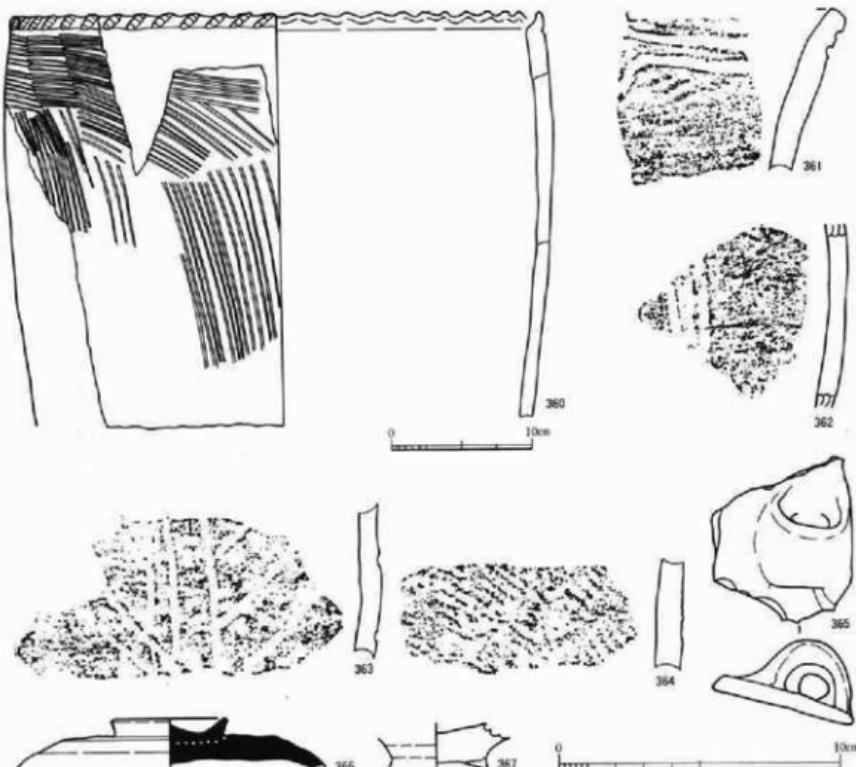
#### B. B沢出土の遺物

B沢からは繩文土器・須恵器・土師器や打製石斧・剥片石器などが少量出土している。また、表土層の上部からは近世陶磁器も若干出土している。

縄文時代の遺物

縄文土器 (360~365)

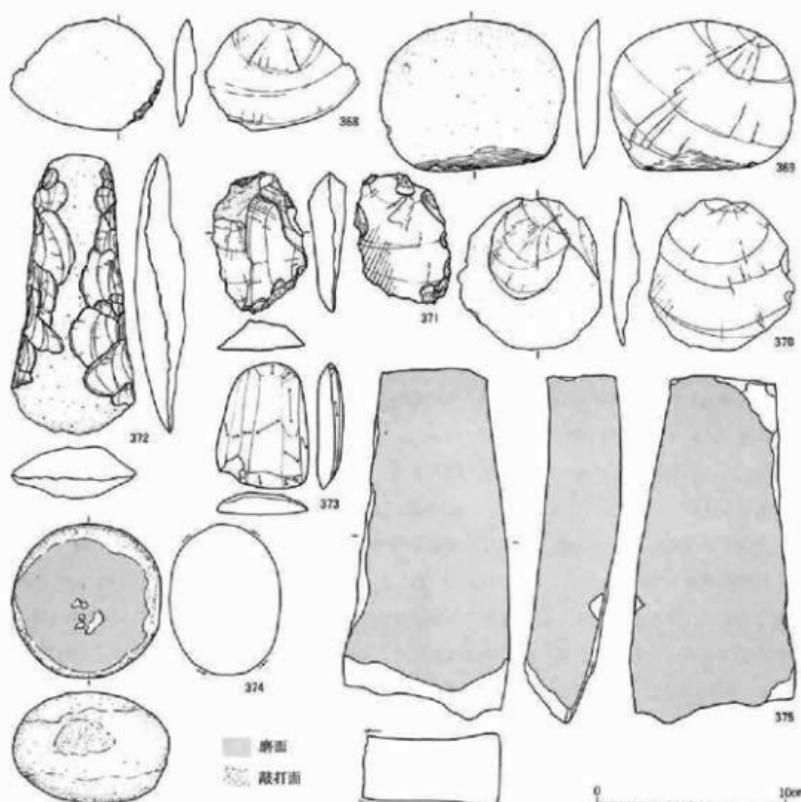
B沢から出土している縄文土器は、中期～晩期にかけてのものである。360は口縁が内湾ぎみになり胴部上半が若干の丸味を帯びる深鉢で、口縁の内側が受け口状になり縫線を持っている。口径は25cmと推定され、残存高は19.6cmである。口唇部の外端に条痕原体が押圧され、口縁部と胴部全面に条痕文が施されている。内面の調整は丁寧で、内外面とも灰褐色を呈し、外面の下半は二次焼成をうけて灰赤褐色に変色している。胎土には多量の小礫が含まれている。361は口縁が外反する波状口縁の深鉢で、口唇部に面をもつ土器である。LRの縄文が地文として施文され口縁には沈線文が描かれている。内面の器面調整は丁寧で外面は灰黄褐色を呈し、口縁部内面に炭化物が付着している。焼成は良好である。362・363は胴部が若干くらむ深鉢で362には縦位の沈線文が363には葉脈状沈線文が施文されている。内面の器面調整は丁寧で内



第75図 B沢出土縄文土器・須恵器・土師器

外面は灰黄褐色を呈し、二次焼成をうけた部分は赤黄褐色に変色している。内外面には炭化物の付着が認められ器厚は5mm余りと薄く、焼成も良好である。364は深鉢の胴部破片で器面全面に短い原体でRLの縦文が施されている。361～363と同様に内面の調整は丁寧で外面赤褐色、内面黒褐色を呈し胎土中に砂粒を多く含んでいる。365は口縁端部に橋状把手を持つ蓋である。無文であるが器面全面が磨かれており、特に内面は丁寧である。外面黒褐色、内面灰黒褐色を呈し、胎土中に砂粒を多く含み焼成は良好である。

360のように条痕原体を口唇部の外端に押圧する類例は、石川県チカモリ遺跡の下野2式土器群(南・増山1986)にみられる事から、360は晩期後葉(大洞A式併行)に比定されるであろう。361～363は同じ搅乱(図版39下)から出土しており器内面の調整や施文工具も似かよっている事から同一個体と考えられる。363の葉脈状文は沈線で描出され、葉脈の間隔も広い事から中期末葉



第76図 B沢出土石器

に属するであろう。364も縄文が短い原体で施文され、内面の調整も361～363と類似していることからほぼ同時期の土器ではなかろうか。365は橈状把手を持つ無文の蓋という点で富山県布尻遺跡〔柳井ほか1977〕の中期末～後期初頭の土器(VII類)に類例が求められる。

#### 石器 (368～384)

総数で31点の石器が出土している。その内6点は縄文時代早期と推定される石器集中地点からの出土であり、それ以外のものは出土土器からして縄文時代中期～晚期に比定されるであろう。石器集中地点からは磨石2、礫器1、石核3点が出土した他に多数の剥片、チップ及び台石状の偏平な自然石や円礫も発見された。それらの主な石材は安山岩、流紋岩などであったが蛇紋岩も使用されていた。

**打製石斧** (372) 7点出土している。372は砂岩製で撥形を呈する。縱長の剥片を利用し、正面の頭部と刃部付近に自然面を多く残す。調整加工は両側縁を中心に行われており、特に両側縁には細い剥離痕がみられる。加熱を受けたのであろうか。赤変している。

**磨製石斧** (373) 1点のみ出土している。片刃の小形磨製石斧で蛇紋岩製である。表面は面どりされているが、接線は明瞭でない。西側に隣接する原山遺跡や糸魚川市岩野庄遺跡〔高橋・小池ほか1986〕から出土しているものと同型式であることから、縄文時代早・前期の所産であろう。

**磨石** (374・376・377) 3点を数え376・377は石器集中地点からの出土である。石材はいずれも安山岩である。374は正・裏面に磨面を持ち、側面の一部に敲打痕を残す。376は長楕円形で、左側面に磨面が残されている。同様な形態を呈するものは糸魚川市岩野庄遺跡〔高橋・小池ほか1986〕からも出土している。377はいわゆる磨石状の円礫で表面にかすかな磨痕が確認される。

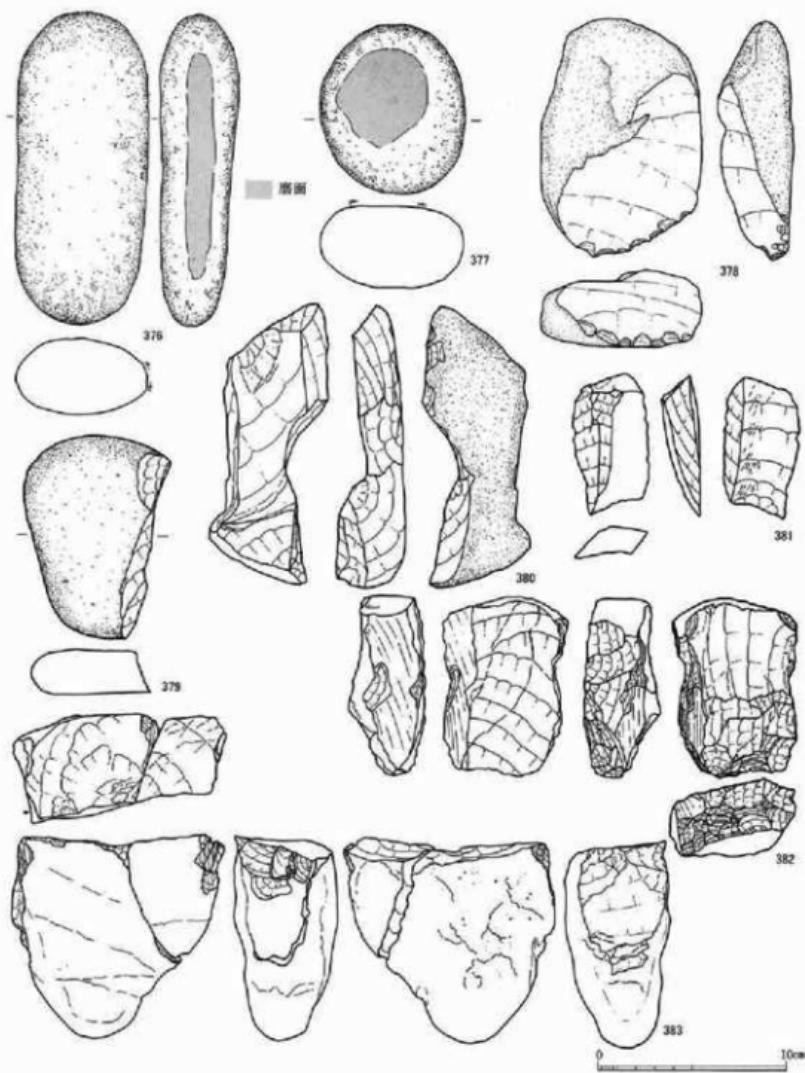
**砥石** (375) 1点出土している。375は砂岩製で角がきちんととした板状の置き砥石である。正・裏・側面が砥面として利用されており、よく使い込まれている。IV層から出土していることから縄文時代前期後半から中期に属する可能性が強い。

**礫器** (378) 石器集中地点から1点出土している。砂岩製である。偏平な蝶の一面を大きく剥離し、その先端部に細かい剥離を加えて刃部としたものである。

**スクレイバー** (371) 粘板岩製で1点のみの出土である。頂部には自然面を残す厚ぼったい縱長剥片の下端に細かい剥離で偏刃状の刃部が作り出されている。

**貝殻状剥片** (368～370) 31点が出土しており、全石器量の55パーセントを占める。368は砂岩製である。横長の剥片で、左側縁部に剥離が加えられスクレイバー状になっている。369は粘板岩製である。四辺形状を呈し、刃部は直線的で、表・裏に擦痕が見られる。370は安山岩製である。縱長の单なる貝殻状剥片で刃部を作り出すための剥離痕や使用痕は見られなかった。

**石核** (382～384) 3点とも石器集中地点から出土している。382・383は流紋岩で、同一母岩と考えられる。383は接合資料で正・裏面と両側面に自然面を残す。上面は調整加工をうけて平坦になっており、右側面には剥片剥ぎ取りの痕跡が残されている。382の上面には自然面が残され、正・裏面と左側面には剥片剥ぎ取りの痕跡がみえる。剥離の方向は一定せず不規則である。右

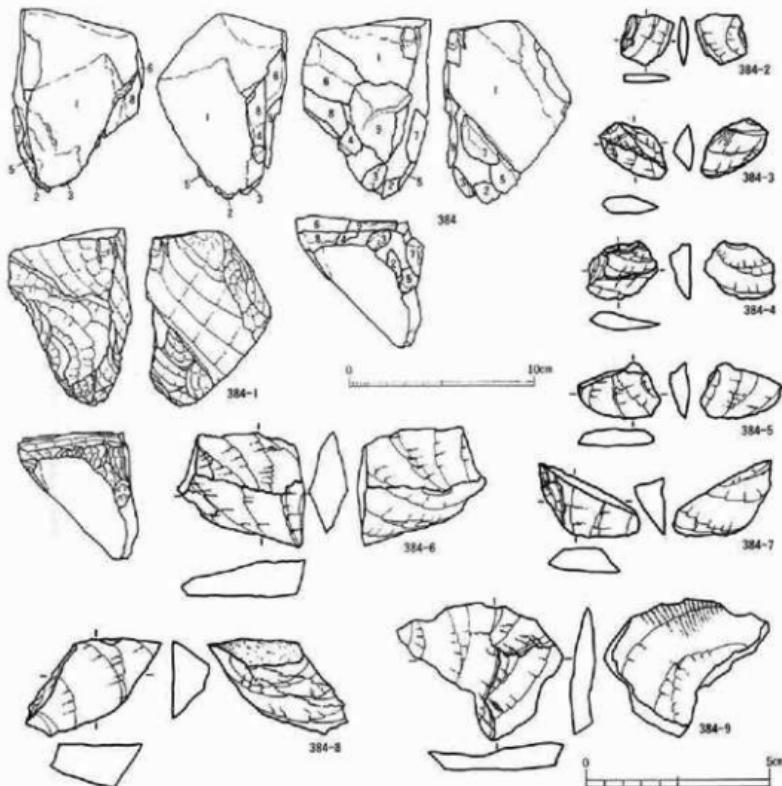


第77図 石器集中地点出土石器・剥片

側面は確の節理面と考えられる。384は粘板岩製で9片の剥片やチップが接合した、四辺形であるが下端が突がりぎみである。上面に自然面が残されており、正・裏面と背面に剥離痕が認められる。背面は平面的に剥離され2箇所は剥ぎ取りの痕跡がみられる。正・裏面の打点方向は一定していない。

剥片（380・381） 2点とも石器集中地点からの出土である。380は頁岩製で裏面は自然面である。裏面の右側縁上部には細かいリタッチ状の剥離がみられる。石核の残核の可能性もある。381は流紋岩製の経長剥片である。上面と正面の一部に自然面が残されているものもある。

その他（379） ほぼ真中付近から打ち折られた偏平な礫である。用途は不明である。



第78図 石器集中地点出土石核接合資料

## 古代の遺物

**須恵器** (366) 壺蓋が1点出土している。つまみの真中が大きくくぼみ、つまみの端が輪状になり、径4cmを測る。天井部は水平で体部は屈曲し、天井部にはヘラ削り調整が、体部にはナデ調整が施されている。今池編年〔坂井1984〕の四期(9世紀末~10世紀)に比定される。

**土師器** (367) 小型の壺底部が出土している。体部と底部の境界が屈曲して底部は板状を呈する。底径3.5cmを測る。底部の端に面を持つことから有台壺の可能性も捨てきれない。年代は須恵器とはほぼ同じで9世紀以降〔坂井1984〕であろう。  
(寺崎裕助)

## C. 台地上出土の遺物

## 先土器時代の遺物 (385)

8K13グリッドのVI層よりナイフ形石器が1点出土している。このナイフ形石器はやや細身で纖長の剥片を素材とし、基部と尖端部が尖った形状を示す。両側縁下半部と尖頭部は細部調整が施される。特に基部付近は入念な細部調整であり、打瘤は除去されている。ただ右側縁下半部の細部調整は、正面から裏面に向かっての刺離である。刃部は右側縁上半部と推定され、そこに見られる細かな刺離は連続性がなく使用痕と考えられる。石質は黒曜石であり、長さ4.8cm・幅6cm・厚さ0.7cm・重さ4.0gを測る。このナイフ形石器は同じく単独出土の糸魚川市中原遺跡のナイフ形石器〔高橋・小池ほか1986〕に類似している。なお、ナイフ形石器出土地点の下層より火山灰分布の結果、AT粒子(始良丹沢火山灰21200±700BP)の濃集部が確認され、AT層より新しいといえる。しかし、出土地点の上層は耕作土であるため、明確な年代は断定できない。

(高橋保雄)

## 古代の遺物 (386~393)

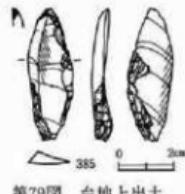
遺物は前述したように、SK33・SK34・ピット35から出土しており以下ではその概要を述べる。

## 須恵器 (389)

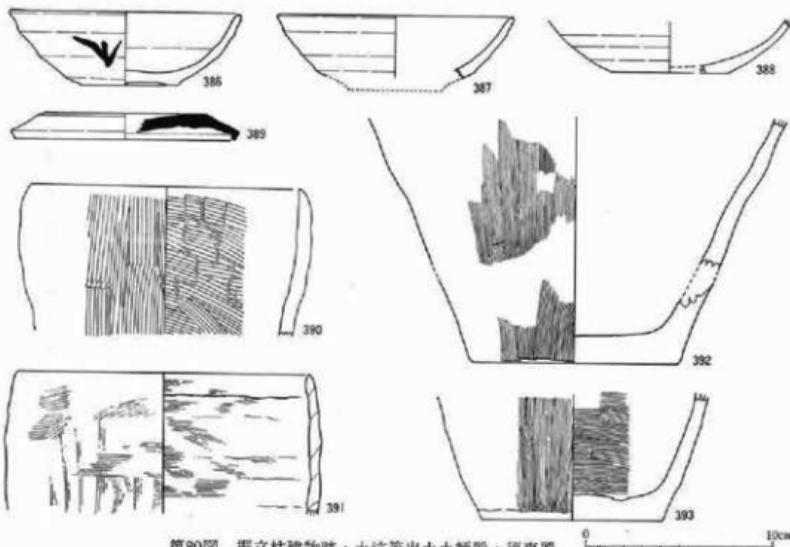
389は器高が低く平坦な器形をとる杯蓋で、SK33・ピット35から出土している。端部はやや内傾し、断面は三角形をなす。器面調整は天井部がヘラケズリされる他、内外面などされている。灰白色を呈し焼成は堅緻である。

## 土師器 (386~388・390~393)

386・387はSK34から出土したものである。386は口縁部が内湾気味に立ち上がり、底部と体部の境界が若干くぼむ。底部の切り離しは回転糸切りで、器面調整は内外面ナデである。赤褐色を呈し焼成は堅緻である。本例は体部外面に「个」(ヶ)と墨書きされているが、性格は不明である。387も同様の器形をとるものと考えられるが、底部を欠損している。淡赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。388はピット35より出土したもので口縁部を欠損する。器面調整は底部と体部の境界がヘラケズリ後などでされている他、内外面丁寧なナデで、器面は平坦に仕上げられている。底部の



第79図 台地上出土  
ナイフ形石器



第80図 掘立柱建物跡・土坑等出土土器・須恵器

切り離しは回転糸切りである。暗黄褐色を呈し焼成は堅緻である。

390～393はいずれもSK33・ピット35より出土したものである。全形をうかがえる資料は無いが、口縁部が直立気味に立ち上がり平底を持つ、いわゆる深鉢形を呈するものと思われる。器面調整は外面が縱方向、内面が横方向の刷毛調整である。391は内面に接合痕を残している。色調は390が赤褐色、391～393が暗黄褐色を呈し、焼成はいずれも堅緻であるが、胎土中には粗い砂粒が混入されている。392の外面にはスヌ状の炭化物が付着している。

以上、各土器の概要を述べてきたが、次にその編年的位置づけについて簡単に考察したい。SK34出土の土器器環(386・387)は口径に比して身が深く、口縁部が明瞭に外反しないなど、上越市一之口遺跡西地区SE183出土資料(坂井1986)に近似し、10世紀前葉に位置づけられよう。SK33・ピット35出土の須恵器器環(389)は天井部の広い範囲に丁寧なヘラケズリを行っている事などから、上越市今池遺跡(坂井1984)SD201出土資料に近似し、9世紀前葉に位置づけられるものと思われ、併出した土器器環(388)、同鉢(390～393)も当該期に伴なうものと考えられる。このように遺構出土の土器は、9世紀前葉、10世紀前葉の2時期に大別され、A沢IIa層における状況と一致する。この事から包含層の形成が本遺構群と密接な関係をもち、遺構の所在する台地上が遺物の供給地となっていたものと推定される。

#### 江戸時代の遺物

近世陶磁器は調査区のほぼ全面より出土しており、その出土層位は0～I層である。これら

は台地上において検出された近世の各遺構と密接に関わるものと考えられ、以下では一括して取り扱うものとする。

#### 肥前系陶磁器（394～419）

394～403は唐津焼で、402・403以外は皿となるものと考えられる。394は内面に鉄絵が描かれるもので、内外面には透明釉が施されている。395は口縁部に鉄釉と透明釉が掛け分けられるもので、内外共に体部下半には施釉されていない。396～401は疊付き及び見込みに、砂目積みの痕跡を残している。いずれも透明釉が施されており、その範囲は396・398・401が全面に、397・400は疊付き及び高台内ののみ無釉、396は内面のみ施釉されている。400は疊付きに回転糸切り痕を残しており、見込みに段を持つ。402は壺の底部破片と考えられる。内面に透明釉が施されており見込みに砂目積みの痕跡を残す。403は二形あるいは刷毛目唐津の鉢である。内面には白土掛けされ、胎土目積みの痕跡を残している。

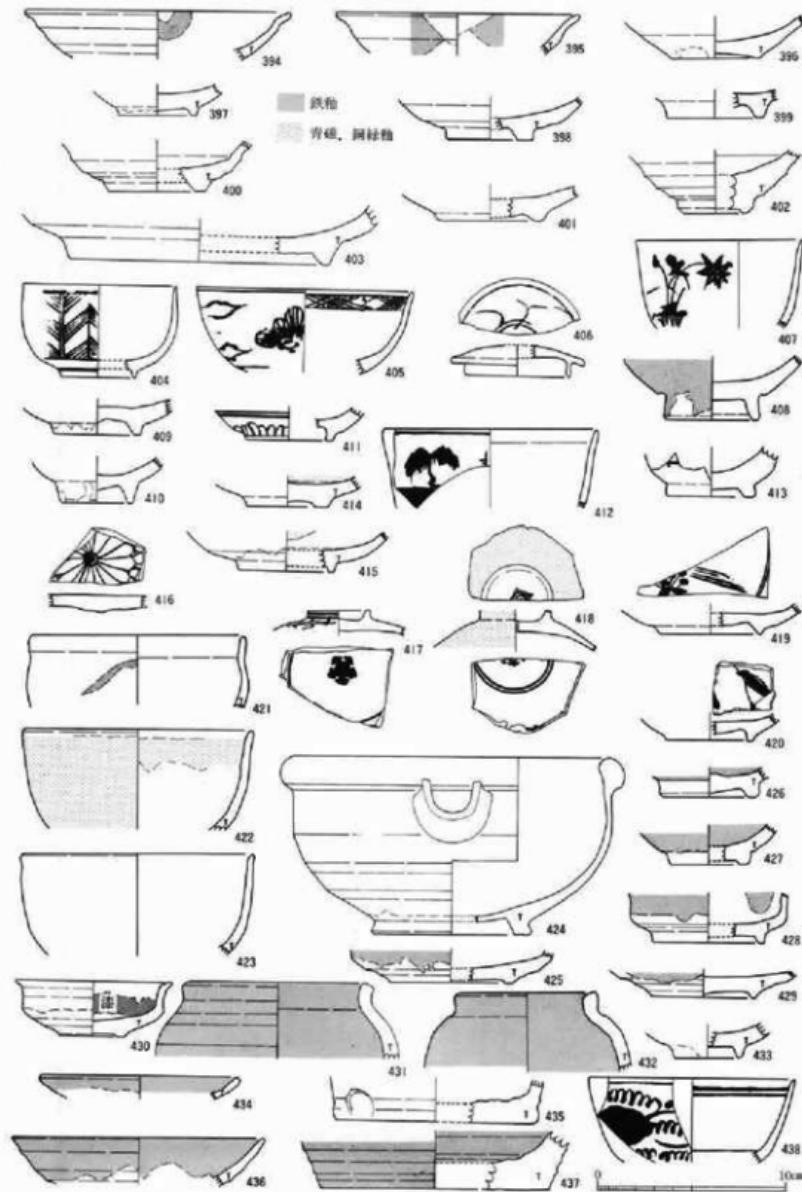
414・415は内野山西窯系の青緑釉皿である。いずれも見込みが蛇ノ目に釉剥ぎされ、外面体部下半は施釉されていない。414は内面に銅緑釉、外面に透明釉、415は内面に銅緑釉+透明釉、外面に透明釉がそれぞれ施されている。

404～419は伊万里焼である。404・405・407・408・410・411・413は碗で、404・405・407・411・413には染付が施される。いずれも具須の発色は良好で濃紺色を呈するが、411・413の疊付き及び見込みには砂が付着している。また404の破断面には漆が付着しており、漆による補修がなされていたものと思われる。406は壺の蓋と考えられる。内面無釉で外面には染付が施されるが、本例は焼成時に釉が白済し、文様が不鮮明となっている。412は蓋物で口縁内面には施釉されず外面に染付が施されている。417・418は壺の蓋で、417は外面に草花文、見込みにコンニャク判による五弁花が施される。418はいわゆる青磁染付で、見込みにコンニャク判による五弁花、高台内に溝筋が施される。409・416・419・420は皿で、409以外は染付が施される。いずれも具須の発色はあまり良くなく見込みや疊付きに砂が付着している。409は高台無釉の白磁皿で、見込みは蛇ノ目に釉剥ぎされている。

#### 瀬戸系陶磁器（425～438）

425～432・435～437は越中瀬戸焼と考えられ、430以外は全て鉄釉が施されている。426・427は高台無釉の壺である。428は香炉で内面及び外面の体部下半には施釉されていない。425・430・434・436は皿で、425・430は口縁部が直立気味に立ち上がり、端部がわずかに外反する器形をとる。また、430は唯一白色釉が施されるもので、内面には漆が厚く付着している。434・436は口縁部が直線的に外反するもので、見込みは円形に釉剥ぎされている。431・432は短頸壺で、内外面に施釉されている。435・437は短頸壺あるいは鉢の底部と考えられる。底面には回転糸切り痕を持ち、全面に施釉されている。433・438は瀬戸焼と考えられる。433は高台無釉の小皿で灰釉が施されている。438は染付磁器の壺である。

#### その他（421～424）



第81图 古地上出土近世陶器 (T. 隋朝)

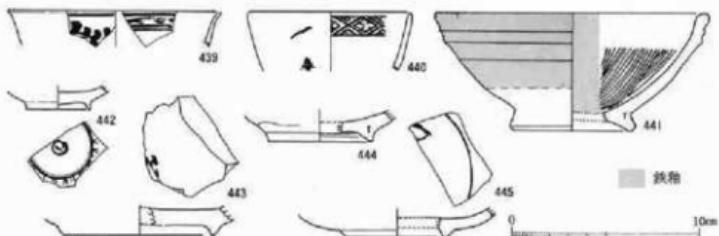
421～424は産地不明のもので、421～423はいわゆる京焼風陶器である。421は口縁部が若干くびれるもので、体部外面に鉄絵が施される。422・423は口縁部が直立気味に立ち上がるもので、422は外面に銅緑釉、内面に透明釉が掛け分けられている。424は片口の鉢で内外面に透明釉が施されるが、高台部分は施釉されていない。見込みに胎土目積みの痕跡を残している。

以上各陶磁器の概要を述べてきたが、次にその編年的位置づけを試みたい。唐津焼の皿、壺の内、砂目積みの痕跡を残す396～402は大橋編年(大橋1984)によるIIa期、すなわち17世紀前葉に、394・395は底部を欠損し詳細は不明だがI～IIa期、16世紀末～17世紀後半に位置づけられる。403の鉢は高台の外端に面取りが施されておらずIIc期、17世紀後半に位置づけられる。伊万里焼の内、高台及び見込みに砂が付着する碗(411・414)、皿(416・419・420)や高台無釉の碗(408・410)はIIb期、17世紀前～中葉頃に、高台無釉で見込み蛇ノ目稚刺ぎの白磁皿(409)はIIc～IIIa期、17世紀後半～18世紀前半に位置づけられる。これら以外は全てIII期、18世紀の所産と考えられる。内野山西窯系の銅緑釉皿(414・415)はIIc～IIIa、17世紀末～18世紀前半に、京焼風陶器の碗(421～423)は18世紀にそれぞれ位置づけられる。本遺跡出土の越中瀬戸焼は、富山県正印新跡(宮田1984)出土のそれに類似し、17世紀後半～18世紀に位置づけられ、瀬戸焼の皿(433)は16世紀末～17世紀前葉に染付磁器(438)は19世紀前半に位置づけられる。産地不明の31は所属時期不明である。

#### SR38出土の近世陶磁器 (439～445)

SR38からは敷石の小砂利に混って若干の近世陶磁器が出土している。439は瀬戸焼の小碗で、19世紀の所産と考えられる。外面には草花文が描かれている。440・442・443・445は伊万里焼で445が17世紀中葉に位置づけられている他は18世紀の所産と考えられる。440・442小碗で、442の高台内には満福が見られる。443・445は皿で、443は見込みにコンニャク版による五弁花が施されている。445は高台に砂の付着が著しく、呉須の発色もあまりよくない。441は産地・時期不明のスリ鉢で、内面及び外面の体部上半に鉄釉が施されている。444は唐津焼の皿で、見込みに砂目積みの痕跡を残し17世紀前葉の所産と考えられる。

(田中 靖)

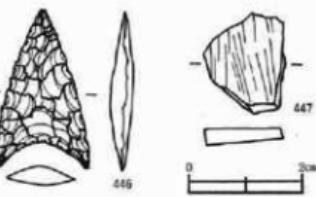


第82図 SR38出土近世陶磁器 (T. 向器)

### その他の遺物

石鏃 (446) 9K7の風倒木痕から出土している。丁寧なつくりの四基無基盤であり、先端部と両脚部の逆刺は鋭く尖り、周縁はやや内湾ぎみの形状を示す。長さ2.8cm・幅1.7cm・厚さ0.4cm・重さ1.3gで石質は凝灰岩である。

滑石製品 (447) 10L8の擾乱から出土している。薄い板状の滑石の正裏面に線状の磨痕が見られる。形状から石製模造品の一部と推定される。長さ1.8cm・幅1.4cm・厚さ0.4cm・重さ1.5gである。



第83図 台地上出土石鏃・石製模造品  
(高橋保雄)

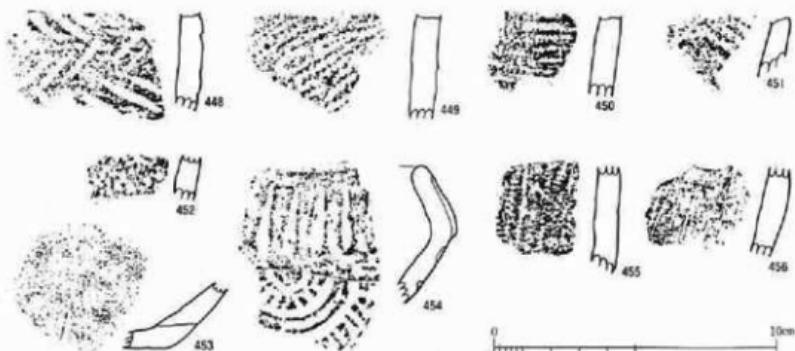
### D. D地区出土の遺物

縄文土器14点、石器2点他に図示していないが弥生中期前葉と思われる土器1点、近世陶磁器数点が調査区全体から散漫に出土している。石器以外はいずれも細片である。

### 縄文時代の遺物

#### 縄文土器 (448~456)

448~452は深鉢の胴部破片と考えられるもので、448は綾杉文、449はLR縄文、450は横位縄文、451はRL縄文、452は羽状縄文が施される。453は浅鉢の底部破片で、底部付近の一部に細かい斜縄文らしい痕跡が認められる。454は「く」字状に内湾する深鉢の口唇部破片で、口唇部の様子から波状口縁を呈すると思われる。半截竹管による縱位の刻み目、その真下に半円弧状の半隆起線が施され、半隆起線の一部には櫛状工具による連続刺突が加えられる。455~456は深鉢の胴部破片と考えられるもので、455はLR縄文、456は縱位の条痕文が施される。胎土は448~453が



第84図 D地区出土縄文土器

砂質分が多く、449はさらに水晶の粒が混入する。また、448-451には纖維が混入し、452の内面には炭化物が付着する。色調は448・449・452が褐色、450・451が暗褐色、453-456が明褐色を呈する。所属時期については、文様・胎土・纖維の混入等から、448は前期初頭の極楽寺式併行、449-452が前期前半、454は中期中葉から後葉にかけての古府II式または、古串田新式併行、456は晩期後半と考えられ、453・455は時期不明である。

#### 石器

磨製石斧の未成品と思われる蛇紋岩の破片(現存長さ7.1cm・幅6.7cm・厚さ3.5cm・重さ188g)打製石斧の刃部と思われる砂岩の破片(現存長さ5.6cm・幅6.0cm・厚さ1.3cm・重さ50g)の2点が出土している。

(高橋保雄)

#### 第5節 科学的分析

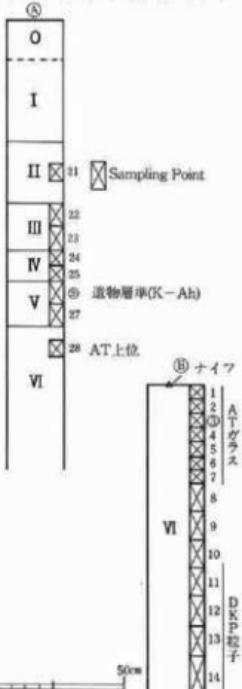
大塚遺跡出土の遺物や土壤については、いくつかの観点から科学的分析を試みた。ナイフ形石器が含まれた土層や石器集中地点の検出された土層については群馬大学講師早津賛二氏や株式会社京都フィッショントラックに火山灰分折を、A沢や歓状小溝の土壤についてはパリノサーヴェイ株式会社に花粉分析をお願いした。A沢IIa層出土の黒曜石の産地同定は京都大学原子炉実験所の藤井哲男氏に依頼中である。遠賀川式系土器の胎土分析は京都大学埋蔵文化財センターの清水芳裕氏にお願いし、蛇紋岩と推定される礫の蛍光X線分析については電気化学工業株式会社青海工場の小野健氏に御好意を賜った。胎土分析について、まだ正式な報告はなされていないが、胎土中に火山性物質が少ないと分析結果が出ている。蛍光X線分析については、5検体とも蛇紋系で流紋岩質の岩石ではないとの分析結果が出されている。黒曜石の産地同定と遠賀川式系土器の胎土分析については正式な分析結果が届きしだい連報したい。

(寺崎祐助)

#### A. 大塚遺跡火山灰分析結果 I (第85図)

サンプリングした2地点(A:先土器の疑いのある石片横の断面、B:ナイフ形石器出土地点)で下記のような結果を得た。

A地点 A地点における最下位のサンプル②中にAT(21,000~22,000年前)粒子は存在するものの少なく、AT降下層準はもっと下位にあるものと思われる。サンプル④・⑤中にK-Ah(鬼界アカホヤ火山灰)と思われるヴァブルウォール型火山ガラスがよ



第85図 大塚遺跡地質柱状図

り多く漁集しており、そのあたりにK-Ahの降下層準(約6300年前)がありそうであるが、ATガラスと混っているようなので屈折率の測定が必要である。◎層準に出土した石片は、縄文早期(?)の可能性が大きい。層準からは少なくともB地点のナイフよりはずっと新しいことは確実である。

B地点 DKP(大山倉吉鉱石、45,000~47,000年前)粒子とAT粒子の漁集部が確認された。両者とも褐色土壤中に分散しており、厳密な降下層準の決定は困難である。しかし、ナイフの出土層準は、ATの降下層準の上位にあることは確実である。

その他 黒色土、褐色土ともテフラ以外の砂粒を多く含んでいる。多分海岸からの飛砂と考えられ、テフラ、ロームと呼ばない方がよい。

(早津賢二)

#### B. 大塚遺跡火山灰分析結果II (第1表)

測定を行ったのは⑤-3(大塚3)と⑥-26(大塚26)の2つである。大塚3ではH型ガラス(ヴァブルウォール型)が認められ、屈折率はレンジ1.4979~1.5020、平均は1.5007、モード1.501~1.502でATと断定できる。大塚26では、K-Ahに特有の色つきガラスが認められることからK-Ahを含むことは確実であるが、今回の測定にひっかかったのは、全てATガラスのようである。ATは表土までまんべんなく混入しているが、K-Ahを特徴づける色つきガラスは大塚26付近から上位のみに出現するので、⑥付近に降下層準があるとみてよいと考えられる。量はきわめて少量であるので、あまり厳密な議論はできない。

(早津賢二)

No.	試料名 (sample name)	屈折率範囲 (range)		屈折率平均値 (mean)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大			
1	大塚3	1.4979	1.5020	1.5007	1.501~Nd<1.502	H型が主
2	大塚26	1.4981	1.5024	1.4995	1.499~Nd<1.500	H型が主

\* H: 扁平型  
C: 中間型  
T: 多孔質型  
(吉川、1976)

第1表 火山ガラス屈折率測定結果一覧表

#### C. 大塚遺跡A沢花粉分析結果及び考察

花粉分析の結果、14科・2亜科・28属・3亜属・1種・その他合計44の分類群が同定された。顕微鏡下の観察では、いずれの試料においても、暗褐色から黒褐色の植物遺体が非常に多く(状況写真参照)、花粉・胞子化石は暗褐色から黒褐色を呈したものもあるが、多くのものは膜が溶けかかって淡黄色から透明に近い状態に変質していた。暗褐色から黒褐色を呈した植物遺体は、地質時代レベルの長期間に渡る熱成作用による炭化(例えば石炭など)、または一時的な高温により炭化(火山などの地熱や野火・焼畑・他)したことが考えられる。試料が石炭のように古い時代のものでないこと、地理的に地熱の影響も考えられないことから、野火または焼畑などによって炭化作用を受けたものであろう。また、花粉・胞子の膜が溶けかかっているのは、堆積

後、酸化的条件下に置かれた為といえよう。このように、今回分析した試料は花粉・胞子が消失するような物理化学作用を強く受けたものと考えられる。全般的に花粉・胞子化石の産出が少なく、出現した化石も変質している化石が多かったのは、それらの作用によるものといえよう。

以上のような点から、今回の分析結果のみで古植生の変遷や古環境について十分に推定することは困難であるが、出現した分類群の母植物は堆積當時にその周囲に存在していたと考えてよい。今回の分析試料の中で注目されるのは、縄文時代後期とされるNo17試料から、変質はしているものの、比較的多くの樹木花粉が産出した点である。その組成は、スギ属が顕著に高率な出現を示し、トチノキ属が高率に出現する傾向がある。塙田(1980)によると、スギ生育に最適な環境下では、その定着初期の5%の値から、もともと定着している他の植物との競争に打ち勝ちながら25%に達するのに最低2,000年、55%の出現率に達するには約3,000年必要としている。スギ属の定着時期について考えてみると、No17試料のスギ属の出現率は約57%であることから、この出現率になるまで約3,000年以上かかることがある。当試料の時代が縄文後・晩期とされていることから、これより約3,000年以前に定着していたことになる。また、後氷期のスギの移動と拡大をみると、晩氷期の気候の温暖化に伴い、若狭湾地域または富山湾地域に逃避していたスギは、直江津に約6,000年前(若狭湾地域からの移動速度41.5m/年とした場合)から約6,700年前(富山湾地域からの移動速度16m/年とした場合)に到達したと考えられている。糸魚川市は上越市よりも若狭湾や富山湾寄りにあることから、それより約1,000~2,000年前にスギが到着していたものと考えられ、縄文時代後期にスギが55%以上の出現率を示すことになる。

しかし、No17試料の上下試料は化石個体数が少ないとから、全体を通じた変遷で解析ができない。これらの考えはあくまでも仮説として示したにすぎない。

これらのことから、大塚遺跡の縄文時代後期とされるNo17試料にスギ属が57%の出現率を示す結果は、少なくともこの時代にはスギ林が発達していたことを示すデータが得られたものといえよう。またトチノキ属の高い出現率は、新戸部(1973)・安田(1982a・b)によって指摘されているように、縄文時代におけるトチノキの意図的保護を示唆するものといえよう。今後、花粉分析をはじめとする諸分析から、可食植物の抽出を試み、特定の植物の管理・保護の問題を検討することは、縄文時代生態に関する重要な知見を与えるものと思われる。

また、今回の分析試料の内、新潟県では初見の弥生時代前期包含層とされるNo13・15からは、花粉化石の出現は少なく周辺環境の復元には至らなかった。しかし、該期の遺跡に水田耕作があったか否かは、最近北陸・東北地方で問題となっている。弥生文化の伝播問題を考えるうえで重要な視点である。今後プランクトンオパール分析・種子同定等の分析を実施し、この点を補足することが望まれる。

#### D. 大塚遺跡畝状小溝花粉分析結果及び考察

花粉分析の結果、この度の試料は、比較的良好に花粉・胞子化石を産出した(No.9を除く)。検出された花粉・胞子化石として、樹木花粉が36種類、草本花粉が25種類、シダ類胞子が3種類であった。全般的に、樹木花粉の割合が多く、ついで草本花粉、シダ類胞子の順に産出する。

以下に各試料について述べる。

##### No.1 (SD9 K-C)

樹木花粉は、マツ属複雑管束亞属(ニヨウマツ亞属)とスギ属が高率に出現し、コナラ亞属・ハンノキ属・クルミ属・ニレ属一ケヤキ属などを伴なう。なお、マツ属複雑管束亞属はスギ属よりも多く出現する。草本花粉は、イネ科・アリノトウグサ属・ソバ属などが出現するものの、全般的に低率である。

##### No.2 (SD10 K-B)

樹木花粉のマツ属複雑管束亞属がNo.1試料よりもやや多いものの、草本花粉とともにNo.1試料とほとんど同じ出現傾向を示す。

##### No.3 (SD10 K-C)

樹木花粉のマツ属複雑管束亞属がNo.1試料よりもやや多いものの、草本花粉とともにNo.1試料とほとんど同じ出現傾向を示す。

##### No.4 (SD11 K-A)

樹木花粉のマツ属複雑管束亞属がNo.1試料よりもやや多く、草本花粉のイネ科が多く出現するものの、No.1試料と良く似た出現傾向を示す。

##### No.5 (SD12 K-A)

樹木花粉・草本花粉ともにNo.1試料とほとんど同じ出現傾向を示す。

##### No.6 (SD13 K-B)

樹木花粉は、マツ属複雑管束亞属とスギ属が高率に出現するが、その量比はほとんど同じである。コナラ亞属・ハンノキ属・クルミ属・ニケ属一ケヤキ属などを伴なう。草本花粉はヨモギ属が多く出現し、イネ科・ソバ属などを出現する。

##### No.7 (SD14 K-A)

樹木花粉・草本花粉ともにNo.1試料とほとんど同じ出現傾向を示す。

##### No.8 (SD15 K-B)

樹木花粉・草本花粉ともにNo.1試料とほとんど同じ出現傾向を示す。

##### No.9 (SD20 SD20)

試料中に含まれる花粉・胞子化石が少なかったと考えられ、花粉・胞子化石の同定・計数が十分に行えなかった。

スギ属・イネ科・ヨモギ属・タンボボ亞科などが比較的多く同定されている。

## No.10 (SD25 SD25)

樹木花粉は、スギ属が非常に高い出現率を示し、マツ属複維管束亞属・コナラ亜属・ハンノキ属・クルミ属などを伴なう。草本花粉は、イネ科をはじめとしてソバ属・ヨモギ属・タンボポ亜科などが出る。

以上の結果から若干の考察を述べる。

花粉組成をみると、試料番号の1、2、3、4、5、7、8の各試料(SD9 K-C、SD10 K-B、SD10 K-C、SD11 K-A、SD12 K-A、SD14 K-A、SD15 K-B)は、よく似た花粉組成をしており、樹木花粉の割合が高くマツ属複維管束亞属(ニヨウマツ亜属)とスギ属が高率に出現する。マツ属複維管束亞属とスギ属の高率な出現は、分析に供した試料の時代が17世紀から19世紀とされていることから、後背地にはマツ(おそらくアカマツ)とスギを主とする二次林が存在していたことを示している。関東地方においても、浅間B軽石降下以降マツ属複維管束亞属とスギ属が高い出現率を示し(特に、浅間A軽石降下以降が著しい)、人間の森林植生への干渉(人間の生業活動に伴う森林破壊)と考えられている[辻ほか1986、パリノ・サーヴェイ株式会社1985]。花粉分析の結果から、本遺跡の周辺においても同じように人間の森林植生への干渉が起きていたと推定される。また、草本花粉では栽培植物に由来すると考えられるソバ属が検出されている。このことは、ソバ栽培が近隣で行われていた可能性を示唆している。

No.6 (SD13 K-B)試料は、前述した試料と較べてマツ属複維管束亞属の出現率が低下するものの、マツ属複維管束亞属とスギ属が共に高い出現率を示しているので、No.1 試料などと同じことがいえる。

No.10 (SD25 SD25)試料は、スギ属が非常に高い出現率を示している。後背地にはスギを主とする森林が存在していたことを示している。マツ属複維管束亞属がスギ属に次いで多く出現していることから、前述したように人間の森林植生への干渉が本試料においてもうかがえる。マツ属複維管束亞属とスギ属の出現率がNo.1 試料をはじめとする試料と異なることから、覆土の堆積時期が異なっていたことが示唆される。関東地方のマツ属複維管束亞属とスギ属の変遷は、そのまま本遺跡に当てはまらない。しかし、マツ属複維管束亞属の増加は約1,500年前を前後して全国的にみとめられる[塙田1981]。その変遷によるとNo.10試料は、No.1 試料をはじめとする試料よりも古い時代の堆積物の可能性が高い。地域的な違いもあるので本遺跡の地質層序を考慮したり、判断することが必要である。

また、草本花粉では栽培植物と考えられる、ソバ属が検出されている。本試料においてもNo.1 試料をはじめとする試料と同じように、ソバ栽培が近隣で行われていたことが示唆される。

No.9 (SD20 SD20)試料は、花粉・胞子化石の産出が少ないので解説しがたい。花粉・胞子化石が少なかったのは、堆積後の酸化的環境による分解作用を受けたためと考えられる。

なお、今回の分析試料は溝内の堆積物であるが、花粉分析の結果水生植物の花粉化石は検出されないことから、用水として機能した可能性は低い。



※：色調・岩質は分析の際に観察したものである

I ~ Vは基本層序のそれと一致する

●Sampling Point

第86図 大坂遺跡(A河東西セクション南壁)試料採取地点土層柱状図

	1	8	9	10	11	13	15	17	20	21
ツガ属	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
裸絆管束亞属 (ニヨウマツ亚属)	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属	7	1	-	-	-	-	3	1	-	-
スキ属	32	4	7	5	11	29	8	194	12	4
イテイ科イヌガヤ科ヒノキ科	1	-	-	-	-	-	-	3	-	-
サワグルミ属	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
クマシデ属アサゲ属	1	-	1	-	1	-	6	1	1	-
カバノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	3	1	-	-	1	1	1	9	-	2
ブナ属	-	-	-	-	3	-	-	1	-	2
コナラ属	3	2	4	-	2	2	1	5	1	-
アカガシ属	1	-	-	1	-	1	-	3	1	-
クリ属	2	-	-	-	-	4	-	2	-	-
ニレ属ケヤキ属	4	-	-	1	-	4	-	13	4	3
エノキ属ムクノキ属	-	-	-	1	-	1	-	1	2	-
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トネノキ属	7	-	1	1	-	-	-	95	5	3
シナノキ属	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-
トヨリコ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ティカカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
イネ科	80	61	17	19	29	19	4	13	6	9
カヤツリグサ科	3	2	-	-	1	-	1	-	-	1
ユリ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	10	1	-	-	-	-	-	1	-	-
カラマツソウ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キンボウゲ科	3	3	6	2	2	-	-	1	-	1
タケニグサ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
アブラナ科	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
バラ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウガサ属	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	15	48	1	-	-	-	-	-	-	-
ホナシカズラ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤエムグラ属アカネ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	85	151	34	32	49	11	13	13	2	1
キク科	5	4	1	-	2	-	1	2	5	-
タンポポ科	34	26	4	5	6	2	1	-	3	-
不明花粉	17	9	1	4	8	4	1	71	84	61
ゼンマイ属	1	1	-	-	-	1	-	1	-	-
サンショウモ	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子	35	4	5	5	6	6	15	24	10	7
ボトリオコッカス属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
樹木花粉	65	8	14	9	18	52	11	341	29	16
草本花粉	262	298	63	56	89	32	20	33	13	15
不明花粉	17	9	1	4	8	4	1	71	84	61
シダ類孢子	36	5	6	5	6	7	15	25	10	7
總花粉・孢子	380	320	84	76	121	95	47	470	136	99

\* : 1%未満の出現率を示す

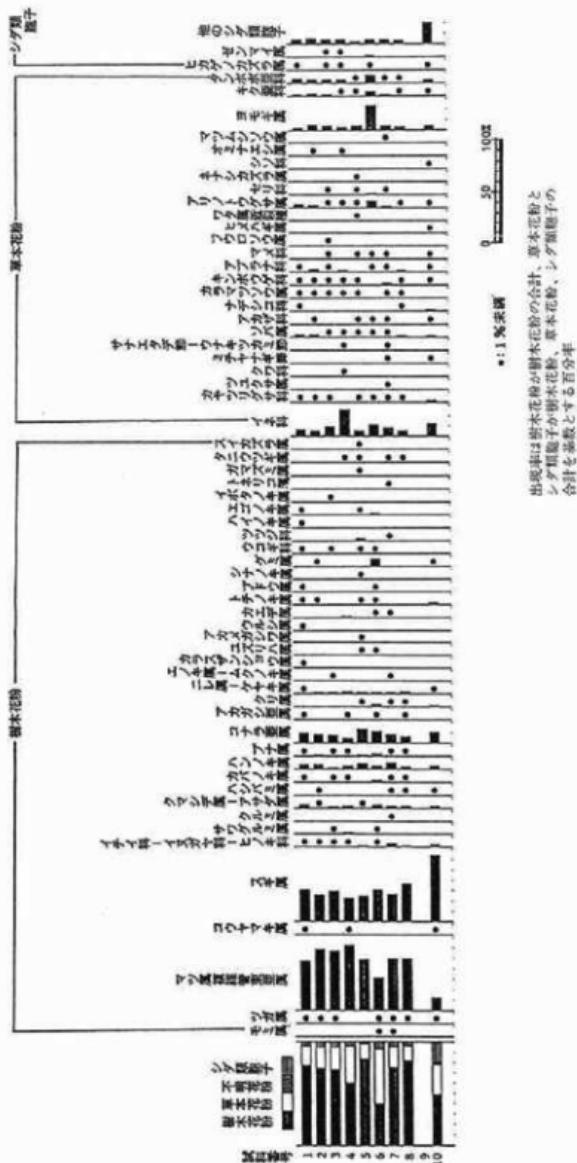


第87図 大塚遺跡花粉分析結果及び花粉群集分布図(A区)

試料番号

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
モコ属	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
ツガ属	2	1	2	-	-	1	1	2	-	1
樹胡桃科属(ニヨウマツ科属)	143	154	166	172	140	49	153	151	1	20
コウジ属	1	-	-	2	-	-	-	-	1	1
スギ属	91	72	86	61	71	47	81	110	23	106
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	2	2	2	4	1	10	4	3	3
サワグルミ属	-	-	1	3	-	1	-	-	-	-
クルミ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
クマシデ属-アサガ属	10	1	4	8	2	5	6	8	-	3
ハシバミ属	-	1	-	-	-	-	2	1	-	1
カバノキ属	2	-	1	2	-	3	1	1	-	-
ハンノキ属	13	10	4	8	15	5	19	7	1	5
ブナ属	2	3	2	2	4	3	1	1	-	-
コナラ属	27	24	21	10	37	17	24	18	2	16
アカガシ・ムクノキ属	1	-	-	2	-	1	-	1	-	-
クリ属	-	-	-	-	2	3	1	5	-	2
ニレ属-ケヤキ属	2	4	3	6	3	2	4	5	2	1
エノキ属-ムクノキ属	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
カラスザンショウ属近似種	1	-	-	-	1	1	-	-	-	-
ユズリハ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	1	1	-	-	1	1	-	-	-	4
ブドウ属	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
シナノキ属	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
グミ属	-	1	-	-	-	11	-	-	2	1
ウコギ科	1	-	2	-	-	1	1	-	-	-
ツツジ科	-	-	-	-	-	5	-	1	-	-
ハイノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エゴノキ属	1	-	-	-	-	1	2	-	-	-
イボタノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ガマズミ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
タニウツギ属	-	-	-	2	1	-	2	1	-	-
スイカズラ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
イネ科	24	20	35	115	16	42	33	20	21	39
カラマツリグサ科	1	1	1	-	1	2	2	2	-	-
ツユクサ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
クワ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ミテヤナギ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
サンエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-
リバ属	9	7	3	4	3	1	4	6	-	4
アカザ科	-	1	-	-	2	1	1	-	2	2
ナデシコ科	1	-	-	-	-	-	-	1	-	4
カラマツリウ属	1	1	4	1	1	-	2	1	-	-
キンボウゲ科	2	2	1	2	2	-	7	2	-	1
アブラン科	-	7	3	6	-	1	2	4	1	3
マメ科	-	-	1	-	-	1	2	1	-	1
フウロソウ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヒメハギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ワタ属近似種	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アリノトウガサ属	10	6	4	3	3	23	6	2	-	2
セリ科	-	-	2	-	1	4	1	-	-	-
ネナシカズラ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ソリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
オミナエシ属	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
マツムシソウ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	9	21	17	15	15	90	15	11	11	14
キモ里科	4	6	6	4	3	14	6	3	1	3
タンボボ科	15	10	13	14	3	27	1	2	8	11
不育花粉	1	1	-	1	1	4	3	5	1	5
ヒカゲノカズラ属	1	-	1	2	-	2	-	-	-	2
ゼンマイ属	-	-	1	1	-	5	-	-	-	-
他のシダ類胞子	16	21	17	18	7	16	17	10	35	64
樹木花粉	304	284	295	279	293	155	311	309	36	163
草本花粉	77	63	91	167	53	207	85	53	44	94
不明花粉	1	1	0	1	1	4	3	5	1	5
シダ類胞子	17	21	19	21	7	23	17	10	36	66
蝶花粉・孢子	399	369	405	458	354	390	416	377	117	328

第88図 大塚遺跡花粉分析結果(試抜小清)



第89図 大塚遺跡溝内堆植物花粉・胞子化石組成図(断面小溝)

## 第6節 考 察

### —A沢出土の弥生時代遺物について—

新潟県における縄文時代晩期末～弥生時代初頭の良好な資料が出土した遺跡としては、第90図に示したように、いずれも中越以東の地域に分布している。それに対し上越地域では、中郷村奥ノ城(岡本1982)、同龍峰遺跡(中島1986)から浮線文系土器の断片的な資料が出土している以外、当該期の状況は長らく不明であった。今回の調査資料は、その編年上の空白を埋めるものと考えられ、特に遠賀川式系土器の出土は県下では初例で、周辺地域との編年の対比を行うにあたって重要な資料である。以下では出土土器の編年的位置づけを中心に、伴出した石器について若干の考察を述べるものとする。



第90図 新潟県及び周辺の縄文晩期～弥生初頭主要遺跡

#### 出土土器について

**系統** 今回の調査で検出された土器には、遠賀川式系・条痕文系・東北系・浮線文系等の4系統以上の土器が存在し、複雑な状況を示している。遠賀川式系土器は壺A類のみで、他の器種は認められない。2個体存在するが、全形がほぼうかがえる第58図1は長野県松本市針塚遺跡出土土器(神沢1983)に類似し、また胎土中に顕著では無いが水晶の粗粒を含んでいる事から、信州方面から搬入された可能性が強い。東海地方の条痕文系土器の系譜を引く一群としては、壺B I～B III類があり、この他その在地化した姿(市沢・百瀬1985)とされる甕B I類が存在する。壺B Ia類は長野県大町市トチガ原遺跡(原田1980)、同飯島町うどん坂II遺跡(丸山・伊藤1973)等から出土しており、口唇部に押引きを持たず楔型式に近い内容を示す。壺B Ib～B II類は口唇部に押引きを持ち、器種不明の条痕文系土器の内第63図148・151・167等、貝殻及び半裁竹管で綫羽状の構図をとる一群と共に、水神平式土器に近い内容を示している。類例は長野県豊丘村林里遺跡(神村1967)、同天竜村満島南遺跡(丸山1966)等から出土している。壺B III類は岐阜県小坂町阿弥陀堂遺跡(大江1965)、満島南遺跡出土資料に類似するが、本例は頭部が縱方向、体部が斜方向で条痕の方向を違えている点で、上記遺跡より新しい様相を示すものと言える。甕B I類の内、口頭部と体部で条痕の方向を違える第59図13は、長野県中川村刈谷原遺跡・林里遺跡等に類例があり、この手法は水神平式併行期に出現し、岩滑式の段階まで残存する(市沢・百瀬1985)。第60図51は口縁端部が面取りされ、横方向に条痕が施されており、東海地方東部の丸子式に類似する。東北系土器としては壺D I～D II類・甕A類・高环A I～A II類・浅鉢A類があるが、高环・浅鉢が主体をなしている。同様の傾向は、石川県七尾市小島六

十刈遺跡(土肥・久田1986)においても指摘できるが、全体の組成の中で東北系土器の占める割合はさらに低くなっている。壺D I類は、大洞A式以後の壺形土器に系譜を追るもので、類例は新発田市村尻遺跡(岡ほか1982)等にある。他の器種も同様で、県北半を中心とする大洞式系土器に系譜が求められ、新潟県黒崎町諸立遺跡におけるA群土器(磯崎1969)に共通性が見出せる部分が多い。しかし高环A I類(第61図53)に見られる突起の形態や文様構成等に若干の変遷がうかがえ、地域性を示すものと考えられる。浮線文系土器としては壺E類、甕C類があげられるが、同系の土器の主要構成器種である浅鉢は全く見られず、小型の特殊な器種のみが存在する。壺E類(第58図7)は千葉県荒貝塚(西村1961)に類例がある。甕C類(第59図14)は正統な施文技法をとらず、沈線によって浮線文的な構図が描かれるもので、浮線文系土器の変遷した姿と考えられる。壺C類は大地型と呼称される壺形土器で、同系の土器は尾張・美濃・北陸を中心に分布し、水式に並行する美濃・尾張・信濃の土器群中に祖形を求めるものとされている(石川1980)。本類は石川の分類するE IV類にあたる。深鉢A~B類・甕B II類は信州における水式の粗製土器に系譜を引くものと考えられる。

**編年的位置** 以上各土器の系統について考察してきたが、次にその編年的位置について若干考察したい。本遺跡出土土器は前述したように多系統の土器によって構成されており、複雑な状況を示している。これらはどの程度の時間幅を持つものであろうか。本遺跡で主体をなす一群は、端部に押し引きを持ち縦羽状の横目をとる条痕文土器や、その在地化したものの存在から、東海地方における水神平式に並行する時期の所産と考えられる。多量の東北系土器を伴なう点以外、刈谷原・林里等、信州における当該期の遺跡と極めて近似した内容を示すが、いわゆる大地型の壺形土器が一定量出土している事から、北陸方面における柴山出村式との関連も重要であろう。東北系土器は器種の偏りが見られるが、ほぼ諸立A群に近い内容を示している。諸立A群は大洞A~A式に並行する長堀・鳥屋遺跡等、浮線文系土器群の次に位置づけられており(石川1983)、本遺跡における水神平式系土器との伴出は妥当性を持つものと考えられる。これらの主体をなす一群より古い様相を示すものとしては、櫻式に類似する壺B Ia類や正統な浮線文が施される壺E類がある。しかし櫻式的な口唇部無文の壺は、水神平式段階まで残存する例があり(佐藤1983)、浮線文系土器も、その主要構成器種である浅鉢が全く欠如している事や、土器集中地点において水神平式併行期の甕(第59図13)と伴出している事から、いずれも古い様相を残すが当該期に伴なうものと考えたい。主体をなす一群より若干新しい様相を示すものとしては、口縁端部が面取りされ横位に条痕が施された第60図51があり、東海地方東部の丸子式に類似する。しかし一点のみの出土であり、SK39において水神平式併行期の大地型土器(第58図4)と伴出しておらず、同時期の所産と考えたい。

以上のように本遺跡出土の土器は、ほとんど時期幅を持たないものと推定され、遺跡に残された小型打製石器・剝片・石核に数種類の母岩しか存在せず(註)、図版60・61に見られるよ

註 図版62-aの石核と242、同-bの石核と212・216・224・243、図版60の接合資料と227、石核の219と220がそれぞれ同一母岩である。黒曜石製のものについては詳細は不明だが、色調及び原面の状況から4~5母岩程度が存在するものと考えられる。

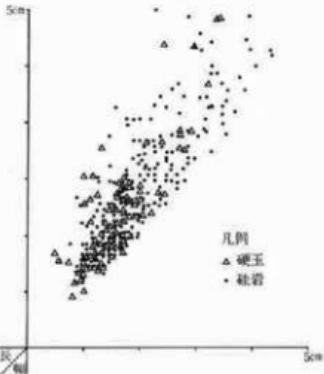
うに良好に接合された事からも、遺跡の存続が比較的短期間であった事を裏付けている。本遺跡の所属時期を周辺地域の幅年に対比させると、畿内における第一様式新段階(佐原1968)、東海西部(三河)における水神平式(紅村1967)、北陸西部における柴山出村II式(土肥・久田1986)、新潟県東部における縦立A群(磯崎1969)の時期にそれぞれ位置づけられよう。

#### 出土石器について

**組成** 大塚遺跡出土の弥生時代の石器は総数186点で、打製石斧・砥石が全体の過半数を占めており、この他石鏃・四石・敲石・磨石の出土量も比較的多い。本遺跡の所在する西頸城地方は、硬玉・滑石・蛇紋岩等の石材の原産地に近く、伝統的に玉や磨製石斧を多量に生産していた地域で、縄文晚期前一中葉の細胞(寺村1974)、寺地遺跡(寺村1987)でも、それに関わる工具や成品、未成品が石器組成の中で卓越している。打製石斧も一定量出土しているが、組成の中で占める割合は低く、大塚遺跡における状況とは異なる。次に周辺地域における当該期前後のそれと比較してみたい。本県中越地方における縄文晚期後葉の上野原遺跡(中島1981)～弥生時代中期前葉の尾立遺跡(寺崎1977)では、石鏃が組成の中心であり、打製石斧は極めて少ない。頸南地方でも同様な傾向を示すが、比較的磨製石斧の占める割合が高いのが特徴である。打製石斧を多用する地域としては、北陸西部及び中部高地があげられる。北陸西部では縄文時代後期以後も縄文中期的な石器組成が継続し、特に縄文後期後葉以後一段と打製石斧が増加する事が指摘されている(麻柄1984)。それに対し中部高地では縄文後期以後打製石斧が激減し、縄文後期後葉に再び増加する事から、土器の様相と共に東海地方からの影響が考えられる。また石鏃に関しては各遺跡でかなりのばらつきが有り、詳細は不明だが出土量は相対的に多い。

以上の事象を大塚遺跡のそれと比較すると、打製石斧が組成の中心をなし石鏃も比較的多く出土している事、当該期に爆発的に打製石斧の出土量が増大している事から、土器と共に中部高地との関係がより強いものと考えられる。

**玉造り** 本遺跡からは多量の硬玉・滑石原石及び荒削りされた素材・玉未成品が出土(図版58下・64・65上)しており、砥石の出土と共に当地で盛んに玉造りが行われていた事を示している。この他、粗削りされ角柱状を呈する硅岩標(図版65下・66)が267点出土している。これを用いた玉類は発見されていないが、形状及び大きさが硬玉の荒削り標とはほぼ一致することから、玉類の素材である可能性が強い。玉類には垂玉・管玉・小玉があり、形態的には縄文晚期以来のそれを受けつぐものと言える。玉の製作工程で注目すべき点は、滑石製小玉の中で、管玉状のも



第91図 硅岩・硬玉荒削り素材長幅比

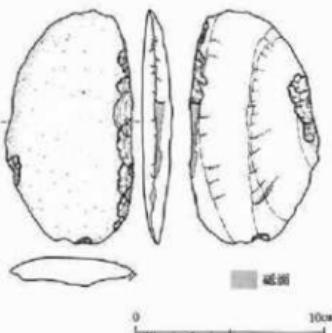
のを分割して作り出すものが存在する事と、硬玉を石材とする4点のうち3点までが、全く研磨が加えられない荒削りの状態で穿孔されている事である。後者は縄文時代後期の長岡市三十稻場遺跡(中村1966)、後～晚期の柏崎市小丸山遺跡(品田1985b)に類例があるが、同遺跡の中でも主体を占めるものではなく、一つの特色と考えられる。

次に砥石について考察したい。石材は全て細粒砂岩を用いており、砥石間における粒度の差は認められない。前章で述べたように砥面の形状から大きく3類(A～C類)に分類されるが、2種以上の砥面を持つものが多い。形態的には縄文晚期前～中葉の細池、寺地遺跡出土のものに類似するが、全体的にやや小型である。A・C類はそれぞれ筋砥石・平砥石と呼称されてきたもので自然礫あるいは大型の剥片を素材としている。粗い剥離・敲打で周縁の形状を整える場合が多いが、自然礫をそのまま用いている例も存在する。A類は1条ない

しは2～3条の平行する溝状の砥面を持つもので、寺地遺跡等に見られる多数の溝が不定方向に形成されるタイプは確認されていない。B類は内磨き砥石と呼称されてきたもので、全て剥片を素材としている。やはり粗い剥離によって厚さ及び周縁の形状を整えるものと、剥片の鋭い縁辺をそのまま砥面に用いる両者が存在する。本類は使用によって砥面の厚みを増してゆくが、ある段階で連続的な剥離が加えられ、砥面再生が行われている場合が有り、細池遺跡においても類例が知られている。第91図は細池遺跡出土のもので、本遺跡における砥石B類に相当する。横長剥片を素材とし、右側縁に砥面が形成されているか砥面再生に関わる剥離によって大半が除去されている。

以上のように本遺跡出土の玉造り関係の遺物は、形状及び製作技術の上で前時代との関連が強く、縄文的色彩を色濃く残すものと言える。これは当該期において丹後地方にまで達している弥生的な玉の製作技術とは対照的なもので、これ以後どの段階で弥生的な玉生産が開始されるかが今後の課題であろう。

(田中 錯)



第92図 新潟県細池遺跡出土砥石

## 第VI章 まとめ

### はじめに

原山・大塚遺跡は、昭和58年4月に実施された北陸自動車道建設に係る糸魚川地区の遺跡分布調査に於いて、再確認及び新発見された遺跡であった。両遺跡では昭和59年8月に確認調査が実施された。その結果、原山遺跡の発掘対象面積は約8,500m<sup>2</sup>～約13,000m<sup>2</sup>、大塚遺跡の発掘対象面積は約11,000m<sup>2</sup>と予想された。

この2遺跡は糸魚川市街地の南方約3kmの糸魚川台地上に位置し、周辺には苦竹原A・菊畠などの遺跡が分布している。2遺跡は沢を隔てて隣接しているため層位は極めて類似性が強い。しかし、台地上は土壤の堆積が薄く、表土下は郎地山(VI層)になっているため沢部分の層序を基本とした。

発掘調査は昭和60年8月20日から開始された。60年度は原山遺跡と大塚遺跡の一部で調査を行い、61年度は大塚遺跡の発掘を実施した。そして昭和61年7月26日には調査を完了した。

### 調査結果

この2遺跡からは先土器時代～江戸時代にかけての遺構や遺物が発見された。

先土器時代の遺物としては、大塚遺跡の8K13よりナイフ形石器が単独で出土したのみである。このナイフ形石器は黒曜石製で形状は糸魚川市中原遺跡から出土したものに類似し、AT降下層準(21200±700BP)よりも上位から検出されている。

縄文時代の遺構・遺物は原山・大塚の両遺跡から発見されている。遺構は土坑1基とTピット1基である。土坑は原山遺跡の7C11から検出され、一辺110cmの隅丸方形状を呈し、深さ30cmと浅い。上層から深鉢の破片がまとまって出土している。しかし、無文で口縁部と底部を欠いているため詳細な時期決定は困難であるが、縄文晚期後半以降に比定されるであろう。Tピットは大塚遺跡5I1・2で検出され、遺物は出土していないが覆土にIV層類似の土層が堆積していることから縄文前期後半～中期の所産と考えられる。その他の遺構としては大塚遺跡B沢10M16～18・21・22を中心として石器集中地点が検出されている。この石器集中地点は磨石・礫器・石核やチップなどで構成されており、土器は伴出していないが出土層位中にK-Ah(約6300年前)の降下層準の存在が予想されることなどから、早期に比定されるであろう。性格としては石器製作跡の可能性が強い。

縄文時代の遺物としては、前期～晚期までの土器とそれらに伴なう石器が出土している。これらの遺物は少量で、その多くは沢より出土している。

前期の土器は原山遺跡の6Eから出土した無模様土器で前期後葉の諸磯式土器並行期に比定されるものと考えられる。中期の土器は両遺跡の沢筋から出土している。いずれも中期後葉以降に比定され、北陸～東海地方的な雰囲気が感じられる。後期の土器は原山遺跡西斜面や大塚

遺跡B沢で少量出土したのみであるが、前葉～末葉までの資料が散見でき、中期と同様北陸的な色彩がうかがえる。晩期の土器は原山遺跡の沢及び大塚遺跡B沢より出土している。原山遺跡の土器は中葉に、大塚遺跡の土器は後葉に比定されるであろう。両者とも北陸地方の影響が顕著にうかがえる。

縄文時代の石器は両遺跡合わせて約195点出土しており、その内訳は原山遺跡122点、大塚遺跡73点余りである。器種は打製石斧・磨製石斧・磨石・くぼみ石・石錐などごく一般的な物の他、貝殻状削片が大量に出土しており、原山遺跡では68点を数えて全体の51%を占めている。この削片は表に自然面を残し、裏面を貝殻状に剥離しており、スクレイバー的なものや擦痕の見られるもの以外に貝殻状に剥離しただけのものもある。その出土例は現在のところ富山県東部～西頃城地方にかけて多く知られている。

弥生時代の遺構としては大塚遺跡A沢でSK39・集石・土器集中地点が検出された。SK39は10Ⅰ-3で検出された不正方形の土坑で、断面形は浅いスリット状をなし、覆土上層より遺物が多く出土している。集石は9Ⅰ20のⅢb層中で確認されたもので、大型の礫5個で構成されている。しかし、土器集中地点は人為的なものではなく、自然地形の窪地に土器等の遺物が廃棄もしくは堆積したと考えたほうがより妥当であろう。これらの遺構などから出土している遺物はいずれも弥生時代前期のもので、遺構もほぼこの時期に比定されるであろう。なお、今回の調査は遺跡の南端に限られていたため、法線外の遺跡北側部分に於いて今後住居跡等の遺構が検出される可能性は充分に残されている。

弥生土器は原山遺跡の台地上や沢部分及び大塚遺跡A沢に於いて出土し、いずれも前期に比定される土器である。特に、大塚遺跡A沢においては0層～Ⅲb層にかけて遠賀川式系土器をはじめとした貴重な資料が出土している。A沢出土の弥生土器には壺・深鉢・甕・高杯・浅鉢などがあり、壺は9類、深鉢は2類、甕は4類、高杯は2類、浅鉢は1類に分類される。壺は遠賀川式系・水神平式系・浮線文系・亀ヶ岡式系などで構成され、甕には全面に朱痕文を施したものもみられる。遠賀川式系土器及び水神平式系土器は長野県中・南信地方の福沢遺跡・針塚遺跡・刈谷原遺跡などの土器に類似していることから、フォッサマグナ(糸魚川～静岡構造線)沿いに北進してきたものと考えられる。高杯には変形工字文が施され、本県北部の村尻遺跡や緒立遺跡などの土器に共通性がうかがえるなど、亀ヶ岡式土器の影響を最も色濃く残している。また、深鉢や甕の一部には長野県の氷式の系譜を引くものもみられる。このような点からA沢の弥生土器を大観するならば、信州系列のものと本県北部系列のものに大きく2分されるであろう。なお、A沢の資料から鑑みて緒立遺跡A群土器など本県の縄文直後の弥生土器とされている土器群の中には、編年的位置が従来の弥生中期から前期へとさかのぼる土器もでてくるであろう。

弥生時代の石器はA沢の0層～Ⅲb層で出土しており、その出土総量は136点余りで、前期以外の土器が出土していないことから石器もその時期の所産と考えられる。器種としては石錐・石錐・打製石斧・磨製石斧・くぼみ石・砥石などで、弥生時代特有の石器はまったく出土してい

ない。また、硬玉や滑石を素材とした玉作りも行われており、玉の原石や未成品も出土している。しかし、その製作技術は縄文時代からの伝統を受け継いでおり、いわゆる弥生的な玉作り技法は見られなかった。内磨き砥石に於いては、砥面が肥厚すると砥面再生のための調整が加えられていることが明らかになり、この種の砥石は砥面に一定の薄さを保って初めて機能する砥石であったことがうかがえる。

平安時代の遺構としては、大塚遺跡の10H1で掘立柱建物跡1棟・土坑2基・ピット1基が検出されたのみであった。これらの遺構は出土遺物から9世紀中葉と10世紀前葉に大別され、前者はSK33とP35、後者はSB30とSK34によって構成されている。

平安時代の遺物は原山・大塚の両遺跡から出土している。原山遺跡からは須恵器の長頸壺・壺・瓶と土師器の壺・深鉢・小皿が出土し、そのほとんどは沢からの発見である。時期的には大半が9世紀に位置づけられるが、柱状高台の小皿は11世紀の所産であろう。大塚遺跡では須恵器の壺・壺蓋・長頸壺・土師器の鉢などが散漫に出土している。時期は9世紀中葉～10世紀前半と推定され、遺構の構築時期や原山遺跡から出土した須恵器・土師器とはほぼ同時期である。

江戸時代の遺構としては、原山遺跡で梵鐘鋳造跡が大塚遺跡で道路遺構・掘立柱建物跡・欲状小溝が検出された。梵鐘鋳造跡は梵鐘鋳造用土坑(SK21)・作業場(SB23)・土坑5基(SK20・22・33・35・37)からなり、台地の北側に集中している。作業場は東西2間(約5m)・南北3間(約9m)の掘立柱建物と予想される。作業面は土間状になっており、砂層上に新たな土を搬入していることから、建てかえが行われた可能性もうかがえる。梵鐘鋳造用の土坑は西側に突出部を持つ不整円形状を呈し、確認面からの深さ約2m(第1次作業面)と約1m(第2次作業面)の箇所に作業面が検出された。第1次作業面は1辺約3mの隅丸方形を呈した底面と西側に突出したテラス部分からなり、底面にはピット4基とこれらをつなぐ溝4本からなる排水跡が検出された。第2次作業面からは径約120cmの定盤が出土している。他の土坑の性格は不明である。しかし、SK22とSK33は検出位置などからみて同じ機能の土坑ではないかと予想され、SK22はSK33に切られていることからSK33よりも古い年代の土坑である。このようなことから、梵鐘鋳造跡には少なくともSB23の砂層面—SK21の第1作業面—SK22とSB23の粘土層面—SK21の第2次作業面—SK33という2時期の存在が予想される。

梵鐘鋳造跡からは、梵鐘鋳型・こしき炉・三叉形土製品・瓦・鐵釘等が出土しているが、鋳造跡の年代や鋳造者を特定する遺物は出土しなかった。しかし、17世紀後半に比定される伊万里焼の小破片がSK21から出土していることや瓦に「延享四」(1747)という年号が刻印されていることからこの梵鐘鋳造跡の上限は18世紀後半と推定できよう。文献資料によれば文化(1804)以前の糸魚川の鋳物師は一の宮村の森半左衛門と作右衛門の2名が知られているが、半鐘などには網嶋三郎・網嶋作右衛門の銘もみられる。森家の資料によれば、森家は近江系の鋳物師で代々鋳物業を営んできたが一時休職し、寛政11年(1799)に京都真継家へ許状を受けに上京しており、文政13年(1830)の許状が残っていることから糸魚川在住の勤許鋳物師であった。森家の

鉄造品には梵鐘類が多いことや2時期にわたる遺構の状況と一定期間鉄物業を休業している事実が合致することから梵鐘鉄造跡は森家の鋳造所であった可能性もうかがわれる。

道路遺構は大塚遺跡の5~8Ⅰで検出され、延長88m・幅2.6m~3.4mで法線内を南北に縱断する。道路面は堅く踏み締められ、砂利敷きでところどころにビット列がみられた。この道路遺構は信州街道(塩の道)で砂利に混じって出土した伊万里焼や唐津焼などから17世紀中葉を上限とし19世紀を下限とするものであろう。

擡立柱建物跡(SB31)は7HⅠの道路遺構に面して検出された。規模は4間(11.3m)・3間(7m)で、東側に2間(5.5m)・1間(2.5m)の張り出し部分が付属する總柱建物であった。柱穴の覆土と道路遺構の覆土が一致することから、道路遺構と同一時期と考えられる。性格としては、道路遺構に面していることや聞き込み調査からボッカ茶屋の可能性が最も高い。

敵状小溝は9~11O Pと7・8 J・Kの2地点で検出され、敵の方向から3群に分けられる。敵間は平坦地で0.7m、斜面地で1.5mを測り検出面積は約590m<sup>2</sup>(9~10O・P)と350m<sup>2</sup>(7・8J・K)である。この遺構は畑跡と考えられており、溝の中からは道路遺構と同様に17世紀~19世紀前半に比定される伊万里焼や唐津焼が出土している。

#### 科学的分析

科学的な分析としては、大塚遺跡の石器集中地点と先土器時代のナイフ形石器出土地点の火山灰分析、蛇紋岩と推定される礫の螢光X線分析、大塚遺跡A沢の堆積土と敵状小溝覆土の花粉分析等を行った。

その結果石器集中地点が包含されていたIV層にはK-Ah(鬼界アカホヤ火山灰・約6300年前)降下層準があることが予想され、ナイフ形石器はAT(ブルウォール型ガラス・21,000年~22,000年前)降下層準の上位から出土したことが明らかになった。螢光X線の分析結果からは分析した礫は純蛇紋岩系で流紋岩質ではないことが判明した。大塚遺跡A沢の花粉分析は、9試料で行われ、14科・2亜科・28属・3亜属・1種・その他の合計44分類群が同定された。しかし、花粉化石や植物遺体は変質しているものが多く、古植生の変化や古環境について十分な推定を行うことは困難であった。変質の要因としては野火や焼畑による炭化作用が考えられる。敵状小溝の覆土内の状態もほぼ同様であったが、ソバ類と松の花粉化石が目立った。この分析結果は、糸魚川近郊の台地上では「塩焼き」の燃料として赤松を植林し、伐採後は雜木や雜草を焼き払い、2~3年間ソバを栽培した後再び赤松を植林していたという地元の人達の言を科学的に立証している。

#### 総 摘

原山・大塚遺跡の所在する台地上からは小規模又は少量ではあるが、先土器時代~江戸時代の遺構・遺物が発見された。これらの調査結果からこの台地上は長期間にわたって何らかの形で利用されていたものと考えられる。

先土器時代は単独遺物の出土にとどまり、縄文時代においても石器集中地点やTビットなど

が検出されたのみである。遺物も集落跡に比較して少量であることから、縄文時代にはこの台地上は居住空間とは異なる生活空間として利用されていたことが予想される。

弥生時代の遺構・遺物は大塚遺跡A沢と原山遺跡の台地上から発見されており、いずれも前期に比定されている。出土遺物の種類や量から予想して住居跡などの生活跡が調査区の周囲に存在する可能性が大きい。両遺跡では壺形土器や腹形土器の一部に弥生文化の影響が明らかにうかがえるが、石器や玉作技術などには弥生文化の影響は全く認められなかった。即ち、土器の一部は弥生土器であったが、他の遺物は縄文文化の延長線上に位置しており、このような様相は当地域以東の越後全体においてもほぼ同様であったものと考えられる。

平安時代の遺構は大塚遺跡の台地上西側で検出されたが集落跡ではなく、掘立柱建物跡にしても「野中の一軒家」を連想させるようなものであった。

江戸時代になるとこの台地上は畝状小溝が物語るように畠地として開墾され始め、信州街道が南北に走り、街道脇には茶屋が営まれるなど郊外地の様相を呈していたと推定される。そして、18世紀後半～19世紀前半には原山遺跡で焼窯の築造が行われていた。信州街道は「塙の道」とも呼ばれ、江戸時代には越後と信州を結ぶ重要な交易ルートであったが、それは江戸時代に限ったことではなく古くから海岸部と山間部を結ぶ交易ルートとして重要な役割を果たしていくであろうことが原山・大塚遺跡や街道沿いの他遺跡の出土遺物からうかがえる。

このように原山・大塚遺跡が所在する地区には先土器時代から人々の活動の痕跡が残され、それらは弥生時代前期に一つのピークを迎えるが、点在的な活動痕跡を示すにすぎない。この地区が面的に活用されるのは江戸時代以降で、それも大半は畠地や林野としてで、本格的に聚落が営まれ始めたのはごく最近のことである。

(寺崎裕助)

## 引用文献

- 青木重孝 1978 「第7編 沖の口／運上」『糸魚川市史3』 糸魚川市役所
- 青木重孝 1981a 「第2編 新檢／前後」『糸魚川市史5』 糸魚川市役所
- 青木重孝 1981b 「第8編 商と工と」『糸魚川市史5』 糸魚川市役所
- 荒川正明 1985 「遺物・御館」 新潟県小国町教育委員会
- 石尾政信 1982 「京都市広隆寺の梵鐘鋳造遺構について」『梵鐘鋳造遺構の現状とその諸問題』 京都市埋蔵文化財調査研究センター
- 石川日出志 1981 「三河・尾張における弥生文化の成立」『駿台史学』52 駿台史学会
- 石川日出志 1983 「新潟県における縄文時代晩期末から弥生時代に至る土器群の推移」『東日本における黎明期の弥生土器』 北武考古古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会
- 五十川伸矢 1982 「京都大学教養校内A P22区の梵鐘鋳造遺構について」『梵鐘鋳造遺構の現状とその諸問題』 京都市埋蔵文化財調査研究センター
- 磯崎雅彦・上原甲子郎 1969 「亀ヶ岡式文化外殻圓における終末期の土器形式」『石器時代』9号 石器時代研究会
- 市沢英利・百瀬長秀 1985 「長野県「条痕文系土器をめぐる諸問題—縄文から弥生—資料編I」 愛知県考古学談話会
- 糸魚川市史編さん委員会 1986 「新削跡跡」『糸魚川市史 資料集1 考古編』 糸魚川市役所
- 大江 伸 1965 「阿弥陀堂遺跡」「飛驒の考古学」
- 大橋康二 1984 「国内出土の肥前陶磁」 佐賀県立九州陶磁文化館
- 大森 敏 1984 「新潟県糸魚川市遺跡詳細分布調査報告書」 糸魚川市教育委員会
- 岡本都栄<sup>11a</sup> 1982 「奥ノ城(西巣)遺跡—第二次発掘調査概報—」 中郷村教育委員会
- 小野 昭・前山精明 1986 「速報・豊原遺跡試掘調査の成果—獸骨・魚骨が出土した縄文時代の低湿地遺跡『まきの木』第35号 川町郷土資料館友の会
- 小原昭二 1963 「近世における真鍮支配の飾物部統制について」『地方史研究』3卷6号
- 柏崎市教育委員会 1982 「柏崎市の文化財」
- 神村 透 1967 「豊丘村林里遺跡」「長野県考古学会誌」4号 長野県考古学会
- 川上 元 1986 「信濃国における古代末期の土器様相」「神奈川考古」21号 神奈川考古同人会
- 神崎 勝 1982 「兵庫県多可郡中町天田地区(多可寺)梵鐘鋳造遺構について」『梵鐘鋳造遺構の現状とその諸問題』 京都市埋蔵文化財調査研究センター
- 神沢昌二郎 1983 「針塚遺跡」「長野県史 考古資料編 主要遺跡(中信地方)」 長野県史刊行会
- 岸本雅敏・山本正放 1986 「南太閤山I 遺跡」「都市計画街路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(4) 富山県教育委員会
- 桑原紀昭 1983 「光明寺一件」「柏崎刈羽」11号 柏崎刈羽郷土史研究会
- 桑原紀昭 1985 「近世越後の鉄物師達 上」「柏崎刈羽」13号 柏崎刈羽郷土史研究会
- 桑原紀昭 1986 「近世越後の鉄物師達 下」「柏崎刈羽」14号 柏崎刈羽郷土史研究会
- 古泉 弘 1983 「江戸を掘る」 柏書房
- 甲野 勇・中村 成 1965 「鉄物師間氏とその作業場—第一編発掘の概況」「武藏野」第44卷 第2・3号
- 紅村 弘 1949 「西志賀貝塚出土の一土器について」「考古学叢刊」1-3 東京考古学会
- 紅村 弘 1967 「水神平式土器とその周辺」「信濃」19-4 信濃史学会
- 小島幸雄 1979 「岩木地区遺跡群発掘調査報告書」 上越市教育委員会
- 小林秀夫<sup>11a</sup> 1982 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5 昭和52・53年度—」 長野県中央道遺跡調査団
- 小林康男<sup>11a</sup> 1985 「童の前・福沢・青木沢」 塩尻市教育委員会
- 坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」「上新バイパス関係発掘調査報告I」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1986 「平安時代中期の土器」「上越市春日・木田地区発掘調査報告書II」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・高橋 保・田辺早苗 1986 「上越市春日・木田地区発掘調査報告書II」 新潟県教育委員会
- 坂本美夫 1986 「柱状高台の里・环について」「神奈川考古」21

- 笠本正治 1984 a 「近世の鉄物師と真跡家」『歴史学研究』 1984年度大会特集号
- 笠本正治 1984 b 「近世初期における真跡家支配」『名古屋大学文学部研究論集LXXXIX』
- 佐藤由紀男 1983 「東海地方東部における畿内第I様式・第II様式に並行する土器の編年について」『東日本における黎明期の弥生土器』 北武藏古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学研究会
- 品田高志 1985 a 「札坊遺跡」『吉井遺跡群』 柏崎市教育委員会
- 品田高志 1985 b 「足小丸山遺跡」「刈羽大平・小丸山遺跡」 柏崎市教育委員会
- 鈴木木夫 1983 「I 地形分類図」『新潟県上越地域土地分類基本調査糸魚川』 新潟県農地部農村総合整備課
- 間 雅之 1972 「田伏玉作遺跡」糸魚川市教育委員会
- 間 雅之<sup>12</sup> 1982 「村尻遺跡I」 新潟市教育委員会
- 高橋 保・坂井秀弥 1983 「栗原遺跡第6次調査概報」 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1986 「調査に至る経緯」「北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書I」 新潟県教育委員会
- 高橋 保・小池義人<sup>13</sup> 1986 「北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書I」 新潟県教育委員会
- 田嶋明人 1986 「9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」「漆町遺跡I」 石川県立埋蔵文化財センター
- 坂田松雄 1980 「杉の歴史：過去一万五千年間」『科学50』No.9
- 坂田松雄 1981 「過去の歴史一万二千年間—日本の植生変遷史II 新しい花粉帶」「日生態会誌」31
- 辻 誠一郎・南木睦彦・小杉正人 1985 「茂林寺沼及び低地埋蔵文化財調査報告書 第2集 館林の池沼群と環境の変遷史」 館林市教育委員会
- 土田孝雄 1986 「道者ハバ遺跡」「糸魚川市史 資料集I—考古編」糸魚川市教育委員会
- 坪井良平 1970 「日本の花鏡」 角川書店
- 坪井良平 1983 「江戸時代以降越後・佐渡鉄物師名鑑稿(1)」「かみくひむし」52号 かみくひむしの会
- 坪井良平 1984 「江戸時代以降越後・佐渡鉄物師名鑑稿(2)」「かみくひむし」53号 かみくひむしの会
- 寺崎裕助 1977 「尾立遺跡」「埋蔵文化財報告書—麻績遺跡・尾立遺跡・田富岡農学校跡遺跡—」 長岡市麻績遺跡発掘調査委員会
- 寺崎裕助 1985 「八反田遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査だより」No.1 新潟県教育行政課
- 寺崎裕助・肥田野弘之・田中 翔 1985 「上越市春日・木田地区発掘調査報告書III」 新潟県教育委員会
- 寺村光晴・安藤文一<sup>14</sup> 1974 「細池遺跡」糸魚川市教育委員会
- 寺村光晴・安藤文一・千家和比古 1979 「大角地遺跡」青海町教育委員会
- 寺村光晴・青木重孝・間 雅之 1987 「史跡 寺地遺跡」 新潟県青海町
- 戸根与八郎・坂井秀弥<sup>15</sup> 1984 「上新ハイバス関係発掘調査報告I」 新潟県教育委員会
- 戸根与八郎・田海義正・鈴木俊成 1987 「北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 宮ノ平遺跡ほか9遺跡」 新潟県教育委員会
- 土肥富士夫・久田正弘 1986 「小島六十九刈遺跡」 七尾市教育委員会
- 友野良一 1979 「寺平遺跡の梵鐘跡遺跡」「月刊文化財」194号 第一法規出版
- 中島栄一 1981 「上野原遺跡」「三条市史 資料編」第一卷 三条市役所
- 中島栄一<sup>16</sup> 1986 「龍峯遺跡 一発掘調査概報一」 中郷村教育委員会
- 中村孝三郎 1966 「三十櫛塙遺跡」「先史時代と長岡の遺跡」 長岡市立科学博物館
- 橋崎彰一・齊藤孝正 1983 「猿投窓の編年について」「愛知県古窓跡群分布調査報告書(III)」 愛知県教育委員会
- 新潟県 1944 「新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告」第12輯
- 新潟県教育行政課 1979 「新潟県遺跡地図」 新潟県教育委員会
- 新潟大学研究グループ 1976 「地の構図」「糸魚川市史I」 糸魚川市役所
- 西村正衡 1961 「千葉県成田市荒海貝塚」「古代」第36号 早稲田大学考古学会
- 新戸部 隆 1973 「花粉分析について」「亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書」 青森県教育委員会
- 能生地すべり団体研究グループ 1971 「新潟県西頃城郡能生町幕崎地区における地すべりについて 一新潟県の第四系そのXV—」「新大高田分校研究紀要」16
- 長谷 進・辻本 驚 1981 「中居金星の浜鉄物跡調査」 穴水町教育委員会

- 長谷川一英 1986 「第2節 鑄物遺跡群の調査」『真福寺遺跡—調査の概要』 大阪府教育委員会・大阪文化財センター
- 林 博通 1978 「梵鐘を鑄造した遺跡の調査」『月刊文化財』176号 第一法規出版
- 原田 嘉 1980 「トチガ原遺跡立合調査」『信馬遺跡II』 大町市教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1985 「微化石 植物遺体等の同定及び火山灰の検出、年代測定報告」『大久保条里遺跡発掘調査報告書(第一次)』 浦和市遺跡調査会
- 藤田富士夫 1983 「块状耳飾の編年に関する一試論」『北陸の考古学』 石川考古学研究会
- 麻柄一志 1984 「縄文時代の石器組成と植生—いわゆるナラ林文化論へのアプローチとして—」『大境』第8号 富山考古学会
- 丸山敏一郎 1966 「長野県下伊那郡天竜村平岡南遺跡出土遺物について」『信濃』18-4 信濃史学会
- 丸山敏一郎・伊藤 修 1973 「うどん坂II」『中央道発掘調査報告書—般島町その3』 長野県教育委員会
- 南 久和・増山 仁 1986 「金沢市新保本町チカモリ遺跡—第4次発掘調査兼土器編—」 金沢市教育委員会
- 安田喜憲 1982 a 「古環境をめぐる自然科学調査 花粉分析」『小泉遺跡』 大門町教育委員会
- 安田喜憲 1982 b 「縄文人とその環境」『縄文文化の研究1』 離山閣出版
- 桜井 雄 1977 「富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要」 大沢野町教育委員会
- 湯尻修平 1983 「柴山出村式土器について」『北陸の考古学』 石川考古学研究会

第2表 墓山遺跡出土石器観察表(1)

No.	器種名	出土地・地区 層位・遺構	長×幅×厚 (cm) (cm) (cm)	重 (g)	石材	備考
1	打製石斧	台地-7 B-表土	(12.5)×(5.0)×2.5	184.0	蛇紋岩	刃部欠損
2	"	台地-7 C-S K21	(7.1)×(7.5)×(3.1)	210.0	砂岩	"
3	"	台地-7 D-S B23	(7.8)×(6.2)×(2.2)	107.0	"	"
4	"	台地-7 ~ 8 D	7.8 × 4.6 × 1.1	40.0	流紋岩	第30回-128
5	"	台地-7 ~ 8 D-表土	(9.1)×(6.5)×(2.9)	230.0	蛇紋岩	刃部欠損
6	"	沢-3 F-II	(6.5)×4.4×1.7	63.5	"	
7	"	沢-4 E-II	9.5 × 8.1 × 1.7	165.0	ハシレイ岩	
8	"	沢-4 F-III	8.3 × 4.2 × 1.2	46.0	頁岩	
9	"	沢-4 F-III	4.7 × 3.6 × 0.7	10.5	?	
10	"	沢-5 E-III	24.7 × 6.5 × 1.5	200.0	粘板岩	第30回-136
11	"	沢-5 F	10.0 × 5.7 × 2.0	114.0	頁岩	第30回-130
12	"	沢-5 F	(5.7)×6.0 × 2.0	85.5	砂岩	刃部欠損
13	"	沢-6 E	15.2 × 12.4 × 3.5	710.0	"	第30回-133
14	"	沢-6 F-III	13.5 × 6.1 × 2.3	220.0	蛇紋岩	第30回-134
15	"	沢-6 F	13.4 × 6.9 × 2.1	215.0	安山岩	第30回-135
16	"	沢-6 F	9.9 × 4.6 × 1.5	85.0	粘板岩	第30回-129
17	"	沢-7 E	12.5 × 6.2 × 2.5	215.0	蛇紋岩	第30回-131
18	"	沢-7 E	(11.3)×(5.2)×(1.5)	79.0	"	
19	"	沢-7 ~ 8 E F-III	11.6 × 5.7 × 2.2	155.0	砂岩	第30回-132
20	"	沢-8 E	(18.1)×(6.4)×(2.8)	360.0		第30回-137
21	"	沢-8 E	(7.5)×5.3 × 2.3	113.5	砂岩	刃部欠損
22	"	沢-8 E	(6.6)×4.5 × 2.2	84.0	頁岩	"
23	磨製石斧	台地-2 B-表土	5.1 × 2.8 × 1.0	22.5	蛇紋岩	未成品
24	"	台地-7 C-表土	3.7 × 1.6 × 0.5	5.0	"	第34回-172
25	"	台地-7 C-表土	(3.8)×(2.2)×(1.1)	12.5	"	未成品
26	"	沢-3 F-II	(9.3)×(5.2)×(1.9)	159.5	"	第31回-151
27	"	沢-4 E	(6.7)×4.6 × 1.4	68.0	"	頭部欠損
28	"	沢-4 F-III	(5.9)×(4.4)×(0.8)	32.0	"	第31回-152
29	"	沢-4 F-III	(2.1)×(3.4)×(0.8)	6.0	"	刃部片
30	"	沢-5 F	(7.6)×(4.8)×(1.8)	108.5	"	第31回-155
31	"	沢-6 F-III	(3.9)×(3.5)×(0.8)	19.0	"	第31回-154
32	"	沢-7 E-III	(9.2)×5.1 × 2.9	200.0	"	第31回-153
33	"	沢-7 E-III	(7.6)×(5.5)×(2.1)	136.0	"	頭部欠損
34	"	沢-7 E	5.5 × 3.3 × 1.3	37.0	"	第34回-173
35	"	沢-7 ~ 8 E F-IV	(5.0)×(6.7)×(1.8)	58.5	"	頭部欠損
36	"	表採	(7.1)×4.6 × 1.8	106.0	"	第1回-2
37	"	表採	(2.2)×(3.4)×(0.8)	6.0	"	未成品
38	敲石	沢-5 E	7.2 × 7.2 × 5.8	570.0	砂岩	第32回-157
39	凹石	台地-7 D-S B23	10.4 × 7.1 × 3.3	290.0	砂岩	
40	"	沢-6 E	10.1 × 8.3 × 5.5	640.0	?	第32回-164
41	"	沢-7 F-III	14.5 × 12.0 × 5.4	1485.0	閃綠岩	第32回-163
42	"	沢-7 F	11.1 × 10.3 × 6.8	855.0	花崗岩	
43	"	沢-7 ~ 8 E F-IV	8.3 × 7.1 × 3.7	240.0	石英安山岩	第32回-160
44	"	沢-III	10.7 × 8.0 × 4.5	570.0	石英斑岩	第32回-162
45	"	沢-III	11.8 × 9.8 × 5.0	950.0	ハシレイ岩	第32回-161
46	磨石	台地-6 B	14.5 × 7.0 × 2.6	450.0	頁岩	第32回-158

第2表 原山遺跡出土石器観察表(2)

No.	器種名	出土地・地区 層位・遺構	長×幅×厚 (cm) (cm) (cm)	重 (g)	石材	備考
47	磨石	台地-7 B	9.5 × 7.5 × 4.3	450.0	雲母花崗岩	第32回-159
48	"	沢-7 E	8.4 × 6.1 × 3.3	270.0	蛇紋岩	第32回-156
49	"	沢-7 F	9.8 × 9.3 × 4.3	600.0	安山岩	第33回-156
50	"	沢-7 ~ 8 E F-III	13.2 × 11.8 × 9.4	1960.0	"	第33回-165
51	砥石	台地-8 D	(9.3) × 7.2 × 1.8	133.0	砂岩	第34回-170
52	"	沢-7 E-III	(6.1) × 9.8 × 2.0	122.0	"	第34回-169
53	"	表揮	(4.4) × (3.3) × (0.7)	9.5	"	第34回-168
54	石鍬	沢-4 E	(4.6) × 5.2 × 1.2	32.0	"	第34回-167
55	石匙	台地-7 D-表土	4.3 × (6.8) × 0.9	25.0	頁岩	第34回-171
56	石鎌	台地-7 C-表土	3.3 × 1.4 × 0.45	2.0	珪質頁岩	第34回-177
57	"	表揮	1.8 × 1.15 × 0.3	0.2	黑曜石	第34回-175
58	"	表揮	2.7 × (1.7) × 0.8	2.0	水晶	第34回-174
59	"	表揮	(1.7) × 1.6 × 0.5	1.0	"	第34回-176
60	"	表揮	(2.6) × 1.45 × 0.5	1.5	頁岩	第1回-1
61	ビエスキーユ	台地-7 D	3.0 × 1.7 × 1.25	6.0	流紋岩	第34回-179
62	石核	沢-6 F-III	14.6 × 11.2 × 2.9	465.0	塊板岩	第30回-138
63	R・フレーク	台地-7 D	2.6 × 1.2 × 0.7	1.5	石英画面岩	第34回-178
64	貝殻状剥片	台地-3 B	7.5 × 11.4 × 2.0	192.5	砂岩	
65	"	台地-4 B	7.0 × 9.3 × 1.5	94.0	"	第31回-143
66	"	台地-5 B	5.2 × 4.8 × 1.1	32.0	"	第30回-140
67	"	台地-5 ~ 6 B	5.9 × 6.3 × 2.0	66.0	"	
68	"	台地-6 B	6.3 × 6.8 × 1.2	54.5	頁岩	
69	"	台地-7 B	7.9 × 10.8 × 1.8	146.0	安山岩	
70	"	台地-7 B	5.3 × 7.2 × 1.35	57.0	頁岩	
71	"	台地-7 B	5.0 × 6.4 × 1.0	37.0	"	
72	"	台地-7 B	3.8 × 4.8 × 0.9	19.0	"	
73	"	台地-7 B-表土	3.9 × 4.5 × 0.85	12.0	"	
74	"	台地-7 C-表土	11.1 × (9.3) × 3.1	355.0	"	
75	"	台地-7 C-表土	3.1 × 3.8 × 0.7	8.0	"	
76	"	台地-7 C-表土	4.9 × 8.5 × 1.0	42.5	"	
77	"	台地-7 C-表土	(8.2) × (7.1) × 2.7	161.0	"	
78	"	台地-7 C-表土	6.7 × 7.9 × 1.9	104.0	砂岩	第31回-146
79	"	台地-7 C-表土	7.4 × 8.8 × 1.65	123.0	粘板岩	
80	"	台地-4 D	5.4 × 12.4 × 1.8	106.0	頁岩	
81	"	台地-5 D-表土	(4.7) × (4.9) × 1.2	20.0	砂岩	
82	"	台地-7 D-S B23	7.0 × 11.6 × 1.95	155.0	"	
83	"	台地-7 D-S B23	8.4 × 10.7 × 1.6	184.0	頁岩	第31回-149
84	"	台地-7 D-S B23	5.6 × 7.5 × 1.7	50.0	蛇紋岩	第31回-144
85	"	台地-7 D	6.1 × 7.5 × 1.7	93.0	砂岩	
86	"	台地-7 ~ 8 D-表土	(5.3) × 5.2 × 1.0	30.0	"	
87	"	沢-3 E	13.2 × 9.1 × 2.6	400.0	結晶片岩	
88	"	沢-3 F-III	3.2 × 6.9 × 1.5	41.5	頁岩	
89	"	沢-3 F-III	6.6 × 9.4 × 1.2	81.5	砂岩	第31回-141
90	"	沢-3 ~ 4 F-II	10.8 × 16.6 × 3.0	510.0	"	
91	"	沢-4 F-III	7.4 × 11.3 × 2.3	192.0	"	第31回-148
92	"	沢-4 F-III	6.7 × 12.0 × 1.9	135.0	粉岩	

第2表 原山遺跡出土石器觀察表(3)

No.	器種名	出土地・地区 層位・遺構	長×幅×厚 (cm) (cm) (cm)	重 (g)	石 材	備 考
93	瓦紋状剥片	沢-4 F-III	7.7 × 8.1 × 1.9	115.0	頁岩	
94	"	沢-4 F-III	6.4 × 6.3 × 1.3	50.5	"	
95	"	沢-4 F-III	7.0 × 11.2 × 1.7	162.0	"	
96	"	沢-4 F-III	3.9 × 5.9 × 1.0	20.5	"	
97	"	沢-4 F-IV	8.8 × 12.8 × 2.1	206.0	"	
98	"	沢-4 F	6.0 × 9.0 × 1.2	57.0	"	
99	"	沢-4 F	6.4 × 8.3 × 1.4	78.5	頁岩	
100	"	沢-4 F	8.2 × 12.8 × 1.7	190.0	珪質片岩	第30回-139
101	"	沢-4 F	6.8 × 8.4 × 1.4	80.5	粘板岩	
102	"	沢-4 F	6.3 × 7.8 × 1.4	82.0	砂岩	
103	"	沢-5 E	4.2 × 10.8 × 1.6	64.0	頁岩	
104	"	沢-5 E	6.8 × 9.3 × 1.6	118.0	玢岩	
105	"	沢-5 F-III	6.0 × 7.9 × 1.15	51.0	砂岩	
106	"	沢-5 F-III	5.2 × 6.6 × 0.9	34.0	頁岩	
107	"	沢-5 F	4.0 × 6.3 × 1.2	32.0	砂岩	
108	"	沢-5 F	3.9 × 6.6 × 7.5	20.5	"	
109	"	沢-5 F	10.0 × 13.2 × 3.0	435.0	"	
110	"	沢-5 F	4.1 × 6.3 × 1.0	25.5	頁岩	
111	"	沢-5 F	4.8 × 5.7 × 1.8	50.0	"	
112	"	沢-5 F	5.8 × 8.4 × 1.6	85.5	安山岩	
113	"	沢-5 F	8.0 × 8.2 × 1.6	119.5	?	第31回-145
114	"	沢-6 F-III	6.3 × 11.5 × 2.2	120.0	粘板岩	
115	"	沢-6 F-III	5.9 × 7.6 × 1.4	72.0	流紋岩	
116	"	沢-6 F-IV	8.7 × 10.4 × 1.6	173.5	粘板岩	第31回-150
117	"	沢-7 E-III	5.4 × 12.0 × 1.5	119.0	砂岩	第31回-147
118	"	沢-7 E-III	7.9 × 10.5 × 2.0	153.5	"	
119	"	沢-7 E-III	8.5 × 11.8 × 2.0	169.0	玢岩	
120	"	沢-7 E-III	8.6 × 11.2 × 2.0	188.0	粘板岩	
121	"	沢-7 E	4.8 × 7.4 × 1.0	32.5	頁岩	
122	"	沢-7 E	4.25 × 5.1 × 0.7	13.5	"	
123	"	沢-7 E	6.2 × 8.9 × 1.5	85.5	砂岩	
124	"	沢-7 E	8.0 × 8.2 × 1.6	119.5	?	
125	"	沢-7~8 EF-III	13.2 × 9.1 × 2.6	400.0	結晶片岩	
126	"	沢-8 E	6.6 × 8.5 × 1.8	107.0	砂岩	
127	"	表採	9.0 × 10.9 × 2.3	210.0	"	
128	"	表採	5.8 × 7.5 × 1.8	90.0	頁岩	
129	"	表採	6.0 × 7.65 × 1.15	61.0	"	
130	"	表採	3.7 × 5.25 × 0.85	17.0	"	
131	"	表採	6.2 × 8.6 × 1.0	56.0	"	第31回-142
132	块状耳飾	台地-7 C	直徑 2.7 × 0.4	4.0	滑石	第34回-185
133	バステル形石製品	台地-7 C-表土	2.0 × 0.4 × 0.3	0.2	"	第34回-182
134	"	台地-7 C-表土	3.7 × 0.6 × 0.5	2.0	"	第34回-184
135	"	台地-7~8 D-表土	3.9 × 0.6 × 0.6	2.0	"	第34回-183
136	玉未成品	台地-7 C	2.6 × 0.9 × 0.5	2.0	"	第34回-181
137	"	表採	1.6 × 0.7 × 0.65	1.0	"	第34回-180

第3表 大塚遺跡出土石器観察表(1)

No	器種名	出土地・地区 層位・遺構	長×幅×厚 (cm) (cm) (cm)	重 (g)	石 材	備 考
1	石 鏟	A沢-9 I-I	2.9×1.7×0.3	0.8	チャート	第66回-210
2	#	A沢-9 I-II b	(2.4)×1.3×0.4	0.5	真 岩	第66回-211
3	#	A沢-9 I-II a	(1.1)×(1.7)×0.4	0.9	#	第66回-212
4	#	A沢-9 I-II a	2.1×1.3×0.4	0.3	黒 曜 石	第66回-213
5	#	A沢-9 I-II a	(1.8)×1.2×0.2	0.2	#	第66回-214
6	#	A沢-9 I-II a	(1.7)×1.2×0.3	0.1	#	第66回-215
7	#	A沢-9 I-I	(1.5)×1.7×0.4	0.2	真 岩	第66回-216
8	#	A沢-9 I-II a	2.0×1.4×0.5	0.6	チャート	第66回-217
9	#	A沢-9 I-II	1.9×1.0×0.3	0.3	安 山 岩	第66回-218
10	#	A沢-9 I-II b	1.9×(0.7)×0.3	0.2	オ バ ール	第66回-219
11	#	A沢-9 I-I	2.0×1.5×0.5	1.0	#	第66回-220
12	#	A沢-9 I-II a	2.1×1.4×0.5	0.9	黒 曜 石	第66回-221
13	#	A沢-9 I-II a	1.8×1.0×0.9	0.8	#	第66回-222
14	#	A沢-9 I-II b	1.8×1.0×0.3	0.2	#	第66回-223
15	#	A沢-9 I-II a	3.2×2.5×0.7	4.0	真 岩	第66回-224
16	#	A沢-9 I-II a	2.9×2.3×0.7	2.2	黒 曜 石	第66回-225
17	#	A沢-9 I-II a	2.7×1.2×0.6	1.1	#	第66回-226
18	#	A沢-9 I-II a	2.1×1.7×0.8	1.8	流 紋 岩	第66回-227
19	#	A沢-表鉢	1.1×1.3×0.6	0.7	黒 曜 石	第66回-228
20	#	A沢-9 I-II b	1.8×1.3×0.3	0.2	#	第66回-229
21	#	A沢-9 I-II a	2.0×0.9×0.6	0.3	#	未成品
22	#	A沢-9 I-II a	1.7×1.1×0.6	0.9	#	#
23	#	A沢-9 I-II a	1.6×1.4×0.6	0.9	#	#
24	#	A沢-9 I-II a	1.8×0.7×0.3	0.1	#	#
25	#	A沢-9 I-II a	2.0×1.5×0.5	0.3	#	#
26	#	A沢-9 I-II a	1.7×1.5×0.5	0.3	#	#
27	#	A沢-9 I-II a	1.9×1.6×0.6	0.8	#	#
28	#	A沢-9 I-II a	1.6×1.3×0.5	0.2	#	#
29	打 製 石 斧	A沢-9 I-攪乱	(10.5)×(5.5)×1.9	128.0	砂 岩	第67回-240
30	#	A沢-9 I-II a	9.0×(5.2)×1.3	75.0	蛇 紋 岩	第67回-241
31	#	A沢-9 I-II a	8.0×5.2×1.5	71.5	流 紋 岩	第67回-242
32	#	A沢-9 I-I	7.5×4.8×2.5	89.0	真 岩	第67回-243
33	#	A沢-9 I-I	10.9×4.5×1.2	65.0	砂 岩	第67回-244
34	#	A沢-8 I-II a	10.5×7.5×2.6	196.0	#	第67回-245
35	#	A沢-7 I-I	11.0×7.1×2.3	215.5	蛇 紋 岩	第67回-246
36	#	A沢-9 I-II b	11.5×6.8×2.9	251.0	砂 岩	第67回-247
37	#	A沢-9 I-試T	13.0×7.4×2.5	250.0	#	第67回-248
38	#	A沢-9 I-II a	12.4×7.1×2.2	220.0	#	第67回-249
39	#	A沢-8 I-拂土	11.5×6.5×2.4	181.5	#	第67回-250
40	#	A沢-8 I-II a	11.1×5.4×2.1	162.0	#	第67回-251
41	#	A沢-8 I-II a	12.1×6.0×2.4	191.5	石英 斑 岩	第67回-252
42	#	A沢-9 I-II a	11.8×5.9×1.9	144.0	#	第67回-253
43	#	A沢-8~9 I-J	13.0×7.0×2.4	198.0	砂 岩	第67回-254
44	#	A沢-9 I-O	13.6×8.7×2.5	318.0	#	第67回-255
45	#	A沢-7 I-I	17.8×8.0×3.1	478.5	#	第68回-256
46	#	A沢-7 I-I	17.4×5.4×2.3	328.0	#	第68回-257

第3表 大塚遺跡出土石器觀察表(2)

No.	器種名	出土地・地区 層位・遺構	長×幅×厚 (cm) (cm) (cm)	重 (g)	石 材	備 考
47	打製石斧	A沢-9 I-試T	15.9 × 8.1 × 3.3	389.5	流紋岩	第68回-258
48	"	A沢-8 I-II	16.5 × 7.0 × 2.3	352.5	砂岩	第68回-259
49	"	A沢-7 I-I	(11.3) × 6.5 × 3.3	221.0	"	頭部欠損
50	"	A沢-8~9 I~J	(6.3) × (4.3) × 2.4	100.0	"	刃部欠損
51	"	A沢-9 I-II b	(7.5) × 7.0 × 2.1	120.0	"	頭部欠損
52	"	A沢-9 I-II a	(8.0) × (5.3) × 2.6	149.5	"	刃部欠損
53	"	A沢-8 I-II	12.2 × 7.5 × 2.2	222.0	"	
54	"	A沢-9 I-II a	9.2 × 5.4 × 1.3	63.0	"	
55	"	A沢-9 I-II a	(8.5) × (5.2) × 2.1	112.0	"	刃部欠損
56	"	A沢-9 I-試T	11.3 × 6.4 × 2.1	181.0	"	
57	"	A沢-9 I-II a	(6.0) × (5.6) × 0.9	40.5	"	刃部欠損
58	"	A沢-8 I-II a	(13.3) × 10.0 × 2.9	410.0	"	頭部欠損
59	"	A沢-9 I-II a	(5.8) × (4.4) × 1.7	51.0	"	刃部欠損
60	"	A沢-9 I-II a	(5.6) × (4.6) × 1.3	41.0	"	"
61	"	A沢-8 I-試T	(10.1) × (7.3) × 1.9	161.5	"	"
62	"	A沢-8~9 I~J	10.2 × 7.4 × 1.5	129.5	蛇紋岩	
63	"	A沢-7~9 I-拂土	(2.1) × (5.1) × 0.9	10.0	"	刃部欠損
64	"	A沢-9 I-II a	(5.7) × (6.8) × 2.1	95.0	"	頭部欠損
65	"	A沢-8 I-I	(1.3) × (4.8) × 1.0	11.5	"	"
66	"	A沢-9 I-II a	(11.7) × (7.0) × 3.7	272.0	石英斑岩	刃部欠損
67	"	A沢-8 I-II	(13.4) × (6.4) × 2.2	215.5	砂岩	"
68	"	A沢-9 I-II a	(8.8) × (7.4) × 2.8	160.0	"	"
69	"	A沢-9 I-I	(6.6) × (4.8) × 1.3	58.0	蛇紋岩	"
70	"	A沢-9 I-拂土	(7.2) × 4.9 × 2.0	118.0	砂岩	"
71	"	A沢-8 I-擾乱	12.9 × 8.6 × 2.6	253.5	安山岩	
72	"	A沢-8 I-擾亂	12.6 × 7.6 × 2.5	237.0	"	
73	"	A沢-8 I-試T	8.2 × 5.0 × 1.0	49.0	粘板岩	
74	磨製石斧	A沢-9 I-試T	(10.0) × (5.9) × 3.0	239.5	蛇紋岩	第68回-263
75	"	A沢-9 I-I	(3.1) × (4.4) × 1.4	28.0	"	第68回-264
76	"	A沢-8 I-擾亂	(7.0) × (5.3) × 1.1	19.0	"	第68回-265
77	"	A沢-8 I-擾亂	(3.2) × (3.3) × 1.6	15.0	"	第68回-266
78	"	A沢-9 I-I	5.2 × 2.3 × 0.9	19.5	"	第68回-267
79	"	A沢-9 I-I	2.9 × 1.9 × 0.5	6.0	"	第68回-268
80	"	A沢-9 I-II a	(6.9) × 5.7 × 2.7	150.5	"	第68回-269
81	"	A沢-9 I-試T	(4.2) × (6.1) × 1.7	48.0	"	頭部欠損
82	"	A沢-9 I-試T	(2.5) × (3.0) × (0.5)	6.5	"	刃部小破片
83	"	A沢-8 I-II a	7.4 × 3.0 × 1.1	40.0	"	未成品
84	"	A沢-9 I-II a	(4.0) × 2.8 × 0.9	19.0	"	"
85	"	A沢-9 I-II a	7.6 × 4.0 × 2.0	95.0	"	"
86	凹石	A沢-9 I-II a	13.8 × 6.6 × 3.1	488.5	閃綠岩	第69回-270
87	"	A沢-9 I-II b	8.8 × 10.5 × 5.8	811.0	安山岩	第69回-271
88	"	A沢-9 I-II a	9.2 × 6.5 × 3.5	350.0	"	第69回-272
89	"	A沢-9 I-II b	8.3 × 6.5 × 3.9	362.5	"	第69回-273
90	"	A沢-9 I-II a	8.5 × 8.4 × 5.4	589.5	"	第69回-274
91	"	A沢-9 I-II a	10.8 × 9.3 × 4.1	649.0	蛇紋岩	第69回-275
92	"	A沢-9 I-O	7.6 × 5.9 × 2.0	149.0	"	第69回-276

第3表 大塚遺跡出土石器観察表(3)

No.	器種名	出土地・地区 層位・遺構	長×幅×厚 (cm) (cm) (cm)	重 (g)	石材	備考
93	凹	岩 A沢-9 I-II a	11.2×10.0×5.9	964.0	砂 岩	
94	#	A沢-9 I-II a	(9.3)×(6.0)×3.1	251.0	安 山 岩	欠損
95	#	A沢-9 I-II a	(9.0)×(7.6)×4.1	350.5	#	#
96	#	A沢-7 I-I	11.5×10.3×6.3	1082.0	#	
97	#	A沢-9 I-II a	10.0×9.5×5.1	908.5	#	
98	#	A沢-8 I-II a	8.6×8.1×2.7	290.0	#	
99	敲	石 A沢-10 I-試T	5.8×4.8×1.6	73.0	蛇 紋 岩	第69回-277
100	#	A沢-9 I-II a	6.9×5.6×4.1	225.5	流 織 岩	第69回-278
101	磨	石 A沢-9 I-II a	6.5×5.9×3.2	129.5	#	第69回-279
102	#	A沢-9 I-II b	6.1×6.0×2.8	141.5	安 山 岩	第69回-280
103	#	A沢-8 I-II a	7.9×7.5×3.1	305.0	閃 緑 岩	第69回-283
104	#	A沢-7 I-I	(5.4)×(8.4)×4.4	252.5	石 英 斧 岩	第69回-284
105	石	劍 A沢-9 I-I	10.7×7.8×2.8	352.0	安 山 岩	第69回-281
106	#	A沢-9 I-拂土	7.3×5.0×2.2	108.0	#	第69回-282
107	砥	石 A沢-9 I-II b	12.9×8.5×3.6	400.0	砂 岩	第70回-299
108	#	A沢-9 I-I	(10.1)×12.6×3.9	589.5	#	第70回-300
109	#	A沢-9 I-II a	(12.6)×(11.7)×3.9	370.0	#	第70回-301
110	#	A沢-8~9 I-J	11.3×9.4×4.7	559.0	#	第70回-302
111	#	A沢-9 I-II a	9.8×7.0×2.1	154.0	#	第70回-303
112	#	A沢-9 I-II b	9.3×6.0×2.1	131.5	#	第70回-304
113	#	A沢-7 I-II b	(6.6)×(8.4)×2.1	190.5	#	第70回-305
114	#	A沢-9 I-試T	(8.1)×(10.2)×3.9	328.0	#	第70回-306
115	#	A沢-8 I-II a	7.9×6.8×2.3	175.0	#	第71回-307
116	#	A沢-9 I-試T	9.5×5.1×1.2	105.0	#	第71回-308
117	#	A沢-9 I-II a	10.0×5.7×1.9	102.0	#	第71回-309
118	#	A沢-9 I-II a	(5.4)×3.3×0.9	25.5	#	第71回-310
119	#	A沢-9 I-II a	(5.7)×(2.4)×(1.9)	30.0	#	第71回-311
120	#	A沢-8 I-II a	(2.7)×(3.8)×(1.5)	27.5	#	第71回-312
121	#	A沢-8 I-II b	10.2×8.0×3.1	240.0	#	第71回-313
122	#	A沢-8 I-II a	(9.3)×(8.1)×2.0	129.0	#	第71回-314
123	#	A沢-9 I-II a	6.6×10.4×2.1	121.5	#	第71回-315
124	#	A沢-8~9 I-J	9.4×6.6×4.4	315.5	#	第71回-316
125	#	A沢-8 I-I	5.7×9.1×1.5	62.0	#	第71回-317
126	#	A沢-8 I-II b	7.4×7.3×1.3	71.0	#	第71回-318
127	#	A沢-9 I-II b	2.5×2.4×0.4	4.8	#	第71回-319
128	#	A沢-9 I-II a	2.2×2.6×0.5	3.2	#	第71回-320
129	#	A沢-9 I-II a	2.4×3.8×0.6	9.2	#	第71回-321
130	#	A沢-9 I-II a	3.2×2.7×0.7	7.5	#	第71回-322
131	#	A沢-9 I-II b	2.5×3.6×0.7	6.2	#	第71回-323
132	#	A沢-9 I-II a	2.6×2.8×0.5	5.8	#	第71回-324
133	#	A沢-9 I-II a	4.5×4.7×1.5	32.0	#	
134	#	A沢-9 I-I~II	(6.2)×(7.3)×2.5	120.0	#	B 類
135	#	A沢-9 I-II a	(4.8)×(4.5)×2.4	25.5	#	A 類
136	#	A沢-9 I-II a	(4.8)×(1.7)×0.7	1.4	#	B 類
137	#	A沢-9 I-I	(5.0)×(4.7)×1.4	24.0	#	
138	#	A沢-9 I-II a	(6.1)×(3.1)×1.6	30.0	#	

第3表 大塚遺跡出土石器観察表(4)

No.	器種名	出土地・地区 層位・遺構	長×幅×厚 (cm) (cm) (cm)	重 (g)	石 材	備 考
139	砥石	A沢-9 I-II a	(6.0)×(6.9)×3.7	135.0	砂岩	A類
140	ドリル	A沢-9 I-II a	2.4×0.9×0.7	0.8	黒曜石	第66回-236
141	ピエススキーユ	A沢-9 I-II a	3.7×1.7×0.8	4.9	"	第66回-230
142	"	A沢-9 I-II a	3.8×3.3×0.7	6.7	安山岩	第66回-231
143	"	A沢-9 I-II a	2.5×1.4×0.6	2.3	黒曜石	第66回-232
144	"	A沢-9 I-II a	2.9×1.6×0.9	2.8	"	第66回-233
145	"	A沢-9 I-II a	2.0×1.3×0.5	0.9	"	第66回-234
146	"	A沢-9 I-II a	1.2×2.2×0.8	1.2	"	第66回-235
147	"	A沢-9 I-O	3.8×3.4×0.7	8.9	安山岩	第66回-237
148	"	A沢-9 I-O	4.0×2.5×0.6	7.1	頁岩	第66回-238
149	U・フレーク	A沢-9 I-II a	2.8×2.7×0.5	6.0	"	第66回-239
150	削器	A沢-7 I-I	11.1×17.4×4.2	979.0	粘板岩	第67回-244
151	"	A沢-8 I-II	6.0×8.8×1.4	83.0	砂岩	第67回-245
152	"	A沢-9 I-II b	10.3×7.0×1.7	131.5	"	第67回-246
153	"	A沢-7~9 I-拂土	7.0×(7.5)×1.3	75.0	石英斑岩	欠損
154	貝殻状剥片	A沢-9 J-I~II	4.4×6.9×1.1	31.0	砂岩	
155	"	A沢-9 I-II a	9.3×5.8×1.6	76.0	"	
156	"	A沢-9 I-II a	6.9×6.5×1.2	61.0	頁岩	
157	"	A沢-9 I-II a	6.1×7.3×1.2	48.8	粘板岩	
158	"	A沢-9 I-II a	10.5×8.1×2.2	197.5	流紋岩	
159	"	A沢-9 I-I	6.8×7.0×1.1	49.5	砂岩	
160	"	A沢-9 I-II a	6.2×8.0×1.3	62.1	"	
161	"	A沢-9 I-試T	8.4×14.0×2.0	270.0	"	
162	"	A沢-7 I-表	5.8×6.5×1.2	46.5	"	
163	"	A沢-9 I-II	5.2×7.9×1.2	68.2	流紋岩	
164	"	A沢-7~9 I-表	11.0×11.4×2.5	310.0	砂岩	
165	石劍	A沢-9 I-II a	(6.0)×3.3×1.8	67.5	綠泥片岩	第72回-325
166	玉	A沢-9 I-II a	2.9×1.5×1.3	7.9	硬玉	第70回-285
167	"	A沢-9 I-II a	2.3×1.6×1.6	6.8	"	第70回-286
168	"	A沢-7~9 I-表	2.9×1.1×0.7	1.9	滑石	第70回-287
169	"	A沢-8 I-II a	1.6×1.3×0.9	1.9	硬玉	第70回-288
170	"	A沢-9 I-II a	(1.1)×1.4×1.2	1.9	滑石	第70回-289
171	"	A沢-9 I-II b	7.8×2.8×1.5	5.4	"	第70回-290
172	"	A沢-7 I-I	4.5×1.3×0.4	2.2	ネフライト	第70回-291
173	"	A沢-9 I-II a	0.8×0.9×0.8	0.2	滑石	第70回-292
174	"	A沢-9 I-I	0.9×0.8×0.6	0.9	"	第70回-293
175	"	A沢-9 I-II a	0.8×0.7×0.6	1.8	"	第70回-294
176	"	A沢-9 I-II a	1.4×0.7×0.5	0.9	"	第70回-295
177	"	A沢-9 I-I	1.6×1.1×0.9	2.1	"	第70回-296
178	"	A沢-9 I-II a	2.1×1.0×0.8	2.3	"	第70回-297
179	"	A沢-9 I-I	2.0×3.6×0.8	7.5	"	第70回-298
180	"	A沢-9 I-I	1.1×(0.8)×(0.4)	0.2	"	未成品
181	"	A沢-8 I-II b	1.8×(0.7)×(0.4)	0.2	"	"
182	"	A沢-9 I-II b	1.3×(0.7)×(0.4)	0.2	"	"
183	"	A沢-9 I-II a	1.8×(0.5)×(0.3)	0.2	"	"
184	"	A沢-9 I-II a	1.8×(0.6)×(0.4)	0.1	"	"

第3表 大塚遺跡出土石器観察表(5)

No.	器種名	出土地・地区 層位・遺構	長×幅×厚 (cm) (cm) (cm)	重 (g)	石 材	備考
185	玉	A沢-9 I-II a	1.2 × 1.1 × 1.0	1.4	滑石	未成品
186	#	A沢-9 I-II a	2.1 × 1.1 × 0.8	1.5	#	#
187	#	A沢-9 I-II a	2.7 × 1.1 × 0.9	1.8	#	#
188	#	A沢-8 I-II b	2.7 × 1.1 × 0.5	1.1	#	#
189	石錐	A沢-9 I-N	3.5 × (1.7) × 0.3	0.8	墨曜石	第73回-331
190	打製石斧	A沢-8 I-III	6.5 × 9.0 × 2.4	150.0	砂岩	第73回-326
191	#	A沢-9 I-N	(9.5) × 5.9 × 2.0	131.5	千枚岩	第73回-332
192	#	A沢-9 I-N	10.0 × 4.8 × 1.8	110.5	砂岩	第73回-333
193	磨製石斧	A沢-7 I-III	(9.1) × (5.8) × 3.7	284.0	ハニレイ岩	第73回-327
194	#	A沢-9 I-III	(2.4) × (4.3) × (1.2)	11.5	蛇紋岩	第73回-328
195	#	A沢-9 I-N	(9.0) × 5.6 × 2.4	191.0	#	第73回-334
196	#	A沢-9 I-N	(11.6) × 5.0 × 2.4	221.5	#	第73回-335
197	#	A沢-9 I-N	(2.0) × (2.1) × (0.9)	5.2	#	第73回-336
198	スクレーパー	A沢-9 I-N	9.4 × 8.3 × 2.9	251.0	砂岩	第73回-337
199	不明	A沢-9 I-N	7.4 × 7.3 × 3.0	218.0	滑石	第73回-338
200	貝殻状剥片	A沢-7 I-III	6.5 × (4.8) × 1.1	37.5	砂岩	第73回-329
201	#	A沢-9 I-N	7.4 × 9.1 × 1.6	79.0	#	第73回-330
202	#	A沢-7 J-III	(4.7) × (5.4) × 1.0	51.5	#	欠損
203	打製石斧	B沢-9 L-II a	14.9 × 6.6 × 2.8	262.5	#	第76回-372
204	#	B沢-11L-試T	19.2 × 6.9 × 2.3	331.5	#	
205	#	B沢-10M-II a	(5.6) × (5.4) × 2.0	74.0	#	両端欠損
206	#	B沢-不明	13.8 × 5.6 × 3.0	228.5	蛇紋岩	
207	#	B沢-10P-試T	11.5 × 7.1 × 3.0	266.0	粘板岩	
208	#	B沢-10M-I	(7.7) × 4.8 × 1.6	61.0	粘板岩	頭部欠損
209	#	B沢-9 M-II	9.0 × 4.8 × 1.2	65.5	蛇紋岩	
210	磨製石斧	B沢-12M-試T	6.8 × 4.9 × 1.4	53.0	#	第76回-373
211	凹石	B沢-S D50	10.7 × 8.5 × 2.5	331.0	安山岩	
212	#	B沢-10N-I	10.7 × 9.8 × 4.8	708.5	#	
213	磨石	B沢-10M-II a	8.5 × 7.9 × 5.9	241.5	#	第76回-374
214	砥石	B沢-11O-N	8.8 × 8.2 × 2.6	898.0	砂岩	第76回-375
215	削器	B沢-10L-試T	7.5 × 4.8 × 1.9	64.0	粘板岩	第76回-371
216	貝殻状剥片	B沢-10M-II a	6.0 × 8.1 × 1.2	51.5	砂岩	第76回-368
217	#	B沢-10M-III	8.0 × 10.0 × 1.5	108.0	粘板岩	第76回-369
218	#	B沢-10M-III	4.4 × 8.1 × 1.2	90.0	砂岩	第76回-370
219	#	B沢-11M-試T	4.9 × 8.4 × 1.4	66.0	#	
220	#	B沢-9 M-I	5.2 × 7.7 × 1.2	59.5	#	
221	#	B沢-12N-試T	8.4 × 11.6 × 2.1	261.0	粘板岩	使用痕有り
222	#	B沢-13O-N	12.6 × 12.7 × 2.2	340.0	#	#
223	#	B沢-10N-I	5.8 × 4.8 × 0.9	27.0	砂岩	
224	#	B沢-10M-II a	6.6 × 8.2 × 1.5	88.0	#	使用痕有り
225	#	B沢-12N-試T	5.4 × 9.2 × 1.7	94.0	#	
226	#	B沢-10M-N	7.4 × 11.8 × 1.4	157.0	#	
227	#	B沢-9-10M	4.9 × 6.3 × 7.5	29.5	#	
228	磨石	B沢-10M集中地点	16.8 × 7.2 × 4.4	690.0	安山岩	第77回-376
229	#	B沢-10M集中地点	9.1 × 7.9 × 4.4	399.0	#	第77回-377
230	礫	B沢-10M集中地点	12.6 × 8.8 × 4.2	495.0	砂岩	第77回-378

### 第3表 大溪遺跡出土石器觀察表(6)

西川

南山・本宿遺跡

図版2  
(原山遺跡)



遺 景



発掘風景（試掘）



発掘風景（表土剥ぎ）



発掘風景（遺物包含層掻削）

図版4  
(原山遺跡)



梵鐘铸造跡全景



SB23・SK21 宛掘状況



SK21 第2次作業面 土層断面



SK21 第1次作業面 土層断面



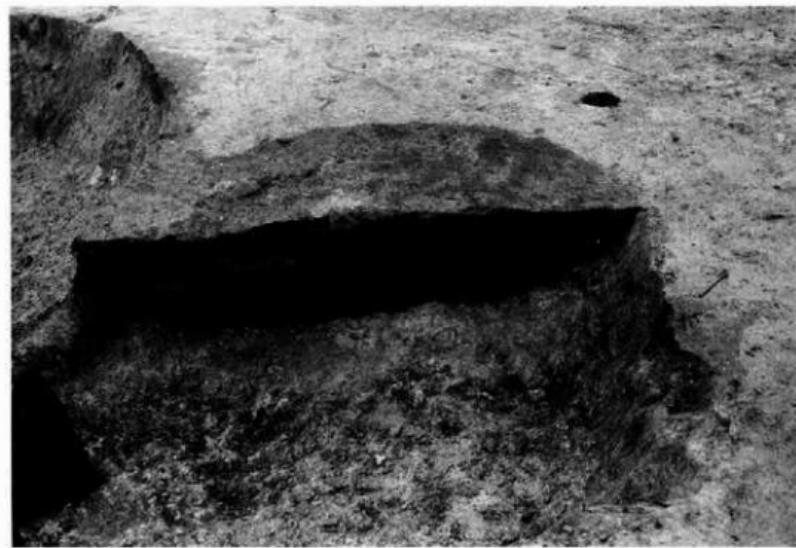
SK21 第2次作業面 完掘状況



SK21 第1次作業面 完掘状況



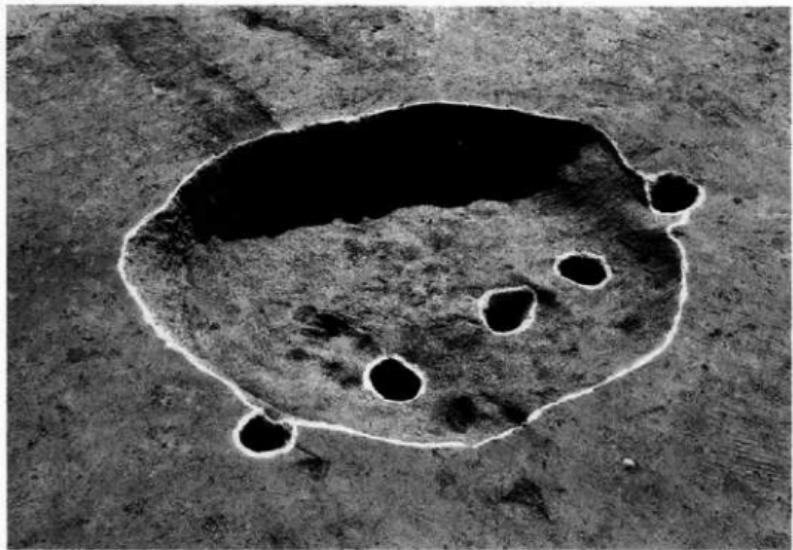
SK22 土層断面



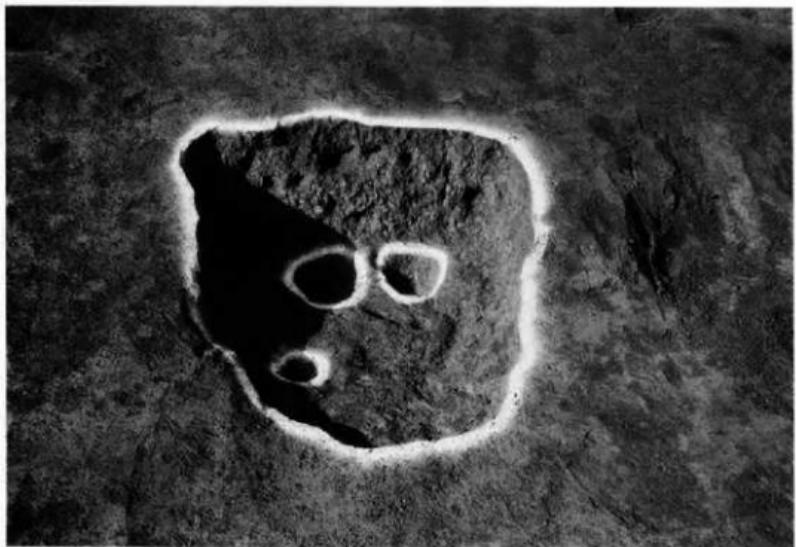
SK33 土層断面



SK22・33 完掘状況



SK20 完掘状況

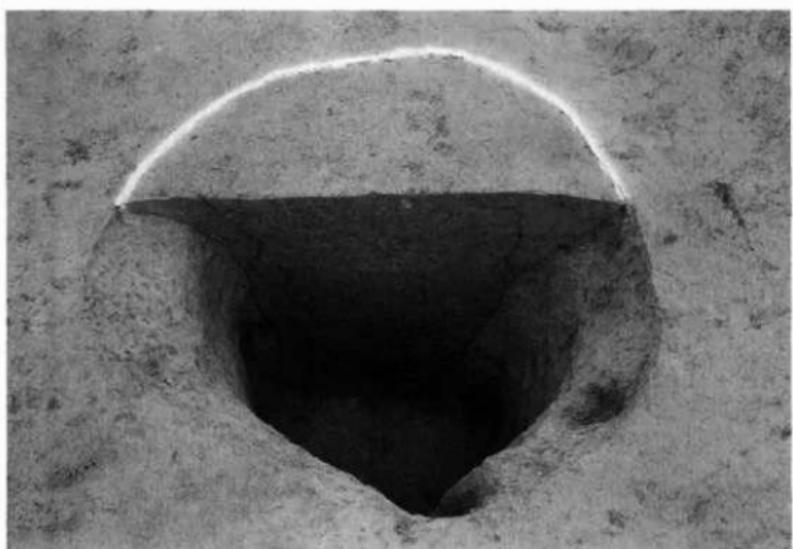


SK37 完掘状況



SK21 織物出土状況

図版10  
(原山遺跡)



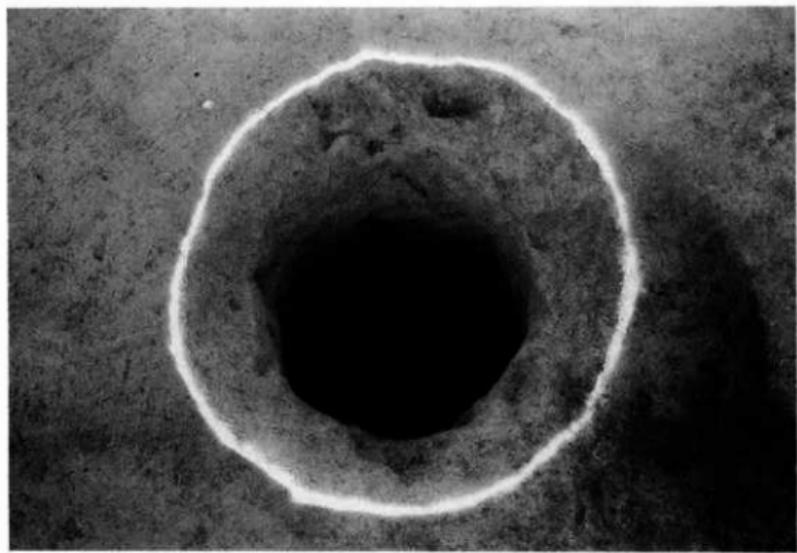
SK15 土層断面



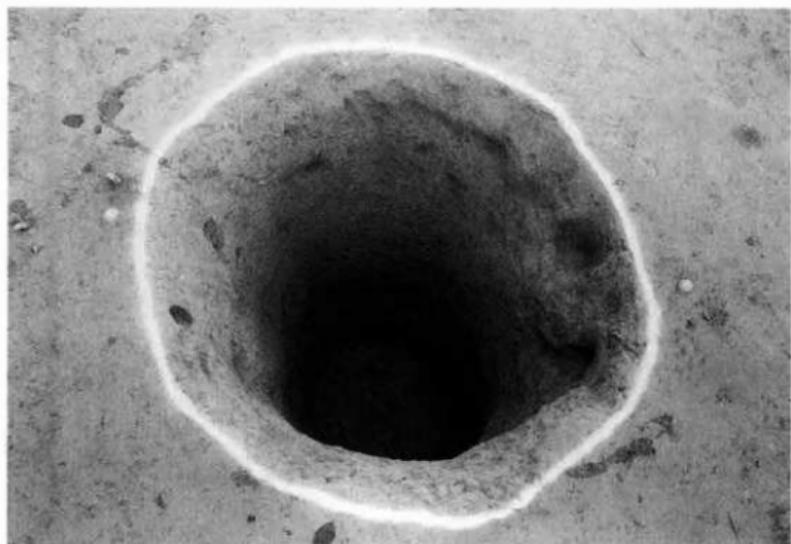
SK15 完掘状況



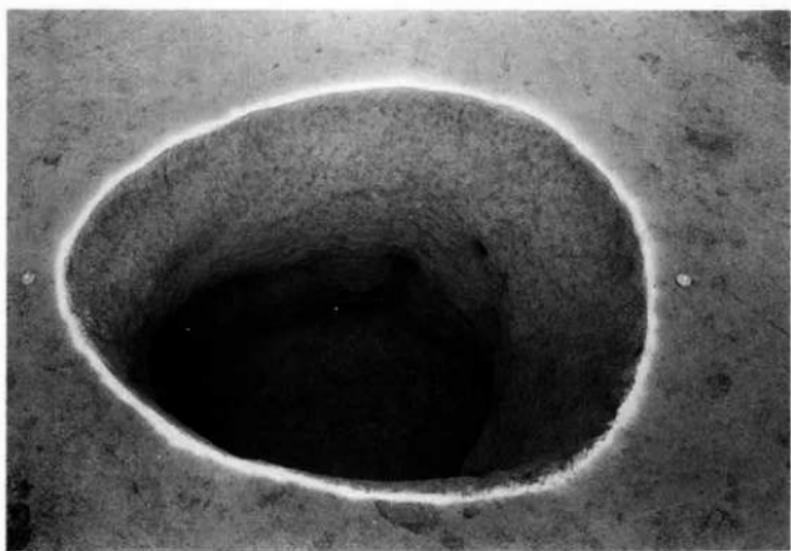
SK11 土層断面



SK11 完掘状況



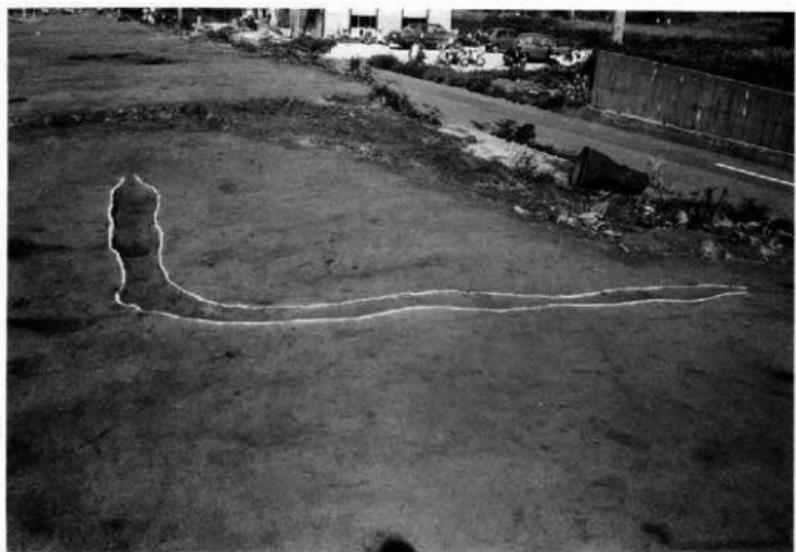
SK 5 完掘状況



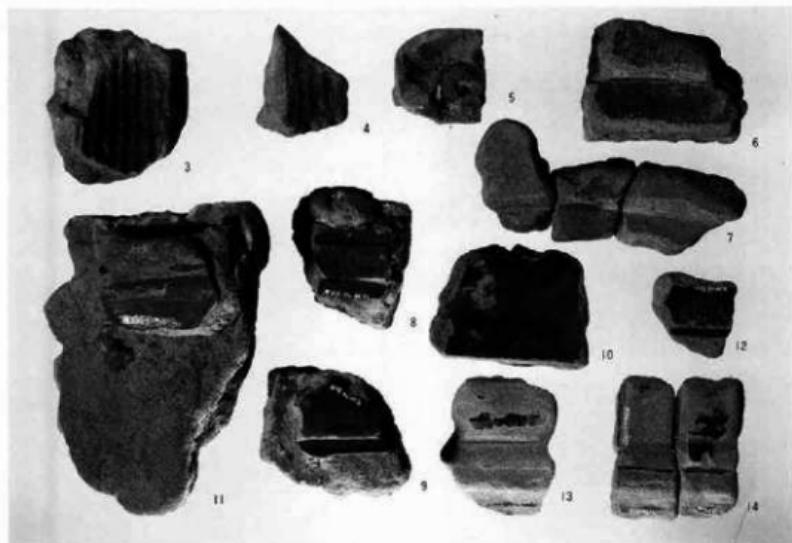
SK 3 完掘状況



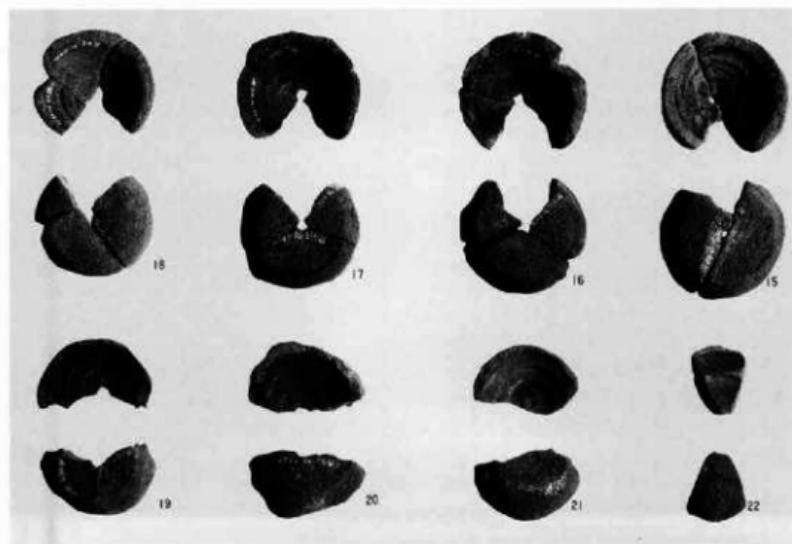
SK34 遺物出土状況



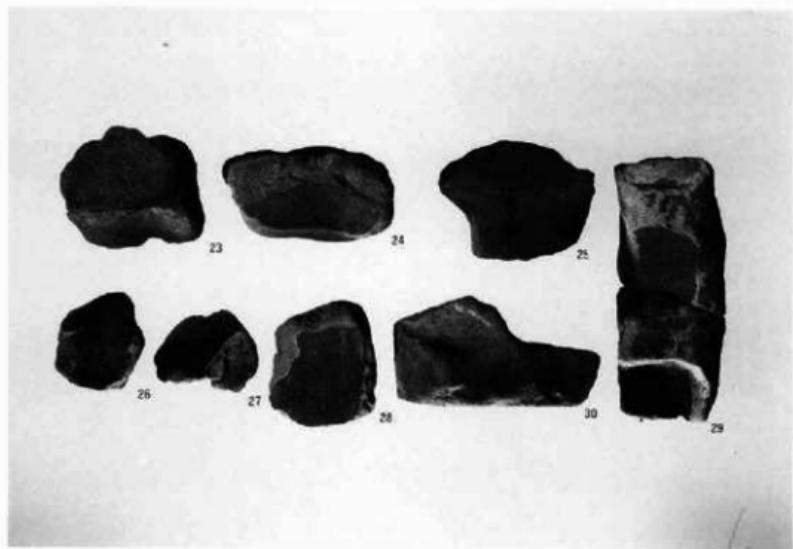
SD14 完掘状況



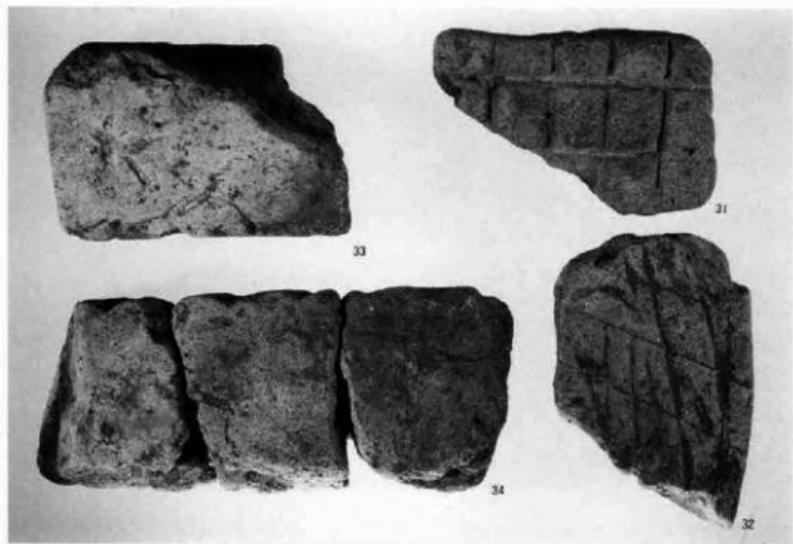
梵鐘鋳型（約1/3）



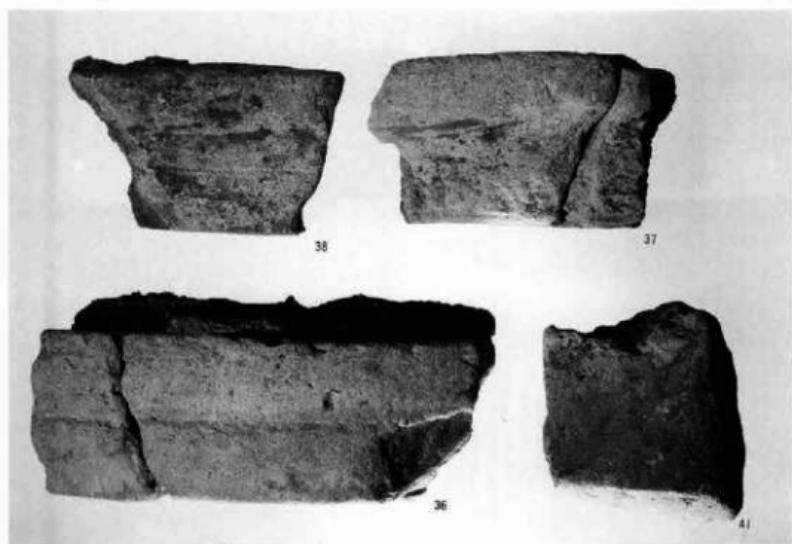
梵鐘鋳型（乳型、約1/2）



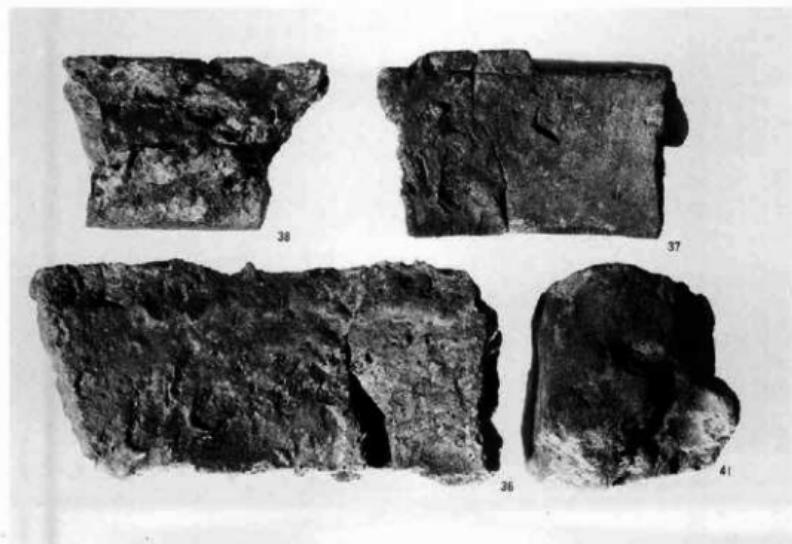
梵鐘鑄型（約1/3）



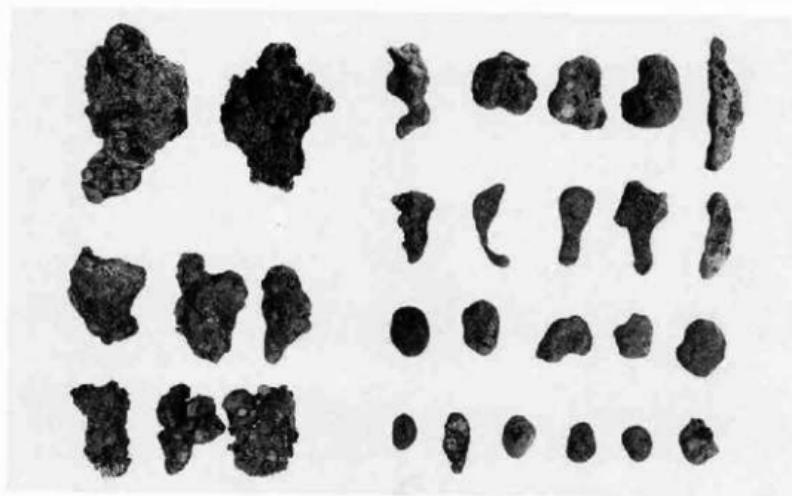
梵鐘鑄型（約1/3）



こしき炉（外面、約1/3）



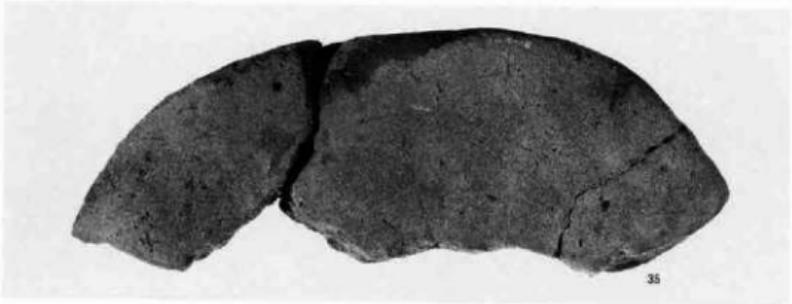
こしき炉（内面、約1/3）



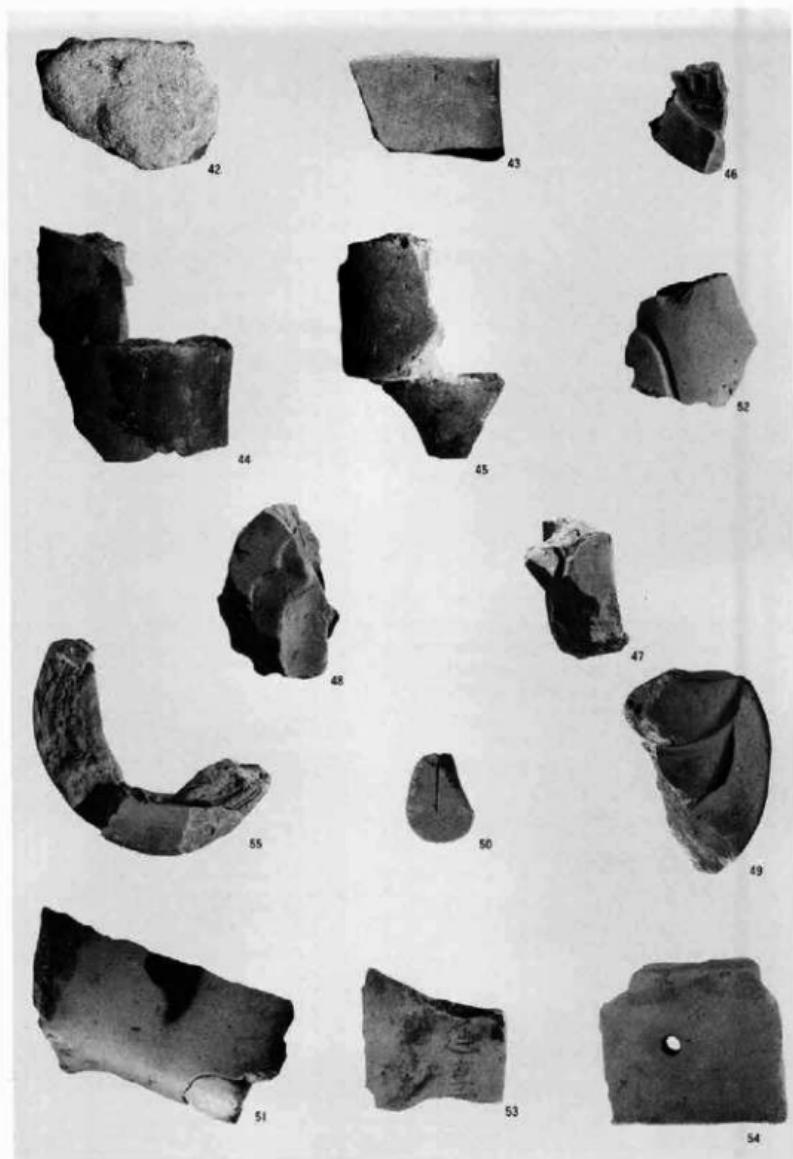
青銅溶解片 (約1/2)



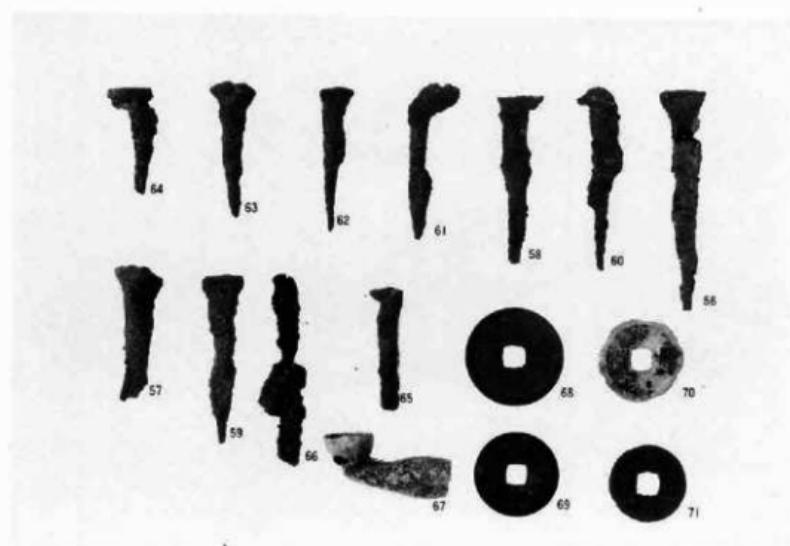
三叉形土製品 (約1/3)



梵鐘鑄型 (約1/3)



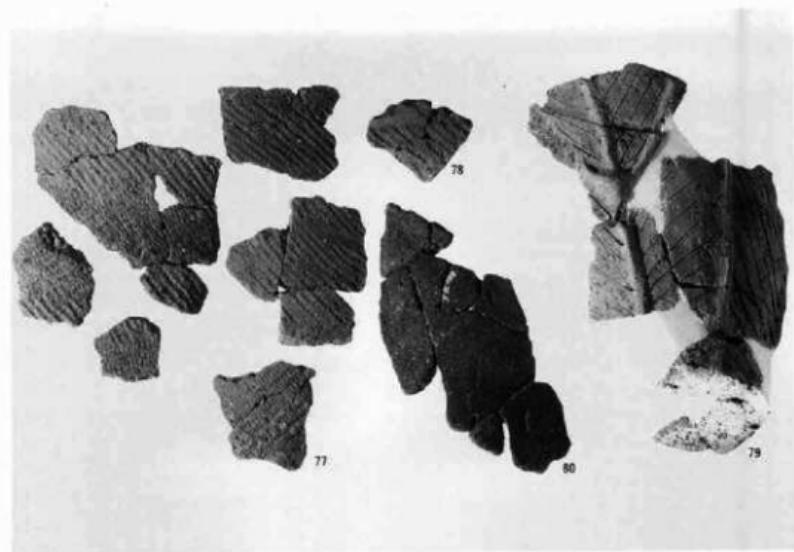
平瓦・九瓦・道具瓦（約1/3）



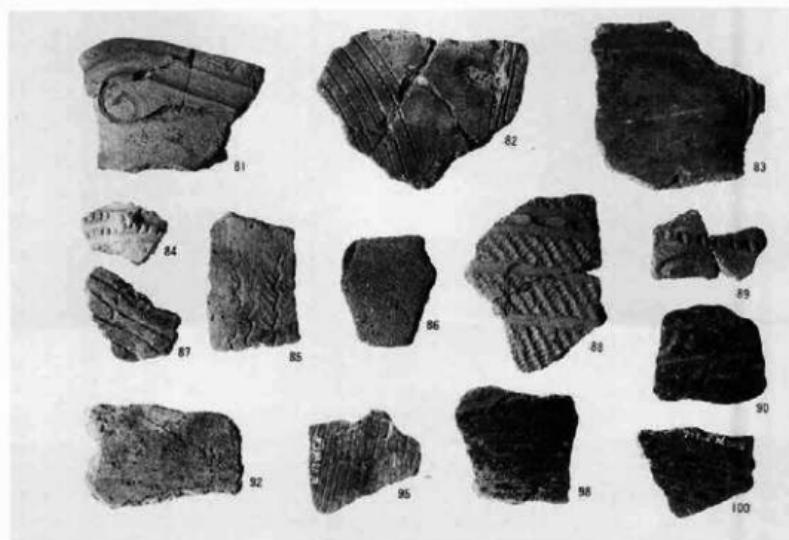
釘・煙管・錢貨（約2/3）



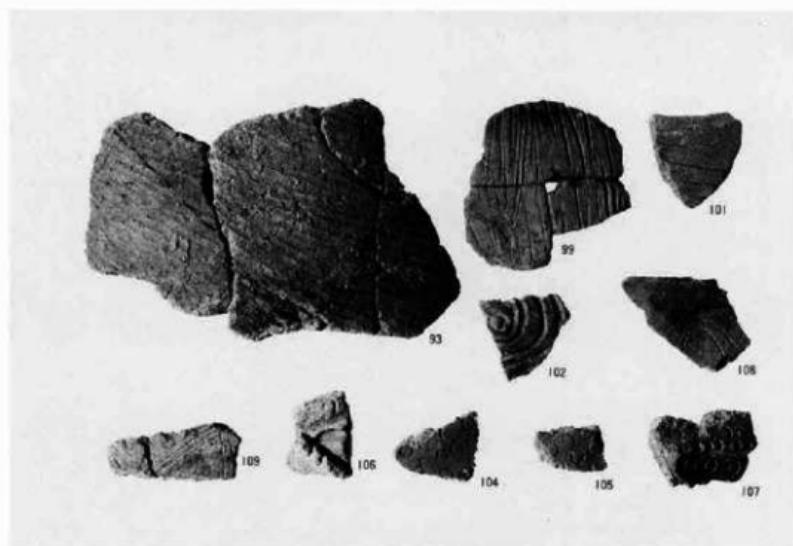
板狀金屬片（約2/3）



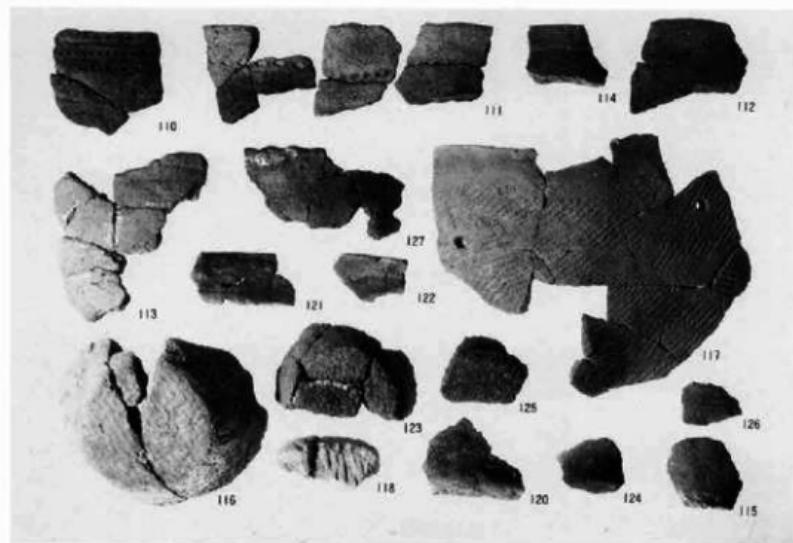
縄文前期・中期の土器（約1/3）



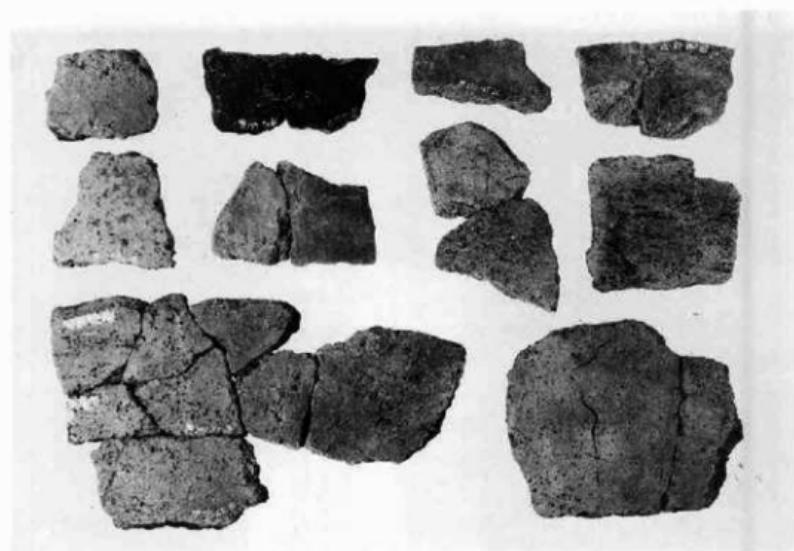
縄文後期・晚期の土器（約1/2）



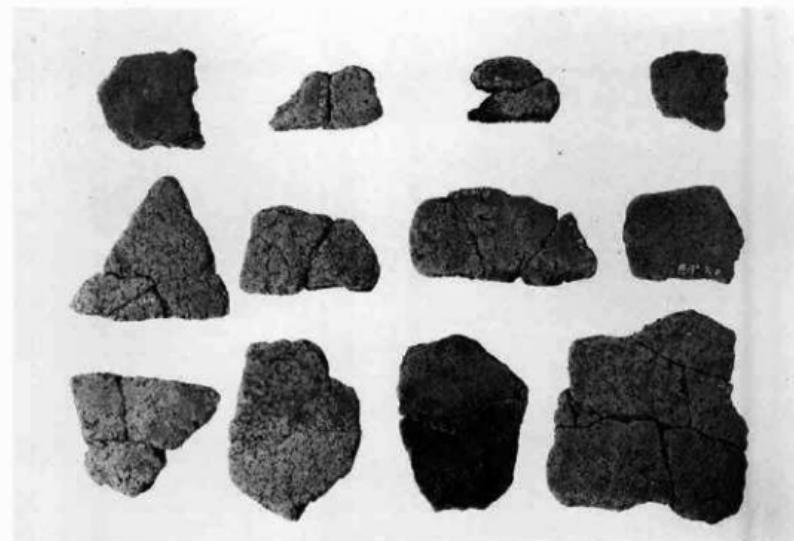
縄文・弥生時代の土器（約1/2）



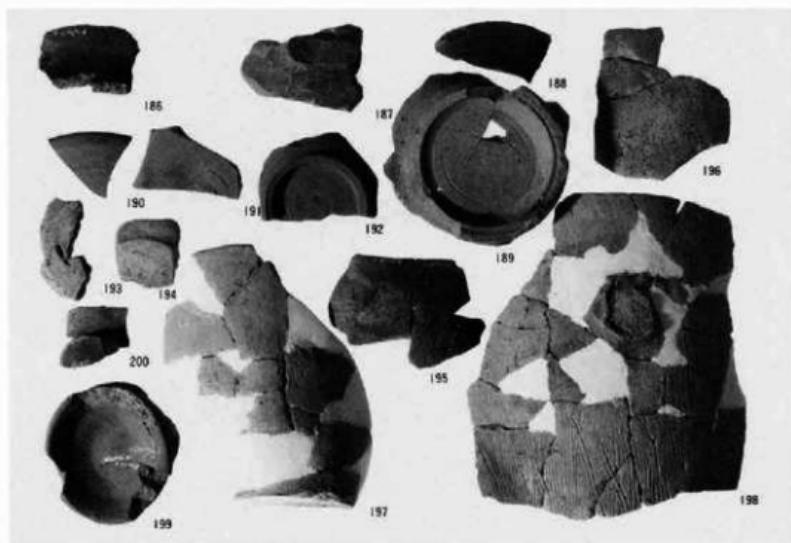
縄文・弥生時代の土器（約1/3）



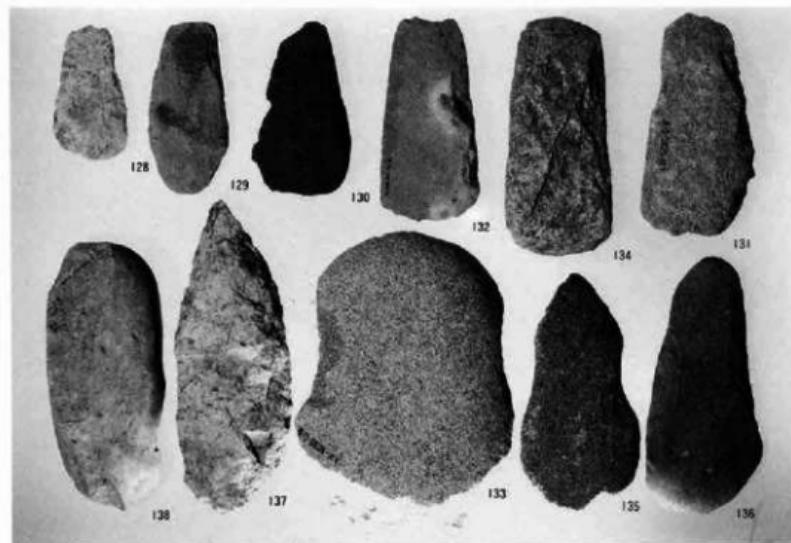
縄文土器（無文、約1/2）



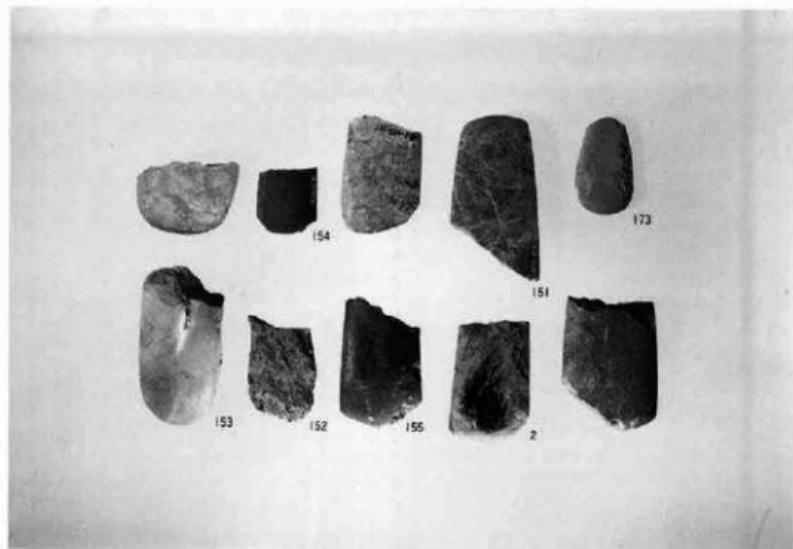
SK34出土の土器（約1/2）



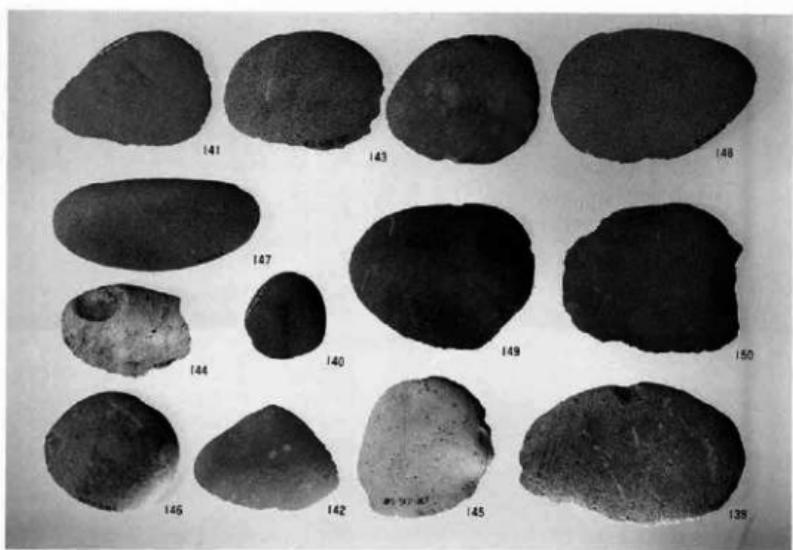
古墳時代・古代の土器 (約1/3)



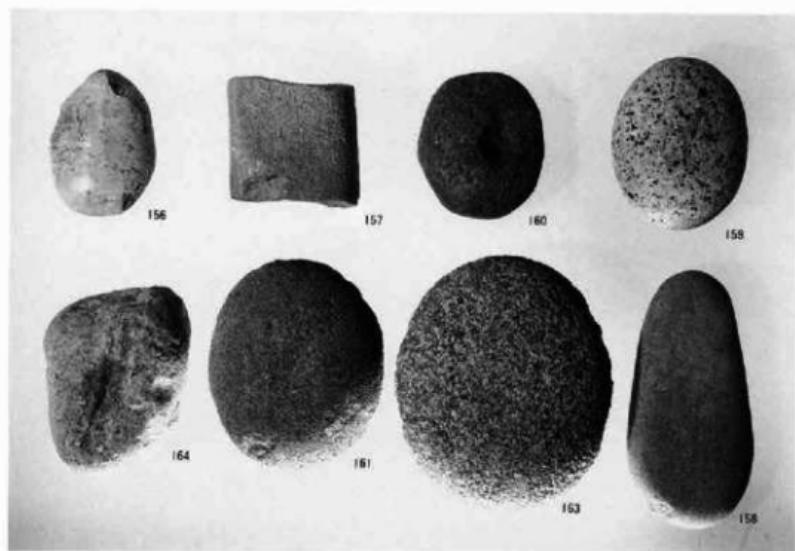
打製石斧・石核 (約1/3)



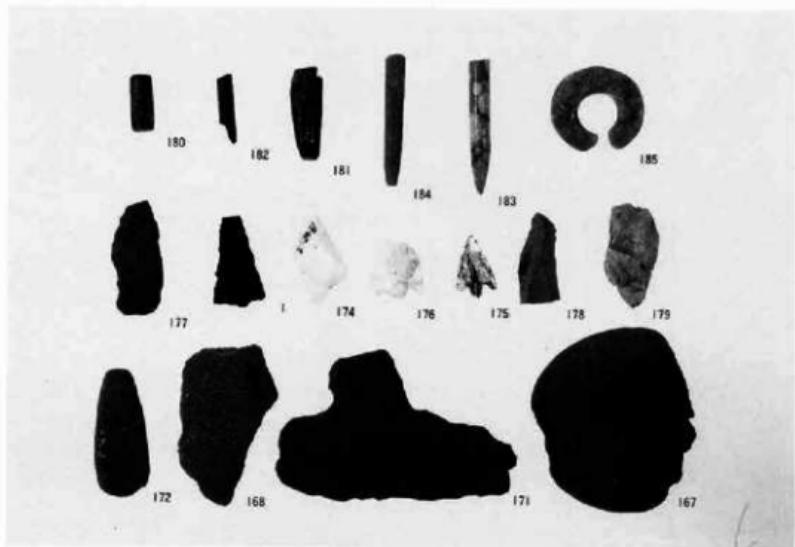
磨製石斧（約1/3）



貝殻状剣片（約1/3）



敲石・磨石・凹石（約1/3）



石製品・块状耳飾・石鎌・石匙・石錐等（約2/3）

図版26  
(大堤遺跡)



遺 景(東から)



近 景(北から)



工事用道路部分 発掘状況



工事用道路部分 発掘終了状況



SR38 発掘状況



鉢状小溝 発掘状況



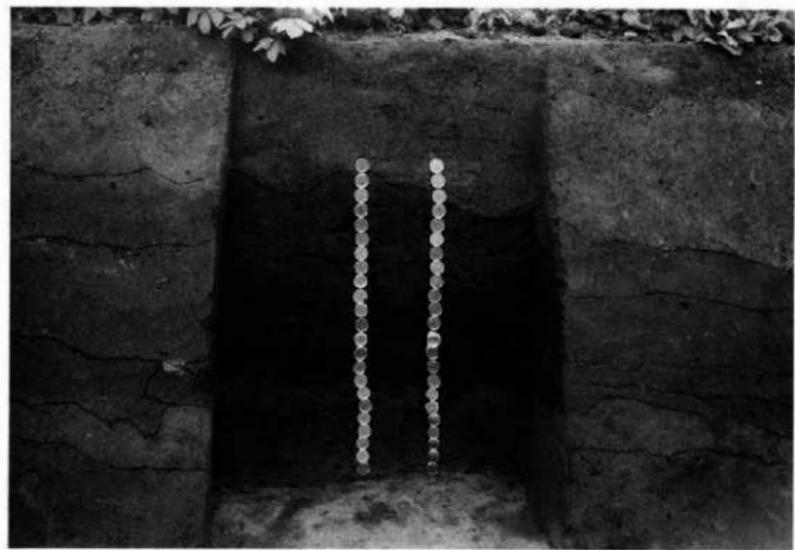
A沢 発掘状況



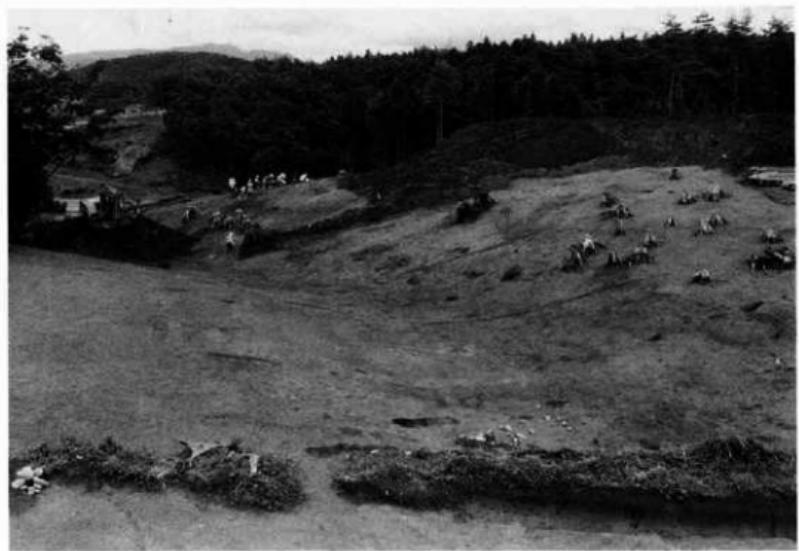
A沢 発掘状況



A-mound 土層断面



A-mound 土壌サンプル採取状況



B沢 発掘状況



B沢 発掘状況



D地区 発掘終了状況



D地区 発掘終了状況



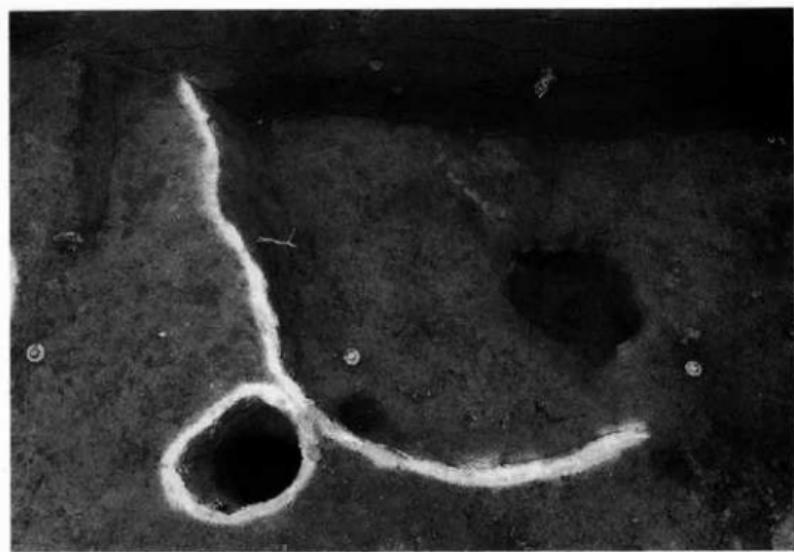
SK39(A 池) 遺物出土状況



SK39(A 池) 実掘状況



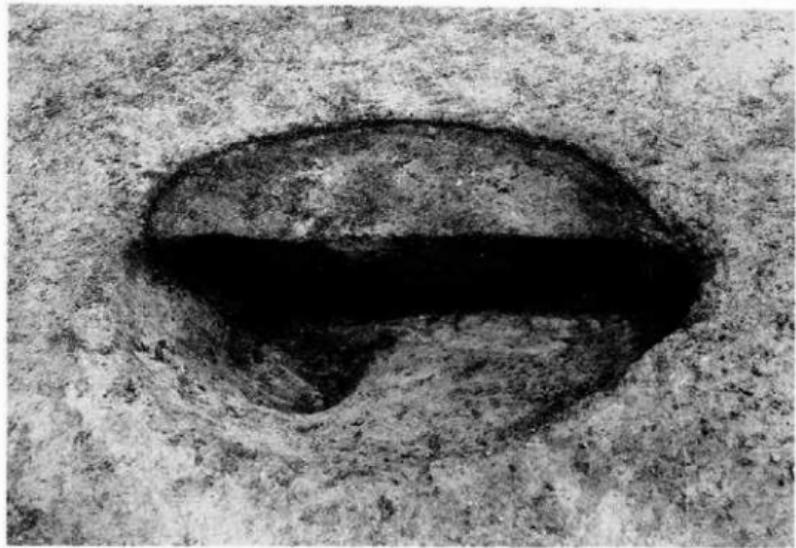
土器集中地点( A 沢) 遺物出土状況



土器集中地点( A 沢) 完掘状況



集石46(A沢)



SK70 (A沢) 土層断面



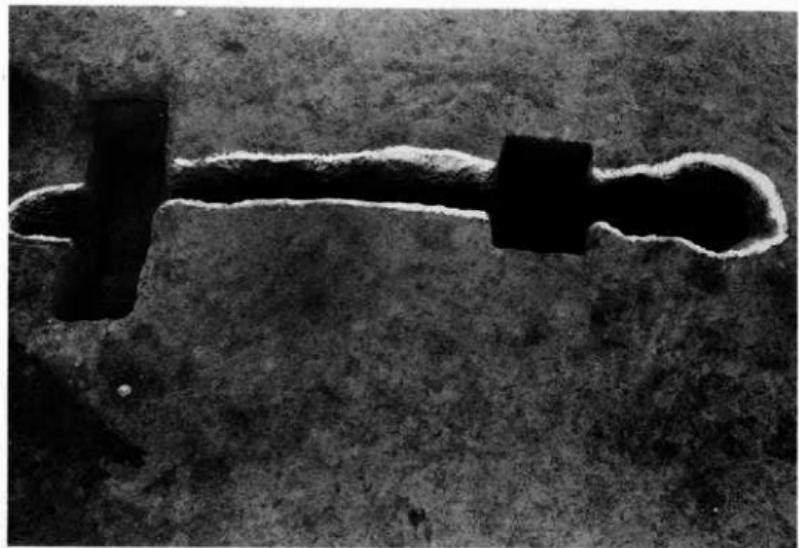
石器集中地点( B 沢) 完掘状況



B 沢 土層断面



P51(台地上) 土層断面

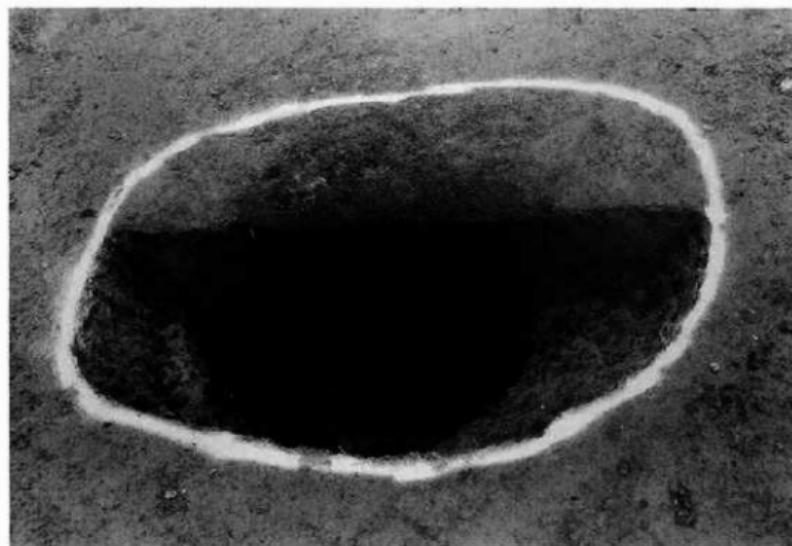


P51(台地上) 石器状況

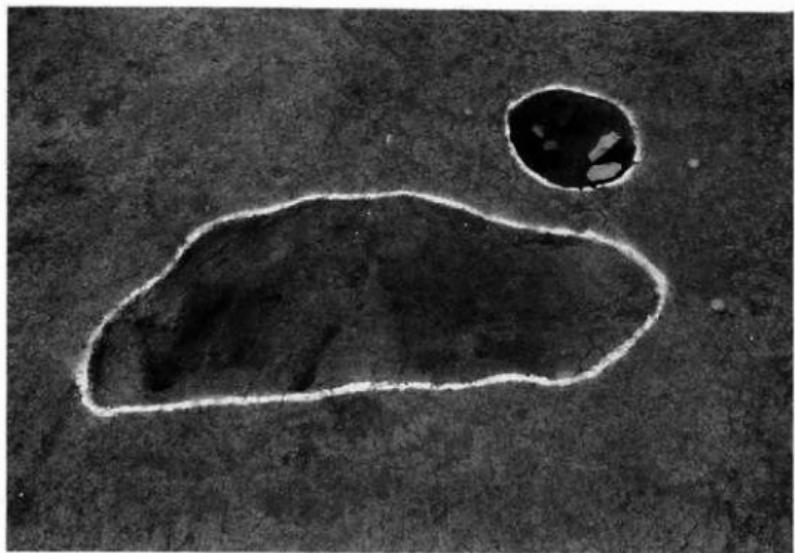
図版38  
(大塚遺跡)



SB30 完損状況



ピット(SB30柱穴) 土層断面



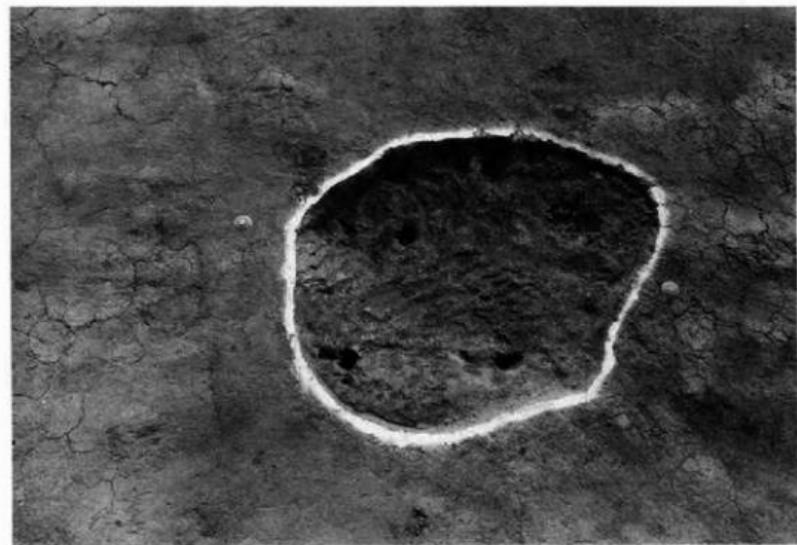
SK33(台地上) 完損状況



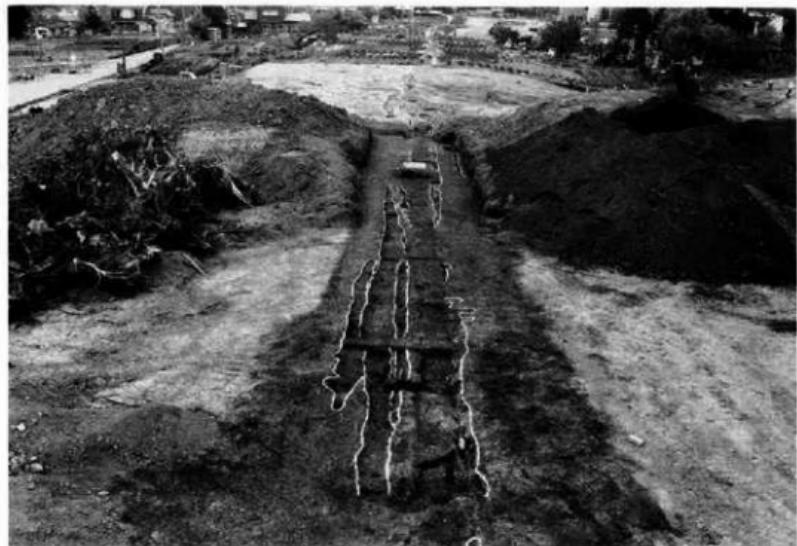
P35(台地上) 土層断面・遺物出土状況



SK34(台地上) 遺物出土状況



SK34(台地上) 完整状況



SR38(台地上) 完掘状況



SB31(台地上) 完掘状況



鉢状小溝(8J-K) 完掘状況



鉢状小溝(8J-K) 完掘状況



歎状小溝(10N) 完掘状況

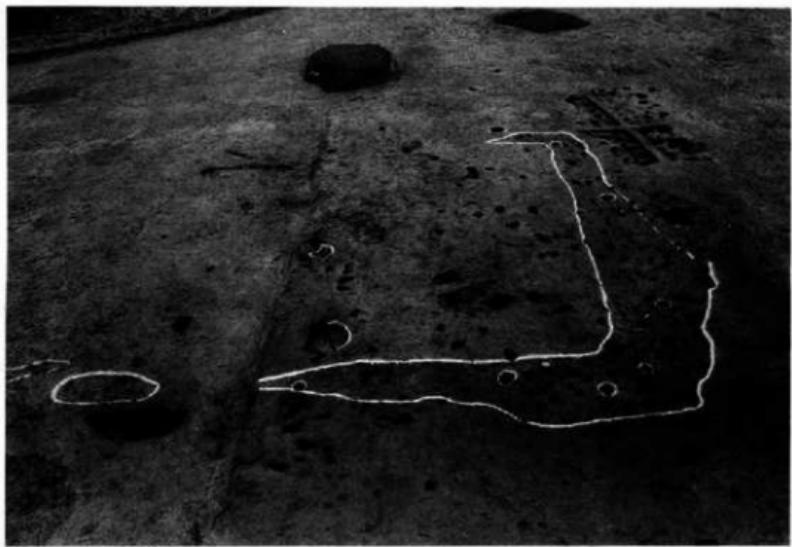


歎状小溝(12P) 完掘状況

図版44  
(大塚遺跡)



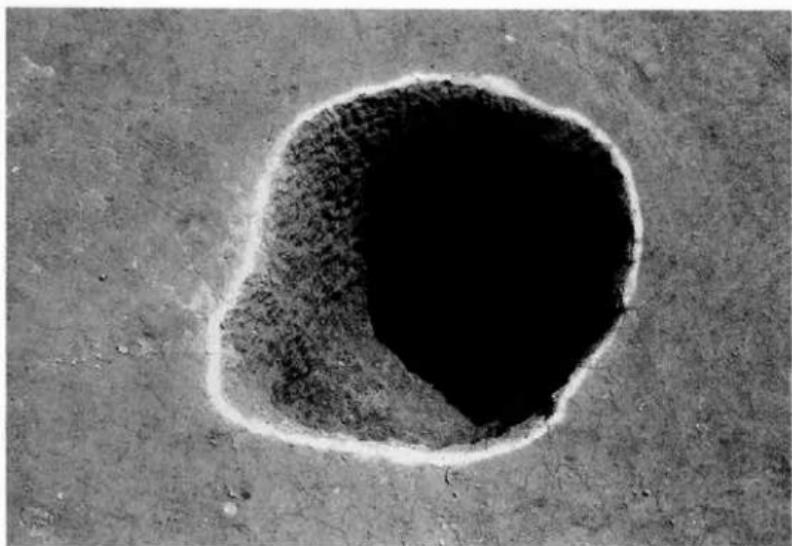
SD56 完縁状況



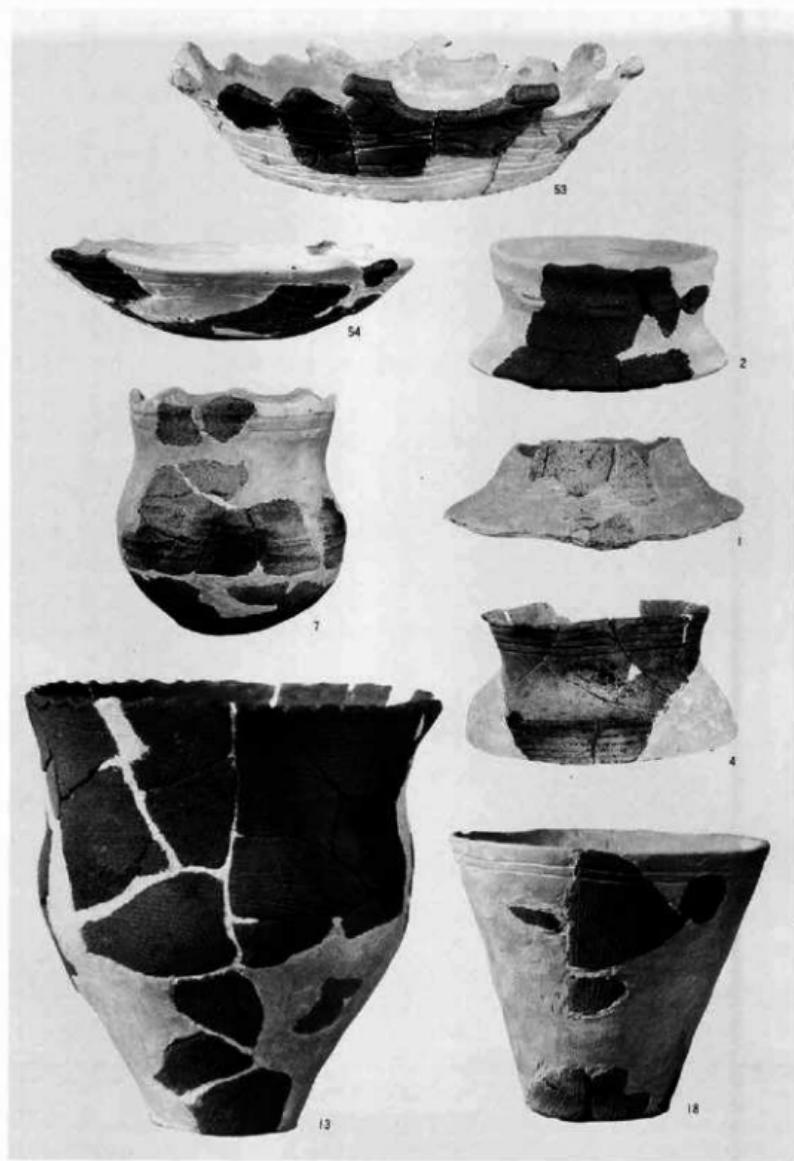
SD50 完縁状況



SK8(台地上) 土層断面



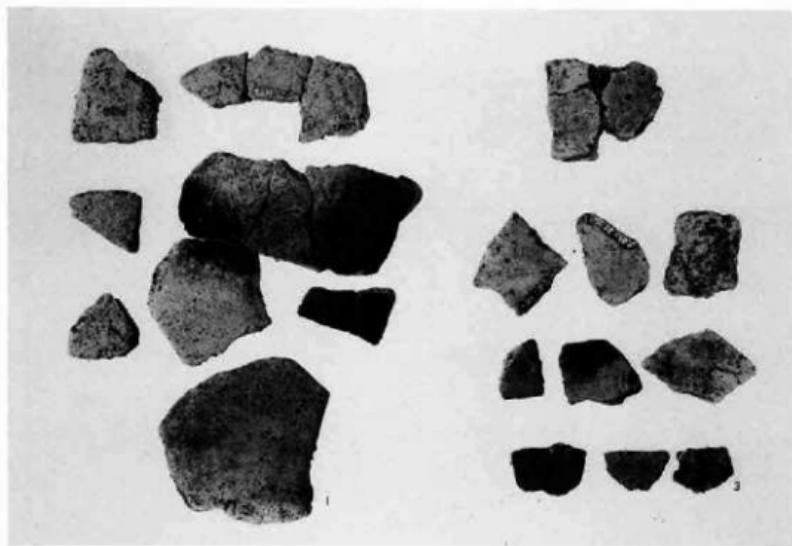
SK8(台地上) 完墻状況



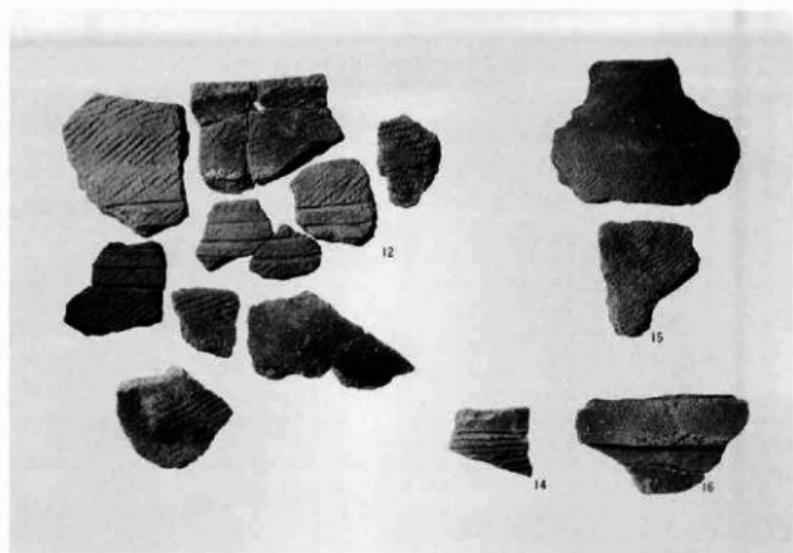
A 沢出土弥生土器 (約1/3)



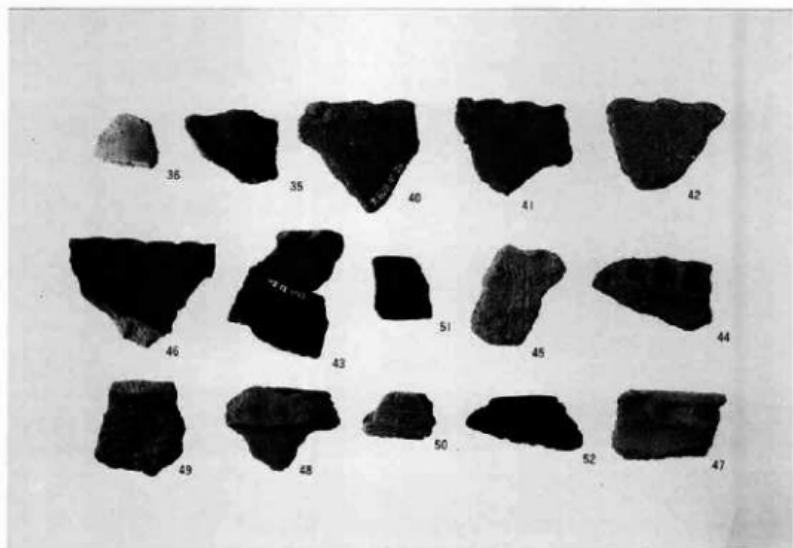
A沢出土弥生土器（水神平式系、約1/2）



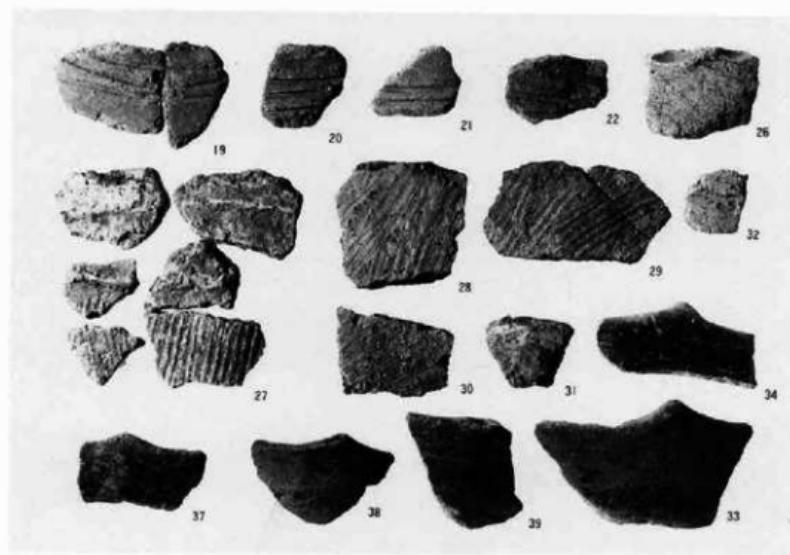
A沢出土弥生土器（遠賀川式系、約1/2）



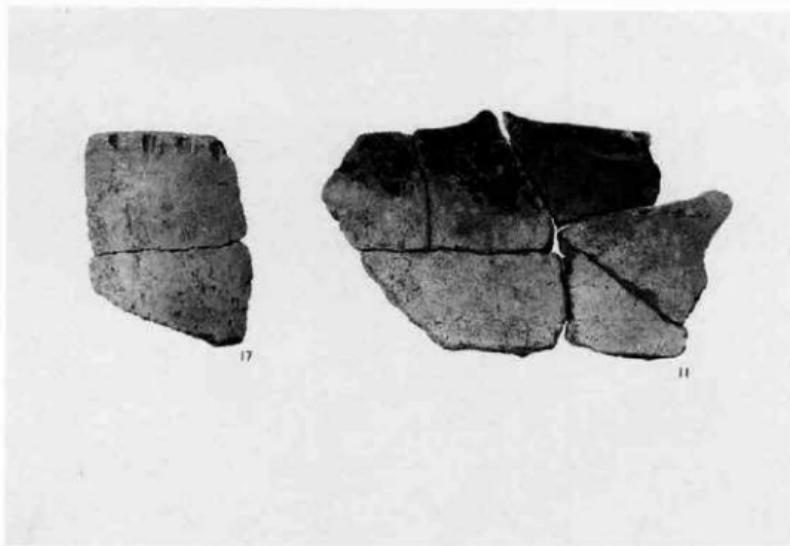
A 沢出土弥生土器（約1/2）



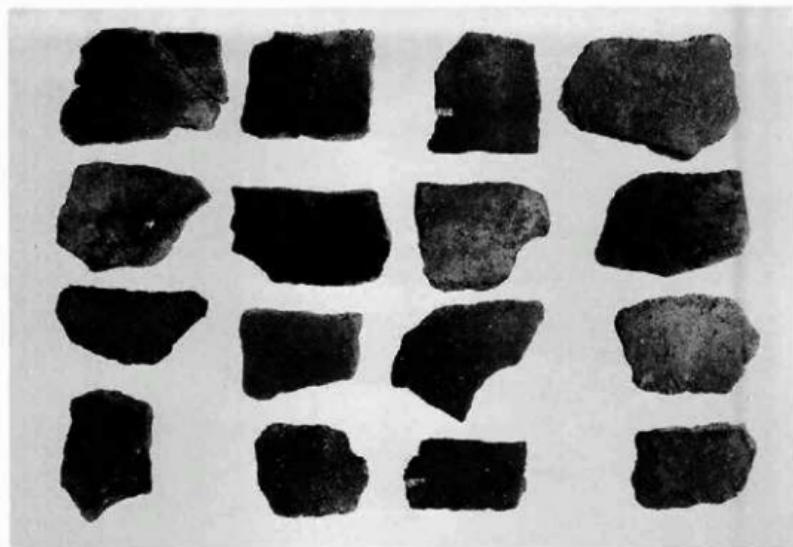
A 沢出土弥生土器（約1/2）



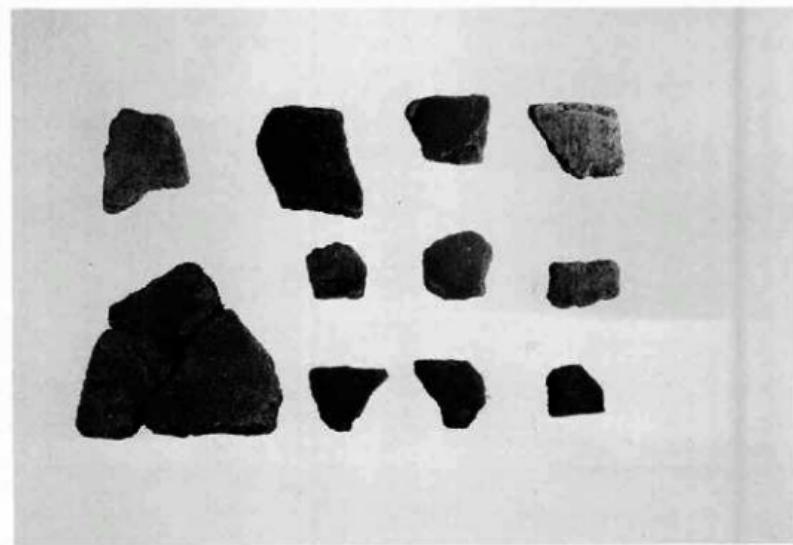
A 沢出土弥生土器 (約1/2)



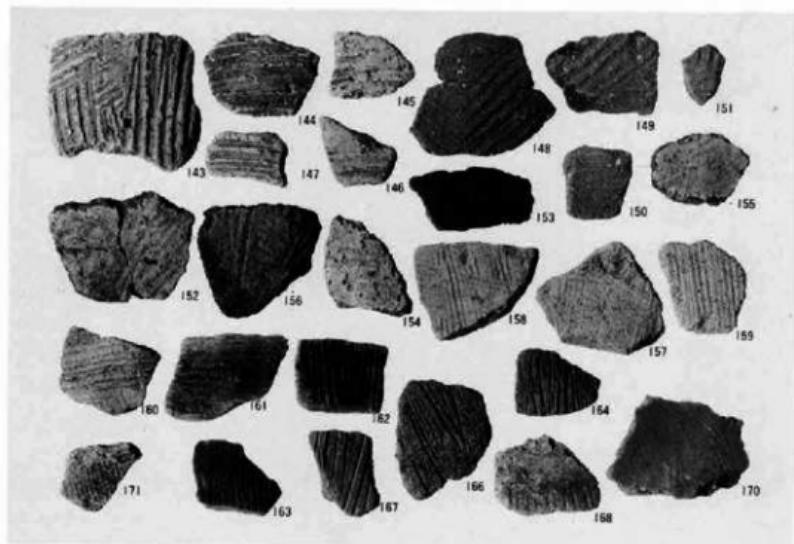
A 沢出土弥生土器 (約1/2)



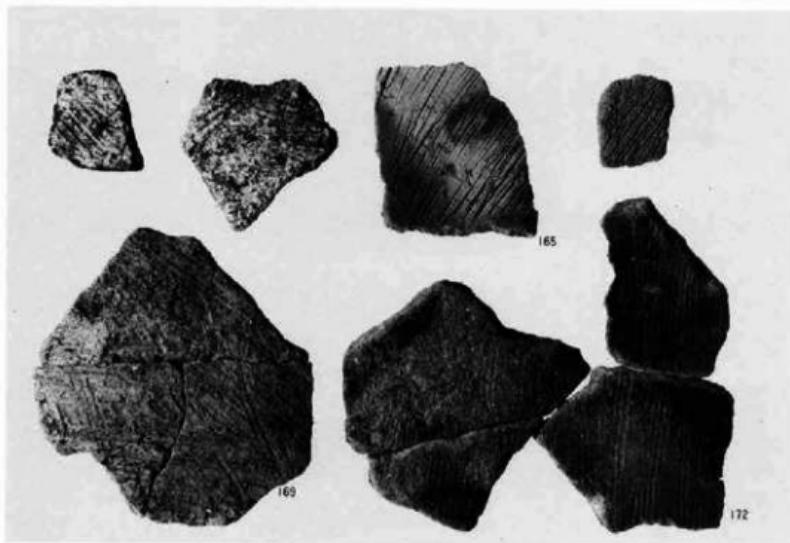
A沢出土弥生土器（約1/2）



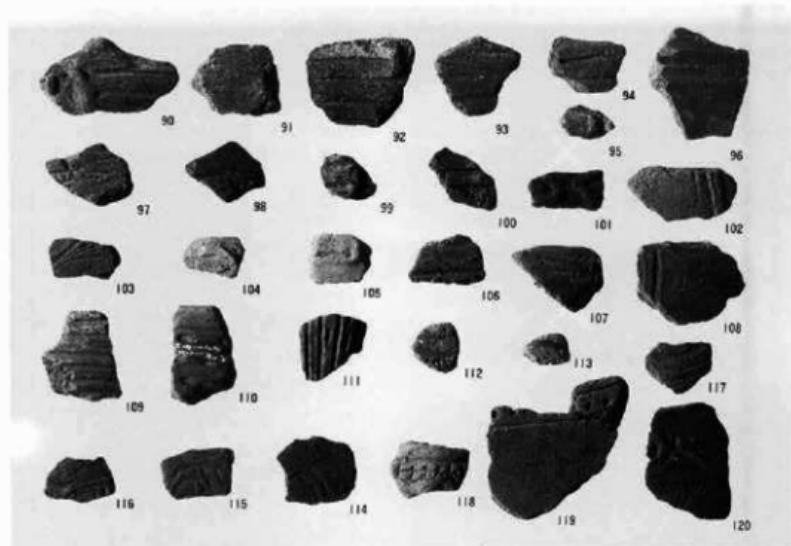
A沢出土弥生土器（赤色塗形、約1/2）



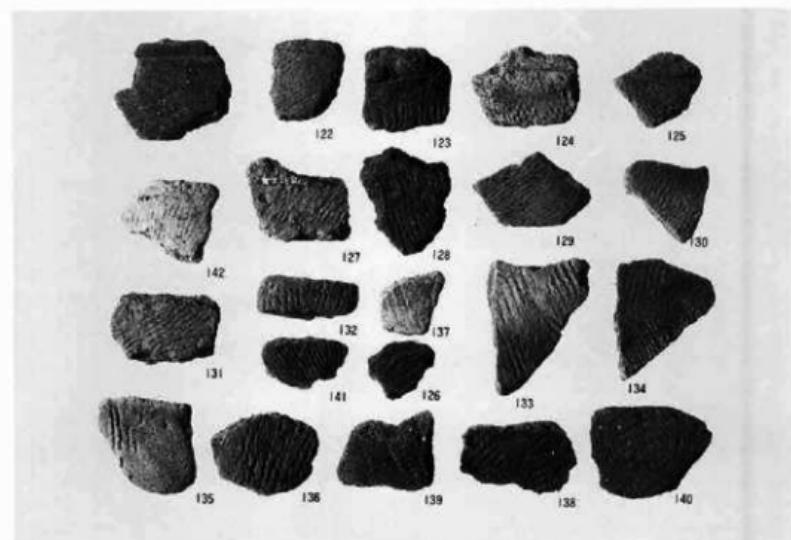
A 沢出土弥生土器（条痕文系、約1/2）



A 沢出土弥生土器（条痕文系、約1/2）



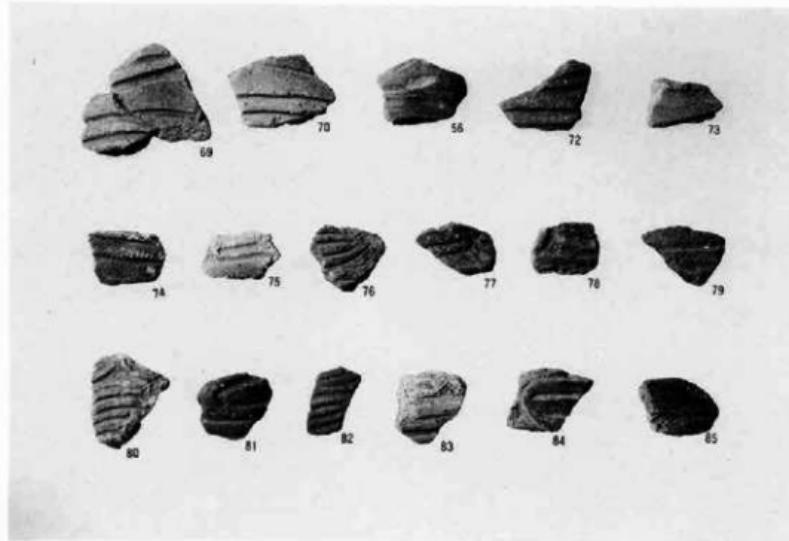
A沢出土弥生土器（約1/2）



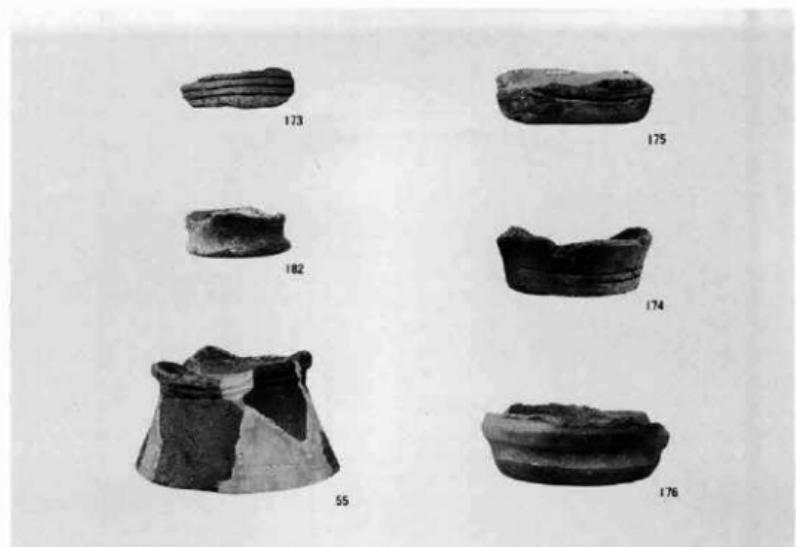
A沢出土弥生土器（約1/2）



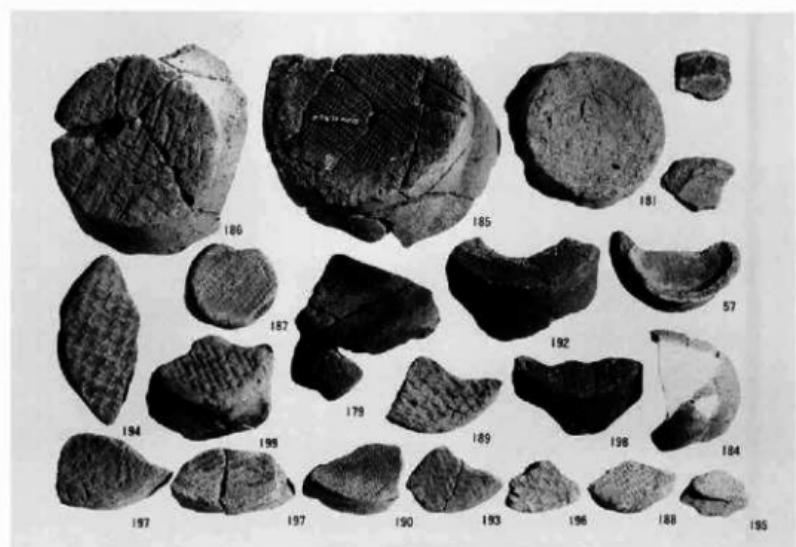
A沢出土弥生土器（約1/2）



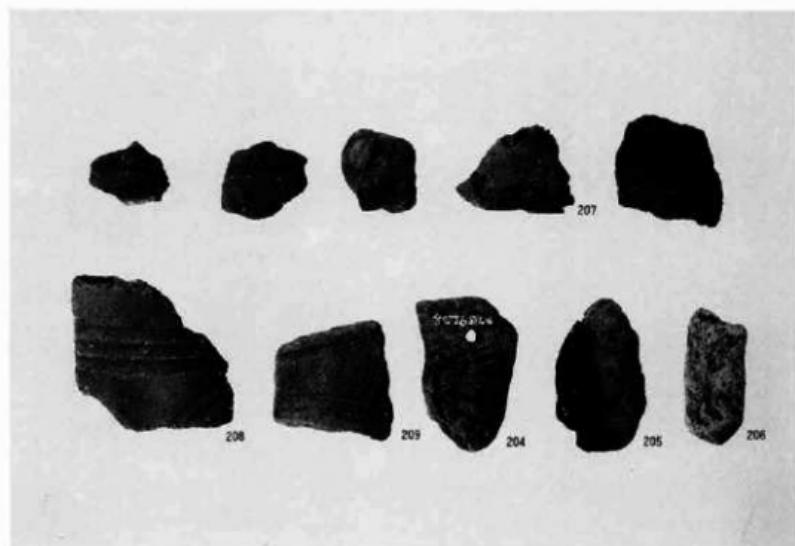
A沢出土弥生土器（東北系、約1/2）



A沢出土弥生土器(約1/3)



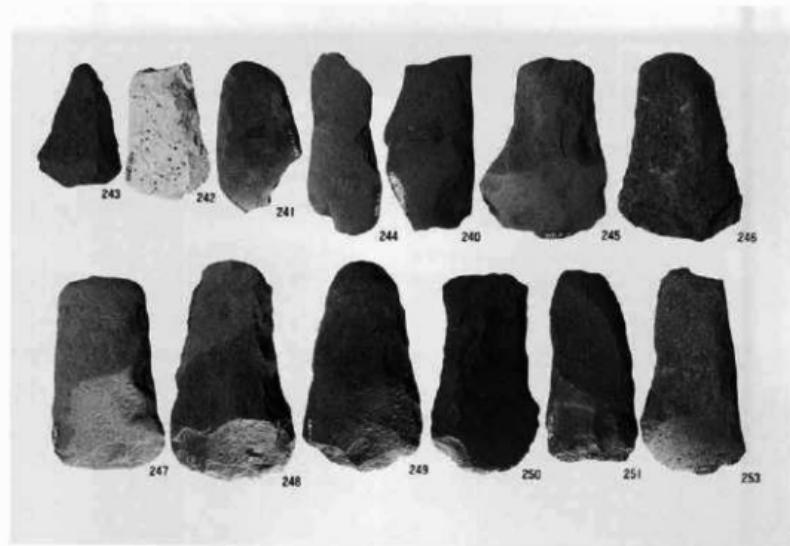
A沢出土弥生土器(底部、約1/3)



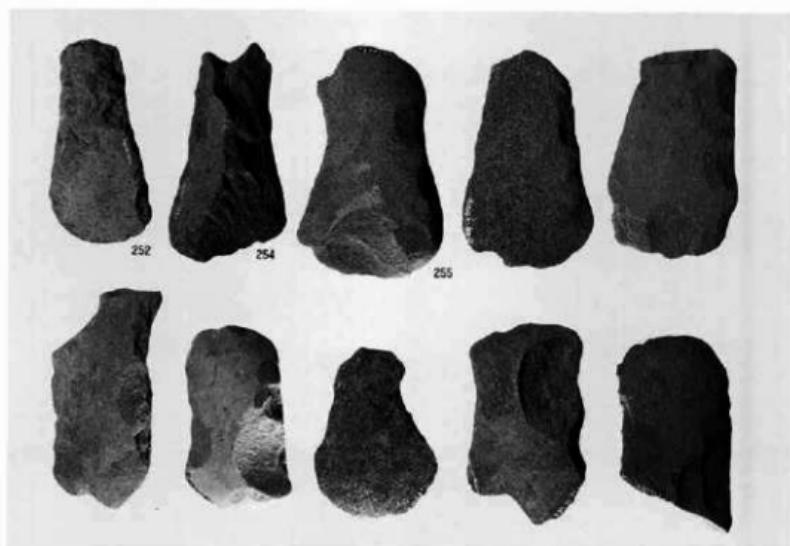
A沢出土異形土器・土偶・土製品等（約2/3）



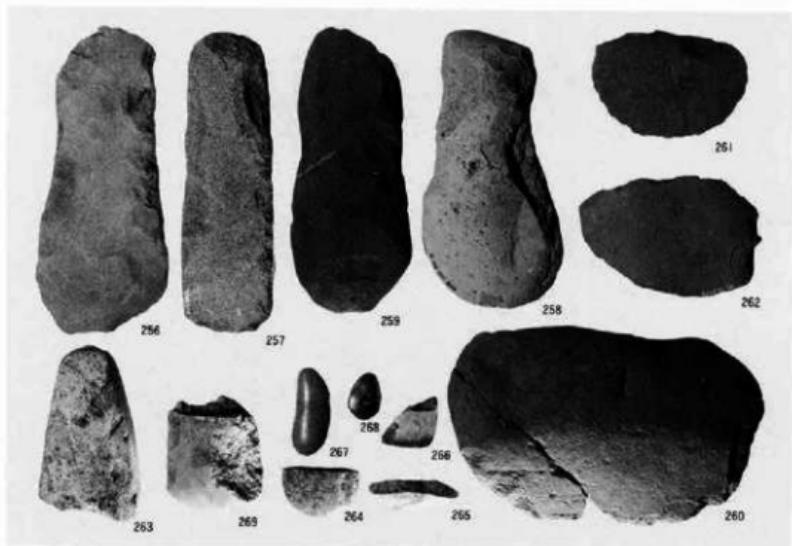
A沢出土球形土製品（約1/2）



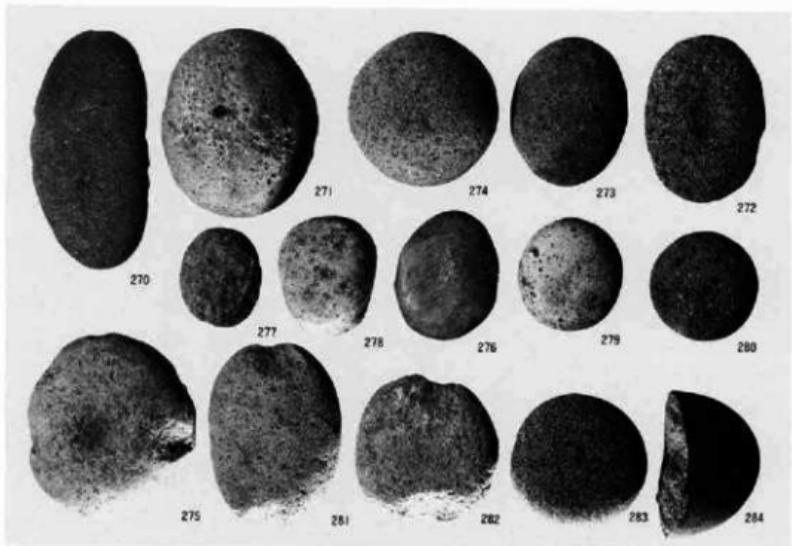
A 沢出土打製石斧 (約1/3)



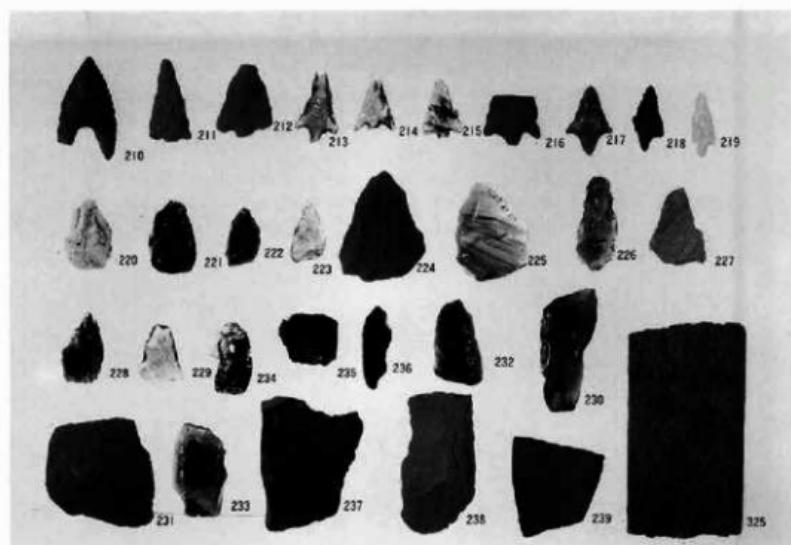
A 沢出土打製石斧 (約1/3)



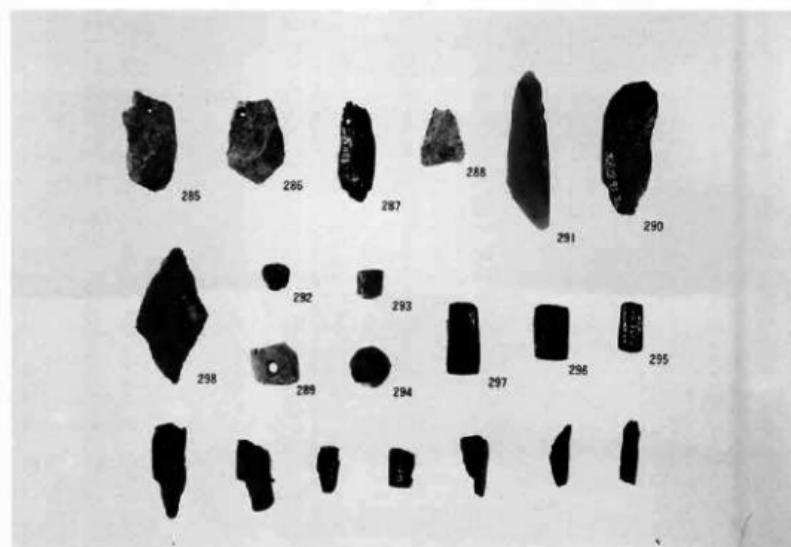
A沢出土打製石斧・磨製石斧・スクレイバー等 (約1/3)



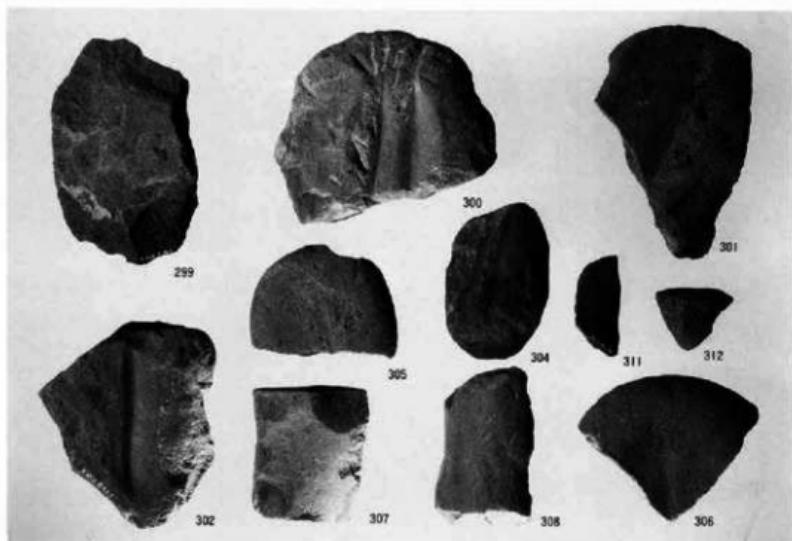
A沢出土敲石・凹石・磨石・石錘 (約1/3)



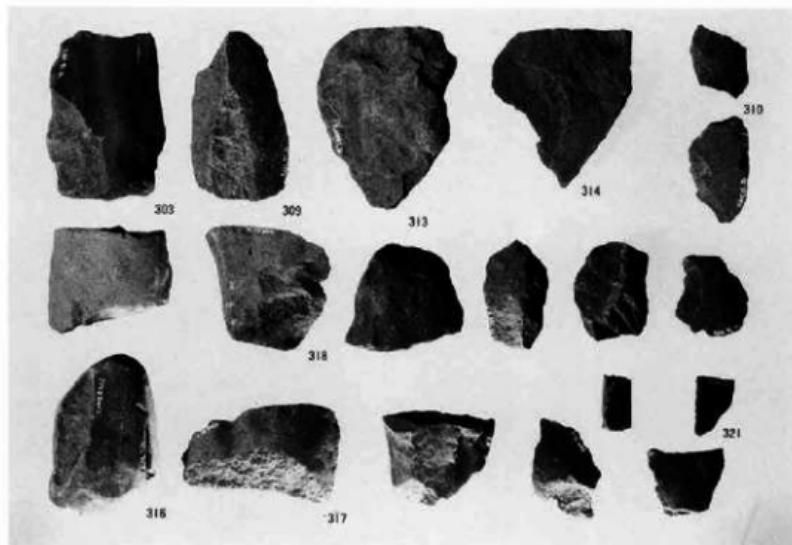
A 沢出土石鏃・石剣等 (約2/3)



A 沢出土玉未成品 (約2/3)



A 沢出土砥石（約1/3）



A 沢出土砥石（約1/3）



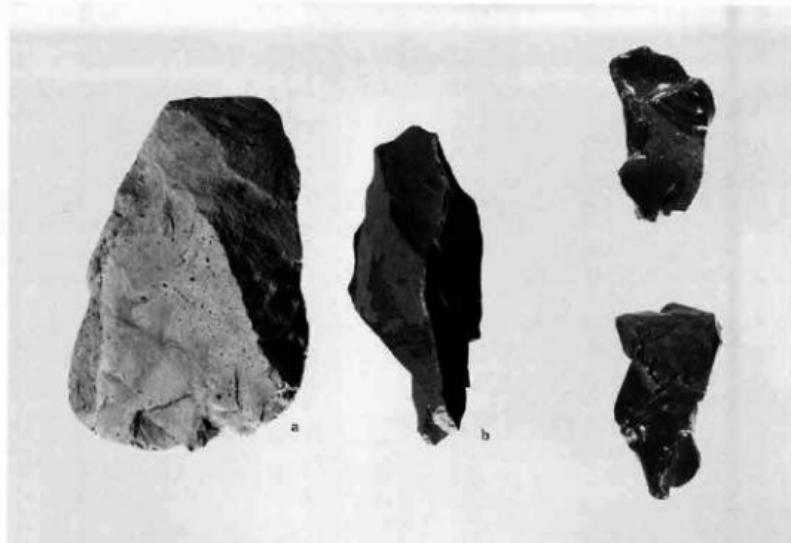
A沢出土割片 接合状態（約1/2）



A沢出土剥片 分類状態（約1/2）



A沢出土剥片 分類状態（約1/2）



A沢出土石核（約1/3）

A沢出土石核（約2/3）



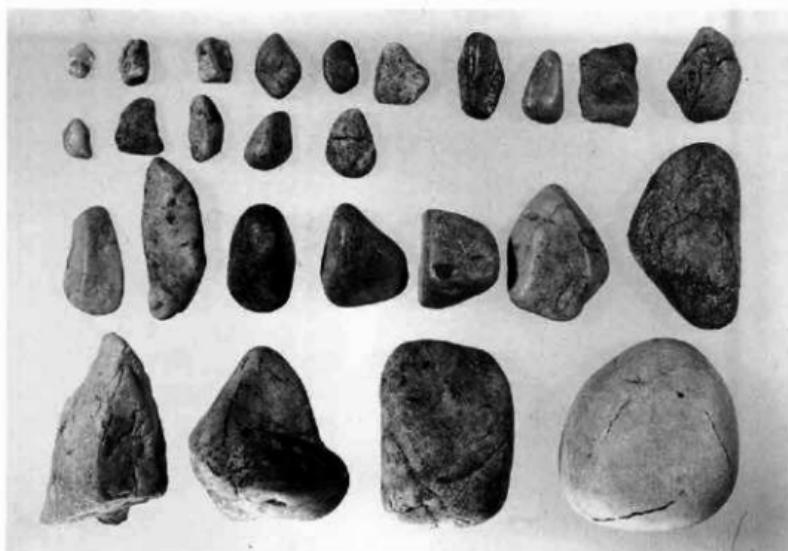
A沢出土黒曜石（約2/3）



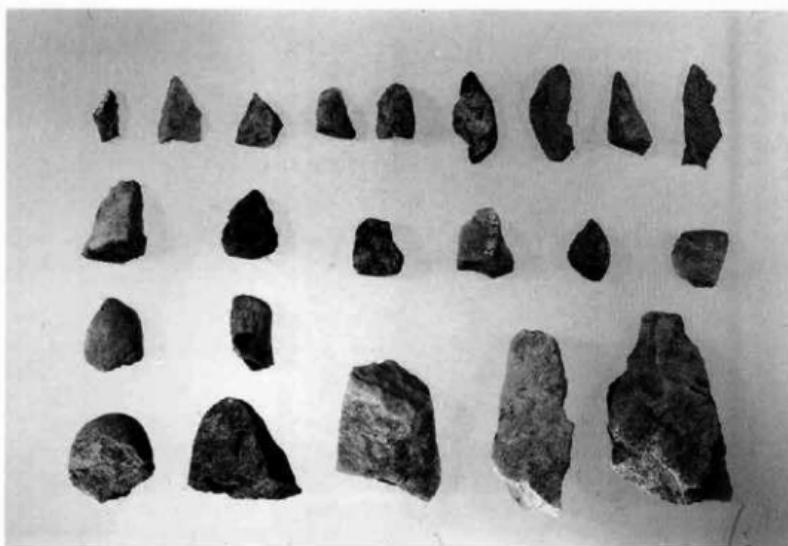
A沢出土黒曜石（約2/3）



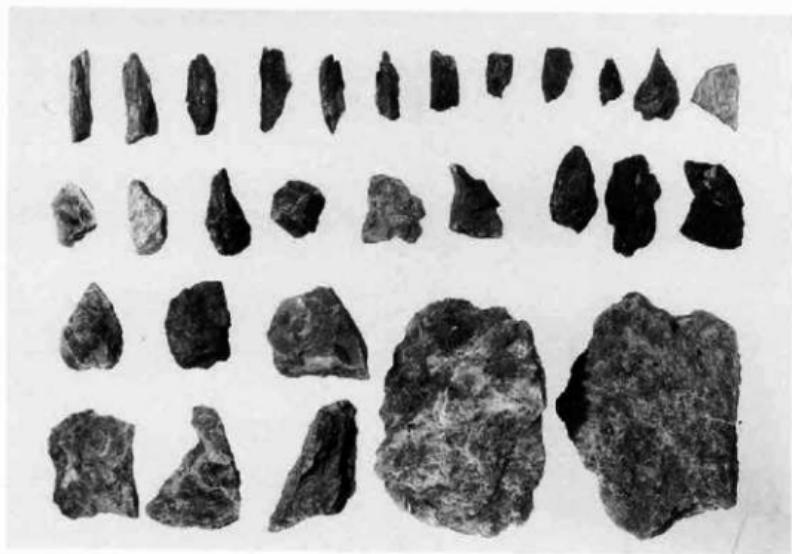
A沢出土黒曜石（約2/3）



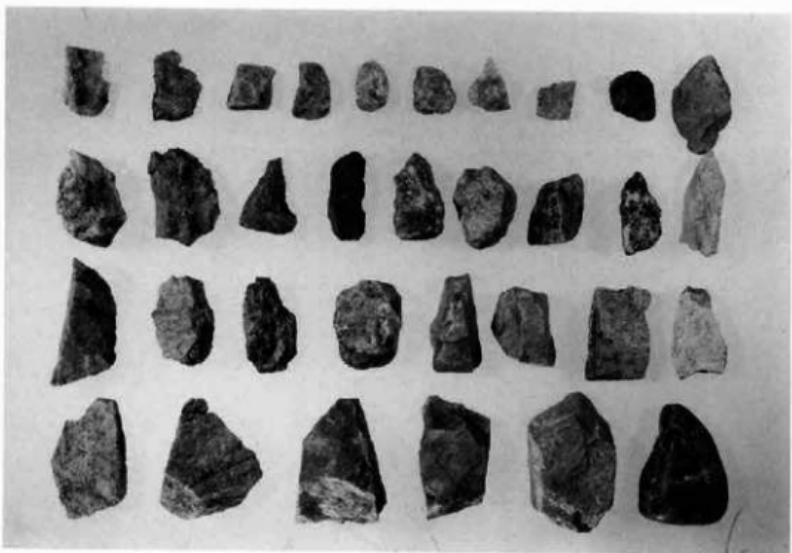
A沢出土ヒスイ (軽石・約2/3)



A沢出土ヒスイ (角礫・約2/3)



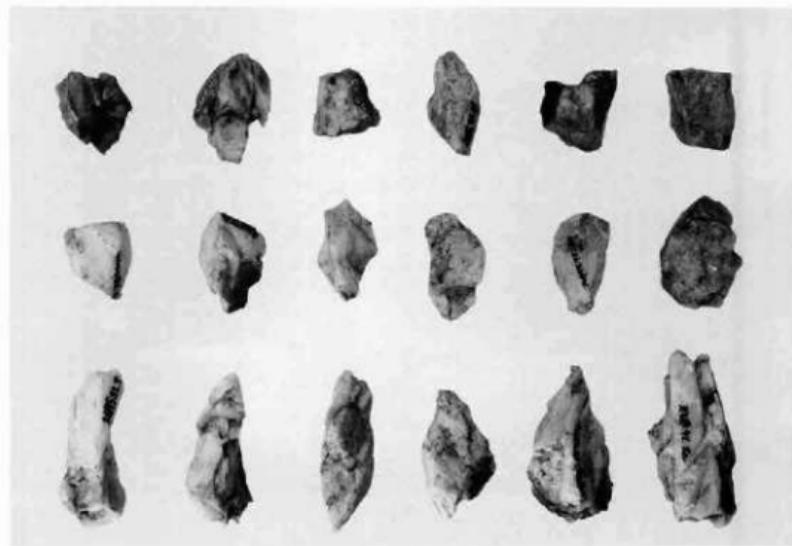
A沢出土滑石（約2/3）



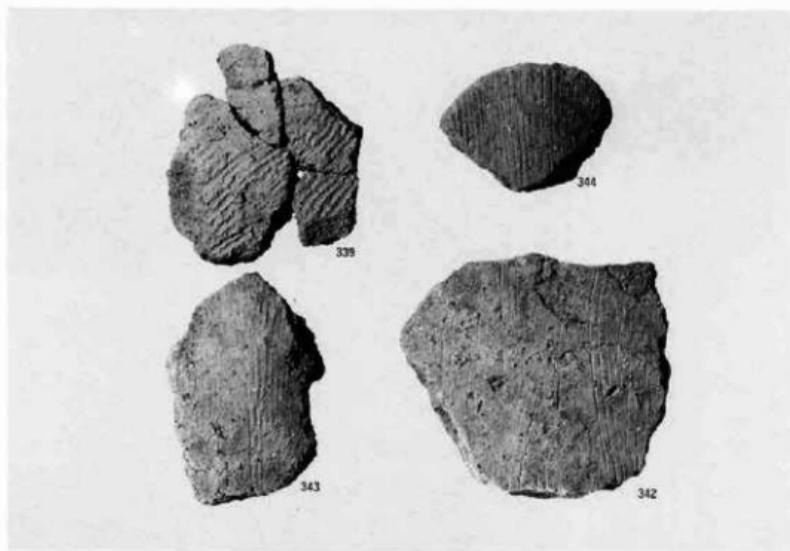
A沢出土珪岩（約2/3）



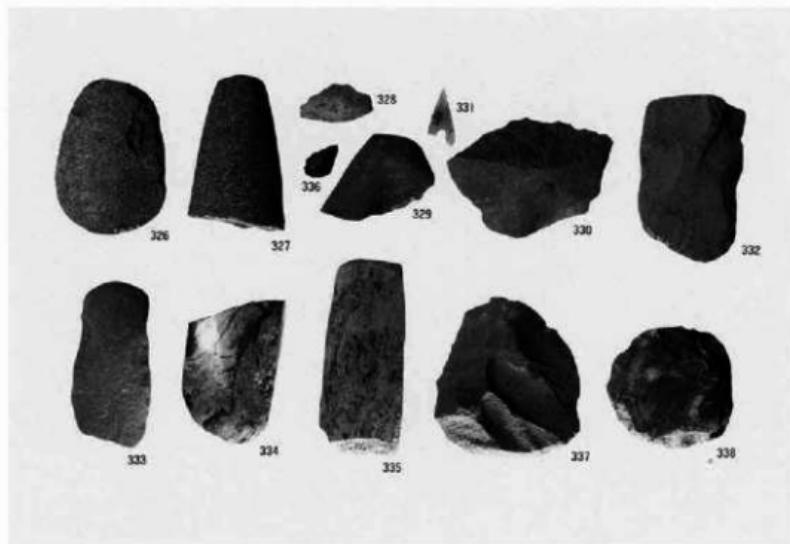
A沢出土石英（約2/3）



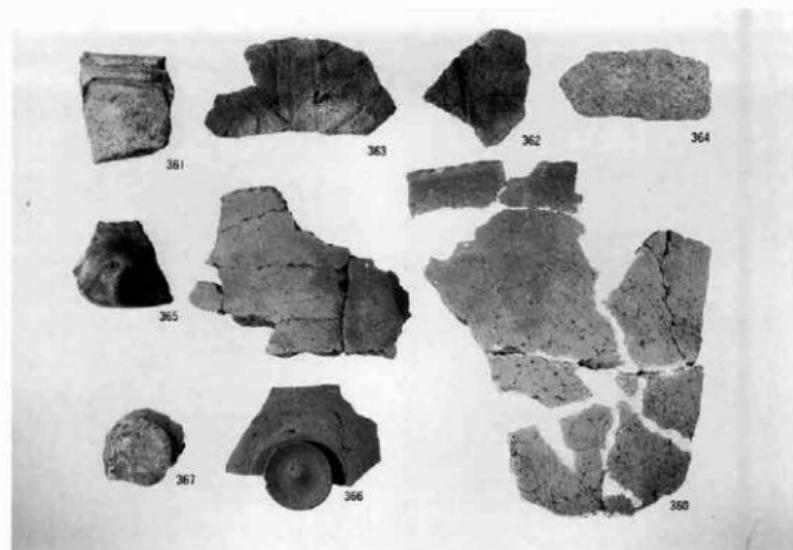
A沢出土石英（約2/3）



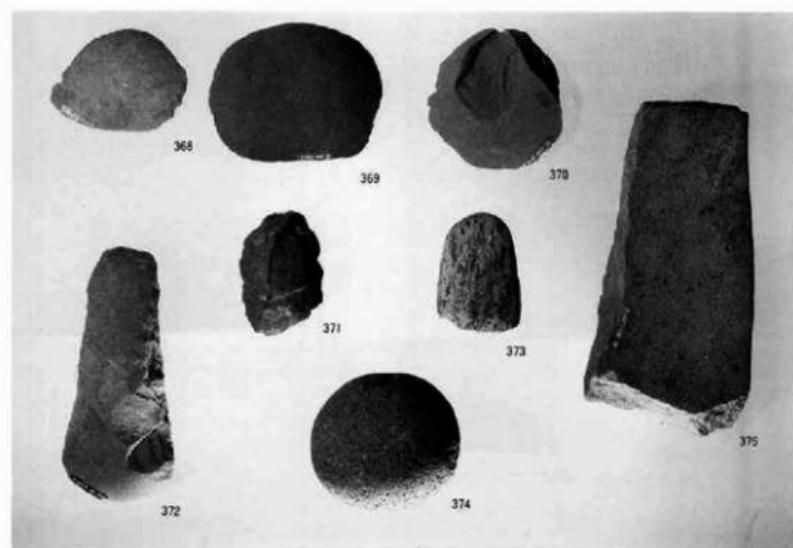
A 沢III・IV層出土縄文土器（約1/2）



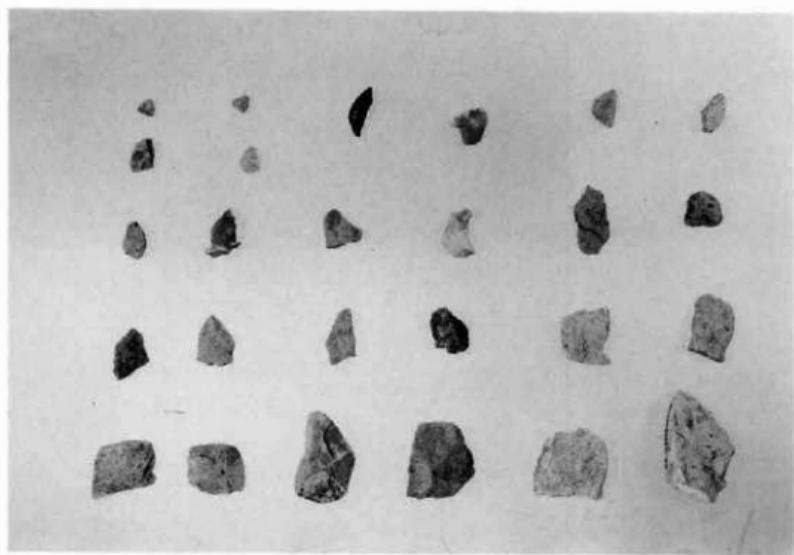
A 沢III・IV層出土打製石斧・磨製石斧・石球等（約1/3）



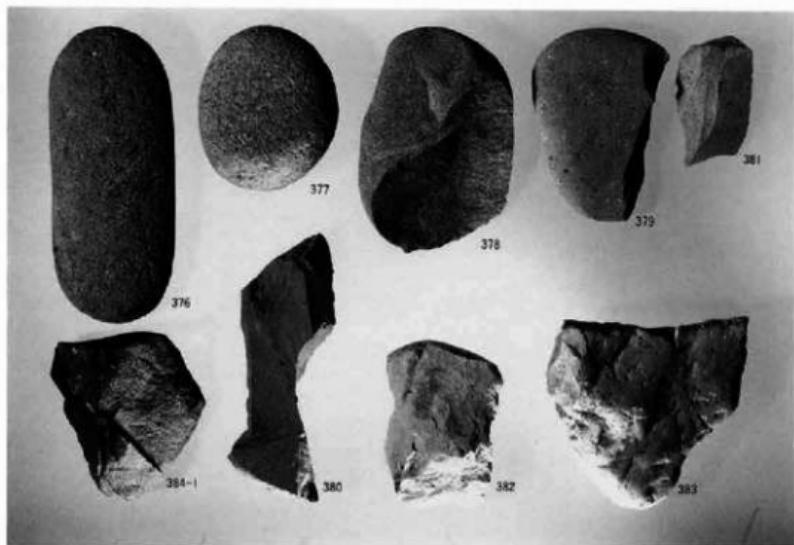
B 沢出土縄文土器・須恵器・土師器（約1/3）



B 沢出土石器・打製石斧・磨製石斧等（約1/3）



B 沢石器集中地点出土剥片（約2/3）

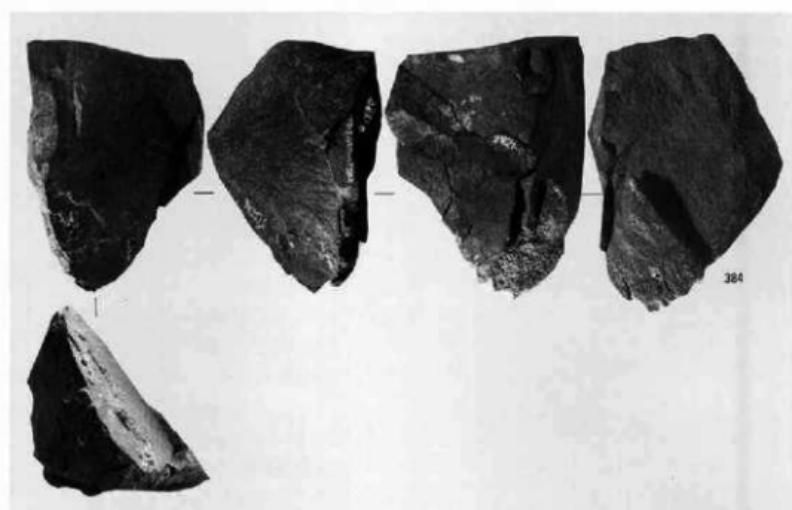


B 沢石器集中地点出土磨石・擦器・石核等（約1/3）

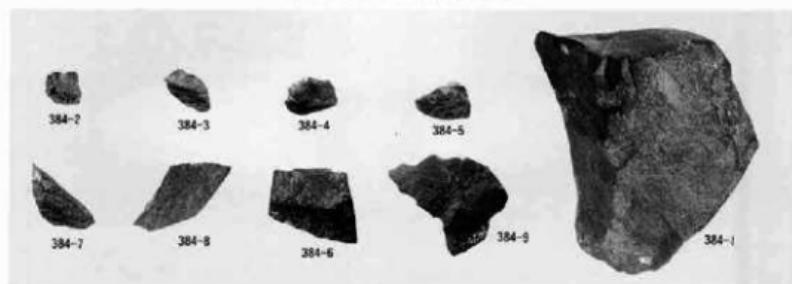


台地上出土ナイフ形石器（約1/1）

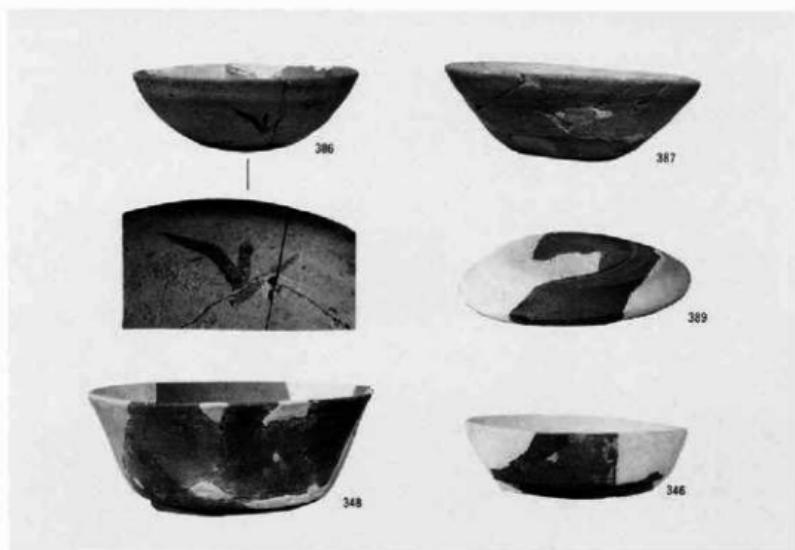
台地上出土滑石製品（約1/1）



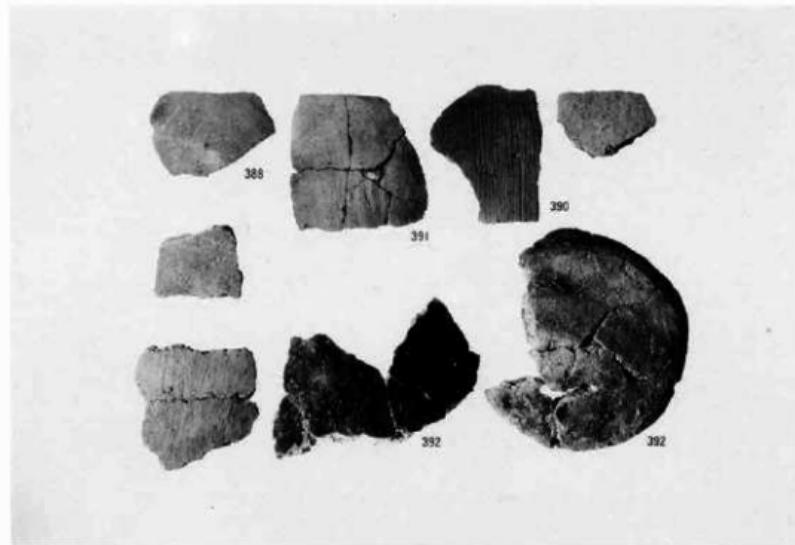
B沢出土石核 接合状態（約1/2）



B沢出土石核 分離状態（約1/2）

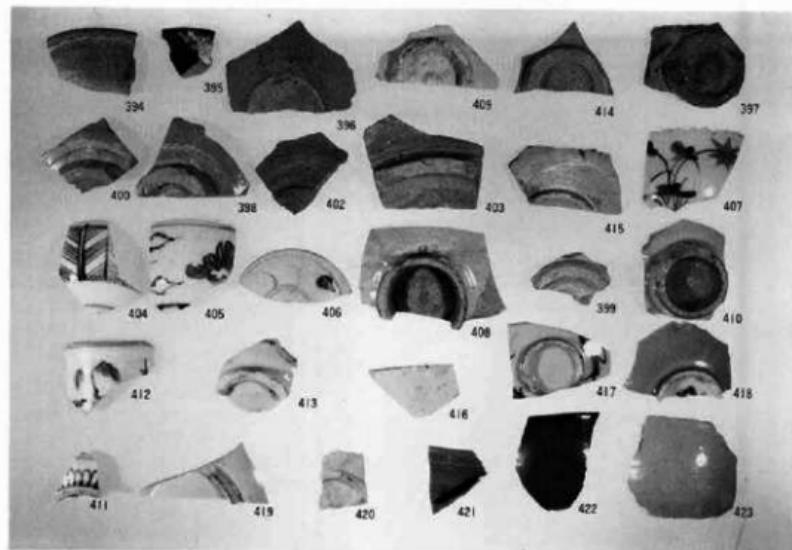


A-mire地上出土土師器・須恵器(約1/3)

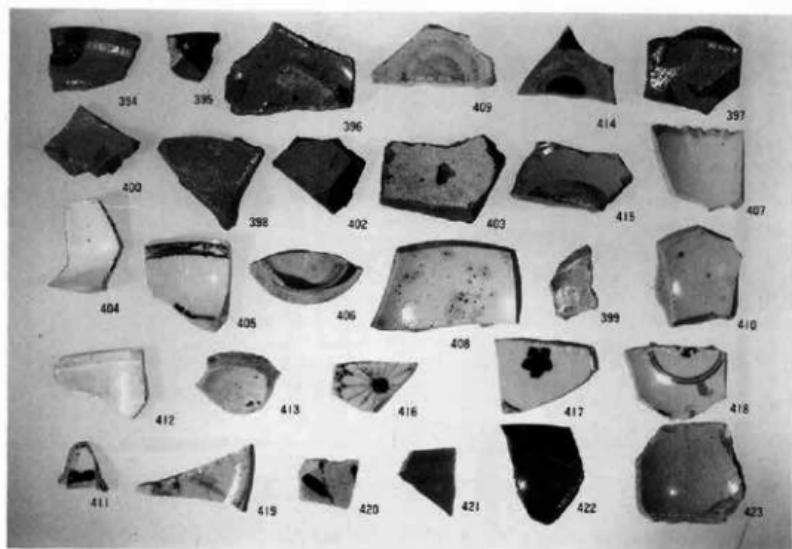


台地上出土土師器(約1/3)

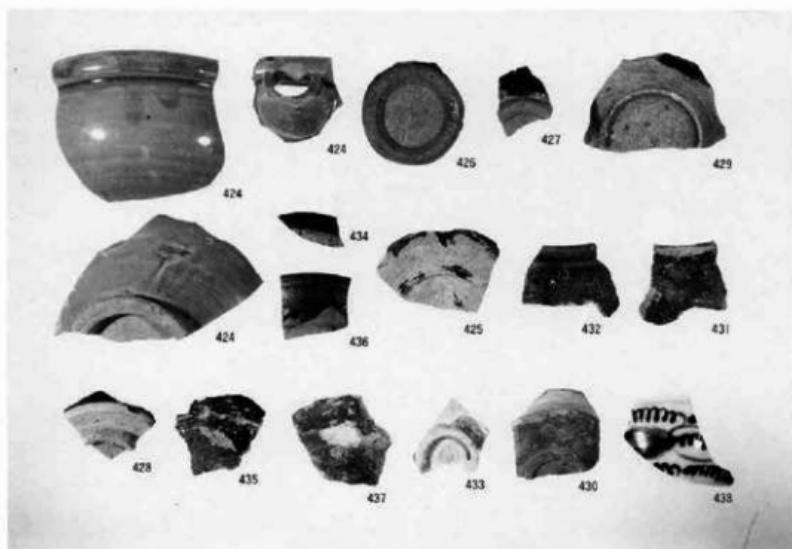
図版72  
(大塚遺跡)



台地上出土近世陶磁器（外面、約1/3）



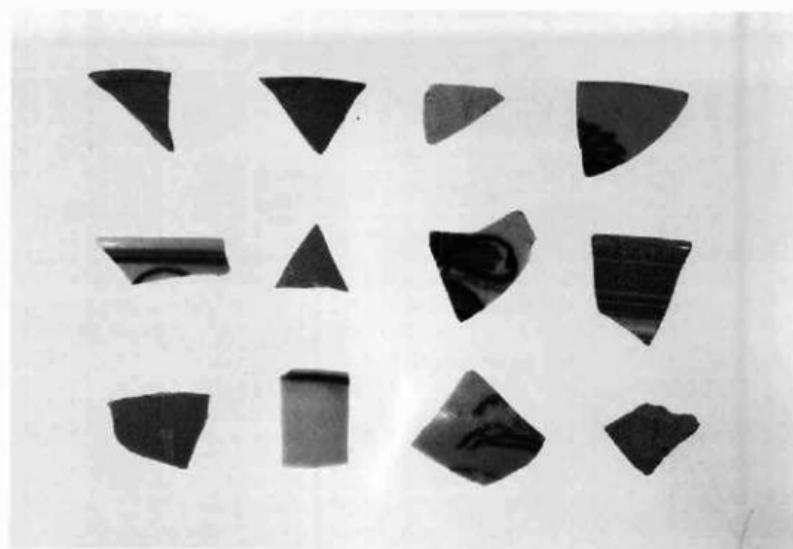
台地上出土近世陶磁器（内面、約1/3）



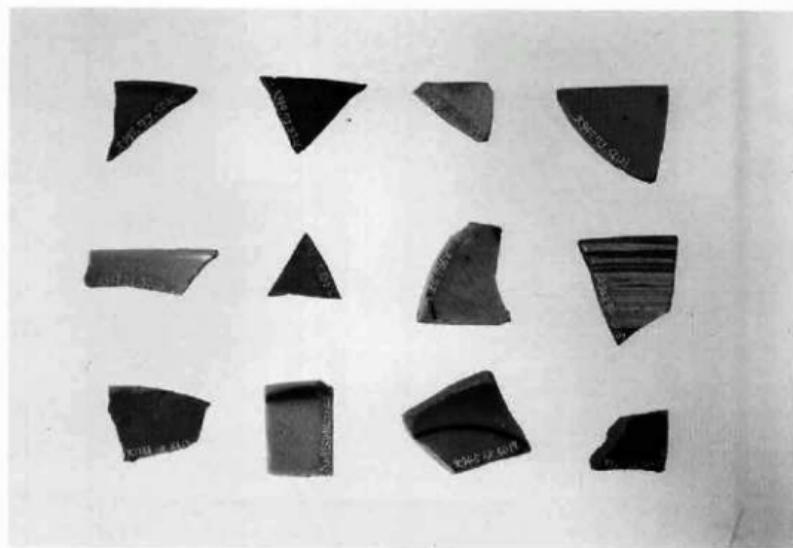
台地上出土近世陶磁器（外面、約1/3）



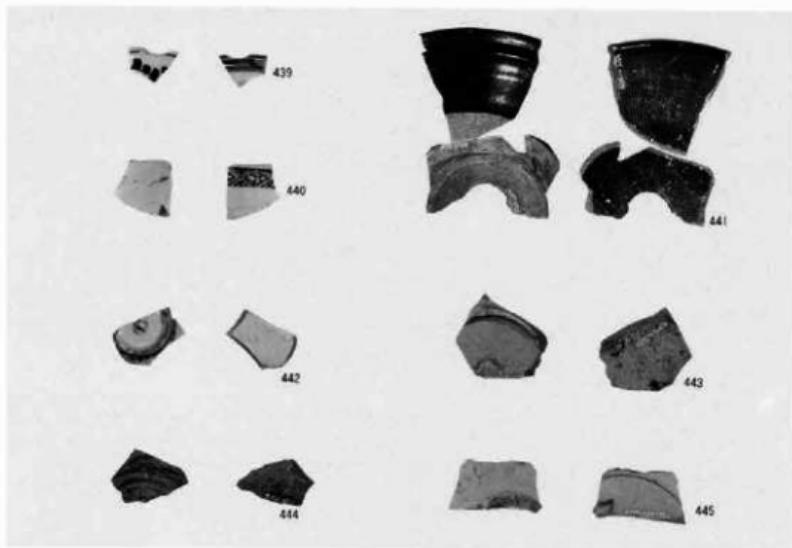
台地上出土近世陶磁器（内面、約1/3）



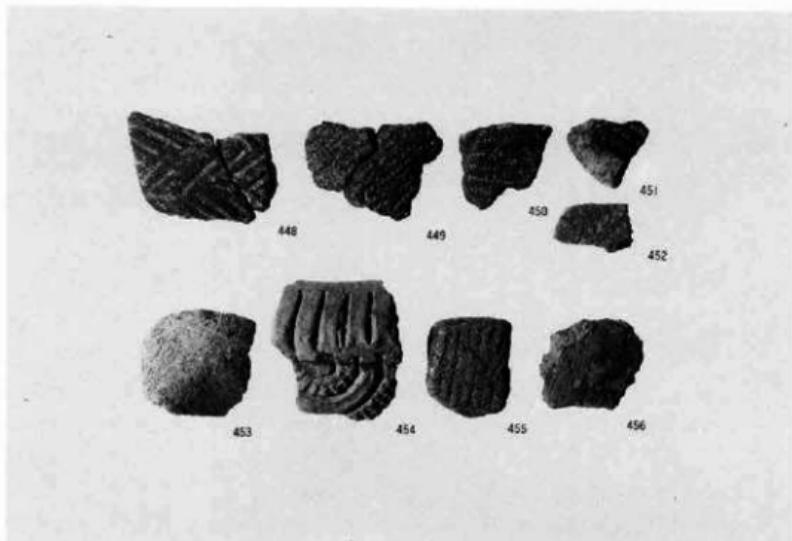
鉢状小溝出土近世陶磁器（外面、約2/3）



鉢状小溝出土近世陶磁器（内面、約2/3）



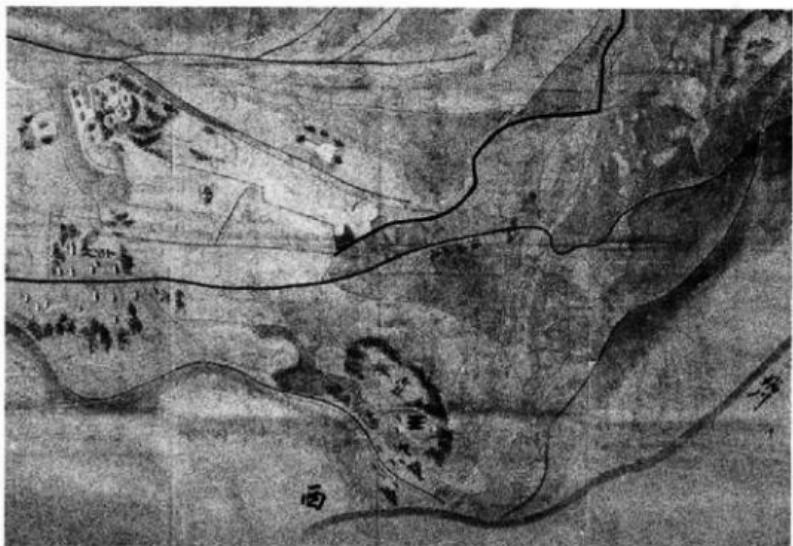
SR38出土近世陶磁器（約1/3）



D地区出土土器（約2/3）



正徳3年(1713)の絵図 (上河原区古文庫)



同絵図 原山遺跡・大塚遺跡付近

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第50集  
北陸自動車道  
糸魚川地区発掘調査報告書Ⅳ  
原山遺跡 大塚遺跡

昭和63年3月25日印刷  
昭和63年3月31日発行

発行 新潟県教育委員会  
新潟市新光町4-1  
電話 (025) 285-5511  
印刷 北越印刷株式会社  
長岡市福住1丁目6-27  
電話 (0258) 33-0306